

指示対象の識別方略- 日本・英語・韓国語の対象研究-

著者	久好 孝子
学位授与機関	Tohoku University
URL	http://hdl.handle.net/10097/55471

博士論文

指示対象の識別方略

—日本語・英語・韓国語の対照研究—

久 好 孝 子

2012 年

目次

第 1 章 序論	1
1.1 問題提起と研究目的	1
1.2 先行研究	5
1.2.1 質的分析が中心の先行文献	6
1.2.2 質的分析・量的分析を併用した先行研究	8
1.2.3 先行研究のまとめ	10
1.3 本研究の意義	12
1.3.1 項省略と日本語教育	12
1.3.2 項省略の通言語学的研究	14
1.4 本論文の構成	15
第 2 章 本研究の理論的・方法論的背景	16
2.1 本研究の理論的背景	16
2.2 包括的なアプローチ	17
2.3 指示対象の識別方略	19
2.4 軸項 (pivot)	21
2.5 単一語彙項の制約	24
2.6 主観性	26
第 3 章 データと方法	27
3.1 コーパス	27
3.2 分類方法	30
3.2.1 項省略	30
3.2.2 分類の手順	32
3.3 名詞句の情報	35
3.3.1 項の形式	35
3.3.2 省略項の復元	36
3.3.3 項の文法関係	37
3.3.4 項の意味的属性	42

3.3.5 項の語用論的信息	43
3.4 述語の情報	48
3.4.1 節間の境目と節の種類	49
3.4.2 統語的・意味的信息	51
3.5 分析項目のまとめ	55
 第4章 日本語の分析と結果	 57
4.1 節構造における語彙項1つの制約	57
4.1.1 1節内の語彙項の数	57
4.1.2 語彙項の制約と節の種類	61
4.1.3 語彙項の制約と動詞	64
4.2 項の形式	66
4.3 項の文法関係	70
4.3.1 文法関係「S」の形式	71
4.3.2 文法関係「A」の形式	77
4.3.3 文法関係「dS」の形式	82
4.3.4 文法関係「O」「IO」の形式	87
4.3.5 文法関係と能格性	92
4.4 項の形式と意味的属性	95
4.4.1 第1項の意味的属性	96
4.4.2 第1項の人称	104
4.4.3 第2項の意味的属性	107
4.4.4 その他の名詞句の意味的属性	113
4.4.5 項の形式・文法関係と意味的属性の関係	116
4.5 交替指示	117
4.5.1 隣接節間の交替指示	118
4.5.2 やや広い参照領域の交替指示	121
4.5.3 主節間の交替指示	123
4.5.4 交替指示のまとめ	126
4.6 省略項と述語の形態	127

4.6.1 使役構文	127
4.6.2 形容詞文	130
4.6.3 存在文	132
4.6.4 移動動詞	133
4.6.5 所有表現	136
4.6.6 知覚動詞	137
4.6.7 伝達・思考動詞	140
4.6.8 所有者変更の動詞 (Verbs of Change of Possession)	143
4.6.9 補助動詞「-てやる／-てもらう／-てくれる」表現	147
4.6.10 意向・希望表現	151
4.6.11 可能表現	154
4.6.12 述語情報のまとめ	157
4.7 日本語の分析のまとめ	158
 第 5 章 英語の分析と結果	161
5.1 英語分析の概要	161
5.2 節構造における語彙項 1 つの制約	163
5.3 項の形式	167
5.4 項の文法関係	173
5.4.1 文法関係	173
5.4.2 文法関係と形式の相関関係	177
5.5 項の形式と意味的属性	178
5.5.1 第 1 項の意味的属性	178
5.5.2 第 2 項の意味的属性	184
5.6 英語の分析のまとめ	186
 第 6 章 韓国語の分析と結果	188
6.1 韓国語分析の概要	188
6.2 節構造における語彙項 1 つの制約	190
6.3 項の形式	192

6.4	項の文法関係	197
6.4.1	文法関係	197
6.4.2	文法関係と形式の相関関係	201
6.5	項の形式と意味的属性	202
6.5.1	第1項の意味的属性	202
6.5.2	第2項の意味的属性	209
6.6	韓国語の分析のまとめ	213
第7章	結論	214
7.1	3言語の比較	216
7.1.1	項構造における単一語彙項の制約	216
7.1.2	項の形式	217
7.1.3	項の形式と意味的属性	218
7.2	今後の研究課題と展望	220
謝辞	222
参考文献	223
略語	231

第 1 章序論

1.1 問題提起と研究目的

私たちがことばを使って何かを言い表そうとするとき、表現したい指示対象を名詞句で示し、その叙述を動詞句などの述語 (predicate) で行う。言語にとって「指示すること (reference) と叙述すること (predication)」は最も重要な機能であり、名詞句と述語のどちらか一方が欠けるとことばとしての伝達役割に支障をきたしてしまうはずである。

しかし、実際のコミュニケーションでは名詞句を具現化しない項省略が頻繁に行われており、特に日本語では名詞句の省略 (ellipsis) が頻繁に起こっている。そのため (1a) のような第 1 項¹ の省略には多くの関心が寄せられ、研究対象とされてきた (伊豆山 1986、甲斐 2000、久野 1983、Kuno 1987、清水 1995、砂川 2005、高田・土井 1995、長谷川 1995、ベケシュ 1995a 他)。² また、この第 1 項の省略は、他の言語と比較・対照して考察されることも多く、(1a) と同じ内容を英語で表現した (1b) を見てみると、第 1 項の出現頻度に際立った違いが見受けられる。このように項省略 (argument ellipsis) という言語現象は、日本語研究のみならず通言語的な分野でも様々な議論を呼んでいる。³

(1) a. それで ϕ_i (=I⁴) 寝室に引き上げてからも ϕ_i 眠りにつけないまま ϕ_i いろいろ考 えているうちに、一方では神経がつかれているのでもあり、寂 しくガラ ンドウの場所に ϕ_i ひとりで立っているという恐ろしい夢が始まりそうになった
(静かな生活)

b. I_i retreated to my bedroom, but sleep evaded me. I_i thought about all sorts of things, and with frayed nerves, I_i was seized by the premonition of a terrible dream, a night mare in which I_i saw myself_i ϕ_i standing all alone in and empty, desolate place.
(A quiet life)

¹ 第 1 項とは、おおむね主語と同義である。ただし、「太郎が/に英語がわかる」などのように他動性の低い場合に格標示と文法関係にズレがおきるときは「太郎」を第 1 項とする。本稿でいう第 1 項とは、「述語が要求する項が欠けている場合に、その中心的役割を果たす項」という意味であり、Van Valin and LaPolla (1997) が「構文のなかで特権的な文法機能を担っている統語的な項」と定義する「軸項 (pivot)」(Van Valin & LaPolla 1997:275) に相当する。格標示と文法関係のズレについての第 3 章で詳しく述べる。

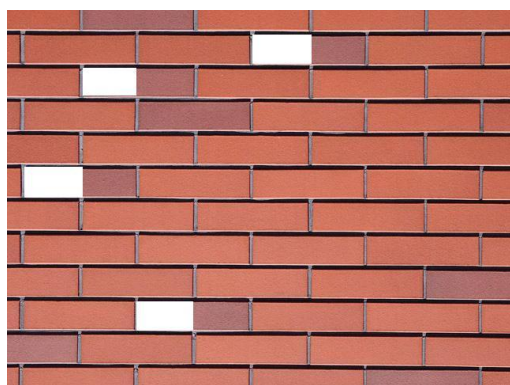
² 詳しくは 1.2 節の先行研究のところでも述べる。

³ 詳しくは 1.3 節の本研究の位置づけのところでも述べる。

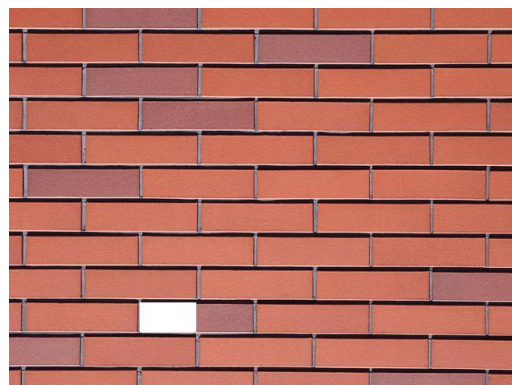
⁴ 略語： ϕ (省略項)、1 (1 人称)

(1a) のような省略項 (φ) の多い日本語とそうでない (1b) のような英語では、例えと (2) に示した 2 種のブロック塀のような違いがあるのではないだろうか。(2a) の壁は何箇所かに一部欠損したブロックが使用され、(2b) ではそのようなブロックはほとんど使われていない。(2a) のように欠陥ブロックを何度も使用して積み重ねたブロック塀は、隙間が多く構造上に問題が生じ塀全体の安定感が損なわれ、塀としての役目に疑問が生じるだろう。しかし、実際には不完全なブロック塀であるはずの (2a) が何の支障もなくしっかりと立ち、塀としての役割を立派に果たしているとしたらどうだろう。この隙間だらけのブロック壁が倒壊することなく立っているのは何故か、あるいは、一部欠損したブロックが積み重ねられていても塀全体の機能に問題が生じないのは何故か、といった疑問が出てくるのではないだろうか。本研究はこのような疑問から出発し、(2a) のブロック塀に似た名詞句の欠損が多い日本語が、1 つの談話として何ら問題なく機能しているその理由を探ることを目的としている。それに加え、(2b) のような名詞句の欠損が少ない談話構造をもつ英語との相違点・類似点も考察していきたいと考える。

(2) a.



b.



本研究の一義的な目的は、(2) の壁で言うならば隙間が多い壁と少ない壁では何がどう違うのかということであるが、それに加え、その隙間の埋め方にも注目したい。例えば、(1b) の英語の「φ」が指し示しているのは、同一のものが同じ文中に存在する「I (代名詞)」である。一方、日本語の場合は、省略された第 1 項「φ」と同じ指示対象を示す名詞句は同一文内 (intrasentential) には見あたらない。日本語の場合、省略された第 1 項を同定することは同一文内の情報だけでは困難なようであり、日本語と英語では省略項の復元の仕方に違いが見受けられる。

私たちが談話を解釈するとき、ブロック塀の隙間に同じ大きさのブロックを見つけて埋

め込むように、欠けた情報が何であるかかを判断し、その不完全さを補うために何らかの対策を講じながら談話全体を解釈していると考えられる。日本語だけでなく英語でも談話解釈には与えられた言語情報を最大限に活用して処理していると考えられるが、この欠けたものを見つけ出し埋めるための対策、あるいは判断基準は言語によって相違があると予想できる。

典型的に異なる日本語と英語では、第 1 項の振る舞いに関して違いがあるのは容易に想像できるが、日本語と形態的・統語的にも類似点が多いといわれている韓国語ではどうだろうか。本研究では日本語・英語の比較の他に、類似性が高いといわれている日本語と韓国語に関しても何らかの相違があるのではないかと考え検証を進める。(1a) と同じ内容を韓国語で表現した (3) を見てもらいたい。

(3) 그래서	ϕ_i	침실로	돌아간	후에도	ϕ_i 잠을
kulayse ⁵	(1)	chimsil-lo	tolaka-n	hu-ey-to	(1) cam-ul
それで	(1)	寢室-PART	帰った-REL	後-PART-PART	(1) 眠り-AC
이루지	못한	채	ϕ_i 이런저런	생각의	끝자락들을
iluci	mos-ha-n	chay	(1) ilencelen	sayngkak-uy	kkuthcalak-tul-ul
達成する	できない-REL	まま	(1) いろいろな	考え-PART	末端-pl-AC
오락가락하는	동안	한편으론	신경이	지쳐	있었기
olakkalakha-nun	tongan	hanphyen-ulo-n	sinky-e-i	cichye	iss-ess-ki
行き来する-REL	間	一方-PART-TOP	神経-NOM	疲れる	いた-NMZ
문인지	쓸쓸하고	텅	빈	장소에	<u>나</u> _i 혼자 서
mwuninci	ssulssulha.ko	theng	bin	cangso-ey	na honca se
ためなのか	さみしくて	中身	空	場所-PART	私 1人 立って

⁵ 韓国語のローマ字転写はイェール方式 (The Yale Romanization System) に従う。助詞も含め接辞と語幹の境界はハイフンで示す。ローマ字転写には下記のサイトを参考にした。

http://ling.bun.kyoto-u.ac.jp/~asaokitan/tools/hangul_yale_converter.cgi.en

있는	그	무서운	꿈을	ϕ_i 또다시	꿈	것-만
iss-nun	ku	mwusewn-n	kkwum-ul	(1) tthotasi	kkwul	kesman
いる-REL	そんな	恐ろしい-REL	夢-AC	(1) 再び	夢見る-REL	NMZ-だけ
같았다						(조용한 생활)
kath-ass-ta						
よう-PAST-DC						(静かな生活)

(3) を見てみると、韓国語も日本語と同様に第 1 項の省略頻度が高いようである。しかし、第 1 項の省略・非省略を含めた第 1 項の振る舞いを注意深く見てみると、一般的によく似ていると言われている両言語にも違いが見てとれる。日本語の例 (1a) では、省略された第 1 項と同一指示の名詞句が同一文内に存在しなかったが、韓国語では同一文内に存在している(下線部の「나 na 私」)。一見、非常に類似していると思われる日本語と韓国語であっても、項省略という現象に関しては微妙なズレが存在しているようである。日本語の項省略の仕組みの全体像を知るためには、日本語を客観的に俯瞰することも必要と考えられるため、英語のみならず韓国語との比較・対照を行っていききたい。

本研究の目的である「項省略」の視点を広げると、言語の効率性 (efficiency) や経済性 (economy) の問題につながると考えらる。Van Valin (1987:513) は、同じ指示対象を連続して言及することについて次のように述べている。⁶

- (4) 言語で何かを指し示そうとすると、同一の名詞や名詞句をただ単純な繰り返しで指示している、と思われがちだが、実際の人間の言語はそのような方法をとっていない。なぜなら、同一の名詞や名詞句を繰り返し使用するという事は、この上なく冗長的で非効率的だからだ。

さらに、Haiman (1983:802) は、形式の短縮は「経済的に動機付けられた親近性の表れ (an economically motivated index of familiarity)」と述べている。この考えに基づくと、項省略とは、「言わなくてもわかるもの」であって、「言わなくてもわかるもの」は、「身近で」みんなが「慣れ親しんでいる」ものを指示しており、言語の効率性が最大限に反映された言語現象であると言い換えることができるだろう。では、「身近で」みんなが「慣れ親しん

⁶ 日本語訳は筆者によるもの。原文は以下のとおり。

Someone might imagine that a language could simply repeat a noun or NP to refer to the same referent, but this is not found in any human language, because it would terribly redundant and inefficient.

でいる」ものとは、一体どのようなものなのだろうか。あるいは、「言わなくてもわかるもの」は、どのような方法で認識されているのだろうか。この「言わなくてもわかるもの」を同定するしくみ、つまり「指示対象の識別方略 (reference-tracking) ⁷」とはどのようなメカニズムになっているのだろうか。また、この指示対象の識別方略は、日本語・韓国語・英語という個別言語の間ではどのような異相を見せるのだろうか。本論では、日本語の名詞句省略とそれに関わる要因を精査し、指示対象の識別方略のメカニズムを考察していく。さらに、日本語の指示対象の識別方略が韓国語や英語の場合とどのように異なるのか、または類似しているのかを検証し、3 言語間のズレを引き起こす背景を探っていきたいと考える。

1.2 先行研究

1.1 節で指摘したとおり、日本語研究の分野において項省略というトピックは多くの研究者の興味を引き、様々なアプローチで研究されてきた。⁸ 本研究の方向性を示すため先行研究の示唆に富む点と問題点を整理する。特に、次の 3 点に着目して概観してみたい。

研究方法： 質的重視かそれとも量的重視か。

分析対象： 1 文内か連続する 2 文の談話か、あるいはそれ以上の連続した談話か。

注目点： 焦点をあてているのは、名詞句か、それとも述語か。

この基準は、ある研究が量的分析だけで質的分析は行われていない、というような 2 項対立的な分類ではなく量的分析を重要視した分析である、といった傾向性に着目したゆるやかな分類である。分析対象の分類は、連続性によって 1 文なのか複数の文の集まりなのかによって分類し、さらに複数文の場合は、局所的な 2 文間を対象にしたものかそれとも広範な文の集まりを対象にしたものかによって区別した。最後の注目点は、分析の焦点によって名詞句を中心とした研究と述語中心の研究に分類した。名詞中心の研究とは、項であ

⁷ “reference-tracking”という用語は「ellipsis(省略)」のような用語とちがいまだ一般的な日本語の訳語が定着していない。管見するかぎりでは直訳に近い「参与者追跡システム」(山田 1996) と内容を重視した「名詞句の同一指示性の識別」(大堀 2002b) の 2 つがある。本研究では節連続において省略項の同定がどのような方略で実現されているかを検証することを目的にしているため機能的な側面を反映させた訳語で、なおかつ原書に近い訳語が適切だと考え「指示対象の識別方略」という独自の訳語を採用することにした。

⁸ 項省略は、言語学の一分野に限ったトピックではなく、他の分野からの関心もたかいようである。例えば、高田 (1995) など、工学系の分野からのアプローチがあり、1 度代名詞・ゼロ代名詞として文に現れた実体は、次の文も代名詞・ゼロ代名詞になる可能性が高いと述べられている。

る名詞句の振る舞いのみに着目して議論しているもの、あるいは名詞句の議論から出発して二義的に述語の要素に言及しているものを指している。述語中心の研究にあたるものは、名詞句と述語を1つのユニットとしてみなし、名詞句は述語の要求があって存在するのだという立場から、述語の影響力を前面に出しながら項省略を観察しているものを指す。

次の1.2.1と1.2.2では、先行研究を上の3つの点に着目し概観していく。

1.2.1 質的分析が中心の先行文献

伊豆山 (1986) は、顕在化していない項を1) 本来ないもの、2) 想定されるが言語形式として特定化できないもの、3) 言語形式として特定できるが顕現できないもの、4 言語形式として顕在化してよいものに下位分類し、3) のみを省略として扱えるとしている。方法論は、質的分析で、話し言葉の1文を対象にし、名詞句中心の分析である。

ベケシュ (1995a) は、ギボン (Givon) の枠組である RD (指示距離) を用いて同一指示対象を示すのに使われる指示詞コソアと省略の相互関係を指摘している。ベケシュ (1995b) では、主題化された「NP ハ」と省略項との連続性を分析、さらにベケシュ (2002) では主題化とテキストのパラグラフ構造との関わりについて、「NP+ハ」「NP+格助詞」「 ϕ 」の分布を主題化との関連で説明している。これらベケシュの3つの議論すべて、書き言葉を質的分析したもので、2 文以上の談話を対象とし、名詞句のみに特化した研究である。

砂川 (2005) は、同一指示形式の使い分け、指示対象の主題性の予測を規定する (ibid. :83) とし、主題性が高ければ省略、主題性が低ければ名詞句や指示詞で示すと説明している。局所的な主題を連続して言及する場合は省略形式がプロトタイプだと主張している。砂川は、2 文以上の書き言葉の談話を対象とし、名詞句を中心として議論を展開している。量的分析も行っているが、その数量が下の Fry (2003) など比べると少なく、検討の余地があると思われる。

久野 (1978) と久野 (1983) は、項省略の適切な説明に不可欠なものは談話情報であるとし、日本語のゼロ代名詞には次のような仮説が成り立つことを説明した。

文の主要構成要素のゼロ代名詞化：その指示対象が先行文脈の談話主題であり、その文の主題でもあるときにのみ、可能である。 (久野 1983:185)

さらに、因果関係を表す「ノデ」や視点を表す「…カカッテ来タ」や話し手の感情移

入(empathy) 表現である「テクレタ」があることで、ゼロ代名詞の予測性が高まると述べている。久野の2つの議論は、質的な分析で、書き言葉の作例を使用したものである。名詞句から出発した議論は、述語との相関を指摘する。

長谷川 (1995) は、ゼロ代名詞と先行詞の関係を中心に「主題との照応」「～ながら」などの接続詞が関与する文内照応の「時制制限」と「話者の視点・共感」と敬語の「述部との一致」という観点から項省略の説明を試みている。これは質的な分析で、対象は書き言葉の1文の作例である。上の久野と同様に名詞句から出発しながらも述語との関連性を視野に入れ議論を進めている点は示唆的である。

甲斐 (2000) は、日本語の1・2人称主語が言語化されない理由を久野 (1983) が提示する「予測性」という意味機能に求め、話し手は、常に前景化 (foregrounded) された旧情報 (given) を担う情報のため非言語化されやすいと説明する。この研究は質的な分析で、対象は話し言葉の2文間で、名詞句とその意味に重点を置いている。

清水 (1995) は、日本語は連続主題を省略することで文章の結束性 (cohesion) が保障されるが、連続主題が省略されない場合もある。それは述部の種類に影響されている。「属性」叙述文の場合は、連続主語でも具現化する必要があると主張している。これは質的な分析で、対象は書き言葉の2文間で述語に重点を置いている。⁹

山田 (1996)、(2001) は、談話内に項省略がある場合テクレル受益文と能動文（および受動文）には相補的な人称確定機能があると主張しており、授受表現が指示対象の同一指示を決定する役割を果たしていると指摘している（山田 1996:105）。日本語の述部に現れる形態素は、一義的な相互参照標識 (cross-referencing marker)¹⁰ ではないが、述部形態素がその依存する項との関連性を示していると考え、授受表現などの述部形態素が相互参照標識のような機能をもつということを主張していると考えられる。質的分析で、対象は書き言葉の単文で、名詞句と述語の相互関係に注目している。

Fry (2003) と Nariyama (2003) については、1.2.2 で詳しく述べるが、両者とも質的・量的分析を行っている。Fry (2003) は名詞句を中心に、Nariyama (2003) は名詞句と述語の相互作用に着目している。

⁹ 宮島・仁田 (1995)、恵谷 (2004) も清水 (1995) と同様に主題の省略と顕現に叙述の類型が関与していると述べている。

¹⁰ 相互参照標識とは、呼応標識 (agreement marker) とも呼ばれ、例えば、英語の John likes Mary の3人称単数現在の「s」がそれに相当する。

1.2.2 質的分析・量的分析を併用した先行研究

1.2.1 節でみた先行研究のうち指示対象の識別方略に深く関わっているもので、質的・量的な分析両方を実施している Fry (2003) と Nariyama (2003) を詳しくみていきたい。

1.2.2.1 Fry (2003)

Fry (2003) は日本語の話し言葉を研究対象とし、日本語の「省略と『ハ』標示 (wa-marking)」という言語現象を分析している。対象は話し言葉に設定され、自然会話のコーパス Call Home Japanese (以下 CHJ) を言語データベースとして使用している。そして、独自の音響的、音声的、統語的、意味論的な言語的注釈 (annotation)¹¹ を施すことで、詳細な分析結果を提示することに成功している。実際の言語データを扱いつつ、それを客観的に数量化することで、質的側面および量的側面の両方から言語現象を観察できるという、コーパス言語学の利点を最大限活用した先行研究といえる。

この論文が導き出した結論で注目すべき点は以下の 2 点であると考える。

- ① 人間主語と他動詞の主語は省略されやすい。また、他動詞の場合、その主語の多くは人間である (ibid. :87)
- ② DuBois(1987) の提案する「単一語彙項の制約 (One Lexical Argument Constraint on Clause Cstructure)」¹² および Comrie (1989b) の提案する「他動詞の主語は省略されやすいという一般化」の実証

まず、1 番目の主語省略に関しては CHJ が提示する項の省略率は、主語 (N1) が 69%、そして直接目的語 (N2) が 52%と両者ともに頻度は高いが、比較すると主語の省略率のほうが高いという結果が提示されている (Fry 2003:86)。さらに、主語 (N1) の述語別の省略率では、自動詞は 63%で他動詞は 80%という結果を示している。個別の述部でいえば、「送る」は 89%の主語(N1)が省略されている。また、主語省略がある述部の内上位 27 位までの述部が、項に対して人間性の意味属性を要求している (ibid. 88)。人間主語および他動詞の主語は省略されやすいというわけである。

Fry (2003)は日本語会話での人間主語の省略頻度が高くなる要因として、日本語には 1 人称と 2 人称という直示指示を同定できる文法形式が人称代名詞以外にも存在することを

¹¹ コーパスとして集められた言語資料に単語の品詞や文法範疇など言語学的情報を加えることを annotation (注釈) と呼ぶ。言語研究とコーパスの使用に関しては Biber et al. (1998) を参照。

¹² 単一語彙項の制約に関しては第 2 章で詳しく述べる。

挙げている。日本語では指示対象が省略されても、それを回復することは容易に達成できるが、それは敬語やモダリティや終助詞などの形式が述部に存在するからだというのが Fry (2003) の主張である (ibid. :89)。

次に、2 番目の注目点であるが、Fry (2003) は具体的な数値を提示しながら日本語の話し言葉における 1 節内の項の数はゼロか 1 であることを導きだしている。項構造における「単一語彙項の制約」つまり「1 つの節内での項の数はゼロか 1 が基本で、節 1 つに対して項が 2 つ以上出現することは避ける構造になっている」という DuBois (1987) の仮説、および Comrie (1989b) が主張する「他動詞の主語は省略されやすいという一般化」を支持する結果を提示している。

Fry (2003) は指示対象の決定を名詞句側から質的・量的分析を行い、説得的な結果を提示してくれるが、対象が「話し言葉」であり「書き言葉」についての言及はない。ことばが「話し言葉」と「書き言葉」の総体であることを考えると、「話し言葉」のみならず「書き言葉」からの分析も必要と思われる。

1.2.2.2 Nariyama(2003)

1955 年の国立国語研究所の調べによると主語省略の頻度は会話では 74% にのぼり、省略の頻度が低いといわれる書き言葉でも 56.3% という分析結果がある (ibid.:26)。Nariyama (2003) は、日本語の主語位置にある項の省略の仕組みを解明しようとした研究である。日本語では、実際には顕在化していない非表示項 (unexpressed argument) が曖昧性を伴わずに指定することができるわけだが、Nariyama (2003) は日本語の主語省略とその同定システム、つまり指示対象の識別方略システム (reference-tracking system) について詳細に説明し、その省略回復の仕組みを提示している。

Nariyama (2003) は省略された項を回復するための方略には「項省略を解決する 3 つの装置 (three devices for Ellipsis resolution)」があるという。具体的には以下の 3 つの装置であり、各段階が順を追って作動し省略項を回復していると提案する (ibid. :288-289)。

- ① 「述部装置 (Predicate devices)」
- ② 「文装置 (Sentence devices)」
- ③ 「談話装置 (Discourse devices)」

それぞれの装置を下に紹介する。

【述部装置】

述部装置は述部の形態素で省略項がどのようなものかを示す機能をもっており、それを頼りに省略項を同定する。この述部装置は 4 つの下位範疇で構成されている。

- ① 動詞の意味
- ② 待遇表現
- ③ 認識論的形態素
- ④ 交替指示 (switch-reference)¹³

具体的にみると 1 番目の「動詞の意味」とは、述部が自動詞か他動詞かあるいは授受動詞かといった動詞の意味が項省略の同定に関与していることである。2 番目の「待遇表現」とはいわゆる敬語で、これも名詞句同定のでがかりになる。3 番目は、「～タイ」などの認識論的形態素で、最後は、「～ナガラ」などの接続詞による交替指示である。Nariyama (2003) は、交替指示は述部の形態素だけでなく、名詞句側の形態素、つまり助詞にも関係しており、「ハ」と「ガ」の使い分けが指示対象の決定に関与していると述べている。

述部装置では上記の 4 つの下位範疇、① 動詞の意味、② 待遇表現、③ 認識論的形態素、④ 交替指示が互いにヒントを出し合って、省略項に対して同じよみを導き、さらに指示同定機能を強化して 1 つの指示対象を特定していくと述べている。Nariyama (2003) では、項省略の解明には関与すると思われる要因を細かく提示してくれているという点で示唆に富むが、それらの要因間の相関性に関しては言及がなく、データ量とともに相関関係の検証が課題として残っていると思われる。

1.2.3 先行研究のまとめ

1.2.1 と 1.2.2 で概観した先行研究を質的分析と量的分析の違い、名詞句重視か述語重視か、項省略の対象範囲の違いの 3 点に着目してまとめると表 1 ように分類することができる。

分析方法では主に質的分析が中心であったが、Fry (2003) がコーパスを使い数量分析を行っている。質的分析の妥当性をデータ分析で補強するという点で量的分析の意味は大きいと思われる。

¹³ 詳しくは第 2 章で述べる。

表 1 先行研究のまとめ

	方法論		着目点		対象の範囲		
	質的	量的	名詞句	述語	文内	2文	2文以上
伊豆山	○	×	○	×	○	-	-
ベケシュ	○	-	○	×	-	-	○
砂川	○	△	○	-	-	-	○
久野	○	×	○	△	○	-	-
長谷川	○	×	○	△	○	-	-
甲斐	○	×	○	△	-	○	-
清水	○	×	○	○	-	○	-
山田	○	×	○	○	○	-	-
Fry	○	○	○	-	-	-	○
Nariyama	○	○	○	○	-	-	○

次に、分析内容としてどのような要素に着目しているかを見てみると、名詞句側重視の研究は指示対象が主題なのかそうでないのかという情報構造を重視し、広い範囲を射程に談話内での指示対象の語り継がれ方に焦点が置かれている。この談話全体からトップダウンで項の振る舞いを観察するというマクロ的な視点の分析は、連続した出来事の中で名詞句自身が果たす役割を確認する点でその有効性を発揮できる。

一方、名詞句と述語の相互作用を重視した分析では視点などを示す形態素「V タイ」や授受動詞の重要性が指摘され、省略項の復元に大きな役割を果たしていることを示している。これは分析対象を1つの出来事に限定し、そこでどのような意味の名詞句がどのような形式で使われているか、ということに焦点が置かれたミクロ的な分析といえる。狭い範囲のなかで意味に影響を受けながら、項省略がどのような役割を担っているかを詳しくみる上で、この述語を重視した分析は有効に機能していると思われる。

以上、先行研究を方法論、着目点、対象範囲に着目して概観してみると、様々なアプローチがあることがわかった。これまでの先行研究は、それぞれの分析の特徴を生かし、貴重で示唆に富む知見を提示し、項省略に対する理解を深めてきたと思われる。しかし、それでも、未だに項省略が議論の場に上るという現実からすると、項省略という問題点にはさらなる検証が必要と考えられる。先行研究は多くの点で有益であるが、それぞれの研究

が個別的で限定された要因に関心を払ってきたことに項省略の全体像を捉えるときの欠点があると思われる。多様な要因が絡み合い、影響しあっていると考えられる項省略を適切に説明していくためには、これまでに蓄積された知見を取り入れ、それを基にした包括的な方法論に拠って立つ分析・考察が必要ではないだろうか。

特に、書き言葉はその煩雑さ故に量的分析が少ないようで、日本語には、Biber et al. (1998) などのように言語教育を含め広い分野で共有されているコーパスが少なく、その危機感から近年、国立国語研究所を中心にした『現代日本語書き言葉均衡コーパス』など、書き言葉コーパスの構築が始まっている (丸山 2009)。しかし、これらの日本語の書き言葉コーパスは、解析精度は高いが品詞のタグ付けが主で、述語項構造的な情報や節関係などの情報を網羅したものはほとんどないと言われている (松本・大山 2009)。そこで、本研究では書き言葉を対象に名詞句側と述語の相互作用を重視し、複数の要因を包括的に分析するために、これまでになかった細かなタグ付け・アノテーションを施した独自のコーパス構築を行い、質的かつ量的な分析を行いたいと考える。

1.3 本研究の意義

1.3.1 項省略と日本語教育

言語研究は、隣接分野との連携を念頭に置いた外向きのもので、特に、言語研究と外国語教育との密接な関係は周知のことである。言語研究が実践的に貢献できる分野は言語教育であり (角田 1991 他)、日本語教育においても、学習者が文型 (文法形式) は知っていても、使うべき文脈やその表現が示す意図や担う機能が把握できないため、教室外での実際の会話でうまくいなくなる、といった言語知識と言語使用の問題が重要な課題となっている (海保 2002)。

日本語教育においては、「文脈からわかる時には主語が省略されることを指導すれば、それほど困難はない」 (富田 2007:28) という項省略をあまり重視しない言説もあるが、項省略と言語習得の問題 (架谷 1991)、項省略と複文習得 (田中 1997)、項省略を学習者に理解させるときの指導上のポイント (野田他 2001)、項省略と文化の関係 (成山 2009) など項省略に関する議論は活発に行われている。

実際に、筆者が日本語の学習者を対象に行った調査でも日本語教育において項省略が軽視できない重要な課題であることを示唆するような結果が得られた。特に、項省略とそれに関係する言語表現の使い方という側面で、学習者と母語話者の間にズレがあることが観

察された。

実施した調査は、次のようなものである。

被験者：母語話者 20 名

学習者 20 名

学習者のレベル：中級後半

学習者の母語構成：

中国語 (7 名)、フランス語 (3 名)、タイ語 (3 名)、チェコ語 (2 名)、

韓国語 (1 名)、ペルシャ語 (1 名)、デンマーク語 (1 名)、ドイツ語 (1 名)、

スペイン語 (1 名)

調査内容：図 1 の 4 コマ漫画¹⁴を見てもらい次の質問に解答してもらう

質問) 4 コマ漫画の (A) に入れるとしたら、a ～ d のうちどれを入れますか。

- a. みんな、ぼくのこと変なヤツと思うかなあ。心配～。
- b. ぼくのこと変なヤツと思うかなあ。心配～。
- c. 変なヤツと思うかなあ。心配～。
- d. 変なヤツと思われないかなあ。心配～。

(a) から (d) はどれも文法的に正しい文であるが、項省略の仕方がそれぞれ異なる。(a) は第 1 項の省略がなく、(b) は第 1 項が省略され、その指示対象「みんな」である。(c) は第 1 項と第 2 項が省略で第 1 項の指示対象が「みんな」で、(d) は第 1 項が省略で指示対象が「ぼく」である。また、(d) のヴォイスだけが受動の形態を使用している。

上の多肢選択テストを行った結果は図 2 の通りである。母語話者の解答は、(a) が 6 名と (d) が 14 名に分かれるものの、解答 (d) の方が明らかに多く、(b) と (c) を選択した母語話者はいなかった。ところが、学習者の場合は、(a) が 6 名、(b) が 8 名、(c) が 4 名、(d) が 2 名と解答にばらつきが見うけられた。選択肢 (d) に関しては、母語話者と学習者の解答差にかなり大きな違いがあることが分かる。

それぞれの言語には、出来事を表現するのに好んで使う表現があり、学習者は個別の文法を学ぶと同時にその目標言語で好まれて使われる言語表現も習得する必要がある。いわゆる、「日本語らしい表現」を習得するためには、文法能力に加え、それを適切に使用する

¹⁴ 作品の著作権は出処元に帰属する。この作品の一部使用に関しては、発行元の使用許可を得て掲載している。オリジナルの漫画で A に入る言葉は、「変なヤツと思われないかなあ」。出典 小泉吉宏 (2006) 『ドッポたち シアワセのもと』 p.88. 幻冬舎

運用能力も要求される。本研究の目的である項省略の解明は、この「日本語らしい表現」の習得において重要な位置を占めると思われ、日本語教育に少なからず貢献できる成果を提示できるものと考ええる。



図 1 4 コマ漫画

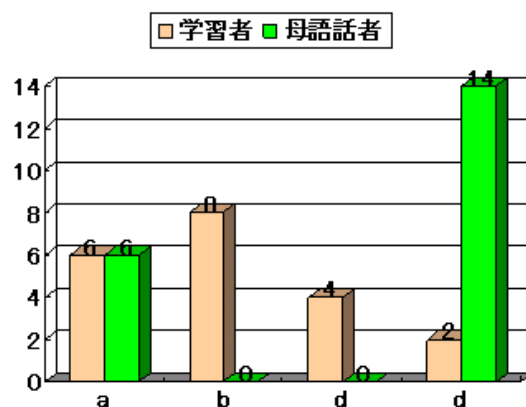


図 2 学習者と母語話者の解答比較

1.3.2 項省略の通言語学的研究

日本語や韓国語にとって項省略の頻度の高さは顕著な特徴であるため、その仕組みを明確にすることはそれぞれの言語の固有の問題である。しかし、項省略の説明は多くの言語が共有する通言語学な課題と考えられる。省略頻度の低い英語でさえも会話ではその頻度が上がることが観察され¹⁵、Huang (2004) では英語・日本語・北京語・ロシア語・スペイン語の 5 つの言語を対象に、実際の談話の中で指示表現がどのように分布しているかが調査されるなど、項省略に対する興味は個別言語の問題にとどまらず、言語間の問題として広がりを見せている。日本語・韓国語・英語という個別言語を実証的に観察し比較・対

¹⁵詳しくは Oh(2006) を参照されたい。

照する本研究はこのような通言語学的な課題に貢献することができるのではないかと考えている。

1.4 本論文の構成

本論の構成は以下のとおりである。

第 1 章 序論

第 2 章 本研究の理論的背景

第 3 章 本研究のデータと方法

第 4 章 日本語の分析結果

第 5 章 英語の分析

第 6 章 韓国語の分析

第 7 章 結論

第 2 章では、本研究が立脚する理論的背景である、類型論と機能主義的アプローチと対照研究の重要性を述べ、これまで個別的な要因に関して限定的に研究されてきた項省略を包括的な視点から研究することを提案してみたい。それに加え、本研究のキーワードである指示対象の識別方略 (reference-tracking) と関連する言語学的概念を説明する。

第 3 章では、日韓英対訳の小説・学術書に詳細な注釈を加えた独自のコーパスの解説をし用例を示しながら、形態論・統語論・意味論・語用論の包括的視点からの分析方法を説明する。

第 4 章では、本研究の理論的よりどころである「単一語彙項の制約 (one lexical argument constraint)」を検証するために 1 節内の項の出現個数を確認し、次に具体的な分析項目である①文法関係、①有生性、③同一指示性、④述語の情報の 4 項目について量的および質的分析を行った結果を示す。

第 5 章と第 6 章では、日本語の分析と同様の方法で行った英語と韓国語の量的・質的分析の結果を示す。

第 7 章では、第 4 章から第 6 章でみた 3 言語の指示対象の識別方略の相違を基に、それぞれの言語がどのような関連性をもち配置されているかをまとめ、今後の研究課題と展望について述べていく。

第 2 章 本研究の理論的・方法論的背景

2.1 本研究の理論的背景

本節では本研究が拠って立つ理論的背景について述べていく。ことばをどのように捉えるかは言語理論によって異なるが、機能主義的アプローチでは、ことばを道具とみなし、その道具を使う人間とその使われ方に重点を置いている。機能主義の言語観は、Dik (1997:3) の次の言葉によく現れている。

(A) language is in the first place conceptualized as an instrument of social interaction among human beings, used with the intention of establishing communicative relations.

ことばの一義的な役割は人間が社会の中でお互いの意思疎通を円滑に行うために用いる道具のようなものだ、という姿勢が機能主義の拠り所である。本研究もこの言語観を主軸に、機能主義的なアプローチで提案されている手法を採用し、日本語・英語・韓国語の 3 言語における指示対象の識別方略を検証していく。

言語を道具とみなす機能主義的なアプローチでは、道具として適切に機能しているかを測る目安として使用頻度が重要視される。何度も繰り返し使用すること (routine repetition) で様式化された記号は、認識されやすく使い勝手がよくなる。すると、さらに使われやすくなり、さらに使用される頻度が高くなるといった相乗効果が生まれる (Haiman 1994:6)。その結果、他のものに比べて際立って出現率の高いものはプロトタイプとして認識されることになる。本研究でもこのような生起頻度 (frequency) および分布状況を確認して、どのような要因が項省略とその指示対象の識別に積極的に関与しているかを検証していく。

また、機能主義ではその帰納的手法から類型論¹⁶と目的を共有している。異なる言語が同じ機能領域（例えば「受動態」のような表現）をどのような構造的手段を使ってコード化しているのかを調べるのが文法的な類型論 (grammatical typology) と言われており (Givon 2001:23)、一見すると何の共通性もないようなところに一定の法則性を求めていく、という点では、機能主義と類型論が目指している方向性は類似していると考えられる。また、機能主義は、異なる複数の言語体系を比較してそれぞれの特性を明示し

¹⁶ 類型論については Whaley (1997) などを参照されたい。

ようとする対照言語学 (contrastive linguistics) とも目標を共有している。¹⁷ 形態的・統語的・意味的・語用論的な道具立てを設定して項省略の生起実態を整理・分類しながら、日本語・英語・韓国語の 3 言語に見られる相違を明確にし、共通のパタンを探っていく。このような手法をとる本研究は、機能的で類型論的な対照言語学的方法論を大きな拠り所としている。

2.2 包括的なアプローチ

ことばを研究する場合に、その対象とする言語現象がどのような大きさの単位なのかによって研究分野が分かれている。意味をもつ最も小さなレベルを扱う形態論 (morphology) から統語論 (syntax)、意味論 (semantics)、語用論 (pragmatics) にいくに従って対象とする範囲が広がっていく。第 1 章のブロック塀の喩で言うならば、ブロック 1 つ 1 つを細かく見るか、隣合ったのブロックとの配列を見るか、あるいはぐっと視線を引いて塀全体を見渡すか、といった見方の違いのようなもので、形態論では意味を表す最小の単位を対象にし、語の配列の仕組みを考える統語論や語や文の意味を扱う意味論ではもう少し大きなレベルを対象にし、文を超えた意味を扱う語用論ではさらに大きなレベルを対象とする。

これらの分野は異なるレベルを対象にしながらも、独立した存在ではなく相互に依存しあっている。ことばを記述・分析するときの態度として、形態・統語・意味に加え、文を超えたレベルの視点が必要で、言語に内在した自律的な側面と言語の外にある要因の両方を考慮にいたした柔軟な対応が必要だと言われている (Du Bois 1987:344、Du Bois 2003、Givon 2001:13)。¹⁸ 省略現象を議論する際においても指示表現の形式の決定にはグライス (Grice) の量の公理 (the Maxim of Quantity) に基づいた談話的要因 (factor) が関与しているとした、統語と語用論の相互作用を強調した考察がある (Gundel et al. 1993、Huang 2004)。また、第 1 章の先行研究の概観からもわかるように、項省略には様々な要因が関与しており、その相互関係の解明が課題として残されているといえる。

¹⁷ 対照言語学は、個々の言語は異なることを前提に、あるものさしを使って比較することでそこに類似性を見出し、言語間の関連性を認めるようとする学問で、同じ系譜の言語を比べて祖語を再現しようとする比較言語学 (comparative linguistics) とはことなる。対照言語学については (生越 2002) などを参照されたい。

¹⁸ 特に指示対象の識別方略に関して、形式・意味・語用論の相互作用の重要性を説いたものに Ohori (2005) がある。

同じものを指し示すのに何故異なった形式 (form) を使う必要があるのか。その動機を探っていくには、どのような形式がどの位置に現れ、そのときの指示対象はどのような意味で、談話内でどのような役割なのか、といった形態・統語的要因、そして、意味的・談話的要因を多角的に検証する必要があると考えられる。

形式・意味・機能・談話的（語用論）要素を包括した多様な分析方法の必要性を否定する人はいないと思うが、分析点が多岐にわたるため研究の焦点が不明瞭だという批判を受けやすい。そのような危険性を避けるには1つの形式や意味、または機能だけに焦点をあてたピンポイントな分析（例えば、談話中の省略項と主題の関係など）に集約の方が賢明かもしれない。実際に多くの研究はこのような方法論をとっている。しかし、ことばに組み込まれている要因が多種多様である以上、焦点の分散化という危険を認識しつつも、包括的な視点を取り入れ問題を掘り下げていくことにこだわっていきたいと考える。本研究では、複数の要因1つ1つを解きほぐしながら相互のつながりを確認するといった地道な作業をベースに、第1項の省略およびそれに関連する言語現象を検証していく。

談話と文法の相互作用の観点から、マクロ的視点とミクロ的視点の両視点からの観察 (Givon 1979:208-9) の重要性が提唱されるなか、実際にどのような「ものさし」で談話を観察するのが適切かといった点に関しては具体的な指標が提示されていない。その中でまず問題となるのがことばのまとまり・ユニットの設定で、どのレベルにまで下がって観察・検証を行っていくかということである。ことばのミクロ的ユニットの適切な設定である。

一般的には、命題を表す節 (clause) が基本的な単位であると考えられるが (Halliday 1985)、Van Valin & LaPolla (1997:25-31) は、Dik (1989) が命題 (proposition) レベルと叙述 (predication) の区別を認めたように、内核 (nucleus) レベル（動詞）と中核 (core)（動詞と名詞句）レベルを認め、節の層状構造 (layered structure) を次のように提示している。

表 2 節の層状構造 (Van Valin & Lapolla 1997:26 より)

節 (clause)	
中核 (core)	周辺的要素 (periphery)
John <u>ate</u> the sandwich 内核 (nucleus)	in the library.

表 2 は、1 つの述語要素（内核（**nucleus**））とその項構造で中核が構成され、節に発展していくことを示している。ここで注目したいのは、中間的な存在の中核（**core**）を認めていることで、(5) のような場合も、いわゆる動詞句（**VP**）という範疇は設定せず、項構造を維持した中核の連続と捉えている点である。

(5) a. Sam sat ϕ playing the guitar.

b. Tom tried ϕ to open the door. (ibid. 454)

(5a) は「sit」とそれが要求する項「Sam」の中核と「play」とその項「 ϕ 」と「the guitar」の中核が連結したもので、(5b) は「try」と項「Tom」の中核と「open」と項「 ϕ 」と「the door」の中核の連続とみなしている。本研究では、談話の中で項の位置に現れる指示対象がなぜ異なった形式で現れるのか、その動機を探ることを目的としている。そのために、より細かな談話構成を確認する必要があると考え、Van Valin & LaPolla (1997) の中核と節という概念を援用し、中核レベルにまで下げたミクロ的な考察を行う。

談話が構成されるときには、ミクロのレベルに中核の連続、マクロのレベルに節および文の連続という 2 つの側面が同時並行していると考えられる。述部を中心に出来事を積み重ねて記述している談話のボトムアップ的な側面と、談話内で名詞句がどのように連続しているかといった表層的な側面の 2 つの側面を並行して観察する重層的な分析方法をとり、談話の構造を考察していく。

2.3 指示対象の識別方略

言語には、談話内で連続して名詞句に言及するとき、その名詞句の同一性を保障するための機能である指示対象の識別方略（reference-tracking）があり、その代表的なものは、交替機能（switch function）と交替指示（switch reference）と言われている（Comrie 1989a:37）。交替機能とは同じ指示対象を連続して言及していることを示す仕組みのことで、日本語の文法範疇では受動態が同じような働きをしている。

(6) [CL1	ϕ_i	贅沢をすると]	[CL2 幕府に	ϕ_i	怒-られ-て]
	[動作主]	(=当時の日本人)		[受動者]	V-PASS-te
	[CL3 ϕ_i	財産没収などの罰を受ける] ¹⁹			(日本を創った 12 人)

¹⁹ 角括弧で囲まれた部分が節で CL と番号で示し、丸括弧で囲まれた部分は文で S と番号で示

(6) の第 1 節と第 2 節を見ると、この文の 2 文前に出現する「当時の日本人」の意味役割が動作主と受動者として異なっている。受動態の機能の 1 つとして、このような意味的な変化を示すことができる (Van Valin & LaPolla 1997:291)。連続する節の間の指示対象の同一性を保障しつつ、意味要素の変化を示すのが交替機能の役割である。一方、「交替指示」とは、接続した 2 つの節の主語が同じなのか (SS=same subject)、それとも違うのか (DS=different subject)、それを文法的な手段（多くは動詞まわりの接辞）によって標示するシステムである。交替指示とは、次の Mojave 語 のような場合である (Munro 1979:145)。²⁰

- (7) a. *ya-isvar-k*, *iima-k*.
 when-sing-SS, dance-PAST
 ‘When X sang, X danced. (X が歌って X が踊った)’
- b. *naya-isvar-m*, *iima-k*
 when-sing-DS, dance-PAST
 ‘When X sang, Y danced. (X が歌って Y が踊った)’

同一主語への指示は「SS」、異なる主語は「DS」で標示される。(7a) と (7b) それぞれの文における述語 (「sang」と「dance」) の主語は出現していないが、「-k」と「-m」の接尾辞が主語が同一であるかそうでないかを標示している。

話し手や書き手が自分の意図を正確に伝達したいと思えば、語彙名詞などを使って意味と形式が透明 (transparent)²¹ な形で明示的に指示対象を指定することが望ましいだろう。しかし、現実はそのような明示的な場合ばかりとは限らない。不完全な形でしか情報が提供されないこともある。そのような場合、聞き手や読み手はどう対処すればいいのか。適切な解釈をするためには不完全ながらも与えられた範囲の情報に何かの手がかりを求める

している。節や文を明確に示すときに使用する。

²⁰ 日本語訳は筆者が加筆した。

²¹ Booij (2007:34) では次のように述べ、

[W]ords with a high degree of transparency, that is, the formal morphological structure correlates systematically with their semantic interpretation.

形式と意味に一对一の明確な関係が成立する場合を「透明性 (transparency) が高い」と呼んでいる。例えば、複合語の *blueberry* や *blackberry* の *-berry* の前の要素である、*blue* や *black* は、明確な意味を持つ語として存在していて、その部分の意味と全体の意味との対応が明確に対応しているので「透明性が高い」が、*cranberry* の *-berry* の前の要素である *cran-* は、それ自体の形式が明確な意味をもつ要素として存在していないため、「透明性が低い」形態素である。

はずである。指示対象の形式のコード化（省略なのか具現化なのか）には、それが何であるかを示すための手がかりや仕組み、つまり指示対象の識別方略がどこかに内包されているはずである。この指示対象の識別方略という観点に光を当てて項省略の再考を試みることが本研究の目的である。

2.4 軸項(pivot)

「主語 (subject)」や「(直接) 目的語 (object)」といった文法関係を示す概念は、普遍的な術語として確固たる地位を築いている。しかし、類型論的アプローチの研究分野では、英語の説明では便利に機能している「いわゆる主語」という概念が、どの言語にも常に適切に使用できるわけではないと主張されている (Van Valin 1987、Van Valin 1993、Van Valin 1995、Van Valin and LaPolla 1997、角田 1991 など)。「いわゆる主語」ではジルバル語 (Dyirbal) のような能格言語 (ergative language)²² の言語現象を説明するには不適切であるというのが大きな理由である。また、英語においても、「主語」らしき名詞句が一貫した振る舞いをしていないことも指摘されている。例えば、以下の (8) のような存在文では、疑問文の倒置など統語的役割は「there」が担い、動詞との呼応は「any boys」と「a boy」が担っている。

- (8) a. Were there any boys in the room?
b. There was a boy in the room.

Role and Reference Grammar (以下 RRG) では、異なる言語間の多様な統語的現象を説明するため、従来の主語の代案として「軸項 (pivot)」を提案している。軸項とは、「構文のなかで特権的な文法機能を担っている統語的項 (the privileged grammatical function in the construction)」であり、「統語的な目的で意味役割が制限付きで中和している (a restricted neutralization of semantic roles for syntactic purposes)」と定義されている (Van Valin & LaPolla 1997:275)。

ここで着目した点は、軸項(pivot) が構文ごとに存在するという点と意味の中和(neutralization) という 2 点である。構文とは言語形式と意味が慣習的に対になった基本的単位である。1つの文の中に異なる主語をもつ構文が2つ以上含まれ可能性があり、このような場合に、構文に固定している名詞句が1つありそれが軸項として機能していると

²²次の節で詳しく説明する。

いうのである。

次に注目すべきは、軸項は意味の中和によって意味と形式をリンクする中和という概念である。項の意味内容をそぎ落とし抽象化して、ある 1 つの形式に収斂することで文法関係が成立するというわけである。Van Valin and LaPolla (1997) は、意味役割の制限と中和の有無を基準にして、軸項を「軸項なし (pivotless)」、「意味的軸項 (semantic pivot)」、「統語的軸項 (syntactic pivot)」の 3 つに分類している。(表 3 を参照のこと)

表 3 軸項 (pivot) と制限付き (restricted) と中和の関係

番号	制限付き	中和	名称	例
①	×		軸項なし	英語の関係詞構文
②	○	×	意味的軸項	Acehnese 語の「所有者上昇」構文
③	○	○	統語的軸項	英語の「want to V」構文

「① 軸項なし」の場合とは、(9) のような英語の関係詞構文である (Van Valin & LaPolla 1997:253)。

(9) a. Mary talked to the man

(a) who [動作主(agent)] bought the house down the street.

(b) who [受動者(patient)] the dog bit.

(c) to whom [受け手(recipient)] Bill sold the house.

b. Mary looked at the box

(d) in which [場所(location)] the jewelry was kept.

(e) out of which [起点(source)] the jewelry had been taken.

先行詞の意味役割には制限がなく、動作主 (9a.a) でも場所 (9b.d) や起点 (9b.e) でも先行詞になりうるため、中和は起こっていないとみなされる。

次に、② 意味的軸項の例であるが、アチェ語 (Acehnese)²³ の「所有者上昇 (possessor raising)」構文の場合である (Van Valin & LaPolla 1997:258)。

²³ インドネシアのスマトラ地方にあるアチェ州で話されている言語で、オーストロネシア語族に属する。

- (10) a. Seunang até lôn. [受動者 (undergoer)]
happy liver 1sg.
‘I am happy.’ (lit.: ‘My liver is happy.’)
- b. Lôn seunang-até. [受動者 (undergoer)]
1sg happy-liver-.
- c. Ka lôn-tët rumoh gopnyan. [受動者 (undergoer)]
ASP 1sgA-burn house 3sg
‘I burned her house.’
- d. Gopnyan ka lôn-tôt-rumoh. [受動者 (undergoer)]
3sg ASP 1sgA-burn-house
‘I burned her house’. Or ‘She had her house burned by me.’
- e. *Gopnyan ka aneuk-woe. [動作主 (actor)]
3sg ASP child-return
‘His/her child returned.’

(10) のように、所有格名詞句 (the possessive NP) ((a)、(b) の「lôn」、(c)、(d)、(e) の「gopnyan」) が前に出ることができるのは受動者 (undergoer) のときのみという意味的制限があり、受動者だけが文法的機能を持つことができる。つまり、所有者が受動者と解釈される場合にのみ主語になれる。所有者上昇構文の軸項には、「所有者」と「受動者」という意味的要素が必須であり、このような場合を意味的軸項という。

最後に、③ 統語的軸項の場合である。英語の「want to V」構文 (Van Valin & LaPolla 1997:252) がそれにあたる。

- (11) a. Susan_i wants ______i to run in the park. [動作主 (actor)]
- b. Susan_i wants ______i to eat a hamburger. [動作主 (actor)]
- c. Susan_i wants ______i to be taller. [受動者 (undergoer)]
- d. *Susan_i doesn't want the police to arrest ______i. [受動者 (undergoer)]
- e. Susan_i doesn't want ______i to be arrested by the police.
[受動者 (undergoer)]

例文 (11a) (11b) (11c) (11e) では、動作主と受動者という 2 つの意味の違いに関係なく、

「Susan」が主語位置に現れることができる。意味的区別がなくなり同じものとして扱われていることを示している。動作主と受動者という2つの意味要素に限定された制限付きの中和が起こっている。一方、(11d) と (11e) の文法性を左右しているのは、省略されている項の位置である。つまり、英語の「want to V」構文は、省略項が軸項として機能し、統語構造に大きく依存している。²⁴

ある構文において意味的要素と語用論的要素に制限付き中和があれば、統語的文法関係が重要になる (Van Valin & LaPolla 1997:255)。つまり、個別の動詞で指定されている様々な意味役割が動作主と受動者という2つの「意味的マクロロール (semantic macroroles)」に収斂され、さらにそれが文法関係を示すための「特権的統語項 (privileged syntactic argument PSA)」に引き継がれていき、これが軸項として機能する。

統語的軸項は、意味要素という具体性をそぎ落とし抽象性を高めることで関連性を指定する、という機能を獲得する。言い換えると、統語的軸項は、述語が指定する意味的な項構造に依存し、述語の意味に関係なく、軸項の存在自身が直接的に述語と関連性を持つことができるのである。軸項を介して述語と述語を連結することで一貫性が強化され、節から文へと拡張することが可能になる。述語の連結を支えている蝶番の役割をもつ軸項という概念は、指示対象の識別方略の中で重要な役割を果たすと考えられる。

2.5 単一語彙項の制約

単一語彙項の制約とは、サカプルテックマヤ語 (Sacapultec Maya) ²⁵ の話し言葉の談話を計量分析した結果に帰結した制約である (Du Bois 1987)。談話のなかで自動詞の主語 (S)、他動詞の主語 (A)、目的 (O) の位置にどのような形式の名詞句が生起しているかを計量分析し、1つの節内で語彙的名詞句として現れる項の数はゼロか1が基本で、節1つに対して語彙項が2つ以上出現することは回避されることが示され、さらに、語彙化された項は新情報を担う傾向が高い、という文法的側面と語用論的側面の相互関係が明らかにされた。

Du Bois (1987) は、談話は能格性 (ergativity) を基盤にもち、優先的な項構造 (Preferred Argument Structure: PAS) で構成されていると説明している。能格性とは、

²⁴ RRG は、軸項と同一指示で主語位置にあるもの ((2.4)では Susan) を制御子 (controller)と呼んでいるが、本論では認知度の高い「先行詞」という用語を用いる。

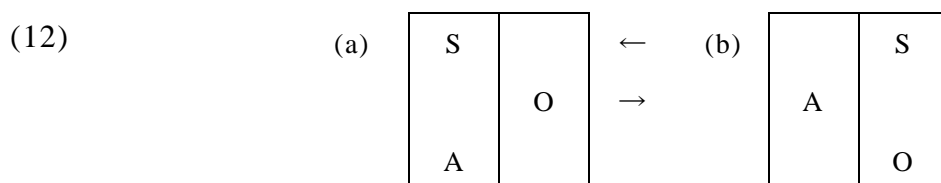
²⁵ インドネシアのスマトラ地方にあるアチェ州で話されている言語で、オーストロネシア語族に属する。

出来事の表現の仕方にかかわり、Dixon (1994) によれば、次のように定義される。

The term ‘ergativity’ is used to describe a grammatical pattern in which the subject of an intransitive clause is treated in the same way as the object of a transitive clause. (ibid.1)

(「能格性」とは、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ文法的パターンで表されることをいう)

能格性を分かりやすく図式すると次のようになる。



(a) は主格 - 対格 (Nominative accusative) 型と呼ばれ、「S」と「A」が同じように扱われ「O」と対立している。一方、(b) は絶対格-能格 (absolutive ergative) 型と呼ばれ、「S」と「O」が同じと見なされ「A」と対立している。日本語は基本的には主格-対格型であるが、次のような「V である」のような場合には、格標示が絶対格 - 能格のような振る舞いをする。

- (13)
- | | | | |
|----|---------|-------|--------|
| a. | 窓があく | (S-ガ格 | 自動詞) |
| b. | 窓をあける | (O-ヲ格 | 他動詞) |
| c. | 窓があけてある | (O-ガ格 | V である) |

「あける」という他動詞の目的語が (13b) の例では「ヲ格」が付与されているが、(13c) の「V である」の構文になると他動詞「あける」の目的語にあたる「窓」には (13a) と同じ自動詞の主語に付与される「ガ格」が付与されている。

出来事をコード化するときの中心的な項構造が能格性に規制され、具現化する項には単一語彙項の制約がかかっているという Du Bois (1987) の主張は、指示対象の識別方略を探るうえで示唆に富む。しかし、この制約は項省略の多い「話し言葉」の談話のみを対象としており、比較的省略項の少ないとされる「書き言葉」の談話では、その有効性を検証することさえ行われていない。「ことば」が話し言葉と書き言葉の総体である以上、書き言

葉における「単一語彙項の制約」の有効性および一般性を検証することは有意義と考えられる。そこで本研究では、単一語彙項の制約の汎用性の検証を行うと同時に、この制約が指示対象の識別方略として機能しているかも検証していきたい。

2.6 主観性

日本語と英語の間に見られる名詞句省略の頻度の違い、あるいは指示対象のズレなどの動機を主観性 (subjectivity) に求めるアプローチがある。その際よく引き合いに出されるのが次の川端康成の『雪国』の冒頭文とその英訳である。

- (14) a. 國境の長いトンネルを抜けると雪國であった。
b. The train came out of the long tunnel into the snow country.

(14a) と (14b) の文は、同じ出来事を表現しているが、日本語母語話者にとって、2つの文から受けるイメージ、あるいは、ニュアンスのようなものに隔たりが感じられる。このような乖離を引き起こしているのは、出来事の捉え方の違いで、(14a) には作者／主人公が汽車に乗っているイメージ、つまり視点が内包されており、一方、(14b) では話者の視点は汽車の外にあり言語表現の中に話者の存在が含まれないと説明されることがよくある(池上 1981・2006、Ikegami 2004、Uehara 1998、上原 2001、廣瀬 2001、井出 2002、本田 1994)。²⁶

このような話者の視点・言語の主観性を動機付けとするアプローチは示唆に富み、共感できる点が数多くあり魅力的である。しかし、世界をどのように把握しているかといった認知的考察は、言語を取り巻く社会や文化という非常に複雑な要因を組み込んでいくことになり研究の射程範囲が非常に広範になってしまう。本研究では、ことばの持つ文化的・社会的要因の重要性は認識しつつも、まずは、ことばの形式・意味機能などことば自身に特化した要因を探っていくことを目的とし、主観性に立脚することはその次の段階と考える。文化と言語、そして事態の捉え方 (construal) といった認知的な考察に踏み込むその前段階として、本研究では、まずことばの中心的な役割である記号的側面を精査することから始めたい。

²⁶これらの違いに関して「聞き手の認識」が関与していると分析したもの(守屋 2006)や時間表現の対比(小澤 2006)、英語との対比だけでなく中国語との対比から議論したもの(徐 2006)など様々な議論がなされている(熊倉 2006、盛 2006、新村 2006)。

第3章 データと方法

3.1 コーパス

言語研究の資料には、大きく分けて書き言葉と話し言葉の2つのモード (mode) があり、語彙・文体・文法などの点で両者の間には大きな違いがあると言われている (Biber et al.:1999)。特に、文の長さ (発話のまとまり) という構造上の特徴の違いは顕著で、話し言葉は発話のまとまりが比較的短く長い修飾句を含むような複雑な構造の文が少ない。一方、書き言葉では発話のまとまりが比較的長く、文の切れ目がはっきりしている。このようなモードの違いがある書き言葉と話し言葉のうちどちらが本研究の対象として適切かと考えた場合、「自然な発話」という点では話し言葉の方が適切のように思われる。しかし、複数の節間での指示対象の同一性／非同一性を分析するという本研究の目的を考えた場合、1 文内の語数や節の数が多く複文の出現頻度の高い書き言葉の方が、分析対象として適しているのではないかと判断した。よって、本研究では分析対象に書き言葉のテキストを選択した。

書き言葉のテキストには、活字化されたものとそうでないものがあるが、本研究では再検証可能性に重点を置き、活字テキストを分析対象とした。²⁷ 使用した資料は学術情報 (informational learned) の2作品と創作 (creative) の4作品である。²⁸ 英語と韓国語の分析には日本語の対訳を用いた。日本語テキストの具体的なデータは下の表4のとおりである。

テキストのカテゴリーとともに考慮しなければならないのが、分析対象のテキスト量である。一作品すべてを対象とするか、それとも一部分を取り出して分析するかという問題であるが、本研究は後者の部分抽出を用いた。部分的抽出の場合、データの偏りという問題がある。一部分の抽出ではデータ全体を反映していないのではないかと問題がそれで、このような偏りに対する対処策として「代表性 (representativeness)」という概念が

²⁷ Kennedy (1998) によると書き言葉テキスト (written texts) は、i. 活字化されていないものと ii. 活字化されたものに分類され、さらに活字化されたものは a. 学術情報 (informational: learned)、b. 大衆向け情報 (informational: popular)、c. 説得的 (persuasive)、d. 創作 (creative) に下位分類される。

²⁸ 作品は、土居健郎 (1980)『甘えの構造』弘文堂、堺屋太一; ジャイルズ・マリー訳 (2003)『日本を創った12人: 対訳』講談社インターナショナル、井伏鱒二 (1995)『黒い雨』新潮社、大江健三郎 (1995)『静かな生活』講談社、宮部みゆき (1998)『火車』新潮社、角田光代 (2004)『対岸の彼女』。以下、出典元は、それぞれ「土居 J」「堺屋 J」「井伏 J」「大江 J」「宮部 J」「角田 J」と表記する。

ある。1つの作品で2,000語から5,000語程度のまとまった分量を扱うことでその作品の代表性を表すことができるといわれており (Kennedy 1998:69)、本研究でもこの代表性という概念を援用し、ある程度まとまった分量の言語資料を部分的に抽出し分析を行った。

表 4 対象資料の文字数、節数、文数

	日本語タイトル	文字数	節数	文数
学術情報	1. 『甘えの構造』	4673	285	83
	2. 『日本を作った 12 人』	4229	266	113
創作	3. 『黒い雨』	4495	350	116
	4. 『静かな生活』	4356	279	85
	5. 『火車』	4667	335	126
	6. 『対岸の彼女』 ²⁹	5670 (4433)	429 (322)	163 (114)

一部抽出データの代表性を保証するには2,000語から5,000語程度のまとまった分量のデータを抽出することが要求されるが、日本語の項省略を分析するにはどれくらいのまとまった分量のデータが適切なのだろうか。まず、表4の1～6までの1作品につき2,000字を抽出して第1項の形式分布を確認してみた。³⁰次に、6作品の対象範囲を4,000字程度まで広げて再度同じように第1項の分布を確認してみた。³¹表5と表6がその結果である。

各作品の2,000字ベースと4,000字ベースの省略項の出現頻度をみてみると、堺屋Jを除いてどちらも50～60%前後の頻度で、抽出文字数の違いによる顕著な頻度差は認められない。頻度が50%に届かず他のデータよりも頻度が低い堺屋Jは、学術情報という文体的な要因が影響していると考えられるが、それでも4,000字ベースでは49.2%と5割に近い頻度になっている。作品ジャンルの文体的な差異を考慮した細かなデータ検証が重要だと思われるが、広い視野に立ち書き言葉の傾向性を見た場合、第1項の省略の頻度

²⁹『対岸の彼女』の丸括弧内のデータは、他のデータと分母を同じにするために対象語数を4,000語程度に限定したものである。第4章の分析対象は丸括弧内の数字を使用。

³⁰ワードの文字カウント機能を使って文字数を確認した。

³¹本研究の英語のコーパスの2,000語に相当する日本語をカウントしたところ4,000文字程度であった。

(49.2~63.0%) には 5 割前後という有る程度の一定性が認められるため、本研究では些末なりかねないジャンル別の細かな考察は避け、包括的に分布を観察することにした。それでもなるべく均一したデータにするため、分析対象データ量は 2,000 字ベースではなく、問題の堺屋 J の省略頻度がより 5 割に近い 4,000 字ベースを分析対象にした。

表 5 2,000 字抽出データの第 1 項省略の頻度

形式	土居 J		堺屋 J		井伏 J		大江 J		宮部 J		角田 J	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	94	59.5%	63	44.4%	123	62.4%	86	58.1%	106	61.3%	80	51.9%
語彙 ³²	27	17.1%	68	47.9%	61	31.0%	39	26.4%	54	31.2%	58	37.7%
その他	37	13.3%	11	0.7%	13	0.0%	23	9.5%	13	1.7%	16	1.9%
合計	158	100.0%	142	100.0%	197	100.0%	148	100.0%	173	100.0%	154	100.0%

表 6 4,000 字抽出データの第 1 項省略の頻度

形式	土居 J		堺屋 J		井伏 J		大江 J		宮部 J		角田 J	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	160	56.1%	131	49.2%	219	62.6%	156	55.9%	211	63.0%	168	52.2%
語彙	57	20.0%	114	42.9%	106	30.3%	85	30.5%	98	29.3%	126	39.1%
その他	68	23.9%	21	7.9%	25	7.1%	38	13.6%	26	7.8%	28	8.7%
合計	285	100.0%	266	92.1%	350	100.0%	279	100.0%	335	100.0%	322	100.0%

表 7 抽出量の違いによる第 1 項省略の推移

	2000 字		4000 字		10 章全体	
省略	80	51.9%	168	52.2%	222	51.7%
語彙	58	37.7%	126	39.1%	173	40.3%
その他	16	10.4%	28	8.7%	34	7.9%
合計	154	100.0%	322	100.0%	429	100.0%

さらに本研究の部分抽出データの代表性を確認するため、4,000 字より広い範囲である 1 つの章全体を取り出し談話のまとまりに着目して分析してみた。『対岸の彼女』の第 10

³² 第 1 項が「語彙」とは語彙名詞を指し、「その他」は数量詞や指示詞などである。詳しくは 3.3.1 項で述べる。

章 (pp.211-221) 5,670 字のうち、2,000 字ベース、4,000 字ベース、さらに章全体で第 1 項の分布を確認してみた。その結果が表 7 である。

1 つの章の中で対象範囲を 2,000 字から 4,000 字、さらに章全体に広げて第 1 項の形式分布の推移を見てみると、省略項と語彙項の分布はそれぞれ 51.9%、52.2%、51.7% となり、対象範囲の広さに左右されることなく安定していることがわかる。

以上、各作品の第 1 項の形式の分布、および 1 作品内での範囲の違いによる形式分布の推移を分析した結果、第 1 項の省略をより偏重なく観察できるデータ量は代表性の下限である 2,000 字程度で充分であると考えられるが³³、先に見た堺屋 J のデータを考慮すると、4,000 字程度まで広げた方がより適切な分析になると考え、4,000 字ベースを対象データ量とした。

3.2 分類方法

3.2.1 項省略

3.1 項ではデータの分量の決定方法を観たが、ここでは「項省略 (argument ellipsis)」の決定方法について説明していく。³⁴ 第 1 章でみた先行研究の Fry (2003) では、項省略を述語の意味 (a predicate sense) を基準にして述語が要求する項の位置に具体的な名詞や名詞相当語句が出現していない場合を項省略としている。例えば(15) を見てもらいたい。

- (15) [CL1 二人-は 気長に φ 待つよりほかはなかったので³⁵][CL2 φ ゆっくり
NUM.-TOP PRED

³³ 1.2.3 の項でふれた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は、代表性を保障する分量として、1 作品につき 1,000 文字の抽出サンプルを用いている(丸山 2009)。このことから 1 作品につき 4,000 文字の抽出データというのは、決して少ない分量ではないと考えられる。

³⁴ 「項省略」の定義は各文法間で異なる。特に生成文法では「空範疇」は 1 種類で、その形式は束縛原理(A)と束縛原理(B)に従う要素の組み合わせで決定され、省略することが任意の「pro」と義務的な「PRO」の区別が必要とされている(安藤・小野 1993)。本研究では、まず生成文法でも認めている「空範疇」は 1 種類という点に着目しつつも、その形式が構造だけで決定されるという立場はとっていないことを述べておきたい。

³⁵ 日本語は形態的類型論 (morphological typology) では膠着言語に属し、その特徴が顕著に表れるのが述語部分である。「待つよりほかなかったので」では、形式は「語幹 - 助詞 - 名詞 - 形容詞 - 過去 - 助詞」と述語になれる形容詞「ない」が含まれているが、「よりほかない」で機能語化しているため、1 つの述語とみなす。このような句モダリティ(phrasal modality)(Narrog 2009:72-73)の他、副詞節や名詞修飾節に関しても、その境界線が不明瞭な場合があり、その取り扱いに関しては下の 3.4 項にて説明を加える。

弁当-を 食べていると][CL3 上り列車が入って来て]・・・

LEX-ACC PRED

(井上 J54)

第 1 節 (CL1) の述語「待つ」には、待つ行為を行う者と待つ対象である相手の 2 つの項が必要である。待つ行為者は「二人」といった数詞＋助数詞の形式で具現化されているが、待つ相手・対象を示す項の位置には何も現われておらず空所 (φ) になっている。このような場合の第 1 項を非省略項、そして、第 2 項を省略項としている。同様に、第 2 節 (CL2) では、「食べる」行為者の項が省略され、対象は「弁当」と語彙名詞で具現化されている。以上のように、述語との意味関係を基に項の位置に明示的な形式があるかないかによって省略／非省略を決定した。これは先行研究の Fry (2003) に準拠したものである。

項省略の決定に関して参照した概念がもう 1 つある。1.2.2 で述べた先行研究の Nariyama (2003) の項省略決定方法である。Nariyama (2003) では、Fry (2003) よりも項構造の解釈が少し広げられており、日本語の文を英語に翻訳するとき該当文の意味を理解するために必要な名詞句があるかないかを基準に項の数を決めている (ibid. 2003:8-9)。これは意味的な結合価 (semantic valency) と統語的な結合価の間にズレが生じる場合 (Van Valin & LaPolla 1997:147-154) に対処するための対策で、格標示と文法関係が基本からはずれる (16) のような場合を想定して項省略を決定するというゆるやかな解釈である。³⁶

(16) そこで φ 静かな生活-が し-たい

N-NOM V- DESI

(大江 J10)

And I want to live a quiet life there,・・・

(大江 E12)

「ガ格」は、(15) の第 3 節 (CL3) の「上り列車-が」のように動作主を標示するのが典型的だが、(17) の「V タイ」のような希望表現³⁷では、心的対象にも主格助詞「ガ格」が標示される。しかし、「V タイ」の表現であっても、心的対象が常に「ガ格」標示されるわけではない。例えば、(17) のように「問題にするようになったか-を」と「ヲ格」で標示

³⁶ 日本語では、格助詞で述語との意味関係を示すが、その標示方法と文法関係の関係が一对一のクリアな関係でないことはよく言及されていることである。それについては、Tsunoda (1981) や角田 (1991) などを参照のこと。

³⁷ 格表示と文法関係のズレとそれに伴う分類については、さらに細かく 3.3.3 で説明する。

されることもある。(16) のようなガ格標示は、形式的には主格だが意味的には対格標示に近いと考えられる。このような場合は第 1 項と第 2 項を認め、(16) では第 1 項省略、第 2 項非省略とした。³⁸

(17) [CL どのようにして私が甘えということを問題にするようになった]-か-を

CL-INT-ACC

のべ-たい-と-思う

Vt-INTE-CMPL-think

(土居 J1)

本研究では項構造の考え方にに基づき述語の意味を参照して必要項の数³⁹を決め、その場所が音形式でコード化されていないときを項省略とした。

3.2.2 分類の手順

ことばを使ってコミュニケーションするとき、聞き手（あるいは読み手）にとって親切な情報提供は、語彙名詞のように形式と意味が一对一の関係を保った透明な (transparent) 方法と考えられる。しかし、現実のコミュニケーションではそのような明確で透明性の高い方法ばかりとは限らず、不明瞭に思える情報提示の場合も多々ある。そのような不完全な情報を提示された場合であっても、聞き手（または読み手）は指示対象を的確に解釈するために、情報提示された範囲内で適切な手掛かりを探し、情報を見極め、指示対象を同定する。

指示対象に辿り着くために拠り所にする情報には、他の項との関係、述語との関係、隣り合う節との関係など様々な要因が考えられる。本研究では、この指示対象の識別に関わると思われる要因を大きく名詞句側の情報と述語側の情報に分類し、私たちが意味理解のために拠り所に行っている方略を特定していく。

これまでの先行研究では、名詞句側に特化した研究が主で、述語側の情報に注目するものが少なく、あったとしても、述語の意味・機能に特化しており、項の解釈は副次的なものとして扱われていた。そのため、名詞句側と述語側の相互関係といった観点は考慮され

³⁸ 動詞の意味的分類は、Levin (1993) などを参考にした。

³⁹ 日本語の項の数は『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL(basic verbs)』(1987)や結合価 (valency)を分類した松本(2006)を参考にした。また、どちらにもない述語は広辞苑の自動詞・他動詞の区分を参考にした。

てこなかったことを上の節で述べた。そこで、本研究では、名詞句側と述語側の双方向からの相互作用という観点を重視し、名詞句の省略と複数の要因を包括的に観察していく。

以下では、考察対象にした要因とその分類方法を、実際の言語資料を用いて示していく。まずは、7文が連続した談話(18)をみてもらいたい。(下線部は述語を示し、筆者が加筆)

- (18) (正午を過ぎたところだった⁴⁰) S1 禁煙車両の自由席に空きを見つけて腰をおろし 資料の入ったカバンを足元に置いたときに電車が動き出すのを感じた S2 定刻どおりだった S3 車内には本間と同年輩の背広姿の男性が目立つ S4 商用で出かけて行くサラリーマンだろう S5 これを見ても 日中の新幹線が東京という商都の血管であることがわかるというものだ S6 斜めの道の通路ぎわのシートにもたれている若者が携帯電話を耳にあてさかんに何かしゃべっている S7 わざとらしく大声をあげてぞんざいな命令口調でものを言っているところをみるといっぱし人を使う立場にいるのだろう (宮部 J4-11)

(18) に現れている述語を基準に談話の構成を見てみると、7文21節が表8のように連続している。まず、第1文・第1節(S1CL1)を見てみると、述語「見つける」にはその主体と「見つける」対象である第1項と第2項が必要になる。ここでは第1項は省略されており、第2項は「空き」という語彙名詞で表され「ヲ格」で標示されている。このような場合、S1CL1の1節内に具現化されている項の数は「1」となる。

S1CL6やS5CL13などの第2項の位置は名詞化辞で占められており、S5CL1の指示詞と同様に語彙名詞ではないため、節内の語彙名詞の数は「0」となる。また、形態素「もの」は内容形態素と機能形態素の2つの働きがあるが、S7CL18の第2項の「もの」の場合は内容形態素なので、この節の節内語彙名詞の数は「1」となる。この他に(19)の「託す」のように項を3つ要求する述語の場合は、第1項(託す主体)は省略、第2項(託す対象)は省略、第3項(託す対象の移動先)は語彙名詞の「正夫」といった具合に各項の場所が埋められている。

- (19) お袋はそう云って「酢の素」の空瓶に井戸水を入れ 線香やフクラシの木の青葉も
紙に包んで [ϕ_i ϕ_j 正男 k -に 託した]
(N1) (N2) N3 (LEX)-DAT (井伏 J66)

⁴⁰ 後続のS1との第1項の指示対象の連続を示すため、S1の先行文として参考のため記入した。

書き言葉は話し言葉に比べて文の長さや構成パターンが複雑ということもあり、項の位置に現れる指示対象の形式・意味・機能が多様である。以下では、表 8 を参考にしながら名詞句側が提供する様々な情報を整理し、本研究の分析対象の項目を提示する。

表 8 述語と項

文 No.	節 No.	述語	第 1 項	第 2 項	項の数
S1	CL1	見つける	φ	空き-を	1
S1	CL2	おろす	φ	腰-を	1
S1	CL3	入る	資料-の		1
S1	CL4	置く	φ	カバン-を	1
S1	CL5	動き出す	電車-が		1
S1	CL6	感じる	φ	節-の-を ⁴¹	0
S2	CL7	N(定刻どおり)だ	φ		0
S3	CL8	目立つ	男-が		1
S4	CL9	出かけて行く	φ		0
S4	CL10	N(サラリーマン)だ	φ		0
S5	CL11	見る	φ	これ-を	0
S5	CL12	N(血管)だ	新幹線-が		1
S5	CL13	わかる	φ	節-こと-が	0
S6	CL14	もたれる	φ		0
S6	CL15	あてる	若者-が	携帯電話-を	2
S6	CL16	しゃべる	φ	何-か	0
S7	CL17	あげる	φ	大声-を	1
S7	CL18	いう	φ	もの-を	1
S7	CL19	みる	φ	節-ところ-を	0
S7	CL20	つかう	φ	人-を	1
S7	CL21	いる	φ		0

⁴¹ 名詞化辞の「の」を含め、形態素「の」の多様性については後述する。

3.3 名詞句の情報

3.3.1 項の形式

名詞句の情報を分類するにあたって、まず、形態的長さを基準に形式を分類する。項が示す指示対象が、形態的にゼロ (zero) で示されているのか、それとも目に見える、あるいは、音で聞こえる状態で具現化されているかを基準に分類を行う。具現化されている場合は、完全な形の名詞句 (full noun) か、あるいは中間的な代名詞 (pronoun) や指示詞 (demonstrative) か、それとも抽象化の進んだ名詞化辞 (nominalizer)⁴² なのかを基準に分類を行った。

前出 (18) の例でみると、項の形式は省略「 ϕ (ゼロ形式)」と非省略にわかれ、非省略は「電車 (CL5 の第 1 項)」のような「語彙名詞」、「これ (CL11 の第 2 項)」のような「指示詞」、「の (CL6 の第 2 項)」のような「名詞化辞」である。この他にも、(20a) の「彼女」や(20b) の「私」のような「人代名詞」、(20b) の「自分」のような再帰形の「人代名詞」、(20c) の「二人」のような数詞と助数詞で表わされた「数量詞」がある。

- (20) a. 彼女-は つまらなさそうに 口を つぐんでしまった

PRO-TOP

(宮部 J44)

- b. アメリカ人は何と小さなことで一々選択しなければならないのかあたかも
そうすることによって 自分-が 自由であることを確かめでもするかのように

REFL-NOM

こんな風にも 私-は 考えた

PRO-TOP

(土居 J27)

- c. 二人-は 気長に待つよりほかはなかったのでゆっくり弁当を食べていると

QNT-TOP

上り列車が入って来て三十人ばかりの下車客がプラットフォームに降りて来た

(井伏 J54)

項の形式は、第 1 項だけでなく第 2 項や第 3 項についても分類している。例えば、(21a) の第 2 項の形式は語彙名詞で、(21b) の第 3 項は ϕ (ゼロ形式) である。

⁴² 国文法でいう形式名詞の「もの」「ところ」「こと」と名詞化辞の「の」を含む。

- (21) a. ϕ 酒-を 所望したとすると 次にはスコッチかブルボンかと
(N1) N2 (LEX)-ACC
聞いてくる (土居 J22)
- b. この人-は 近くの掛小屋にいる中尾というものと自己紹介して
N1-TOP
[閑間さんご夫婦と御養女の矢須子さんの三人-は 古市の会社へお移りに
なっている]-と
CL (N2) -CMPL
 ϕ 教えてくれた
(N3) (井伏 J66)

以上をまとめると、本コーパスの項の形式を示すパラメータは、表 9 にある 6 種類で構成されている。

表 9 項の形式

省略	非省略				
ゼロ形式	名詞化辞	指示詞	人代名詞	数量詞	語彙名詞

抽象的

表 9 の形式の配列は、項の名詞性の階層性を反映しており、右端にある語彙名詞は形態と意味の対応が一对一と透明性が高く具体的である。名詞性を支える「輪郭 (contour)」が明確である。一方、スケールの左方向に行くと形態が短くなり意味の具体性が削がれ透明性が低く、抽象的になっていく。左端のゼロ形式まで行くと、形式単独では意味を表すことはできず、意味を表すとすれば何か他のものに依存することになる。つまり、絶対的な意味表示ではなく、何らか相対的に導き出される関係性でのみ意味表示するしかない。本研究では、この名詞句のもつ、具体性と抽象性という特性にも着目して分析を行った。

3.3.2 省略項の復元

項がゼロ形式で現れた場合、意味解釈をするためにはその指示対象を復元する必要がある。その復元先を分類するために 2 種類のパラメータを使用した。(18) の S6C16 の「 ϕ

何かしゃべっている」の省略項を復元すると 2 節前の「若者」の語彙名詞に復元できる。このように語彙名詞で復元できる場合の他、S2C7 の「 ϕ 定刻どおりだった」の第 1 項のように、明示的な語彙名詞に復元できない場合もある。時間表現は項がないゼロ項表現と処理することもできるが、C7 をそのコピュラ構文「N1 が N2 だ」の形式からあえて復元しようとするれば、「電車が動き出したその時間」といった前節全体を指し示すような抽象性の高い指示とも考えられるため、第 1 項は省略項で、復元先は「非語彙名詞」とした。この他、(22) の CL1 のように時代などを表す時間的表現も同様に、抽象性が高く輪郭の明確ではない名詞性の低い非語彙名詞を復元先に持つものとして分析した。

- (22) [CL1 ϕ 17 世紀に入ると][CL2 世界的に技術の進歩が少なくなり]
[CL3[鎖国政策を採った]REL 日本には 経済刺激も乏しくなった] (堺屋 J7)

本研究では、語彙名詞に復元できる場合を中心に分析するが、語彙化できない場合も視野に入れ、S2C7 や (22) CL1 の第 1 項などの省略項も分析対象にした。省略項の復元先のパラメータは (23) の 2 つである。

- (23) a. 語彙名詞指示(lexical reference)
b. 非語彙名詞指示(non-lexical reference)

3.3.3 項の文法関係

出来事を連続して記述するとき項がどのような文法関係をもちながら談話のなかで継承されているかを確認することが、本研究の目的の一つである。文法関係の分類は RG の定義に従った。表 10 は上の (18) にある述語と名詞句の文法関係を分類したものである。述語が自動詞の場合は「S」⁴³、他動詞の場合は「A」、述部が受動態の場合は「dS」⁴⁴ と分類した。⁴⁵

⁴³ 自動詞を意思性の有無で「死ぬ」などの（非対格性(unaccusativity)）と「笑う」などの（非能格性(unergativity)）に分類することが可能である。この概念は複合動詞や結果構文の関連で重要な役割を果たしており、両者の違いを念頭にいた分析の必要性は認識している。今後のさらなる細かな分析を行うときにこの概念を援用したいと考える。

⁴⁴ 受動態の詳細については、4.3.3 項で述べる。

⁴⁵ 第 2 項、第 3 項に関しては、必要に応じて、直接目的語 (DO) と間接目的語 (IO) を用い、それぞれの分布も確認する。

文法関係を論じるときに避けて通ることができない問題として、他動性 (transitivity)⁴⁶ という複雑な問題を考慮すべきだが、本研究のコーパスで使用する「自動詞」「他動詞」の分類は、基本的に辞書等で規定されているものを使用した。特に、日本語の文法関係の判断には格助詞の役割が大きく、ヲ格と共起する場合を他動詞、それ以外を自動詞と分類する。

表 10 第 1 項の形式と文法関係

節 No.	CL1	CL2	CL3	CL4	CL5	CL6
	見つける	おろす	入る	置く	動き出す	感じる
述語種類	他動詞	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
形式	φ	φ	語彙名詞	φ	語彙名詞	φ
文法関係	A	A	S	A	S	A

しかし、3.2.1 項でも述べたように、統語標識として機能している格助詞が述語の意味の影響で基本的ではない振る舞いをすることがある。そのため、基本的には、他動詞、自動詞の二分類に従いながらも、現実の言語使用に即した分析ができるよう、もう少し丁寧な分類を行うことにした。次に、文法関係の下位分類について説明する。

まず、第 1 項が自動詞「S」の場合、(24a) の典型的なものから(24d) までの 4 種類(S1, S2, S3, S4) のパラメーターを設定した。

- (24) a. 爆発的なお伊勢参りブーム-が 起こる-と 消費需要-が 激増する
S1-NOM PRED-CONJ S1-NOM Vi
(堺屋 J7)
- b. 物産陳列列館や産業奨励館-は 上層-が へし折れて垂れ下がっていた
S1-TOP S2-NOM Vi (井伏 J105)
- c. 女子高生二人が泊まり歩いていたのがラブホテルだったことで 世のなかは
単純に [葵とナオコ-は 恋愛関係-に あった]-と
S3-TOP N-OBL Vi (EXIS)-CMPL
思ったようだった (角田 J80)

⁴⁶ Hopper & Thompson (1980) では、出来事の参加者の数、動作性、意図性、相などの特徴を総合的にみて他動性を決定する必要があると述べている。

- d. 葵-は ただ どこか べつの場所-に いたかった
 S3-TOP N-OBL Vi (角田 J15)
- e. [CL1[たまたま車道をはさんだ]REL 反対側-を 三人連れの女の人们-が
 N-ACC S4-NOM
 通りかかって] 男のふるまいを見咎める動きをおこしかけたところでも
 Vi (MOT)
 あった (大江 J84)

「S1」とは、典型的な自動詞主語で、(24a) のように主格標示「ガ」を伴って「起こる」や「激増する」といった動詞と共起する第 1 項である。「S2」は、いわゆる二重名詞構文 (N1 が/は/には N2 が Vi) の二番目の名詞句に主格が伴う場合である (24b)。⁴⁷ 「S3」は、(24c) の存在構文や「N1 が n2⁴⁸に Vi」などの自動詞構文 (例えば、(24d) の移動構文) で、自動詞の範疇に属するが意味的に名詞句が 2 つ (存在物と存在場所、移動する主体と移動先など) 必要とされる場合、あるいは、名詞句が 2 つあればより適切な情報提供ができる場合の第 1 項である。最後に、(24e) の「S4」は、「N1 が N2 を Vi」のように移動動詞が対格を伴った名詞と共起する場合である。⁴⁹

本研究では、述語の意味が要求する名詞句の数と名詞句と共起する格助詞の種類によって自動詞「S」を表 11 のように 4 種類に下位分類した。

⁴⁷ 韓国語の「N1-NOM N2-NOM tey.ta」との比較を視野に入れ、「S2」には、次のような N1=N2 の関係が成立つする「N1 が N2 になる」構文の N1 も含まれる。

· 그런	물건-이	내	것-이	된다-면	(井伏 J98)
kule.n	mwulken-i	nay	kes-i	toy.nta-myen	
such like.REL	N1-NOM	my	N2-NOM	become.DC-if	
そのような	物-が	私の	もの-に	なる-ならば	

⁴⁸ 必須項「N2」と区別するため「n2」と分類する。「n2」とは、必須項ではないが、述語の意味からこの名詞句があると、出来事の描写がより明確になる、そんな名詞句である。必須項の次に重要な名詞句という「準必須項」のような名詞句である。

⁴⁹ 「通る」「通す」の形態上で自他の区別があったり、受動化すると不自然であったりするなどの理由から、他動詞には分類されないが、「ヲ格 (対格)」を伴う場合。

表 11 自動詞構文の下位分類と文型

下位分類	文 型
S1	「N1 が Vi」
S2	「N1 が N2 が Vi」の二重名詞構文（「N1 が N2 になる」を含む）
S3	「N1 が N2 が・を以外 Vi」
S4	「N1 が N2 を Vi」

次の (25) に示したのは、第 1 項が受動態「dS」の場合である。⁵⁰

- (25) 福祉作業所では 当日の欠席届と出席者の顔ぶれ-が 照合された-ところ-で
dS-NOM PASS-PAST-NMZ-OBL
(大江 J82)

最後に、第 1 項の指標が他動詞「A」の場合を見てみる。「S」と同様に「A」の多様性を詳細に分類するため、格標示を基準に下位分類した。具体的には (26) に示す通りである。第 2 項と共起する格標示がヲ格ではない場合 (26a, 26b) を始め、ヲ格標示の (26c)、そして補文標識のト格の (26d) まで連続的な 4 種類 (A1, A2, A3, A4) のパラメーターを設定した。

- (26) a. 心学塾の講義風景の絵を見ると 部屋の中央正面の舞台みたいところに先生
が座り 聴衆の席は簾で仕切ってあって 向こう側が男子こちら側は女子席で
先生の顔は 見えるが 男女-は 互いの顔-が 見えないようになっている
A1-TOP N2-NOM Vt,POT (堺屋 J77)
- b. [ナオコはどこにいったのかという]_{REL} 問い-に-は ふたり-とも
N2-OBL-TOP A2-both
答えなかった
Vt (角田 J41)
- c. そこかしこにいる骨探しの人たち-が お尻-を 立てて
A3-NOM DO-ACC Vt
前かがみになっているかと思うと 不意に腰をのぼし また前かがみになった
(井伏 J97)

⁵⁰ 「dS」の下位分類等については、3.4.2 で詳しく述べる。

- d. このようなことを実践しているうちに 私-は 次第に [もし日本人の心理に

A4-TOP

特異的なものがあるとするならば それは日本語の特異性と密接に関係があるに
 違いない]-と 考えるようになった

CL-CMPL

Vt

(土居 J56)

- e. 父と母-は 葵-に 何も 訊ねなかった

A3-TOP

IO(N3) DO(N2)

Vt

(角田 J31)

- f. 関根彰子の何に惹かれて φ 彼女-を 標的-に したのだろう

(A3)

DO(N2)-ACC

N3-DAT

Vt

(宮部 J90)

述語が複数項を要求するとき、第 1 項、第 2 項の位置に現れる名詞句を格標示によって 4 つに分類した。(26a) の「A1」は、語彙的可能動詞⁵¹「見える」の第 2 項が主格「ガ格」を伴って現れる場合で、(26b) の「A2」は、「答える」の第 2 項のように主格・対格以外の斜格（「ニ格」や「ト格」）で現れる場合である。(26c) は「A3」の例で、典型的な他動詞表現の第 1 項で、必須の第 2 項が対格「ヲ格」を伴う「DO」の場合である。(26d) は、第 2 項に補文（引用節）が現れる場合である。(26e) は、統語的な「DO」「IO」が現れる場合で、(26f) は、意味的・統語的に名詞句が 3 つ要求される場合で、ヲ格標示の「A3」に含んでいる。まとめると他動詞表現の「A」は表 12 の 4 種類に分かれる。

表 12 他動詞構文の下位分類と文型

下位分類	文 型
A1	「N1 が N2 が Vt」
A2	「N1 が N2 が/を以外の格助詞 Vt」
A3	「N1 が N2(DO)を Vt」 「N1 が N2(DO)を N3 に Vt」を含む
A4	「N1 が 補文と Vt」

談話内の項と文法関係の服合わせの分布を確認し、より適切な分析を行うために文法関

⁵¹ 語彙的可能動詞とは、母音語幹動詞の一部や（「見る - 見える」）、子音語幹動詞をベースに可能の形態素が含まれているもの（「書く - 書ける」）を指す。可能表現には、語彙的なものの他に、可能形態素「れる・られる」をつけた迂言的表現がある（「食べる - 食べられる」）。

係の内部に階層性を認め、9 種類（「S」, 「A」各 4 種類と「dS」）の下位分類を設定した。これにより項省略との関連性を詳細に考察する。⁵²

3.3.4 項の意味的属性

談話内の項の文法関係の分析を上に見たが、それと共に重要な着目点は、項位置に現れる名詞句の意味的属性である。文法カテゴリーとして機能する意味的属性は言語によって異なるため、言語内で完結すべき問題であるが⁵³、実は、多くの言語で共有するものがあり、その数には限りがあるといわれている (Slobin 2001)。中でも、「人称 (person)」を含む「有生性 (animacy)」は重要な位置を占めており (Silverstein 1976、Dik 1997、Croft 1990、Yamamoto 2006)、名詞句の有生性は次のように定式化されている。⁵⁴

(27) 1 人称・2 人称代名詞 > 3 人称代名詞 > 人間 > 動物 > 無生物

項の位置に現れる指示対象が項として機能するために、どのような意味的属性が関与しているかを検証することは、一般性の高い重要項目であり、本研究でもこの有生性という意味的属性に着目し分析を行った。

まず、「人間 (human)」と「非人間 (non-human)」に分類する。具体的には、3.2.2 項の (18) と表 8 にある S6CL15 の第 1 項「若者」が「人間」で、S1CL5 の第 1 項「電気」が「非人間」である。そして、S7CL17 の第 1 項「 ϕ 」は復元した後の「若者」を「人間」と分類する。次に、意味的属性が「人間」の場合は人称別に分類する。例えば、S7CL17 の「若者」は 3 人称である。

意味的属性が「人間」の場合は、人称に加え「発話主体指向性 (logophoricity)」の注釈を加えている。発話主体指向性とは西アフリカの言語にみられる形態標示で、発話者や思考などの心的経験をしている当事者を指し示すために付与する標示である (Comrie 1983)。発話や思考を表明するときに従属節で発話者自身を指示対象として示す指標のことで、英語では「Tom_i said that he_i was going out with Mary.」の従属節のなかの人称代

⁵² 巨視的な文法関係の傾向を見るときは、「S」「dS」「A」の区別を用い、細かな分析の場合は、この 11 種類を用いる。

⁵³ 例えば、英語の場合、指示対象の「数」に配慮しなければならないが、日本語では名詞句で表わす指示対象の数に関しては無頓着でも問題ない。つまり、英語では「数」は有効な文法カテゴリーだが、日本語ではそれほど有益なものではない。

⁵⁴ 階層の最上部の 1 人称と 2 人称の位置については研究者によって違いがある。

名詞「he」がもつ機能のことを指す。⁵⁵ 例えば、(28a) の補文内の省略項（「売る側」と同一指示）に発話主体指向性を付与した。また、主人公の他に (28b) の「 ϕ 」のような場合は、総称指示（generic reference）の注釈を加えている。⁵⁶

- (28) a. 売る側_iとして-は [ϕ _i そんなことは阿呆らしくてやってられない]-と
CL-CMPL
言うだろう (宮部 J33)
- b. ϕ _i 東北新幹線を利用すれば ϕ _i 東京駅から宇都宮まで一時間以内で行くことができる (宮部 J1)

日本語の 3 人称代名詞（「彼」など）は、指示詞を語源にもち「人間」のみを指示するもので、英語の 3 人称代名詞（「it」など）のように「非人間」を指す場合は、ソ系の指示詞を使う。日本語で「人称代名詞 (personal pronoun)」とよぶときは「1・2 人称」と「3 人称人間」を意味し、英語に対応する人称代名詞と明確な区別が必要な場合は「人代名詞 (person pronoun)」の用語を用いることにする。本コーパスの意味的パラメーターは表 13 のようになる。

表 13 項の意味的屬性

人間				非人間
1 人称	2 人称	総称	3 人称	非人間
発話主体指向性			非発話主体指向性	

3.3.5 項の語用論的情報

照応方向

項の位置に現れる指示対象が何であるかを知るために、項の形式や文法関係、意味的屬性を参照する必要性を述べたが、文法関係や意味的情報は、述語との関係で決定されるため、節内で完結する狭い範囲の情報といえる。しかし、項位置に現れる名詞句が提供する

⁵⁵ 日本語では従属節内の「自分」が同じような機能をもつと言われている (Kuno 1987、久野 1978)。

⁵⁶ スウェーデン語、英語、スペイン語の話しことばコーパスを用いた Dahl(2000)では、1/2 人称・総称指示・発話主体指向性をまとめて自己中心的指示(egophoric reference)としている。

S3[CL1 車内には本間と同年輩の背広姿の男性 j -が 目立つ]

S4[CL1 ϕ_j 商用で出かけて行く]REL[CL2 ϕ_j サラリーマンだろう]

S5[CL1 ϕ_k これを見ても] [CL3[CL2 日中の新幹線 l -が 東京という商都の血管で
ある]REL こと NMZ-が ϕ_k わかるというものだ]

S6[CL2 [CL1 ϕ_m 斜めの道の通路ぎわのシートにもたれている]REL 若者 m -が
携帯電話を耳にあて][CL3 ϕ_m さかんに何かしゃべっている]

通常、日本語では「ハ格」を付与された名詞句は文を超えて指示することができると言われており、「ハ」のピリオド越えと呼ばれている(三上 1960: 117-129)。(30) の S3CL1 から S4CL1 さらに S4 CL2 へと第 1 項が連続するその仕方を見ると、「ガ格」標示の名詞句も文を超えて同一指示を示すことができるようである。「ピリオド越え」という方略は、「ハ格」の場合が多いのは間違いないだろうが、「ハ格」にだけ特化したものではないのかもしれない。⁵⁹

本研究は、節が連結し談話を構成する過程で、名詞句の指示対象の同定にどのような情報が活用されるかという指示対象を識別するための方略を探ることを目的にしているが、指示先がどこにあるかという語用論的情報に関しては、第 1 項にのみに着目して分析していく。談話の構造が複雑であることは疑いのない事実で、第 1 項に現れる名詞句だけでなく、談話内に出現するすべての名詞句が他節の名詞句とどのような関係をもっているのか、ということ把握する必要があるだろう。しかし、まずは節内の主要な項、つまり第 1 項に現れる名詞句が近接の節とどのような関係を保ち連続して談話を構成しているかを確認することが最も重要なことだと思われる。そこで、本研究では、「交替指示」の概念に従い、接続した 2 つの節の第 1 項が同一 (SS=same subject) なのか、非同一 (DS=different subject) なのかを基準に、談話全体で第 1 項が隣接する第 1 項とどのような関係を持ちながら連続しているかを確認することにした。

節間の第 1 項の同一性を確認すると同時に、その指示先の方向性、つまり、どちらの方向(前か後)が優先されて同一性が決定されるかも分析した。上の (30) S3CL1 の第 1 項「男性」を見てみると、後方照応は同一指示であるが、直前の節との関係をみると同一指示ではない。一方、S4CL1 の「 ϕ 」は、次節の第 1 項と同一指示であると同時に、前文の第 1 項とも同一指示である。連続する節における指示対象のコード化は、直前・直後の両方の節との同一指示性に関与していると思われる。そこで、本研究では、第 1 項位置の指示対

⁵⁹ この議論に関しては、第 4 章で述べる。

象の同一指示制を前後、両方向に対して確認することにした。

具体的な分類は、表 14 のようになる。S2CL1 の第 1 項「 ϕ 」は語彙で復元することができず、外部照応で、前後の節との同一指示性を示していない。一方、S4 CL1 と S4 CL2 の第 1 項「 ϕ 」は「男性」に復元でき直前節と同一指示の関係を保っている。これは、CL3 の語彙名詞「男性」は前節と第 1 項とは非同一だが、後方の第 1 節と同一指示を示している。これらのパラメーターを使用すると、同じ同一指示性でも前方照応傾向なのか、後方照応傾向なのかを確認することができる。

表 14 第 1 項の同一指示性

節 No.	述語	第 1 項	復元後	照応先	同一指示性①	
					前方	後方
S2 CL1	N だ	ϕ	非語彙	外部	DS	DS
S3 CL1	目立つ	男-が		内部	DS	SS
S4 CL1	出かけて行く	ϕ	語彙（男）	内部	SS	SS
S4 CL2	N だ	ϕ	語彙（男）	内部	SS	SS

第 1 項の同一性を検証する場合、もう一点考慮に入れなければならないことがある。それは、項が属している節の種類である。私たちが使うことばは、線状性と階層構造的性という性格を異にする 2 つの特徴を持ち合わせている。数珠玉のように連続して連なっていることばは、同時に複数のことを処理することができず、1 つずつ処理しなければならない。このような、線状性の特徴がある一方で、名詞修飾節や補文といった構造的な仕組みも備わっている。⁶⁰ 現代日本語は、英語の関係節や補文などのような入れ子構造の仕組みの場合、名詞修飾を示す連体形とそこで文が終わることを示す終止形との間に形態的対立がない。⁶¹ そのため、文が長くなり、名詞化辞や補文標式が現れる前に多くの情報が入り込むと、名詞化辞や補文標識が現れた時点でその及ぶ範囲を再解釈しなければならない場合が

⁶⁰ 日本語の節の種類については 4.1.2 にて後述。

⁶¹ 現代日本語に対し、古典文法では動詞の一部、形容詞、助動詞に終止形と連体形の形態的対立がある（小池 1991 など）。動詞「為（す）（do）」と断定の助動詞「なり」の例を以下に示す。

[男-も す- なる]_{REL} 日記-というもの-を [女-も してみむ]-とて する-
 do(END)- AUX(ATT) N-like-ACC do(ATT)-
 なり
 AUX(END) (土佐日記・序)

ある。例えば、(31) の名詞化辞「こと」のように、名詞修飾節が文の後半に現れると、それまで処理していたものをすべて名詞化して構造的なものに切り替えなくてはならない。

(31) しかし [CL1 相手は [CL2 「あー、そう」]-と いうて][CL3 何の御愛想もないので]
 [CL4 私はがっかりし][CL5 [CL6[CL7 お腹がすいている]-と 答えればよかった]-と
 CL-CMPL CL-CMPL
 内心くやしく思った]-こと-を 記憶している
 CL-NMZ-ACC (土居 J8)

(31) の CL1 と CL2 のように補文内も主節内も単純な構成の場合は、線状的な直列処理 (serial processing) と構造依存の並列処理 (parallel processing)⁶² の間でその効率性に違いはなく、どちらの処理が優先されるべきかを問う必要はないだろう。しかし、節連続が増え、文が長くなると、どちらの処理が優先されるべきかが問題になってくる場合がある。それは、(31) の後半部分のような場合で、CL6 に続く補文標識「と」のところに来ると、前の 2 節を埋め込み、さらに CL7 に続く名詞化辞「こと」のところでは、それまでの処理（「私はがっかりし」から「思った」まで）をすべて埋め込む、といった複雑な再処理をしなければならない。英語のように、補文標識や関係節化標識が先行して現われる言語では、袋小路文 (garden path sentence)⁶³ のような文を除き、線状依存の直列処理と構造依存の並列処理のどちらを優先させるべきか、という問題はそれほど重要ではないかもしれない。しかし、日本語では、(31) の後半部分で行うような非効率的な再処理（長い文の後半部分で埋め込み構造に切り替えること）が多く見られる可能性が高く、第 1 項の同一性を確認する場合も、線状的処理と構造的処理のどちらも考慮に入れて、分析しなければならないだろう。そこで、本研究では、項の所属する節の種類に応じて、表 15 のように第 1 項の同一性を確認した。

⁶² 人間の言語処理方法と項省略に関しては坂本(1995)を参照。

⁶³ 袋小路文(garden path sentence)とは以下のような文である(大津 1995:151)

The horse raced past the barn fell

(納屋の向こう側へ走らされた馬が転んだ)

(The horse [which was raced past the barn] fell)

“race”という動詞の過去形と過去分詞形がたまたま同じことから生じた曖昧性により、“The horse raced past the barn”までは「その馬は納屋の向こうまで走った」という 1 つの文であると解釈されるが、“fell”という動詞が出てきた段階で、“raced”は主文の動詞ではなく“the horse”を修飾する過去分詞であるという再解釈を受けることになる。

表 15 節間の同一指示性

節 No.	述語		同一指示性①		同一指示性②		同一指示性③	
		第 1 項	前方	後方	前方	後方	前方	後方
S2 CL1	N だ	φ	DS	DS	DS	DS	DS	DS
S3 CL1	目立つ	男-が	DS	SS	DS	SS	DS	SS
S4 CL1	出かけて行く	φ	SS	SS	—	—	—	—
S4 CL2	N だ	φ	SS	DS	SS	DS	SS	DS
S5 CL1	見る	φ	DS	DS	DS	SS	—	—
S5 CL2	N だ	新幹線-が	DS	DS	—	—	—	—
S5 CL3	わかる	φ	DS	DS	SS	DS	DS	DS
S6 CL1	もたれる	φ	DS	SS	—	—	—	—
S6 CL2	あてる	若者-が	SS	SS	DS	SS	—	—
S6 CL3	しゃべる	φ	SS	DS	SS	DS	DS	DS

第 1 項の同一指示性は 3 段階で分析している。まず、線状性を重視した接近する節間の同一指示性を確認するミクロ的な視点（同一指示性①）からの分析、次に、埋め込み文以外の節間の同一指示性（同一指示性②）の確認、そして、間に複数節が介入する可能性がある、文間の同一指示性を確認するマクロ的な視点（同一指示性③）に着目して分析を行う。

3.4 述語の情報

類型論的に膠着言語に属す日本語は、述語周辺にその特徴を顕著に表わしている。(32)のように、内容形態素である語幹が先頭に立ち、その後に文法カテゴリーであるヴォイス、アスペクト、否定、テンス、モダリティ、対人関係を表す形態素などが連続して続く。

- (32) 殴 - られ - てい - なかつ - た - らしい - よね
STM- PASS- ASP- NEG- TES- MOD- ILL

述語周辺には、まるで抱合語 (incorporating language) のように多くの情報が組み込まれている。この情報過多とも思える述語の特性は、名詞句側の情報と何らかの関係があるのではないか。項の指示対象の識別方略を考えるにあたり、述語側の情報分析も重要と考え

分析項目に加えた。述語側に付与された様々な情報の関与を確認するためには、語幹の意味内容(左端)から対人関係を示す要素(右端)まですべてを分析対象にする必要があるだろうが、すべての要素との関連性を探ろうとすると分析が煩雑になりすぎ、反って本質的なものを見失ってしまうかもしれない。そこで、本研究では意味と形式の両面を重視し、出来事を記述する際に最も重要な働きをしている内容形態素である語幹と、配列的に語幹に近いヴォイスと使役、そしてアスペクトの一部⁶⁴に分析対象を絞り考察することにした。

3.4.1 節間の境目と節の種類

述語の情報を詳しく見る前に、「何を述語と認めるか」という問題(橋本 2003: 182-184)について考えてみたい。複文とは、複数の節を持つ文と定義されるが、何を節に認めるかによって、どの文が単文でどの文が複文であるかが異なってくる。上にも述べたように、膠着言語の日本語は、述語の内部に様々なものを抱え込むことができるため、どこまでが1つの述語で、次の節の境目がどこなのか、明確な線引きが困難な場合がある。また、1つの形式・形態が複数の意味・機能を持つことによる複雑さも、節間の境界線を不明瞭にってしまう。ここでは、その例として「V1(連用形テ形⁶⁵)(以下「テ形」)+V2」と形態素「の」について述べておく。

動詞の連用形は、2つの出来事を連続して表現するときに用いられる。(33)のように「V1(連用形)→V2」の連続は、それぞれの動詞が述語として機能し、2つの節を構成する。

(33) [CL1 このような傾向は実は精神医学に限らず他の専門分野にも 見られ]

V1(連用形)

[CL2 私は 常々それを奇異なことに 思っていたのであるが]…

V2

(土居 J54)

しかし、同じ連用形でも、「V1(テ形) V2」の形式に、複数のバリエーションが考えられる。

⁶⁴ 分析対象にしたアスペクトとは、例のような格標示にズレ(動詞はVtだが第1項は「S」で分類される場合)がおきる「Vtテアル」である。

・聴衆の席-は 簾で 仕切っ.て-あっ-て (堺屋 J77)

S1-TOP Vt.te-arū

⁶⁵ 五段活用動詞では、連用形が音便化して「て」に続く。(「イ音便化」:「書く」kak-u kak-i ka-i-(te)、「促音便化」:「走る」hasir-u hashir-i hashi-t-(te)など)

ある

(宮部 J2)

- c. [CL1 彼女_i-は すぐれた精神科医であり]また[CL2 これまで φ_i 日本人心理
を研究していたわけでもない-のに][CL3[φ_i 私の発表に関心を示してくれた]

-CONJ

こと-が私にはとても嬉しかった

(土居 J73)

(35a) では、名詞化辞「の」が項の位置（目的語）に現れ、「ヲ格」助詞が後続する場合である。そして、(35b) の名詞化辞「の」は、斜格「ニ格」を伴い、項の位置以外に現れている。(35a)、(35b) の CL1 は、それぞれ、名詞修飾節（埋め込み節）となる。一方、(35c) CL2 の「のに」は、形式は (35b) と全く変わらないが、その機能は逆接の接続詞であり、CL2 は (35a) や (35b) の CL1 の埋め込み節とは異なり副詞節（非埋め込み節）と分類した。

3.4.2 統語的・意味的情報

「3.3 名詞句の情報」の項で、文法関係の「S」「A」に、それぞれ 4 種類と 6 種類の下位分類を認めることを説明したが、それは、概ね、統語的・意味的が反映された構文の分類と連動するものである。様々な文型は、述語の語幹の形態素、あるいは語幹と機能形態素との組み合わせにより作られるが、本研究が分類項目としてタグ付けした統語的・意味的情報は、以下の 12 通りである。⁶⁷

(36) 統語的情報

- a. 自動詞構文 b. 他動詞構文 c. 受身構文 d. 使役構文 e. 形容詞文 f. 存在文
意味的情報
g. 移動動詞 h. 所有表現 i. 知覚動詞 j. 伝達・思考動詞
k. 所有者変更の動詞 l. 補助動詞「てやる／てもらう／てくれる」表現
m. 意向・希望表現 n. 可能表現⁶⁸

⁶⁷ 構文は、統語と意味の総体なので、(36)のように 2 分類することはできないが、ここでは、当該の構文が「統語的側面」あるいは「意味的側面」が強いのか、といった意味合いで 2 分類化している。

⁶⁸ 可能表現の接尾辞「reru/rareru」は、使役の接尾辞と同様に「ヴォイス」に関与するものなので統語的情報に入れるべきだが、ここでは意味を重視して意味的情報の分類に入れている。

まず、統語的情報に属する「形容詞文⁶⁹」とは、(37a) の CL2 などである。(37b) CL1 の二重主語構文も「形容詞文」に含まれる。

- (37) a. しかし[CL1 ここで留まれば][CL2 まだ 影響-は 少ない]
S1-TOP Adj (堺屋 J79)
- b. [CL1 僕-は 明日の朝-が 早い-ので][CL2 客人に失礼して][CL3 隣の三畳間で
S2-TOP N2-NOM Adj-CONJ
寝床について] (井伏 J85)

「存在文」には、(38a) の補文内にある二重主語構文や (38b) CL2 の与格主語の存在文などが含まれる。

- (38) a. そして[CL1 日本人心理の特性-は この現象と 深い関係-が
S2-TOP N2-NOM
ある-にちがいない]-と CMPL ひそかに確信を深めるに至ったのである]
EXIS-MOD (土居 J67)
- b. [CL1 そんなふうに見張られていなくたって][CL2 家を出ても][CL3 [行くべき]REL
場所-が 葵-に-は もう ない]
N2-NOM S2-DAT-TOP EXIS.NEG (角田 J13)

その他の「自動詞文」には、典型的な (39a) の自動詞文をはじめ (39b) の斜格付与の名詞句が意味的に要求される場合が含まれる。

- (39) a. 彼女の背後で 人の声や電話の音-が 入り乱れていた
S-NOM (宮部 J71)

⁶⁹ 日本語の形容詞は形態別にイ形容詞 (37b) とナ形容詞 (a) の 2 種類があるが、その他に、イ形容詞には形態的・意味的な違いから属性形容詞 (b) と感情形容詞 (c) に下位分類される。

(a) その彼が[甘える感情はカトリックが聖母に対する時のそれと 同じで-あろう]かと CMPL
Adj-MOD
質問したのが私には大変興味深く思われたのである (土居 J78)

(b) 外は晴れていたのに[部屋のなかはどんよりと暗い]
Adj (角田 J137)

(c) やっと抱けたときは[φうれしくてうれしくて]涙が止まらなかった
Adj (角田 J36)

- b. ϕ [許されない愛に悩んで心中を決意したという]_{REL}

S

安っぽいストーリー-に 仕上がっ-てい-た]

N-OBL

Vi-ASP-PAST

(角田 J82)

「受身文」や「使役文」と分析したのは、それぞれ (40a)、(40b) である。

- (40) a. 福祉作業所では当日の欠席届と出席者の顔ぶれ-が 照合され-た-ところで

S1-NOM Vt.PASS-PAST-CONJ

(大江 J80)

- b. その噴煙-は 江戸にまで 灰-を 降らせ-た

A1-TOP

N-ACC

Vi.CAUS-PAST

(堺屋 J24)

次に、意味的情報の「移動動詞」には、(41a) CL3 の直示的移動動詞や (41b) の「ヲ格」を伴う自動詞文を含む。

- (41) a. 渡辺がそう思いめぐらしていたところ… [CL2 みんなで相談して]

[CL3 取敢えず 渡辺と高丸-が 総代で 広島-へ 来ることになった]-と

S3-NOM

N-DAT come-

云う

(井伏 J3)

- b. 窓の外-を 東京-が 通過してゆく

N-ACC S4-NOM

Vi

(宮部 J39)

(42a) のような場合を「所有表現」と分類した。また、「所有表現」には (45b) のような与格移動 (dative shift) した「存在文」で心的な所有を表す場合も含んでいる。

- (42) a. 滞米中[以上のべたごとき]_{REL} 体験-を 持ったからであろう

DO POSV

(土居 J40)

- b. 私-には [多分もう一回ぐらいすすめてくれるであろうという]_{REL} かすかな

1st-DAT-TOP

期待-が あったのである

N-NOM EXIS

(土居 J8)

「知覚動詞」とは、(43a) の最初の名詞修飾節 (REL1) 内の述語や、CL3 や CL4 の述語で、「伝達・思考動詞」は (43b) である。

- (43) a. なお[CL1 [センターで 私の話-を きいた]REL1 小グループには

DO Vt(PERC)

[その後 サンフランシスコ・カレッジの学長として学生騒動弾圧に勇名をとどろ
 かしした]REL 意味論の学者ハヤカワがいたが][CL2 彼はカナダ生まれの日本人
 二世であるにも 拘らず] [CL3 日本語-を ほとんど 知らず]

DO Vt(PERC)

[CL4 したがって [私の あげた]REL-どの言葉-も 知っ-てい-なかつ-た]

DO-too Vt(PERC)-ASP-NEG-PAST

(土居 J77)

- b. [嫌悪していたから横浜にはいるはずがない]-と 母-は

CL-CMPL A-TOP

言っ-てい-た-らしい

Vt(COMU)-ASP-PAST-MOD

(角田 J55)

Levin (1993 138-144) の分類では、日本語の「やる／もらう／くれる」の授受表現は、「k. 所有者変更の動詞 (verbs of change of possession)」に含まれているため、同じカテゴリーとして分類した。「所有者変更の動詞」は、(44a) の「貸す」などである。補助動詞「てやる／てもらう／てくれる」表現は (44b) の「忠告してくれる」などである。

- (44) a. このような時 たまたま知りあったあるアメリカ婦人-が ルース・ベネディ
 クトの「菊と刀」-を 貸し-てくれ-た

lend-te.give-PAST

(土居 J55)

- b. [[金利や毎月の支払額の累積のことを考えると今日はこの程度にしておいた
 方がいんですよ]-と 忠告し-てくれる]REL-店員-は い-ない

CL-CMPL advice-te.give-REL-salesclerk-TOP EXI-NEG

(宮部 J32)

「意向・希望表現」に当たるのは (45) CL4 である。

(45) [CL1 そう言って][CL2 何度か文句をつけてはみたのだが]

[CL3 「だってさむいんだもの」と笑っているだけで]

[CL4 ϕ_i ϕ_j なお-そう-とはしなかった]

(A) (DO) Vt-INTEN-NEG

(宮部 J99)

「可能表現」には、(46a) の下線部の語彙的な可能と (46b) の迂言的な可能表現が含まれる。

(46) a. 引潮で川底が見え 窪地の水たまりのなかに鯔のような魚が三四尾腐乱した
背骨をさらして沈んでいた (堺屋 J77)

b. ある国民の特性はその国語の習熟することによってのみ 学ぶことができよう
(土居 J60)

以上の情報に加え、「V てくる／いく」や「V てくれる／もらう／やる」などの直示的動詞や授受動詞の補助動詞型が意味情報として加わっている場合も分析対象とした (47)。

(47) a. 渡辺-は 二度か三度 訪ね-て来た-こと-も-あり 松の木と泉水を見て

S-TOP

V-te.come-NMZ-too-EXI

(井伏 J61)

b. [閑間さんご夫婦と御養女の矢須子さんの三人は 古市の会社へお移りになっ
ている]-と 教え-て-くれ-た

CL-CMPL V-te.give-PAST

(井伏 J66)

以上のように、膠着言語の特徴が顕著に表われる述語周りの情報を分類し、名詞句の識別にどのように関わっているかを分析する。

3.5 分析項目のまとめ

世界の多くの言語には、談話内で連続して名詞句に言及するとき、「指示対象の識別方略 (reference-tracking)」という機能が備わっていると言われているが (Van Valin & LaPolla 1997)、日本語でもその機能は効果的に働いているはずである。項の省略をきっかけに、その周辺で起きている現象を細かく捉えることで、その背後にどのような方略・方法が存在し、音声形式を持たない指示対象の特定に関与しているかを確認したいと考える。

ここ 3 章では本研究のコーパスの分析項目を見てきたが、まとめると以下の 4 項目にな

る。

- ①項の文法関係
- ②意味要素である「有生性 (animacy)」
- ③交替指示
- ④述語の情報

項の言語形式の分布を確認し、これらの諸条件との関連性を検証していく。

第 4 章 日本語の分析と結果

第 3 章では、談話の中での省略項の分布を確認する方法、および、指示性の担保に関すると思われる要因の分析方法をみた。本章ではその分析で得られた結果を以下の順に提示する。

- 1) 項構造における語彙項 1 つの制約 (4.1)
- 2) 項の形式 (4.2)
- 3) 項の形式と文法関係 (4.3)
- 4) 項の形式と意味属性 (4.4)
- 5) 交替指示 (4.5)
- 6) 省略項と述語の形態 (4.6)

以上の分析結果を基に 4.7 項で日本語の分析のまとめを行う。

4.1 節構造における語彙項 1 つの制約

4.1.1 1 節内の語彙項の数

1 つの節に語彙名詞として現れる項の数はゼロか 1 が基本で、複数の項は出現しないという「節構造における語彙項 1 つの制約 (One Lexical Argument Constraint on Clause Structure)」(以下「語彙項の制約」)があると言われている。そしてこの制約が機能するのは、話し言葉のみだと考えられてきたため (Fry 2003)、これまで書き言葉での有効性に対してほとんど関心が払われてこなかった。しかし、ことば総体におけるこの制約の汎用性を見据えた場合、話し言葉のみならず書き言葉での有効性を確かめる必要があるのではないだろうか。そこで、書き言葉を対象にした本研究のデータを使い、語彙項の制約の有効性を検証してみた。

分析結果に先立ち、表 16 や表 17 の見方を兼ね具体的な分析項目を説明してみたい。

まず、分析項目の「語彙項数 0」とは次のような場合のことである。

- (48) a. S1 [CL1 [ϕ_i まだ 寝ていた]REL 客人_iには ϕ_j 失礼して]
(N1) Vi (N1) Vi
[CL2 ϕ_j 一番電車に 乗った]]
(N1) Vi

S2 [CL やはり ϕ_j 山本駅から先は 徒歩で 横川橋に 向かった]

(N1)

Vi(井伏 J93-94)

b. [CL1 ϕ_i そう 言って][CL2 ϕ_i 何度か 文句-を つけてはみたのだが]

(N1)

Vt

(N1)

N2 (LEX)-ACC

Vt

[CL3 ϕ_j 笑っているだけで][CL4 ϕ_j ϕ なおそうとはしなかった]

(N1) Vi

(N1) (N2)

Vt

(宮部 J99)

(48a) の 2 文は、S1 内の名詞修飾節（「まだ寝ていた」）を始め、自動詞文の「N1」がすべてゼロ形式「ϕ」でコード化され、節内の項位置に語彙名詞が現れていない。(48b) では、CL2 の「N2（「文句」）」を除き、CL1、CL3、CL4 の N1 や N2 の位置には語彙名詞の出現はない。特に CL4 では、他動詞文「N1」と「N2」の両方とも語彙化されていない。このように節内の項位置に語彙化された名詞句が現れていない場合を「語彙項数 0」と分類する。その他、(49) CL1 の「彼ら」のように音声を持つが代名詞として現れ内容語でない形式の場合もやはり「語彙項数 0」と分類している。同様に、項の位置が指示詞 (50a) や名詞化辞 (50b) などの機能語で占められている場合も語彙名詞句とはみなさず、節内の語彙項の数は「0」と分類している。⁷⁰

(49) [CL1 彼ら_i-は 武士からも庶民からも 憎まれないように]

N1 (PRO)-TOP

[CL2 ϕ_i 儉約一途に 暮し出したから] [CL3 景気-は ますます 悪化した]

(N1)

N1 (LEX)-TOP

(堺屋 J32)

(50) a. しかし実は [CL これ-が 同時に 私のその後の精神医学的研究の土台ともなっ

N1 (DEM)-NOM

たのである]

(土居 J70)

b. 禁煙車両の自由席に空きを見つけて腰をおろし資料の入ったカバンを足元に

置いたときに [CL1 [電車が動きだす]-の-を ϕ 感じた]

CL-N2(NMZ)-ACC

(N1)

(宮部 J4)

次に、「語彙項数 1」とは上の (49) CL3 の「景気」のように第 1 項の位置に語彙名詞が現れる場合や、下の (51a) CL1 と CL3 ように、第 1 項が省略項で第 2 項が「階下の気配」

⁷⁰ここでは、内容語である語彙名詞の出現のみを扱っているが、(52)のような指示詞や人称代名詞など音声形式で現れている場合分析については、この項の後半で述べる。

や「受話器」として語彙名詞で現れるような場合である。「語彙項数 2」とは、(51a) の CL4 のように他動詞文で「N1」と「N2」の位置に語彙名詞が現れている場合や、(51b) のように「N1」位置は省略だが「N2」と「N3」に語彙名詞が現れている場合である。

- (51) a. [CL1 ϕ_i 階下の気配-を うかがって][CL2 ϕ_i 二階の電話に そっと近寄り]
 (N1) N2 (LEX)-ACC (N1)
 [CL3 ϕ_i 受話器-を とって]
 (N1) N2 (LEX)-ACC
 [CL4 葵 i -は 素早く 電話番号-を 押す]
 N1 (LEX)-TOP N2 (LEX)-ACC (角田 J1)
- b. [CL1 ϕ みんな-に 贅沢-を 奨めた]
 (N1) N3 (LEX)-DAT N2 (LEX)-ACC (堺屋 J51)

最後に「語彙項数 3」とは、(52) CL1 のように「N1」、「N2」、「N3」すべての位置に語彙名詞が現われている場合である。

- (52) [CL1 沿道の地主や富豪 i -は 伊勢参りの人々 j -に 手拭い-を 配ったり]
 N1 (LEX)-TOP N3 (LEX)-DAT N2 (LEX)-ACC
 [CL2 ϕ_i 飯-を ϕ_j 食べさせたり]
 (N1) N2 (LEX)-ACC (N3)
 [CL3 ϕ_i 宿-を ϕ_j 提供したりした]
 (N1) N2 (LEX)-ACC (N3) (堺屋 J29)

以上の手順で分類した結果が表 16 と表 17 である。表 16 は作品別の結果で、表 17 は全作品を合計した総合的な結果を示している。表 17 には比較参照のため、先行研究である話し言葉の結果 (Fry 2003:92-96) を併記した。

まず、表 16 のデータを見てみることにする。「語彙項数 0」は 39.8 % (堺屋 J) から 63.9% (土居 J) まで、そして「語彙項数 1」は 34.0 % (土居 J) から 52.6% (堺屋 J) までと各作品間の出現頻度にはばらつきがみられる。特に、「堺屋 J」、他の作品と異なり、「語彙項数 1」よりも「語彙項数 0」の頻度の方が高い。これは第 3 章「コーパス」のところでみた結果と類似しており、作品の文体・スタイルの違いが関係していると考えられる。しかし、「語彙項数 2」や「3」の分布を見てみると、「語彙項数 1」や「0」に見られ

た作品間のばらつきがほとんど見られず、「語彙項数 2」と「3」の出現率は合計しても 1 割に満たない状態である。本研究のデータで見る限り、「語彙項数 1」の分布と「語彙項数 2」の分布の間には大きなギャップが確認できる。これは、語彙名詞を複数使わない、という「語彙項の制約」が文体に左右されることなく機能していることを示していると言えるのではないだろうか。

表 16 節内の語彙項の数（作品別）

作品名 項数	土居 J		堺屋 J		井伏 J		大江 J		宮部 J		角田 J	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
0	182	63.9%	106	39.8%	163	46.6%	132	47.3%	182	54.3%	146	45.3%
1	97	34.0%	140	52.6%	172	49.1%	136	48.7%	141	42.1%	158	49.1%
2	6	2.1%	19	7.1%	15	4.3%	11	3.9%	12	3.6%	17	5.3%
3	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.3%
合計	285	100.0%	266	100.0%	350	100.0%	279	100.0%	335	100.0%	322	100.0%

表 17 1 節内の語彙項の数

書き言葉			話し言葉 (Fry 2003)
項数	数	割合	割合
0	911	49.6%	46.0%
1	844	45.9%	47.0%
2	80	4.4%	7.0%
3	2	0.1%	
合計	1837	100.0%	100.0%

表 18 音声形式を持った項の数

項数	数	割合
0	584	31.8%
1	1063	57.9%
2	186	10.1%
3	4	0.2%
合計	1837	100.0%

次に、話し言葉の結果（表 17）と比較してみると、節の項位置に語彙名詞が現れない「0」の場合は書き言葉の方が高く（49.6%）、語彙項として現れるのは話し言葉の方が若干高い（47.0%）。しかし、その差は 2～3%とごくわずかであり、語彙項数「0」と「1」を合わせた割合は 90%を超える。語彙項数「1」と「2」の分布の間には非常に明確な境界が存在していることがわかる。書き言葉と話し言葉のモード差は大きいと言われているが、項の位置に語彙名詞を使うか否かに関して考察すると、「1 節内に語彙名詞を複数使わない」とい

う傾向はどちらのモードにおいても非常に類似している。「語彙項の制約」は、話し言葉だけでなく書き言葉にとっても有効な「ものさし」として機能していると考えられ、汎用性の高い制約と考えられる。

「語彙項の制約」は意味内容が詰まった語彙形式のみを対象としているが、その制約をもう少し強めて代名詞や指示詞まで対象を広げて、項が音声形式を持つ場合を分析してみた。1 節内に何等か音声形式で具現化された項がいくつ現れるかを確認したところ、表 18 のような結果が得られた。

音声形式で具現化された項をカウントに入れるため、必然的に「項数 0」が減り「項数 1」以上の場合が増加することが予想されるが、予想通り「項数 1」が 844 例から 1063 例へ、そして「項数 2」が 80 例から 186 例へ 2 倍以上増えている。しかし、全体でみると、「項数 2」と「項数 3」は合わせても 1 割にも満たず、約 9 割 (89.7%) の場合が「項数 0」と「項数 1」で情報伝達していることになる。

これは、「1 節内に語彙名詞を複数使わない」という「語彙項の制約」よりもさらに制限力の強い「1 節内に音声形式を持った形式を複数使わない」という条件が機能していることを示していると思われる。伝達方法として「語彙項の制約」並びに「1 節内に音声形式を持った形式を複数使わない」という「ものさし」は非常に有効な方略と考えられる。

4.1.2 語彙項の制約と節の種類

上の項で語彙項の制約の有効性について述べたが、その分析結果に関し 1 点説明を加えておきたい。それは、(53a) の S1 の名詞修飾節をどのように扱うかということである。いわゆる、「内の関係」の名詞修飾節である (53a) は、語彙化される項の数が 1 つ少ないことが構造上決まっている。そのような名詞修飾節を他の節と同様に取り扱ってもいいのか、という問題が出てくる。そこで再度、節の種類を考慮に入れ語彙項の制約を検証してみた。

日本語の名詞修飾には「内の関係」と「外の関係」の 2 種類がある。「内の関係」とは、主名詞が名詞修飾節内で S/A/dS/DO/IO の文法関係を持つもの (53 a- e)、あるいは、(53f) のように二重主語構文の第 1 項に現れる場合や、それ以外の位置に現れる場合 (54) である。主名詞と同一指示のものが名詞修飾節内の項の位置に現れない (54) のような場合は名詞修飾節内の項数が 1 つ少ないという構造上の前提はないため、表 19 の「内の関係」に含まず、「内の関係 2」とし、「内以外」に分類した。

(53) a. この事務所のようなところが [ϕ_i 奈落へと落ちてゆく]_{REL}

(S)

機関車 i -を ぎりぎりのところで止めるブレーキになろうと頑張っている

(宮部 J72)

b. [ϕ_i 彼女の名前-を 盗んだ]_{REL} 女 i -も まさにその目的のために一本

(A)

物の関根彰子に成り代わるため…

(宮部 J117)

c. この福山駅の構内にも [ϕ_i 焼け出された]_{REL} 人 i -が

(dS)

可なり集っていた

(井伏 J42)

d. [ϕ_i ϕ_j なんとなく抱えていた]_{REL} 使い古しの毛布 j -で膝を 覆うと

(A) (DO)

(大江 J48)

e. 今現在本庁の捜査一課には [本間-が ϕ_i こういうこと-を 気軽に

A (IO)

DO

尋ねることができる]_{REL} 二十代の若い刑事 i -が いないので 想像するこ

としかできないが…

(宮部 J28)

f. 兄を送った帰り [ϕ_i 交通量-が 異様に 激しい]_{REL} 甲州街道 i -から

S2

中古自動車売場のフェンスぞいに入る脇道へさしかかった

(大江 J81)

(54) [夏の制服-が ϕ_i 掛ったままになっている]_{REL} 黄ばんだ壁 i -が

S (OBL)

そこにあるだけだった

(角田 J95)

名詞修飾節の種類を考慮に入れながら語彙項の制約の有効性をさらに細かく分析してみたところ、表 19 のような結果が得られた。語彙化される項の数が 1 つ少ないことが構造化されている名詞修飾節とそうではない他の節を比較した場合、「内の関係」での「語彙項数 0」が際立っている。その他の節では語彙項数「0」と「1」の頻度に際立った違いは見受けられないが、「内の関係」の名詞修飾節内では 7 割以上の場合で項位置に語彙名詞を使用していないことになる。これは、項の数が 1 つ少ないことが構造化されているためだと考えられるが、興味深いことに、他の節と構造上大きく異なると思われる「内の関係」でも、「語彙項 1」以下は 9 割以上を占め、その他の節と同じような振る舞いを見せている。

語彙名詞を複数使用しないという「語彙項の制約」は、節の構造の違いに影響されことなく有効性を示していると考えられる。名詞修飾節であれ補文であれ、あるいは副詞節のような非埋め込み節であれ、複数の項位置に語彙名詞句 (full noun phrase) を配置することを避けているということは、節の種類（節と節の関係）よりも名詞句での情報提供の仕方のほうが重要であることを示していると考えられる。

表 19 名詞修飾節と語彙項

	内の関係		その他の節	
項数	内	割合	内以外	割合
0	139	72.4%	772	46.9%
1	52	27.1%	792	48.1%
2	1	0.5%	79	4.8%
3	-	-	2	0.1%
合計	192	100.0%	1645	100.0%

さらに、他の節の種類別の語彙項の数を確認してみた。その結果が表 20 である。ここから興味深い 2 点読み取れる。1 点目は、「語彙項の制約」と名詞修飾節の下位分類との関連である。「内の関係」の語彙項数は「0」方向に大きく傾いることを上に見たが、「内 2 の関係」では語彙項数「1」の方向にバイアスがかかっている。「内の関係」に比べ、「内 2 の関係」のサンプル数は小さいため、さらなる検証が必要だが、一般的に同じカテゴリーとして一まとまりに扱われている「内の関係」には、下位分類する必要があるが、その際「語彙項の制約」をさらに厳格化し「1つの項」に限定した「ものさし」が機能していることがわかる。「内の関係」と「内 2 の関係」では、“1つ”の項の語彙化／非語彙化において相補的な分布を示し対立しており、同じ名詞修飾節といってもかなり性質の異なる節であると考えられる。

次に判明したことは、「外の関係」と他の名詞修飾節、および、他の種類の節との関係性である（表 20）。まず、名詞修飾節について見てみると、「外の関係」は、「内の関係」に有効に機能していた「1つの項を語彙化／非語彙化する」という「ものさし」は機能していない。しかし、語彙項数「0」、「1」の出現率を見ると、それぞれ 4 割強であり、2つ以上の項を語彙化する頻度はおおむね 5%にとどまっており、「語彙項の制約」が機能していることがわかる。この「外の関係」の振る舞いは、名詞修飾節以外の「補文」や「副

詞節」、「主節」の振る舞いと変わらない。「外の関係」は、項の語彙化に関して言えば、名詞修飾節というよりはそれ以外の節に近い特徴を示しているといえる。

主節／非主節あるいは埋め込み節（補文や名詞修飾節）／非埋め込み節（副詞節）の間には構造に大きな違いがあるはずだが、「複数の語彙名詞は出現しない」という点では、それぞれの節は同じような振る舞いをしていることが観察できた。節の種類を問わず「語彙項の制約」が有効であることがわかったが、それに加え、名詞修飾節は項位置に「名詞句1つの具現化／非具現化」という「語彙項の制約」よりもさらに強い制約で他の節と区別されることがわかった。また、同じ名詞修飾節であっても「外の関係」の振る舞いは、「内の関係」よりも補文や副詞節、主節に近いことも提示した。

表 20 節内の語彙項（節の種類別）

	名詞修飾節				補文		副詞節		主節	
	内 2 の関係		外の関係							
項数	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
0	7	38.9%	86	45.5%	55	52.4%	310	44.5%	314	49.3%
1	11	61.1%	93	49.2%	47	44.8%	349	50.1%	292	45.8%
2	0	0.0%	10	5.3%	3	2.9%	36	5.2%	30	4.7%
3	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	1	0.2%
合計	18	100.0%	189	100.0%	105	100.0%	696	100.0%	637	100.0%

4.1.3 語彙項の制約と動詞

4.1.2 項で、節の種類と「語彙項の制約」の関係を見たが、ここでは、動詞の種類と「語彙項の制約」の関係を見ていく。分析の結果は以下の通りである（表 21）。「語彙項の制約」がその識別効果をより発揮できるのは、述語が項を2つ以上要求する他動詞文の場合と予想でき、分析結果もそのようになった。表 21 の「他動詞」を見ると約 9 割が語彙項数「0」、「1」になっている。他動詞の節において「語彙項の制約」が充分機能していることがわかる。

「語彙項の制約」が機能しているとする、述語1つに対して具現化される項の数は最大1つで充分ということになる。自動詞と他動詞の構造を、単純に「N1+Vi」と「N1+N2+Vt」とし、項の位置に現れる形式を語彙と省略の2つで組み合わせるとその組み合わせは全部

で 6 種類⁷¹ になるが、「語彙項の制約」の下では他動詞と自動詞の区別に関わりなく「語彙+V」と「省略+V」の 2 種類にまで制限されることになる。これが意味するのは、他動詞表現であっても表面上は自動詞表現に近いことということで、述語の意味から項を複数要求するはずの他動詞表現であっても省略項が内包されている可能性が高いことを示唆することになる。⁷²

表 21 語彙項の制約と動詞の種類

	自動詞		他動詞	
項数	数	割合	数	割合
0	500	55.9%	411	43.6%
1	394	44.1%	450	47.7%
2			80	8.5%
3			2	0.2%
合計	894	100.0%	943	100.0%

日本語の書き言葉で「指示と述語」で出来事を表現するとき、理論的に考えられる組み合わせを満遍なく用いるのではなく、その使われ方にバイアスがかかっていると言える。談話を構築していく際に好んで用いられる述語と項の組み合わせは、述語の種類に関わらず「述部と語彙項が 1 つ」か「述部と省略項が 1 つ（述語のみ）」という 2 種類に収斂することができると考えられる。

以上、書き言葉における「語彙項の制約」をさまざまな角度から見てきたが、テキストのモード、文体、そして、構造の異なる節や述語の種類の違いを超えて、この制約が有効に機能していることが明らかになった。談話内で提示する名詞句の数に関する「語彙項の制約」は、非常に汎用性の高い効率的な「ものさし」と考えられる。

⁷¹ 6 種類の組み合わせとは、「N1 語彙 + Vi」「N1 省略 + Vi」「N1 語彙 + N2 語彙 + Vt」「N1 省略 + N2 語彙 + Vt」「N1 省略 + N2 省略 + Vt」「N1 語彙 + N2 省略 + Vt」である。

⁷² このように項の数に制限があるということは、状態化(De-transitivization)や動作主の非焦点化(Defocusing of agent)とも密接に関連し、受動構文の問題に関わっていくものと思われる (Shibatani 1985)。

4.2 項の形式

第 1 項の省略を指示対象のコード化全体から捉えなおすため、第 1 項、第 2 項、第 3 項の形式分布を確認した。まず、第 1 項から具体例を見ていく。「省略」形式は様々な環境下で現れており、例えば、(55a) のように 1 節で 1 文を構成している場合や (55b) のように連続する複数の節内に現れたり、(55c) のように複数の文にわたって連続して現れたりする。このような第 1 項「省略」は、全体 (1,837 例) の 6 割近く (1045 例、56.7%) を占る (表 22)。

- (55) a. [その仕方で翌朝 $\phi (=1)$ 話の続きをした]
(N1) (大江 J31)
- b. そして [_{CL1} $\phi_i (=3)$ いろいろ考えた末][_{CL2} ϕ_i ある閃きを 覚え]
(N1) (N1) N2
[_{CL3} ϕ_i 42,43 歳で 黒柳家の番頭を 辞めた]
(N1) (堺屋 J61)
- c. S1(ϕ_i バスを 乗り換え ϕ_i 一度だけの記憶を 頼りに 葵_i は
ナオコの住んでいた団地まで走った)
S2(ϕ_i 同じかたちの建物を 縫うように走り
[ϕ_j E と 書かれた]_{REL} ϕ_i 棟_j を 探す)
S3(ϕ_i 全速力で階段を 駆け上がり [見覚えのある]_{REL} ドアのわきの
インターホンを ϕ_i たてつづけに鳴らした) (角田 J120-122)

第 1 項が語彙名詞の場合は (56) のような場合で、全体の約 3 割 (586 例、32.1%) であった。省略項 (56.7%) の出現頻度と比較すると約半分の頻度である。

- (56) あまつさえ 紙面の端・がコーヒーカップのなかに浸かっていた
LEX-NOM (宮部 J92)

省略・語彙名詞以外の形式を見てみると、数量詞、代名詞、再帰代名詞、指示詞、名詞化辞、補文でコード化された場合はそれぞれ (57a)~(57f) になる。これらの形式はすべて合わせても 1 割程度にしかない。

表 22 第 1 項の形式

第 1 項		
形式	合計	割合
省略	1045	56.7%
語彙	586	32.1%
数量詞	19	1.0%
代名詞	90	4.9%
再帰	11	0.6%
指示詞	43	2.3%
名詞化辞	42	2.3%
補文	1	0.1%
合計	1837	100.0%

表 23 第 2 項の形式

第 2 項		
形式	合計	割合
省略	152	17.7%
語彙	500	58.2%
数詞	7	0.8%
代名詞	5	0.6%
再帰	1	0.1%
指示詞	36	4.2%
名詞化辞	48	5.6%
補文	110	12.8%
合計	859	100.0%

- (57) a. [CL1 二人-は 気ながに待つよりほかはなかったので]

QNT-TOP

[CL2 ゆっくり弁当を食べていると][CL3 上り列車が入って来て] (井伏 J54)

- b. [CL1 僕-は 全然そんなものには気がつかなかったが]

PRO-TOP

[CL2 お袋がケンポナシの実を供物としてことづけてよこしたのは回向のつもりであったのだ] (井伏 J77)

- c. [CL1 すぐにも斜めうしろから踏み出して来るはずの「未来のイーヨー」は花嫁の介添え人で] それならば [CL2 自分-は 花嫁なのだ]

REFL-TOP

(大江 J42)

- d. [CL [これ-が 頂点に達した]-の-が 17 世紀末の「元禄」といわれる

DEM-NOM

華やかな時代である]

(堺屋 J4-5)

- e. [CL 私の英語力が当時まだかなり不足していた]-こと-が

CL-NMZ-NOM

原因していたであろう

(土居 J18)

- f. [CL1 たとえばナオコの父親は薬物の更生施設に入院していて]

[CL2[母親はキャバレーの雇われママである]-と ある雑誌-には

CL-CMPL

書かれており]

(角田 J86)

第 1 項の形式は多様だが、好んで使われる形式は省略と語彙名詞に限定され、最も頻度分布の高い省略形式が第 1 項の無標識の形式と思われる。

次に、表 23 の第 2 項の形式を見てみると、第 1 項同様多様な形式が出現している。具体的には (58a) CL2 の名詞修飾節内の省略項や、(58b) の CL1、CL3、CL4 の語彙名詞⁷³ である。この省略項と語彙名詞で全体の 8 割近くになる。それら以外の形式は (58c) CL1 の取り立て助詞「も」でマークされた疑問詞の数量詞⁷⁴、(58d) CL2 の代名詞、(58e) の再帰代名詞、(58f) S2 の文脈指示のコ系指示詞、(58g) の補文標識、(58h) の名詞化辞などでコード化されている。

(58) a. [CL1[面接を終えた]REL 葵_i-が 部屋からでると]

[CL2[ϕ_j いつも ベンチに 座って ϕ_k 待っている]REL 母_j-の

(N2)

姿-が なかった]

(角田 J48)

b. [CL1[右に 引用した]REL 箇所-を見つけた-時][CL2 たまたま 私自身

LEX-ACC

異郷に あって][CL3 甘えの問題-を 考えていただけに]

LEX-ACC

[CL4[この言葉-を 述べている]REL 主人公恭吾の 気持ちに

LEX-ACC

深く 感動した]

(角田 J48)

c. [CL1 ϕ_i あいかわらず 何-も 訊かないし]

QNT-too

⁷³ 第 2 項には、次の CL1 ような二重名詞構文の N2 の 46 例が含まれている。これを除いたとしても、第 2 項、語彙名詞の割合は、58.2%と約 6 割を占める。

・ [CL1 徳川時代の日本-は技術進歩-が 乏しく][CL2 土地や資源も限られていた]

N1-TOP

N2-NOM

(堺屋 J98)

⁷⁴ 本研究のデータでは、第 2 項に現れた数量詞 7 例、すべて疑問詞の形態素だった (「何-か」1 例、「何-も」5 例、「何物-も」1 例)。

- [CL2 ϕ_i ナオコのことについても 触れない] (角田 J71)
- d. [CL1 関根彰子の何に惹かれて][CL2 彼女-を 標的にしたのだろう]
PRO-ACC (宮部 J90)
- e. [先走るのはよくない]-と 自分-を 抑えつつ…
REFL-ACC (宮部 J119)
- f. S1 (彼らの教えの一番の特徴は多くの面白い譬え話をつくり庶民の日常生活に即したテーマで非常に平素に心学を説いたことである)
S2 (大名も一般庶民も これ-を 歓迎した)
DEM-ACC (堺屋 J74-75)
- g. [CL お袋も松の木の根を掘りに山へ出かけるので よぼよぼの身で手に豆をこしらえているなど]-と 話していた
CL-CMPL (井伏 J87)
- h. そのときの本間は 店の女の子の子供っぽい不機嫌の裏に [CL 何か苛立ちに近いものが隠れている]-の-を 見たような気がした
CL-NMZ-ACC (宮部 J48)

第 2 項の位置に現れる形式でもっとも頻度が高いのは、語彙名詞で(500 例 58.2%) 省略項の約 3 倍の出現率である。第 2 項として最も好まれている語彙名詞が無標と考えられる。ここで第 1 項と第 2 項の形式分布を比較すると類似点と相違点が見えてくる。第 1 項と第 2 項どちらとも 8~9 割が省略・語彙名詞で現れている。しかし、第 1 項が省略に傾いているのに対し、第 2 項は語彙名詞に傾いている。項位置の形式選択の違いにおいて、第 1 項と第 2 項は対照的な振る舞いをしているといえる。

最後に、第 3 項の形式をしてみる (表 24)。形式の具体例は (59a) の省略項 (復元すると「私」) や、(59b) の親族名詞である語彙名詞「母」、(59c) CL2 の人称代名詞である。

- (59)a. ナオコはどこにいるのか 看護婦たちも担当医師も面接の女も
 ϕ_i 教え-て-くれ-なかつ-た
(N3,1) teach-give-NEG-PAST (角田 J44)
- b. [CL [長椅子で 新聞を 読んでいた]REL 父-が
[台所で働いていた]REL 母-に むしろ考えあぐねて 独りごとのように
LEX-DAT

こう いっ-た]

say-PAST

(大江 J66)

c. それにしても [CL1 昨日僕が千代田町の焼跡で中尾さんを訪ねたとき]

[CL2 なぜ中尾さんは[尋ね人が来た] REL こと-を 僕-に

PRO-DAT

云って-くれ-なかつ-た-の-だろう]

say-give-NAG-PAST-NMZ-MOD

(井伏 J72)

表 24 第 3 項の形式

第 3 項		
形式	合計	割合
省略	22	61.1%
語彙	11	30.6%
代名詞	3	8.3%
合計	36	100.0%

第 3 項の特徴として、まず、形式の種類が少ない点があげられる。第 1 項や第 2 項に比べ第 3 項のデータ量が小さいこともあるが、第 3 項の形式の種類は第 1 項や第 2 項の多様さと異なりかなり制限されている。本研究のデータで確認できたのは、「省略」「語彙名詞」「代名詞」の 3 種類のみであった。もう一つの特徴は、第 3 項の形式分布が第 2 項ではなく第 1 項に類似し、省略項が 6 割近くを占めるということである。第 3 項の位置に現れる無標の形式は「省略」と考えられる。

以上、3 つの項の形式分布をまとめると次のような関係にあると考えられる。第 1 項の位置には、内容形態素である語彙名詞よりも機能語的で依存度の高い省略という形式が好まれ、第 2 項の位置には、第 1 項と対立する語彙名詞が好まれる。さらに、第 3 項に現れる形式は、隣接する第 2 項ではなく第 1 項と同じ省略形式が好まれる。3 つの項形式分布は、それぞれの隣接する項と対立し、相補的な関係にあるといえる。

4.3 項の文法関係

4.2 節では項の形式を分析しその結果を示したが、この節では項の文法関係と形式の関係性に着目して分析を行い、名詞句の識別とどのような関連性があるかを検証する。上の

3.3.3 項で述べたように文法関係のカテゴリー内の要素は均一でないため、本研究では「S」「A」に下位分類を設けている。そこで、まずそれぞれの下位分類の文法関係と形式を確認し、それに続いて「S」「A」「dS」および「DO」「IO」の文法関係の包括的な相関関係を述べる。

4.3.1 文法関係「S」の形式

「S」の下位分類は 3.3.3 項の例文 (24) と表 11 簡単に例示したが、分析結果をよりわかりやすく説明するために、再度 (24) 以外の例を挙げたい。その後分析結果を述べる。

まず、「S1」の省略項とは(60a) CL2 のような場合で、語彙名詞は (60b) のような場合である。それ以外の数量詞、代名詞、再帰代名詞、指示詞、名詞化辞はそれぞれ (60c)、(60d) の 1 人称代名詞、(60e)、(60f)、(60g) になる。(S1) とは典型的な自動詞構文の N1 のことである。

- (60) a. [CL₁ φ_i やっと 抱けたときは][CL₂ φ_i うれしくてうれしくて]
 (N1, S1) Adj
 [CL₃ 涙が止まらなかった] (角田 J36)

b. [… 今では はっきりとした 記憶-が 残っ-てい-ない]
 N1 (LEX. S1)-NOM remain-ASP-NEG
 (土居 J62)

c. [芝生敷きの地面に落ちた]_{REL} ふたり-は 骨折すらせず
 N1 (QNT. S1)-TOP
 打撲だけですんだ (角田 J30)

d. その悲しいような気分のなかで 私-は 立ちすくんでいたのだ
 N1 (PRO, S1)-TOP (大江 J38)

e. [自分-は 泣いているのだろう]-と 葵は 思ったが…
 N1 (REFL, S1)-TOP CL-CMPL (角田 J163)

f. [それ-が 「未来のイーヨー」 なのだ]-と 私は 知っていた
 N1 (DEM, S1)-NOM CL-CMPL (大江 J41)

g. [窓硝子の破れるようなぴんという音がした]-の-は 印象的でした
 CL- N1 (NMZ, S1)-TOP (井伏 J26)

(61) a. 鉄筋の相生橋-は まんなかごろ-が 一メートル近くも隆起して…
N1 (LEX, S2)-TOP N2-NOM (井伏 J106)

b. 私-に-は [多分もう一回ぐらいすすめてくれるであろうという]_{REL}
N1 (PRO, S2) -DAT-TOP

(62) a. [CL1[ϕ_i トイレかどこか-に 行ったのだろう]-と 葵_i-は 思い]
 (S2) QNT-LOC go CL-CMPL

 [CL2[ϕ_i ジュース-を 買うつもりで]

- [CL3 ϕ_i ひとり 売店-に 行っ-た]
(N1, S3) LEX-LOC go-PAST (角田 J49)
- b. 梅岩-は 時勢の矛盾-に-も 非常に 悩んだ
N1 (LEX, S3)-TOP LEX-OBL-too EMO (堺屋 J40)
- c. [CL1 ϕ_i ブリキを曲げて造った同じようなもので 水を 汲んでいたが]
[CL2 ϕ_i ひとしきり 汲むと]
[CL3 疲れた風で 二人 i -とも 石垣-に もたれた]
N1 (QNT, S3)-both LEX-LOC lean (井伏 J100)
- d. 僕-は 本川橋の南岸-に 出-た
N1 (PRO, S3)-TOP LEX-LOC go out-PAST (井伏 J102)
- e. 葵 i -は ようやく [自分 i -が どこにも いっていない]
N1 (REFL, S3)-NOM anywhere go-NEG
-こと-に 気づい-た
-NMZ-OBL (角田 J24)
- f. [これ-が 頂点-に 達した]-の-が 17 世紀末の「元禄」と
N1 (DEM, S3)-NOM LEX-LOC reach-NML-NOM-
いわれる華やかな時代である (堺屋 J5)

最後の「S4」は、自動詞構文の基本的な「N1 ガ Vi」標示ではなく「N1 ガ N2 ヲ Vi」のように対格標示の名詞句と共起している場合である。⁷⁵ 具体的には (63a) CL1 の「門-を」と共起している省略項、(63b) CL2 の「部屋-を」と共起している語彙項「葵」、(63c) CL1 の「階段-を」と共起している代名詞「私」である。

- (63) a. [CL1 ϕ_i 門-を 出て][CL2 ϕ_i バス停まで一目散に走る]
(N1,S4) LEX-ACC go out (角田 J113)
- b. [CL1 ϕ_i 大きく息を 吸いながら]
[CL2 葵 i -は 部屋-を うろつきまわった]
N1 (LEX, S4)-TOP LEX-ACC walk around (角田 J139)
- c. [CL1 私 i -は 階段-を 上がって行き]

⁷⁵ 森山(2010)では、格助詞ヲを、「対格」用法（「子供をなぐる」）をプロトタイプとし、メタファーにより「場所」用法（「空を飛ぶ」）に拡張した多義語と分析している。

N1 (PRO, S4)-TOP LEX-ACC go up

[CL2 ϕ_i 寝室に 入って行ったのだ]

(大江 J47)

以上のように下位分類を行い得られた結果が表 25 である。

表 25 文法関係「S」の形式

文法関係	S1		S2		S3		S4		「S」	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	218	36.2%	3	7.0%	152	67.9%	12	57.1%	385	43.3%
語彙	286	47.5%	31	72.1%	60	26.8%	8	38.1%	385	43.3%
数量詞	9	1.5%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	10	1.1%
代名詞	15	2.5%	5	11.6%	6	2.7%	1	4.8%	27	3.0%
再帰	4	0.7%	0	0.0%	4	1.8%	0	0.0%	8	0.9%
指示詞	29	4.8%	4	9.3%	1	0.4%	0	0.0%	34	3.8%
名詞化辞	41	6.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	41	4.6%
合計	602	100.0%	43	100.0%	224	100.0%	21	100.0%	890	100.0%

まず、個別のカテゴリーを見てみると、「S1」の形式の種類は「省略」から「名詞化辞」まで多様な形式が現れている。「名詞化辞」が現れているのは「S1」のみで他のカテゴリーでは出現していない。「S1」の出現頻度は「語彙名詞」が最も高いが (286 例 47.5%)、二番目に出現率の高い「省略」(218 例 36.2%) と際立った差は確認できなかった。「S2」の形式の種類は「S1」に比べバラエティが少なく、「再帰代名詞」と「名詞化辞」の出現は確認できなかった。出現頻度は 43 例中 31 例と「語彙名詞」が際立って高かった。「S3」の形式の種類は「S1」ほどの多様さはないが「名詞化辞」以外の形式はすべて現れている。また、出現頻度は「省略」が最も高く (152 例 67.9%)、二番目に出現率の高い「語彙名詞」(60 例 26.8%) を 2 倍以上も上回り、際立った偏りがあることが確認できる。「S4」はデータ量が少ないという問題はあるが、他と比べ形式の種類が限定的である。また、出現頻度は「省略」が最も高く (12 例 57.1%)、「語彙名詞」(8 例 38.1%) の 1.5 倍であることが確認できる。

必須項が 1 つである自動詞構文の典型的な主語「S1」、分裂主語 (split subject) 的な「S2」、必須項の他に名詞句 (対格標示ではない) が共起する「S3」、そして、述語の種類

は自動詞でも主格標示と対格標示の2つ名詞句が共起する「S4」という4つの下位分類で自動詞構文を観察してみると、形式の種類、分布に差があることが確認された。

次に各カテゴリー間の関係を見てみる。4つの下位範疇すべてにおいて8割以上が省略と語彙名詞の形式で現れており、下位範疇を統合した「S」でも省略と語彙名詞共に43.3%の出現率になっている。「S」の下位範疇を個別に観察しても包括的に見ても、その位置に現れる形式の種類は「省略」と「語彙名詞」に限定されていた。

形式の種類はカテゴリーに共通で限定的だが、出現頻度は各カテゴリーで特有のばらつき・偏りが見られた。特に、「S2」の語彙名詞の出現率が顕著である。この結果は構文に依存していると考ええる。下位分類「S2」は、第1項(N1)と同一指示のもの(あるいはシネクドキー的に意味拡張したもの)を第1項の次の位置(n1)にコード化する二重主語構文である。二重主語構文は、主語と同一指示のものを主語位置とは別の位置でコード化するという余剰的な情報提供で、1番目の名詞句(N1)と2番目の名詞句(n1)が具現化されることが構文の存在意義であるため、N1の位置が省略には成りえない。ただ、(64)のCL2の「N1(S2)がn1に/となる」構文で先行節のN1と同一指示の場合には第1項の「S2」がゼロ形式でコード化される可能性はある。⁷⁶

(64) やがて[CL1 これ_i-が 日本の商品の特徴-に なり]

[CL2 φ_i 商習慣-と-も なった]

(N1,S2) n1-OBL-too become

(堺屋 J102)

次に、「S1」と「S3」「S4」の分布の違いに着目してみたい。自動詞の主語位置には数量詞、代名詞、指示詞のような指示対象を決定するために指示範囲を必要とするものや、あるいは名詞化辞のように語彙性が低いものは現れにくいようである。これは自動詞の主語には形式と意味が1対1の関係をもつものが好まれ、そうでない不透明なものは現れにくいことを示唆している。

しかし、「S3」と「S4」を見ると、語彙性の低く形式と意味が一對一でない「省略」が6割以上を占めている。この矛盾はどこからくるのか。可能性としては「S1」と「S3」「S4」の構文の違いが考えられる。「S3」「S4」では項以外の位置に名詞句(「N1はn2に/を Vi」のn2)が共起し意味を支えている。明示化される項以外の名詞句が重要な役割をしている

⁷⁶ 「n1」の形式分布は、語彙名詞40例(93.0%)、指示詞2例(4.7%)、名詞化辞1例(2.3%)である。

と考え、「S3」と「S4」の「n2」の形式を調べてみた。その結果が表 26 である。

出来事を表す際に、自動詞の必須項ではなく、その次に必要とされる名詞句が言語化された場合が「S3」と「S4」の「n2」であるが、具体例は、上の (62a) の補文内の「トイレかどこか」や CL3 の「売店」などである。まず、形式分布を見てみると、「n2」の形式種類は第 1 項(N1)と異なり「省略」「語彙」「指示詞」の 3 種類のみ限定されている。さらに、3 つの形式の中でも、「省略」「指示詞」での頻度は低く、それぞれ 6% 強にしか達しておらず両者合わせても 2 割にも満たない。自動詞構文の「n2」に現れる形式は「S3, n2」で 86.6%、「S4, n2」では 95.2% と、全体の 9 割近くが語彙形式である。このような偏り方は、第 1 項 (N1) である「S3」と「S4」(表 22) と対照的であり、隣り合う名詞句の形式は語彙化／非語彙化という対立的な関係にあると言える。

表 26 自動詞構文の n2 の形式

形式	S3 の n2		S4 の n2		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	16	7.1%	0	0.0%	16	6.5%
語彙	194	86.6%	20	95.2%	214	87.3%
指示詞	14	6.3%	1	4.8%	15	6.1%
合計	224	100.0%	21	100.0%	245	100.0%

以上、文法関係「S」を典型的な自動詞主語「S1」から形式が他動詞的な「N1-主格+n2-対格」という現れ方をする「S4」までの連続体とみなし、それを基に形式分布を詳しく観察してきた。「S」は省略項か語彙項でコード化する傾向があるが両者の対立は弁別的なものではなかった。しかし、典型的な自動詞（「S1」）から外れた表現（「S3」、「S4」）になると第 1 項は省略項として現れる傾向が確認された。自動詞的表現でありながら必須項でない位置に準必須項ともいえるべき名詞句が具現化されて、他動詞構文に近い方法で情報提供を行う場合は、第 1 項の省略傾向が強くなっていた。第 1 項「S」の位置にどのような形式が現れるかは構文の影響が大きく相対的に決定されると考えられる。「S」を下位分類して分析することで「S」を均一カテゴリーとして見たのでは確認できなかったような形式の省略化／語彙化の傾向性と構文との関わりが確認できた。

「S」の下位分類同様、「A」の下位分類を再度確認するために、3.3.3 項の (26) の補足としてその他の詳しい例を挙げてみたい。まず、「A1」に該当するのは (65) のように N2 の位置に意味的対象が「ガ格」標示で現れる場合である。例えば、他動詞表現「凶作-を 避ける」に対し、可能の助動詞「れる・られる」⁷⁷ が付与されると迂言的な可能表現「凶作-が 避けられる」となり、「凶作」の格標示が「ガ格」になる場合である (65a の CL2)。同様に、語彙的可能動詞 (potential form) の「抱ける」 (65b の S3CL1) の場合も含まれる。その他 (65c) の CL3「とれる」の節のように「N1 ハ N2 ガ V」と一見すると二重主語構文に類似した形式をとる場合も含まれる。

- 次に、「A2」に該当するのは N2 の格標示が基本の対格（ヲ格）でなく与格（ニ格）や「ト格」などの斜格の場合である。(66a) や (66c) の「会う」や「気づく」などの動詞は、意味的に必須な対象を対格標示（「ヲ格」）ではなく与格（「ニ格」）で標示している。この

77

ような場合の「A」を「A2」と下位分類する。「A2」の形式は、(66a) や(66b) の省略項や (66c) の語彙名詞などである。

- (66) a. [CL1 ϕ_i なかなか 駅員-に 会え-ない-ので][CL2 ϕ_i 暗がりのなかで
(N1, A2) LEX-DAT meet.POT-NEG-CONJ
知らない男と 暫く 立ちばなしをした] (井伏 J21)
- b. S1(そこで酒を所望したとすると次にはスコッチかブルボンかと聞いてくる)
S2([CL1 ϕ_i そのどちらか-に きめ-た-後]
(N1, A2) QNT-DAT decide-PAST-CONJ
[CL2 今度は それをどうやってどのくらい飲むかについても 指示しなければなら
ない]) (土居 J22-23)
- c. [ずいぶん長いこと おもてに出ていなかった]-こと-に
CL-N1 (NMZ, A2)-DAT
葵-は 気づい-た
LEX(N1, A2)-TOP notice-PAST (角田 J119)

「A3」は典型的な他動詞構文で、(67a) CL3 の省略項、(67b) の語彙項、(67c) CL3 の数量詞、(67d) CL1 の 1 人称代名詞、(67e) CL1 の指示詞などで現れている。このように N2 が「ヲ格」で標示される他動詞構文の N1 が「A1」である。

- (67) a. [CL1 午後一時過ぎに ϕ_i 乗車して][CL2 五時すぎに ϕ_i 広島に 着き]
[CL3 ϕ_i 千田町のうちの焼跡-を 探し当て-た-ときに-は]
(N1, A3) LEX-ACC find-PAST-when-TOP
[CL4 ϕ_j 七時を回っていた] (井伏 J61)
- b. 人-は なぜ これらの情報-を 追うのだろう
N1 (LEX, A3)-TOP LEX-ACC chase-NMZ-MOD (宮部 J78)
- c. [CL1 葵はそう言ってみたが][CL2 父と母には聞こえなかったのか]
[CL3 ふたり-は 葵の名前-を 繰り返すだけだった]
N1 (QNT, A3)-TOP LEX-ACC repeat-only-PAST (角田 J26)
- d. [CL1 それにしても 昨日 僕-が 千代田町の焼跡で
N1 (PRO, A3)-NOM

中尾さん-を 訪ね-た-とき][CL2 なぜ 中尾さんは 尋ね人が来たことを
LEX-ACC visit-PAST-when

僕に云ってくれなかったのだろう] (井伏 J74)

- e. [CL1 当然 これ-は 一時的なインフレ・ブーム-を 巻き起こし]
N1 (DEM, A3)-TOP LEX-ACC cause
[CL2 しばらくは景気がよくなった] (堺屋 J19)

「A3」には DO と IO と共起する場合も含まれ、(68a) S2CL1 のゼロ形式や (68b) の語彙名詞の形式で現れた。

- (68) a. S1(ϕ_i 家に帰ってきてからずっと 父と母と祖母 j -は ローテーションを
組んで 葵 i -を 見張っている)
S2([CL1 ϕ_j あいかわらず 何-も ϕ_i 訊か-ない-し]
(N1, A3) DO-too IO ask-NEG-CONJ
[CL2 ϕ_j ナオコのことについても 触れない]) (角田 J70-71)
- b. [CL1 ナオコはどこにいる]-の-か 看護婦たち i -も 担当医師-も
CL-NMZ-INT(DO) N1 (LEX,A3)-too
面接の女-も ϕ_j 教え-てくれ-なかつ-た
(IO) tell-give-NEG-PAST (角田 J14)

最後に、「A4」は第 2 項位置に補文が現れる場合である。(69a) のゼロ形式を始め、語彙名詞 (69b)、代名詞 (69c) などの形式で出現している。

- (69) a. [CL1 ナオコの姿はないにしても]
[CL2[何かメッセージがのこされているので はないか]-と ϕ
CL-CMPL (A4)
思っ-た-の-だ think-PAST-NMZ-COP (角田 J144)
- b. [CL1 お袋-は[僕たち三人-が 吹きとばされるか家の下敷きになるかして
LEX(A4)-TOP
死んだに違いない]-と 思い]
CL-CMPL think

[CL2 仏壇に三人の写真を飾って][CL3 三つの湯飲みに水を入れて供え]

[CL4 ダリヤの花を立てていた] (井伏 J6)

c. [彼女-は また [非人称的な気の用法が分裂病者の言葉に

PRO(A4)-TOP

類似している]-と 指摘し-た]

CL-CMPL point out-PAST (土居 J76)

以上の手順で「A」を下位分類して分析したところ表 27 の結果が得られた。

表 27 文法関係「A」の形式

文法関係	A1		A2		A3		A4		合計	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	40	76.9%	13	59.1%	500	71.9%	61	67.8%	614	71.5%
語彙	12	23.1%	2	9.1%	137	19.7%	19	21.1%	170	19.8%
数量詞	0	0.0%	1	4.5%	7	1.0%	0	0.0%	8	0.9%
代名詞	0	0.0%	4	18.2%	46	6.6%	8	8.9%	58	6.8%
再帰	0	0.0%	2	9.1%	0	0.0%	1	1.1%	3	0.3%
指示詞	0	0.0%	0	0.0%	5	0.7%	1	1.1%	6	0.7%
名詞化辞	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	52	100.0%	22	100.0%	695	100.0%	90	100.0%	859	100.0%

他動詞構文の第 1 項「A」に現れる形式は、「A」全体で省略形式が 614 例 (71.5%)、語彙形式は 170 例 (19.8%)で分布し、7 割以上が省略項として現れている。4.3.1 項でみた自動詞の第 1 項「S」は、省略項と語彙形式の分布に明らかな対立は確認できなかったが (表 25)、「A」の省略項と語彙形式の分布には明確な対立がみられる。「A」の形式分布の傾向は省略に大きく傾いていることがわかる。必須名詞句である第 1 項の形式を省略にするか否かという情報提供の方略は、自動詞構文ではなく他動詞構文で有効に機能していると考えられる。

次に、「A」の振る舞いを詳しく見て行くことにする。まず、基本的なヲ格標示の第 2 項と共起する「A3」は、省略形式の 500 例 (71.9%)、語彙形式の 137 例 (19.7%) で分布している。補文 (「ト」格標示) を伴う「A4」は、省略形式が 61 例 (67.8%)、語彙形式

は 19 例 (21.1%) である。埋め込み文を構造的に前提としている「A4」とそうでない「A3」では情報提供の仕方において「A4」の方が複雑なため第 1 項に乘せる情報の形式には違いありそうである。しかし、「A3」の代名詞出現率が高いという違いがあるが、「省略／語彙名詞」の頻度には「A3」と「A4」の間に際立った相違はない。第 1 項の形式に関して、補文構造を前提とする他動詞文は典型的な他動詞文と同じカテゴリーと考えていいだろう。これは補文構造を前提とする名詞化辞表現が「S1」に限定的であったことと対照的である。

次に、第 2 項がガ格と共起する「A1」(70a) を見てみると、表面上の形式が「名詞句-助詞 名詞句-助詞 述語」と (70b) の「S2」と類似しているため自動詞的表現に近い。

(70) a. みんなが勤勉に働いて儉約に努めたら

[CL1 マクロの国民経済全体として-は バランス-が
NP-TOP NP-NOM

とれなくなってしまう]

PRED

(堺屋 J44)

b. [CL1 関根彰子-に-も それ-が あるはずだった]

NP-DAT-too NP-NOM PRED

(宮部 J115)

しかし、名詞句の形式の分布をみると典型的な他動詞表現の「A3」に類似していることを考えると、自動詞表現と他動詞表現の中間的な自動化 (de-transitive) 的表現だといえる。

それに対して「A2」(第 2 項がヲ・ガ格以外で標示) は出現例数が少ないという点を考慮しなければならないが、典型的な「A3」、「A4」、自動化的な「A1」と比べ、語彙形式の出現率 (2 例 9.1%) の低さが際立っている。「A2」の振る舞いが典型的な他動詞構文と異なることは明らかだが、形式分析だけでは判断材料が少なくその動機についてまで言及することができないが、この点については、さらなる情報 (意味や指示性、述語側の情報など) との関係性を考察した後の項で再度言及したいと考える。

以上、文法関係「A」の形式分布についてまとめると、下位分類において若干の相違 (「A2」の代名詞の頻度が他のカテゴリーに比べ高い) はあるものの省略が無標の形式と考えられ、省略／語彙名詞が対立関係にある。「S」には下位分類にばらつきがみられたが「A」では分布にまとまりが見られた。また、「A」位置に名詞化辞が全く現れなかったというのも「S」との違いといえる。

文法関係「dS」の形式分析に入る前に、日本語の受動文 (passive sentence) について簡単な説明を加えておきたい。日本語の受動文はその多様性が指摘され受動文の規定をめぐる議論が活発である。⁷⁸ 特に有名なアプローチは、直接受動文 (direct passive) と間接受動文 (indirect passive) に区別するアプローチである。直接受動文とは (71a) や (71b) のように対応する能動文 (active sentence) がある受動文で、間接受動文とは (71c) と (71d) のように対応する能動文がない場合である。

- 本研究のデータで確認できた例は、(71) の下位分類 (a.b) に相当する直接受動文が大半を占めている (例えば(72a.b))。

- (71c) に該当するデータとして (73) の CL1 のような例が確認できたが、二格で標示された名詞句が有生物でないため「被害性」が低く感じられる。

⁷⁹ 三上(1953)は間接受動文の影響は通常「迷惑」につながるが多いため、「はた迷惑の受身」と呼んだ。

- (73) [CL1 私-は まず アメリカの豊富な物資-に 目-を 奪わ-れ]
 dS (PRO)-TOP NP-DAT NP-ACC deprive-PASS
 [CL2 また [明るく自由に振舞う] REL-アメリカ人に 深く 関心したものである]
 (土居 J4)

(71d) に該当する間接受動文は本データでは見つからなかった。しかし、類似した例として語幹が自動詞で「自動詞語幹 + 使役接辞 + 受身接辞」の受動文 (74a) が 1 例と意味的に「自発」に近い (74b) の「揺られる」(自動詞「揺る」が語幹) の合わせて 2 例が確認できた。

- (74) a. 石田梅岩-は 落ちこぼれの暗い 境遇-に 立た-さ-れ-てい-た-のである
 dS (LEX)-TOP stand-CAUS-PASS-ASP-MOD
 (堺屋 J39)
- b. [CL1 [宇都宮に 向かう]REL-電車-に ϕ_i 揺ら-れ-てい-た-とき-の]
 (dS) Vi-PASS-ASP-PAST-when-of
 [CL2 「彰子」 i -が 関根彰子の身分-を確実に自分のものにするために]…
 (宮部 J119)

その他、例外的なものとして (75) の補文内の複合動詞「焼け出される」がある。「焼け出される」を、語幹「焼け出す」と受動態語尾「reru / rareru」と分析すると意味が異なってしまう。「焼け出される」の「出」には内容語としての語義的意味が残っているが、「焼け出す」として意味を成す場合の「出す」はアスペクト的な機能語である。そのため「焼け出される」は 1 つの語彙と考え語彙的な受身として取り扱った。

- (75) [CL1 この男 i -は 一箇月前に 福山市へ 疎開して来たが]
 [CL2 [ϕ_i 焼け出され-た-と] ϕ_i 云って]
 (dS) burn and go.PASS-PAST-CMPL
 [CL3 ϕ_i 空襲のときの様子を話してくれた] (井伏 J22)

このような多様な受動文の文法関係「dS」はどのような形式で出現しているのだろうか。その結果が表 28 である。まず、具体例を見てみると、省略項として現れたのは、上の (72b)、(74b)、(75) の他 (76) の S2CL1 内のような場合である。

- (76) S1([彼女に成り代わった]_{REL}-偽の彰子_i-は[彼女のなかにその「何か」があった]_{REL}-こと-を知っていたろうか])
 S2([_{CL1} φ_i 関根彰子の 何-に 惹か-れ-て]
 (dS) attract- PASS-te
 [_{CL2} φ_i 彼女-を 標的にしたのでろう]) (宮部 J90-91)

語彙名詞として現れた例は、上の (72a)、(74a) の他に (77) の「気持ち」ような場合である。

- (77) [_{CL1}[私のなかに 湧いた]_{REL}-攻撃的な 気持ち_i-は
 dS-TOP
 [即席に φ_i かもし出さ-れ-た]_{REL}-ものというよりも
 (dS) well up-PASS-PAST-thing-
 ずっと 準備さ-れ-てい-た-ように感じる]
 prepare-PASS-ASP-PAST-MOD (宮部 J64)

その他の形式の例は、(73) の代名詞の他 (78a,b,c) の数量詞、指示詞、名詞化辞などである。

- (78) a. 何-も 書か-れ-てはい-なか-った
 QNT(dS)-too write-PASS-ASP-NEG-PAST (角田 J63)
- b. [_{CL1} レジの最後尾につき][_{CL2} 何気なく棚に並んだ雑誌を眺めていると]
 [_{CL3}[女子高生 異常性愛のちにたどりついた飛び降り心中と週刊誌の表紙に書かれた]_{REL}-文字-が [_{CL4}まるで そこ-だけ-が
 DEM(dS)-only-NOM
 くりぬ-かれ-た-ように]くっきりと 葵の目-に 入った]
 cut out-PASS-PAST-like (宮部 J50)
- c. S1(葵_iの家庭環境はドラマチックに脚色しようがなかったのだろう)
 S2([φ_i まじめでおとなしい生徒だった]-こと-だけ-が 強調さ-れ-てい-た)
 CL-NML(dS)-only-NOM emphase-PASS-ASP-PAST
 (角田 J90)

表 28 文法関係「dS」の形式

dS		
形式	合計	割合
省略	46	52.3%
語彙	31	35.2%
数量詞	1	1.1%
代名詞	5	5.7%
再帰	0	0.0%
指示詞	3	3.4%
名詞化辞	1	1.1%
補文	1	1.1%
合計	88	100.0%

「dS」の形式は、省略が 52.3%、語彙名詞が 35.2% となり省略項での出現が多いことがわかる (表 28)。しかし、「A」(省略 71.9%、語彙 19.8%) (表 27) の場合に確認できた明確な対立は見られず、「S」(省略 43.3%、語彙 43.3%) (表 25) の振る舞いに近い。特に、「S」の下位分類の「S4」(省略 57.19%、語彙 38.1%) の振る舞いに類似している。「S4」とは移動動詞でヲ格名詞句を伴う構文である (79=66b)。

- (79) [CL1 ϕ_i 大きく息を 吸いながら]
 [CL2 葵 i -は 部屋-を うろつきまわった]
 S4-TOP LEX-ACC walk around
 (角田 J139)

意味的には自動詞タイプで形式的には他動詞タイプという中間的なカテゴリーである「S4」と意味的に他動詞タイプで統語的に自動詞化された「dS」は、項形式の分布に関して類似した振る舞いを示しているといえる。

「dS」の形式のうち 46 例見られた省略形式をさらに詳しく見ていくと、23 例 (50%) が (80) のような名詞修飾節内に出現するものであった。⁸⁰

- (80) [ϕ_i 新聞の折り込み広告-に 載せ-られ-ている]_{REL}-写真 i -や
 (dS) put-PASS-ASP-REL-picture-too
 通信販売のカタログ、テレビでやっている丸井のコマーシャルなどを見ている
 (宮部 J29)

名詞修飾節内において語彙形式で出現したのはわずか 4 例で、すべて (81) の CL1 ような「外の関係」の名詞修飾節内であった。

- (81) 私は早速それを読んだが その際 [[自分の姿-が そこに 映し出さ-れ-
 dS-NOM reflect-PASS-

⁸⁰ 名詞修飾節内「dS」は、省略 23 例 (82.1%)、語彙 4 例 (14.3%)、代名詞 1 例 (3.6%)。

ている-ような]_{REL}-感じ-が しきりと し-た]_{REL}-こと-を 憶えている
 ASP-like-REL-feeling-NOM do-PAST (土居 J43)

また、わずか 1 例しかない代名詞の「dS」も「外の関係」であった (82)。

- (82) [CL1 ところが いま 父が 当の新聞の 知恵遅れ青年の性的「暴発」
 キャンペーン-に [それ-が 実際 や-られ-ている]_{REL}-もの-として
 dS-NOM do-PASS-ASP-REL-NMZ-as
 素直に反応し]… (大江 J67)

この結果から考えられるのは、典型的な名詞修飾節の中に現れる「dS」は省略形式の傾向が強いということである。さらに「dS・省略形式・内関係の名詞修飾節」のパラメータを持つ 19 例の振る舞いを見てみると、その修飾先である主名詞に関してある傾向が見られた。⁸¹19 例のうち 12 例 (63.1%) が、主要な項 (S,A,O) に続き、そのなかでも「S」(83a) と「O」(83b)に連続していく場合が 11 例と 9 割以上を占めていた。「A」に続いていく場合は 1 例のみに留まり (83c=74b)、その場合でも典型的な名詞修飾節ではなく「名詞化された節 + 名詞句 + 所有格 + 名詞句」という周辺的な場合であった。

- (83) a. [[傍目からは「ちゃんと計算できる」と ϕ_i 思わ-れ-てい-た]_{REL}
 (dS)think-PASS-ASP-PAST-REL
 -人間_iたち-が 多重債務者に なっ-てゆく-のだ]
 -peopl-pl-NOM (S) become-go-MOD (宮部 J53)
- b. [滅多に開けることのない]_{REL}-和筆笥の和服の上に
 [ϕ_i つっこま-れ-てい-た]_{REL}-それ-を 葵-は 自分の部屋で
 (dS) stick-PASS-ASP-PAST-REL-PRO-ACC (O)

⁸¹ 主名詞の文法関係の内訳は、「S」7 例、「A」1 例、「O」4 例。その他に、場所格（ニ・デ格）などの斜格 5 例、そして、述語の名詞句（コンピュータの前の名詞句）に連続して行く (a) のような場合が 2 例である。

(a) S1[小島村_iの平均海拔-は 五五〇メートルである]
 S2[[CL1 ϕ_i [ϕ_i 三方-を 山-で 囲ま-れ-た]_{REL}-高原の村-で]
 S (dS) surround-PASS-PAST-REL-N-COP
 [CL2 広島県の東部を南 流する蘆田川と岡山県にそそぐ小田川との分水嶺になってい
 る]] (井伏 J14-15)

熟読し-た

read-PAST

(角田 J77)

c. [CL1[宇都宮に 向かう]REL-電車-に ϕ_i 揺ら-れ-てい-た-とき-の]

(dS) Vi-PASS-ASP-PAST-when-of

[CL2「彰子」 i -が 関根彰子の身分-を 確実に 自分のもの-に する-ために]

A-NOM

NP-ACC

hers-DAT

make-CONJ

[CL3 ϕ_i [ϕ_i 彼女の母親-を 殺す]REL-計画-を-も 立て-てい-た-の

ではないか]

(宮部 J119)

内の関係の名詞修飾節と主節間の文法関係の連続において、「dS→S」「dS→O」と「dS→A」の間に対立があり、受動化された名詞句は能格的な特徴を帯びながら主名詞に向かって連続していると言える。⁸²

「dS」の結果をまとめると、1)「dS」の形式分布は「S」と類似した傾向を示していること、2) 典型的な名詞修飾節である「内の関係」に現れる「dS」は省略形式がプロトタイプで能格的な特徴を示すことがわかった。

これまで第1項の文法関係と形式を見てきたが、最後に1点考察を加えておきたい。第1項の位置に現れる文法関係と「名詞化辞」に非常に強い制限がかかっていることは上に何度か触れた。「名詞化辞」が現れた文法関係は「S」が41例、「dS」が1例で、「A」には全く見られなかった。「S・名詞化辞」の組み合わせにはかなり強い制限がかかっているようである。その理由に関してはさらなる分析が必要であるが、予想しうる要因として「トピック-コメント」構造と埋め込み文を前提とする構造の複雑さが考えられる。特に埋め込み文の構造は複雑なため、主節の構造にはなるべくシンプルなものが要求されるため自動詞構文が好まれるのではないかと推測する。

4.3.4 文法関係「O」「IO」の形式

4.3.1項から4.3.3項では第1項の形式分析を見てきたが、ここでは第2項および第3項の形式分布を見ていきたい。他動詞構文は述語の種類により名詞句の格標示が複数ある

⁸² 英語を対象に、関係節と主節の文法関係の連続に着目した研究には、Fox (1987) や Fox and Thompson (1990) がある。Fox and Thompson (1990) では、語の関係節は目的語目あてと考えられ、全体の56%が目的語関係節で、先行詞が目的語の場合も111例/269例と半数近くが目的語目当てであると述べている。

ことを 4.3.2「文法関係「A」の形式」の項で見た。その分類に平行して第 2 項も大きく 2 つのグループに分けて分析を行った。

頻度分析の前に形式の具体例を示しながら、第 2 項の下位分類を確認しておきたい。

まず、「O」は基本的な他動詞構文の主語 (A3) と共起する第 2 項 (N2) である (84)。

- (84) (=70a) [CL1 午後一時過ぎに ϕ_i 乗車して][CL2 五時過ぎに ϕ_i 広島に 着き]
 [CL3 ϕ_i 千田町のうちの焼跡-を 探し当て-た-ときに-は]…
 (A3) LEX (N2, O)-ACC find-PAST-when-TOP (井伏 J61)

二重目的構文の「O」も分析対象としている (85)。

- (85) a. [CL1 お袋 i -は そう云って][CL2 ϕ_i 「酢の素」の空瓶に井戸水を入れ]
 [CL3 ϕ_i 線香やフクラシの木の青葉も紙に包んで]
 [CL4 ϕ_i ϕ 正男-に 託し-た]
 (A3) (N2, O) IO-DAT send-PAST (井伏 J12)

また、(86)のような補文も「O」として分析する。

- (86) [CL1 ϕ_i このようなことを実践しているうちに][CL2 私 i -は 次第に [CL3 も し
 日本人の心理に特異的なものがあるとするならば][それは日本語の特異性と
 密接に関係-があるに違いない] -と 考える-ようになっ-た]
 CL-CMPL(N2,O) think-became-PAST (土居 J56)

典型的なヲ格標示の「O」ではないが述語が意味的な対象を要求している場合 (87) 、
 「N2」(A1 や A2 の第 2 項相当の位置に現れる名詞句) として分析対象とした。(87a) CL1
 の「N2」は代名詞で現れ、(87b) は名詞化辞で現れている。

- (87) a. [CL1 私-は 早速 彼女-に 会い-に-いっ-た-が]
 A2-TOP PRO (N2)-DAT meet-in odre to-go-PAST-CONJ
 [CL2 彼女は特に「甘える」という言葉と気の概念に 興味を示した]
 (土居 J74)
- b. [ϕ_i ずいぶん長いこと おもてに出ていなかった]-こと-に
 CL-NMZ (N2)-DAT

葵_i-は

気づい-た

LEX(A2)-TOP

notice-PAST

(角田 J119)

以上の基準で第2項を分類した結果が表29である。

表 29 文法形式「DO」の形式

第2項						
形式	DO		N2		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	131	16.7%	21	28.4%	152	17.7%
語彙	461	58.7%	39	52.7%	500	58.2%
数量詞	6	0.8%	1	1.4%	7	0.8%
代名詞	5	0.6%	0	0.0%	5	0.6%
再帰	1	0.1%	0	0.0%	1	0.1%
指示詞	36	4.6%	0	0.0%	36	4.2%
名詞化辞	35	4.5%	13	17.6%	48	5.6%
補文標識	110	14.0%	0	0.0%	110	12.8%
合計	785	100.0%	74	100.0%	859	100.0%

「O」の形式の具体例は、(88a) や (88b) CL4 の省略、(88b) CL3 の語彙名詞、(88c) の代名詞、(88d) S1 内の指示詞、(88e) の名詞化辞、そして (88f) の補文などがある。

- (88) a. S1([イーヨーと呼ばれている兄_i-は私より四歳年長だが 知能に障害のある人たちの通う福祉作業所の工員としてはたらいっている])
 S2([CL₁ 新妻と一緒に そういう人物-が 越して来るとすれば]
 [CL₂ 若い夫-は どのように ϕ_i 迎える-こと-だろう])
 A-TOP (O) receive-NMZ-MOD (大江 J14-15)
- b. [CL₁ 主人_i-は 客_j-を もてなすに際し][CL₂ かゆい所に手がとどくように]
 [CL₃ ϕ_i 相手_jの気持ち-を 察して]
 (A) O (LEX)-ACC guess
 [CL₄ ϕ_i ϕ_j 助けてやる]-の-が 礼儀である
 (A) (O) help CL-NMZ-NOM (土居 J38)

- c. [CL1 A さん_i-が 「あれ、」 と 声を あげてから]
 [CL2 [マーちゃんはどこにいなさい M さんと私が先行するから]-と 不思議な
 言葉の使い方-で ϕ_i 私-を 制し-て]
 (A) PRO (O)-ACC hold back-te
 [CL2 ϕ_i その子のところに 近寄って行かれた] (大江 J83)
- d. S1([彼らの教えの一番の特徴-は [多くの面白い譬え話をつくり庶民の日常
 生活に即したテーマで非常に平素に心学を説いた]-こと_i-である])
 CL-NML-COP
 S2([大名-も 一般庶民-も これ_i-を 歓迎し-た])
 A-too DEM (O)-ACC welcome-PAST (堺屋 J74-75)
- e. [CL1 ところが昨年の秋ごろだったろうか]
 [CL2[智が生前の彼女と同じことをやっている]-の-を
 CL-NMZ (O)-ACC
 ϕ 見つけ-た-のだ
 (A) find-PAST-MOD (宮部 J106)
- f. [その考えは当たっている]-と 本間-は 思っ-た
 CL-CMPL (O) A-TOP think-PAST (宮部 J76)

「N2」には上の (87a,b) のように他動詞主語が A2 ではなく A1 の場合も含まれている。
 「N2」の形式の具体例は、省略 (89a) や語彙形式 (89b) である。名詞化辞は上の (87b) の
 「こと」の他 (89c) の「の」などである。

- (89) a. S1([CL1 寒さの厳しい今頃の季節には 彼女_iは 夜寝巻きに着替える時
 き] [CL2 ϕ_i 下着からブラウスからセーターまで重ねて][CL3 ϕ_i 一度にすぽん
 と脱ぎ][CL4[ϕ_i 翌朝今度はそのまますぽんと着る]-という]_{REL}-芸当_i-を
 ϕ_i やっ-てみせた])
 S2([ところが 本間-に-は ϕ_j どうやっても できなかつ-た])
 A1-DAT-TOP (N2) cannot do-PAST
 (宮部 J97,100)
- b. S1([CL1 葛西通商の社員寮を出てキャッスルマンション錦糸町に入居したと
 き] [CL2 関根彰子_i-は 家具や電気製品を 買ったはずだ]

S2([CL1 ϕ_i インテリア用品-だって ほしく-なっ-た-はずだ]

(A1) LEX(N2)-even want-become-PAST-MOD

(宮部 J84-85)

c. [CL1 そのうち [夢の方へ入り込んでいる]REL-自分-の 斜めうしろに
もうひとり 私 i -と 同じ気分の人-が 立っている]REL-の-が

CL-REL-NMZ(N2)-NOM

ϕ_i わかつ-た

(A1) realize-PAST

(大江 J40)

表 29 から読み取れることは、まず、「O」と「N2」どちらも 5 割以上が語彙形式で現れていることである。これは、省略項での出現が約 7 割⁸³の「A」（省略 71.5%、語彙 19.8%）（表 25）と対立した振る舞いといえる。さらに、「A」の下位分類ではそれぞれ少しずつ分布にズレが見られ、特に「N2」の第 1 項である「A2」の頻度は、省略 59.1%、語彙 9.1% と他の「A1」「A3」と比べ省略の頻度が低かった。「A2」の場合は格形式が自動詞構文に近く典型的な他動詞構文とは異なる振る舞いを見せていた。しかし、それは第 1 項のみの振る舞いで、第 2 項の形式頻度に関しては典型的な「O」と「N2」の間に際立った差はないといえる。他動詞構文の第 1 項は述語の意味的な違い（下位分類）によって形式分布に揺れがあるが、第 2 項の分布は比較的一定である。これは、第 2 項という場所と語彙形式という形式の組み合わせが関与していると考えられる。述語の意味に関係なく、名詞句で安定的な情報を伝達できる場所と形式は、第 2 項の語彙名詞といえるのではないだろうか。⁸⁴

次に、(90) のような第 3 項「IO」の場合を見ていきたい。

(90) a. [CL1[夜になるとやってくる]REL-父 i -は ふだんどおりあまりしゃべらず]

[CL2 ϕ_i パイプ椅子に腰かけて]

[CL2 ϕ_i [何か食べたいものはないか]-と

(A)

照れたような顔で ϕ_j 訊い-た]

(IO) ask-PAST

(角田 J40)

⁸³正確には、省略項 71.5%、語彙形式 19.8%である（表 24）

⁸⁴各文法関係の相関については次の項（4.3.5）で述べる。

- b. [CL1 それほど親しくない客-に-は [お口に合わないかもしれませんが]-と

IO-DAT-TOP

CL-CMPL

いって 食べ物を 差し出す]

offer

(土居 J32)

- c. [CL1 昨日 僕-が 千代田町の焼跡で 中尾さん-を 訪ね たとき]

[CL2 なぜ 中尾さん-は [尋ね人-が 来た]REL-こと-を 僕-に

A-TOP

CL-NMZ-ACC

PRO(IO)-DAT

云っ-て-くれ-なかつ-た-のだろう

say-te-give-NEG-PAST-MOD

(井伏 J21)

表 30 文法関係 IO の形式

「IO」の形式分布は、表 30 の通りである。「A」「O」に比べ、形式のバリエティが少なく、省略、語彙、代名詞のみである。これは、「IO」の基本的な意味属性が人間であるということが規制になっていると考えられる。実際に、本データでは 36 例すべてが「人間」であった。

次に頻度を見てみると、(93a) のような省略項が、(93b) のような語彙形式の約 2 倍の頻度で出現している。これは、

「O」と対立する振る舞いで、「A」とは類似している。3つの項が必要とされる他動詞構文において、「A・IO」が同じ形式分布をし「O」との間に一線を画しているといえる。「A・IO」の位置には機能語に近い形式を置き、「O」の位置には内容形態素で自律性の高い自由形態素でコード化されることが好まれている。

第 1 項と第 2 項の位置にコード化された形式に着目し談話の構造を観察してみると、両者の間には情報伝達の仕方という機能面での対立が認められた。第 1 項に現れる形式は関係性を指示する省略に偏る傾向があり、第 2 項では自律的な意味情報をコード化する語彙名詞に偏っていることが確認された。

4.3.5 文法関係と能格性

4.3.4 項までは個々の文法関係の形式分布を考察してきたが、ここでは第 2 項を含めた項構造全体から文法関係と形式の関係を見ていきたい。上で分析した表 25、表 27、表 28 表 29 を基に主要な形式である省略・語彙名詞・代名詞を対象にし、それ以外の形式は「そ

IO		
形式	数	割合
省略	22	61.1%
語彙	11	30.6%
代名詞	3	8.3%
合計	36	100.0%

の他」にまとめて検証してみた。その結果が表 31 である。

表 31 文法関係と形式の相関

文法関係	A		S／dS		O		合計	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	614	71.5%	431	44.1%	152	17.7%	1197	44.4%
語彙	170	19.8%	416	42.5%	500	58.2%	1086	40.3%
代名詞	61	7.1%	40	4.1%	6	0.7%	107	4.0%
その他	14	1.6%	91	9.3%	201	23.4%	306	11.4%
合計	859	100.0%	978	100.0%	859	100.0%	2696	100.0%

$$\chi^2=668.6, pf=6, p<.001$$

表 31 を見てみると、項が 1 つだけ要求される自動詞と受動態の場合は、語彙と代名詞 46.6%と省略 44.1%であり、音声形式をもった項として現れるか現れないかという具現化／非具現化の間に際立った差異は見受けられない。自動詞／受動態では指示対象を具現化するか否かという情報提示の方法は有益な方略として機能していないことになる。しかし、前項でも見たように、項が 2 つ要求される他動詞構文に注目すると、O は具現化される傾向が強く、語彙名詞 (58.2%) および人称代名詞 (0.7%) を含め 8 割以上が音声形式を持って現れている。これは A と著しく対立する関係にある。他動詞では、具現化／非具現化という方略が機能していることは明白であり、具現化を一手に引き受けているのが O であることがわかる。この結果はカイ 2 乗検定でも有意差が認められ⁸⁵、具体的には、(91a) の CL2 ように第 1 項が他動詞の主語と目的語が両方とも具現化される頻度は低く、(91b) の S1 から S3 にかけて他動詞の第 1 項 (A) が省略され目的語が語彙名詞で具現化されることが多いことを示している。

(91) a. [CL1 通話状態がわるくなったのか]

[CL2 若者-は 気短そうに 舌打ち-を ひとつ し-て …
A-TOP O-ACC do-te (宮部 J14)

⁸⁵ 頻度差の検定の目的で広く使用されているカイ二乗統計量(chi-square: 略記 χ^2)を用いたカイ二乗検定(chi-square test)を行い、相関関係の評価した。カイ二乗検定とは、比較する 2 つ以上の項目の頻度が互いに意味のある程度に異なっているかどうかを評価する検定方法で、下記の計算式を用いた (石川 2008)。

$$\chi^2 = \sum (\text{実測値} - \text{期待値})^2 / \text{期待値}$$

- b. S1([CL1 僕_i-は 張り紙を出していなかったが][CL2 渡辺_i-は 二度か三度
訪ねて来たこともあり][CL3 ϕ_i 松の木と泉水-を 見-て]
(A) O-ACC see-te
[CL4[僕の家-の焼跡だ]-と ϕ_i 気づい-た-そうだ])
CL-OBL (A) notice-PAST-MOD
S2([CL1 しかし 焼跡だから ϕ_i 声-を かける-こと-も-できない-し]
(A) O-ACC Vt-NMZ- too-can't-COJ
[CL2 ϕ_i 灰-を 掘る-に-は][CL3 道具-もない-し]
(A) O-ACC Vt-DAT-TOP S-too EXI-COJ
[CL4[とにかく どこかで ϕ_j 死んでいる]-もの-と ϕ_i きめ-た])
CL-REL-NMZ-OBL (A) decide-PAST
S3([CL1 それで ϕ_j どこで 死ん-だ-にしても]
(S)
[CL2[ϕ_j ここで死んだ]-もの-と-し-て ϕ_i 線香_k-に 火-を つけ]
CL- NMZ-OBL-do-te (A) O-ACC light
[CL3 ϕ_i ϕ_k 泉水のほとりに 立て-て]
(A) (O) erect-te
[CL4 ϕ_i 酢瓶の水-を 供え]
(A) O-ACC put on the grave
[CL5 ϕ_i フクラシの木-の-青葉-は 半焼けの松の木-のところ-に 撒いた]
(A) O-TOP place-DAT Vt
(井伏 J61-63)

また、3つの文法関係 (A, S/dS, O) の形式を包括的に見てみると図3のような関係になる。Aの語彙名詞は19.8%で、O(58.2%)とS/dS(42.5%)と比較すると半分以下の出現率である。また、OとS/dSの語彙名詞を比べると、約6割が語彙名詞で現れるOと4割強のS/dSではOの頻度が明らかに高い。語彙化をものさしにすると「A < S/dS < O」の関係が成り立つことがわかる。しかし、語彙化ではなく具現化／非具現化(代名詞やその他を含む)の基準でみると、S/dSも約6割(55.9%)が具現化され、その振る舞いはAよりもOに近く、「A < S/dS, O」の関係が見えてくる。文法関係を具現化／非具現

化との関係でみると、**A** は非具現化寄りの傾向を示し、**S/dS** と **O** は具現化寄りにバイアスがかかっていると考えられ、**S/dS** と **O** が似たような振る舞いをし **A** と対立している。日本語は基本的には対格言語であるが、出来事を描写する際の形式と文法関係の間には能格的な関係が見受けられる。

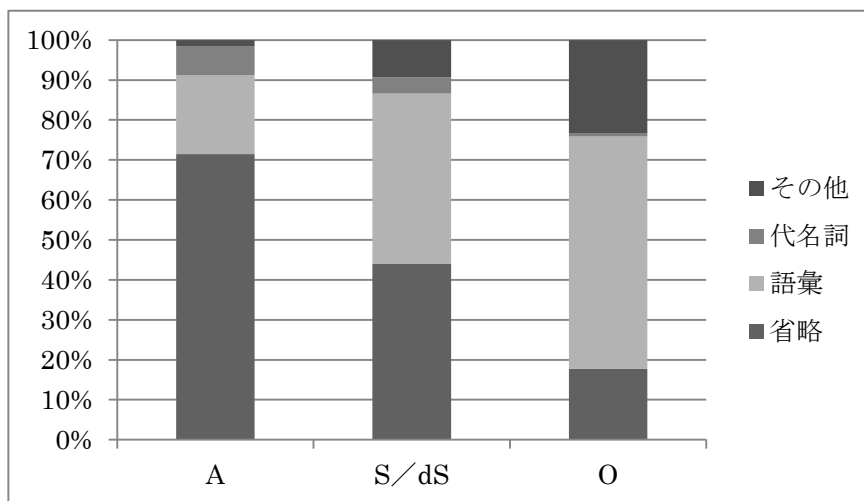


図 3 文法関係と形式の相互関係

4.4 項の形式と意味的属性

4.3 節では節内の主要な名詞句である項の形式と文法関係の相互関係を見たが、ここでは項がもつ意味的属性と形式の関係を見ていく。着目する意味的属性は「有生性 (animacy)」である。言語のさまざまな文法現象に「有生性階層 (the animacy hierarchy)」や「人間階層 (the person hierarchy)」が深く関わっていると言われており、Dik (1997:34-37) はこの 2 つの基準を融合させた (92) の階層を提示している。

(92) 人間と有生性の階層 (the person/animacy hierarchy)

1/2 > 3 > 有生物 (animate) > 非有生物の力 (inanimate force) >
その他の非有生物 (other inanimate)

(92) が表しているのは、言語現象に関与する要素には優先順位があり、1 人称と 2 人称が最も優先順位が高く、その次は 3 人称、有生物、非有生物と順を追って優先順位が下がるということである。Fry (2003) と Nariyama (2003) も日本語の名詞句省略と有生性との間に相関関係があると主張しており、Fry (2003) は第 1 項が人間で述語が他動詞の場合に省略されやすいと主張し (Fry 2003:90)、Nariyama (2003) は第 1 項が人間階層の中

先行研究では第 1 項が主要な対象であったが、本研究では、第 1 項だけでなく第 2 項、第 3 項を対象に、文法関係と形式と意味的属性の関係を考察する。名詞句がどのような情報を提供しながら談話内に存在しているかを検証していく。

第 1 項に現れる名詞句が持つ意味的属性の分布を確認するにあたり、まず、必須項が 1 つの自動詞・受動構文を見てみる。意味的属性の分析のパラメーターは、3.3.4「項の意味的属性」の項で説明したが、分析項目を確認する意味で具体例 (93) を示したい。

- (93a) (93b) の第 1 項 (S と dS) はそれぞれ「有生物・人間」で、(93c) (93d) の第 1 項 (A) は「無生物」である。(94a) ~ (94c) のような人間の身体部位や (94d) の心的状態を表す語彙は、シネクドキー的な人間の延長と考えることもできるが、本データでは「無

生物」と分類した。⁸⁶

- (94) a. S1(人間は痕跡をつけずに生きてゆくことはできない)
S2([CL1 櫛の目の間-に 髪の毛-が はさまっ-ている-ように]
LEX (InA)-NOM be stuck-ASP-like
[CL2 どこかに 何かが 残っている]) (宮部 J111-112)
- b. [CL1 そのつど ϕ_i 平衡を 失って][CL2 体-が 揺れる-ので]
LEX (InA)-NOM
[CL3 はっとばかりにレールをしっかり握る] (井伏 J50)
- c. [CL1 ナオコの姿-は ないにしても][CL2 [何かメッセージがのこされている
LEX (InA)-TOP
のではないか]-と 思ったのだ] (角田 J144)
- d. [CL1 寝室に引き上げてからも眠りにつけないままいろいろ考えているうちに]
[CL2 一方では 神経-が つかれているのでもあり]…
LEX (InA)-NOM (大江 J36)

以上のようにアノテーションを行ったところ、第1項の形式と有生性は表32～34のような結果となった。まず、文法関係「S」(表32)を見ると、有生・省略は59.6%で有生・語彙の30.1%と比較すると約2倍の出現率である。それとは対称的に、無生では省略項30.2%、語彙項53.8%となり、有生の分布と対比的な分布を示している。(95) CL2内の1人称のように有生を前提とする代名詞(35例)⁸⁷やその他に分類した数量詞(3例)など有生でも音声形式を伴って現れることはある。しかし、それらは機能語に近く内容語の語彙名詞とは働きが異なり、頻度も低い。有生性の対比が顕著に表れているのは、省略／語彙名詞の対立である。

- (95) [CL1 ふりかえって見ないでも]
[CL2 [それが「未来のイーヨー」なのだ]-と 私-は 知っ-てい-た]
1(Ani) know-ASP-PAST (大江 J41)

⁸⁶ 身体部位および心的状態を表す語彙は、23例であった。

⁸⁷ 代名詞35例中に、再帰代名詞8例が含まれている。

「S」の形式と有生／無生の意味的属性の結果は、統計的にも支持され (χ^2 値=164.7)、省略項と意味的属性の有生性に相関関係が認められた。

表 32 「S」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	236	59.6%	149	30.2%	385	43.3%
語彙	119	30.1%	266	53.8%	385	43.3%
代名詞	35	8.8%	0	0.0%	35	3.9%
その他	6	1.5%	79	16.0%	85	9.6%
合計	396	100.0%	494	100.0%	890	100.0%

$$\chi^2=164.7, pf=3, p<.001$$

次に「dS」の有生性⁸⁸を見ていく (表 33)。「dS」で有生の形式は、(96a) の省略、(96b) の語彙、(96c) の代名詞⁸⁹として現れ、その他の形式は現れなかった (表 33)。有生・省略項の場合は、復元先の指示対象が先行文に存在しない場合 (96a)⁹⁰ や、(96b) のように参照先が先行文に存在する場合が見られた。復元先の違いはあるものの省略形式として現れた「dS」(30 例) は、全体 (88 例) の 37.5% を占めている。有生がデフォルトである代名詞は、(96d) CL1 内や数量詞と共に現れた (96e) の補文内の受動態主語を含め、5 例の内、4 例が 1 人称であった。⁹¹

⁸⁸ 日本語研究では主語位置に人以外のものが現れる受身を非情受身文と呼ばれており、その使用に制限があることがこれまでに指摘されている。受身文を考える場合、日本語本来の使われ方として非情受身文は稀有であるという議論とそれに反論する意見 (奥津 1983)、それぞれを詳細に検証する必要があると思うが、本研究ではそれらを踏まえながらも共時的データ分析として客観的に受身文を検証したいと考える。

⁸⁹ 代名詞 5 例中には、次の補文内の受動文のように有生／無生の判断がしづらい場合も含まれている。「自分達のこと」の有生性を判断する場合、再帰代名詞「自分」+複数を示す接辞「達」までは、問題はなく「有生」と判断できるが、出来事を客観的に記述する「～のこと」を接続することで有生性が低く感じられる。

[漫画雑誌に 自分たちのこと-が 何か 書か-れ-てはい-ない-か]-と
dS-NOM write-PASS-ASP-NEG-INT-CMPL 特集
記事まで葵は眼を通した (角田 J62)

⁹⁰ ここの指示対象は、発話主体指向性を持った主人公「本間」である。

⁹¹ 3 人称代名詞の例は、以下の場合のみである (前出(52))。

[CL1 彼ら-は 武士からも庶民からも 憎ま-れ-ない-ように] [CL2 俟約一途に暮らし出した

表 33 「dS」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	30	71.4%	16	34.8%	46	52.3%
語彙	7	16.7%	24	52.2%	31	35.2%
代名詞	5	11.9%	0	0.0%	5	5.7%
その他	0	0.0%	6	13.0%	6	6.8%
合計	42	100.0%	46	100.0%	88	100.0%

$$\chi^2=24.5, pf=3, p<.001$$

- (96) a. S1 (今朝がたも あれこれ考えていたものだから 新聞をひろげていても
実際には何も読んでいなかった)
S2 (あまつさえ 紙面の端がコーヒークップのなかに浸かっていた)
S3 ([CL1[いかんな]-と ϕ_i 頭-を 叩いたら]
[CL2 智_j-に [頭でも痛い]-と ϕ_i 訊か-れ-た])
LEX-DAT CL-CMPL (dS, Ani) ask-PASS-PAST
(宮部 J91-93)
- b. S1 (また 次のようなことも 私_iの神経を 刺激したことであつた)
S2 ([CL1 ϕ_i アメリカ人の家庭-に 食事-に呼ば-れる-と]
(dS, Ani) invite-PASS-CONJ
[CL2まず主人が酒かソフト・ドリンクいずれを飲むかとたずねてくる])
(土居 J20-21)
- c. [CL1官僚達-も [細部-が 見苦しい]-と いわ-れ-ない-ために]
dS (Ani) -too CL-CMPL say-PASS-NEG-CONJ
[CL2 ϕ_i 人手をかけ][CL3 ϕ_i 品質に凝った事業を行い]
[CL4 ϕ_i 平気で単価を吊り上げる] (堺屋 J113)
- d. [CL1 私_i-は たまたま [ϕ_j 一九五四年 東京で 開催さ-れ-た]REL-
dS (Ani)-TOP (dS, InA) held-PASS-PAST-REL-

3pl-TOP hate-PASS-NEG-like か
ら][CL3 景気はますます悪化した] (堺屋 J32)

米軍軍医たちの精神医学会 j -において [CL2 ϕ_i [日本の精神医学についての
LEX-at

概観-をのべるように] 求め-られ-た-が][CL3 ϕ_i その講演の終わりの方で
大体次のような趣旨のことをのべた] (土居 J57)

e. [CL1 お袋-は [僕たち-三人-が 吹きとばさ-れる-か

1pl (Ani)-QNT(dS)-NOM blow off-PASS-or

家の下敷きになるかして 死んだに違いない]-と 思い]

CL-CMPL think (井伏 J6)

次に、「dS」で無生の形式は(97a) CL2 の省略 (ϕ_j)、(97b) CL1 の語彙、そして、その他の形式として指示詞 (97c) CL2 などが見られた。

(97) a. [CL1 私 i -が 以上の講演を行った時]

[CL2 [ϕ_j 「甘える」という言葉-に 含蓄さ-れる]REL-

(dS, InA)

imply-PASS-REL-

独特の意味 j -について どれほど ϕ_i 気付いていたか]

a uniqueness-meaning-about

[CL3 今でははっきりとした記憶が残っていない]

(土居 J62)

b. [CL1 噴煙-で 太陽光線-が 遮ら-れて] [CL2 大凶作となり]

LEX(dS, InA)-NOM block off-PASS

[CL3 景気はますます悪化][CL3 世の中の閉塞感はいよいよ募った] (堺屋 J25)

c. [CL1 これが国際競争が激しい分野ならバリュー・アナリシスによってコストダウンもするだろうが]

[CL2 国際競争のない公共事業や教育・医療などになると

それ-も 行わ-れ-ない]

DEM (dS, InA)-too

held-PASS-NEG

(堺屋 J112)

興味深い点は、パラメター「省略・dS・無生」の16例の内15例が(96d) CL1 や(97a) CL2 のように名詞修飾節内に現れていることである。詳しく見てみると、主名詞 ((97a) の「独特の意味」、(98) では名詞化辞「こと」) は、主要な項位置に現われたり述語内の

名詞句として現れたり⁹²、あるいは、斜格標示の名詞句で付随的な情報でありながら、(96d) CL1 のように複合的な助詞「において」でマークされ、文脈上重要な名詞句として場面に導入されている。

- (98) [CL1] [φ ナオコ-について 書か-れ-ている]REL-こと-も きっと
 (dS, InA) N-about write-PASS-ASP-REL-NMZ(S)-too
 本当-で-は-ない-んだろう]-と だから 葵-は 思っ-た]
 truth-COP-TOP-NEG-MOD-CMPL N1-TOP think-PAST (角田 J85)

「S」同様、「dS」においても有生／無生という意味的な「ものさし」は、有効に機能していることがわかり、この結果は統計的にも支持され (χ^2 値=24.5)、「dS」の形式と有生性に相関関係が認められた。それに加え、「省略・dS・無生・名詞修飾節」の組み合わせにはかなり制限があり、後続節の名詞句を文脈に導入する働きが関与していることが伺えた。実例が少ないため、さらなる検証が必要だが、主題性と受動態、そして形式と有生性が連動していることが予測できる。⁹³

次に、「A」の有生性を見ていく (表 34)。

表 34 「A」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	554	72.0%	60	66.7%	614	71.5%
語彙	144	18.7%	26	28.9%	170	19.8%
代名詞	61	7.9%	0	0.0%	61	7.1%
その他	10	1.3%	4	4.4%	14	1.6%
合計	769	100.0%	90	100.0%	859	100.0%

$$\chi^2=16.6, pf=3, p<.001$$

(99a) S3CL2 のような省略で有生の場合が 7 割以上を占めており、(99b) CL2 や (99c) の語彙形式で有生な場合を遥に上回っている。しかし、語彙形式全体の 170 例からみると

⁹² 述語内に主名詞が現れる例としては、脚注 78 を参照されたい。

⁹³ ここでは「名詞修飾節・省略・無生・dS」とトピック性の関連性を示唆するだけにとどめ、その検証は今後の課題としたい。

「A・語彙・有生」も 84.7% になり、語彙化でも有生に偏った分布を示している。さらに、(99d) CL4 のような有生がデフォルトの代名詞や (99e) CL1 の有生数量詞を加え、すべての有生「A」(769 例) を対象にすると、その頻度は 89.5% まで上り「A」と有生（無生ではない）との関連性が強いことが伺える。

- (99) a. S1(財政難に対応して 吉宗_i-は 徹底的な儉約を強いた)
 S2(幕府財政を再建するための享保の改革である)
 S3([CL₁ 自ら_i-も 質素儉約に 努めたが]
 [CL₂ φ_i 他人にも それ-を 強要し-た])
 (A, Ani) it-ACC force-PAST (堺屋 J34-36)
- b. [CL₁ φ_i レジの列を抜け]
 [CL₂ 葵_i-は その雑誌-を 手に取っ-た]
 LEX(A, Ani) the magazine-ACC hold-PAST (角田 J51)
- c. [CL₁ 母-が 寝室で 化粧-を している⁹⁴ 間]
 mother (A, Ani, LEX)
 [CL₂ 小さい時からの習慣で私はつきそうように脇に立って]
 [CL₃ いくらか話をする ことがある] (大江 J30)
- d. [CL₁ 夜が更けてから][CL₂ φ_i 眼をさまし][CL₃ φ_i 思い出すうち]
 [CL₄ 私-は なによりも 色濃く 夢の寂しい-気持ち-を ブリかえ-らせ-
 PRO (A, Ani)-TOP Adj-feeling-ACC return-CAUS-AUX
 てしまい]
 [CL₅ φ_i 暗いなかのベッドに横になっていることができなくなった]

⁹⁴CL1「化粧をする」、CL3「話をする」のような軽動詞構文 (light verb construction) (下の (a) の「修行をする」と (b) の「修行する」のような対応があり、「漢語動詞派生名詞 (verbal noun) +ACC+suru」の形式を持つもの) に関しては、形態論・統語論・意味論から「階層的な項構造をもつ／もたない」など様々な主張がある。本研究の分類にあたっても、詳細な検証が必要であろうが、対格「を」を伴う (a) のような場合は、他動詞表現と分類した。本研究のデータでは、(b) のような「VN+suru」形式は 151 例に対し、(a) 軽動詞構文「VN+ACC+suru」は、わずか 18 例であった。「VN+suru」形式が無標で、軽動詞構文は有標と考えられるだろう。軽動詞構文に関するこれまでの研究概要については、Miyamoto (1999) を参照した。

- (a) [CL₁ この店はかなり有名な呉服屋だったが][CL₂ 12, 13 歳の丁稚たちと同じような-
修行-をする]-の-は 相当に苦しかったはずだ
 VN-ACC suru-NMZ-TOP (堺屋 J38)
- (b) [CL₁ 先述した小栗了雲について 修行-し][CL₂ とうとう独自のものを
 VN-suru 考えついたのである] (堺屋 J62)

(大江 J46)

- e. [CL1 二人_i-は 道-を さぐり]
QNT (A,Ani)-TOP road-ACC search
[CL2 ϕ_i 山陽線の線路-を 探し当てて]
(A,Ani) railroad-ACC find out
[CL3 ϕ_i 線路づたいに西へ行くと][CL4 ϕ_i 駅らしいところに着いた]

(井伏 J20)

一方、無生を見てみると、有生とは対象的に (100a) CL2 の省略、(100b) の語彙、その他の指示詞 (100c) を加えても 1 割強の頻度である。

- (100) a. [CL1 さらに これ (=石門心学) _i-が 広範囲に拡がって]
[CL2 ϕ_i 日本独自の-文化-を 作り出し-ていく-のである]
(A,InA) culture-ACC create-AUX-MOD (堺屋 J80)
- b. [ドイツ語としては極く日常的な]_{REL}-語-も ほとんど
A (LEX,InA)-too
学術用語同然の-扱い-を 受け-た]
treatment-ACC receive-PAST (土居 J52)
- c. それ-が 関根彰子をはじめとする「真面目で気の小さい」そして
DEM (A,InA)-NOM
年齢の-若い-多重債務者-たち-を 動かし-た-もの-な-ので-は-ない-か
Adj-debtor-pl-ACC move-PAST-NMZ-COP-MOD-TOP-NEG-INT
(宮部 J82)

「A」の形式決定において有生／無生の意味的なものさしは有効に機能しており、この結果は統計的にも支持された (χ^2 値 = 16.6)。「S」「dS」同様、文法関係「A」にも形式と意味的属性に相関関係が認められた。しかし、分布の仕方に少し違いが見られた。「S」「dS」では有生／無生と省略／語彙形式の間に明確な対立が見られるが (表 29 と 30)、「A」では形式と意味の相互対立ではなく、「有生」の方向に極度に偏っている。「S」「dS」「A」の形式・意味の分布を見てみると、「S」「dS」対「A」の構図が見える。3つ文法関係には形式と有生性が関連しているという類似点はあるが、「A」の「省略・有生」への顕著な

傾きは特徴的で、「S」「dS」との違いを示している。

この違いは必須項の数の違いと考えられる。必須項が1つの「S」「dS」では、一義的な形式決定は自律的に完結することになるが、必須項が2つの「A」では、もう1つの必須項である「O」の関与を想定しなければならず、形式決定は相対的に判断しなければならないのではないだろうか。そこで、下の4.4.3項では「O」の有生性を確認し、他動詞文の総合的な形式決定を見て行きたい。

4.4.2 第1項の人称

前項では、第1項の文法関係とその形式および意味的属性の関係を検証した。「S」「dS」、「A」それぞれの分布は異なるものの、形式・文法関係・意味の間には相関関係が認められ、第1項の省略には有生性が大きく関与していることがわかった。

ここでは、その有生性をさらに詳しく見ていくことにする。(92)で示したDik (1997)の「人間と有生性の階層」を参照し、有生の第1項を再分類した。1/2/3 人称の「人間」とそれ以外の有生物、つまり、動物に分類したところ、動物の例は、(101a) CL2 の自動詞主語「馬」や、(101b) CL2 の他動詞主語「大きい犬」のような例が4例あるのみで、残りはすべて「人間」であった。⁹⁵

(101) a. [CL1 横川橋を渡りながら見ると]

[CL2[六日の日に橋の下で焼けただれて身震いしていた]REL-馬-は

CL-REL-horse-TOP

S, Ani, NH

殆ど骨ばかりになっ-てい-た]

become-ASP-PAST

(井伏 J98)

b. [CL1 ところが大きい音をたてていつまでも排尿するようだったイーヨーは
そのうち戻って来ると] [CL2 大きい-犬-が 頭や鼻さきで 飼い主-を

Adj-dog-NOM

keeper-ACC

A, Ani, NH

小突いて-確かめる-ように] [CL3 体をかがめて…]

poke-make sure-such as

(大江 J51)

⁹⁵ 文法関係「S」、「dS」、「A」の意味的属性が「人間」の場合は、1203例である。

私達が何かを語り記述しようとするとき、まずその出来事を人間との関係でとらえることがごく一般的な方法であると Du Bois (1980:269-70) は述べている。話題が動物や擬人化された動物の場合を除いて、何かについて語るときは「人間」がデフォルトになりやすいというわけである。意味的カテゴリー「有生」の内部で「人間」と「人間以外の有生物」ではその優位性が異なり、「有生・人間」の組み合わせがデフォルトとして認識されやすいのだろう。

そこで、有生カテゴリー内で優位な位置を占める人間内の階層 (1/2/3 人称) に着目し、その分布を確認してみた。まず、1 人称は (102a) CL1 の省略項と (102a) CL2 の代名詞の形式で現れている。1 人称には (102b) のような複数形も含む。

- (102) a. [CL1 ϕ_i 兄にまったく無視されたことで]
(1, dS)
[CL2 私_i-は あらためてもっと独りぼっちの気持ちになっ-てい-た]
1(S)-TOP (大江 J50)
- b. お袋-は [僕たち-三人-が吹きとばされるか家の下敷きになるかして
we-three (1, pl, dS)-NOM
死んだに違いない]-と 思い… (井伏 J6)

3 人称は (103a) CL1 の「dS」語彙名詞「父」や CL3 の「S」語彙名詞「母」、そして、(103b) CL1 の代名詞や CL2 の省略形式で現れている。3 人称には (103c) のような複数形も含まれる。

- (103) a. [CL1 父-が カリフォルニアの大学に居住作家として招かれ]
father (3, dS)-NOM
[CL2 事情があって][CL3 母-も 同行することになった]
mother(3, S)-too (大江 J1)
- b. [CL1 すると 彼_i-が 怪訝な顔をして]
PRO (3, S)-NOM
[CL2 ϕ_i “What are you sorry for?” -と 聞き返してきたので]
(3, A)
[CL3 すっかり面喰ってしまった] (土居 J14)

c. [電車が着く前から待ち構えていた]_{REL}-二十人ばかりの人-が

about 20 people (3, pl, A) - NOM

下車して来た人たちと口々に「見つからなんだ、家跡はどうなっとる」などと
大声で話し合っていた (井伏 J56)

3 人称のうち (104a) の省略項のような指示対象が主人公（ここでは「本間」）の場合には「発話主体指向性」の注釈を加えている。(104b) S3 の総称指示 (generic reference)⁹⁶ も同様である。

(104) a. [CL1 ϕ_i 考えるうちに] [CL2 ϕ_i 関根彰子の経歴を照会した折に]
(3, LOG) (=本間) (3, LOG) (宮部 J58)

b. S1(客人の話声によると 小畠村でも 松根堀りをやっている) …S2…

S3([CL1 ϕ_i 松の根から 油を 蒸しとって]

(Gen)

[CL2 [B29 を撃ち落す]_{REL}- 飛行機-か何かのエンジンの油に

ϕ_i 使うのだ])

(Gen)

(井伏 J86 と J88)

研究のデータは書き言葉のため、指示対象が 2 人称の場合はほとんどないが、(105) の補文内⁹⁷ の名詞修飾節内の「あなた」として現れる場合が確認できたが、かなり特殊なケースと言える。

(105) 母-は [この病院-は [あなた-が 生まれた]_{REL}-ところ-な-のだ]-と

2 (S)-NOM CL-REL-place-COP-MOD-CMPL

葵には能面のように見える顔で幾度も繰り返した (角田 J32)

分析結果は表 35 の通りである。本研究のデータでは、1/2/3 人称すべてにおいて省略形式の頻度が 6 割以上と高く、発話主体指向性の 3 人称 (252 例) では 75% (190 例) が省略項である。出現度数では (103b) CL2 のような「3 人称・省略」の場合がもっとも多く 362

⁹⁶ (107b) S3 の省略項の指示対象を、あえて復元すると「小畠村で松根堀りをしている人々」となるのだろうが、具体的指示とはいいたため総称指示とした。

⁹⁷ 「と」を補文標識と認め補文としているが、直接話法に近い表現である。

例確認され、発話主体指向性の「3 人称・省略」を合わせると 552 例で全体 1203 例のうち 45.9% を占める。1 人称ではなく 3 人称の省略頻度が高いことを示している。同じ書き言葉の先行研究である Nariyama (2003) は、省略された第 1 項で頻度が高いのは 1 人称であると主張しているおり、本データと食い違いが見られる。しかし、「発話主体指向性」に注目して、「1 人称、総称、3 人称 LOG」対「3 人称」の省略形式の関係を見ると、454 例 (37.7%) 対 362 例 (30.1%) となり、「発話主体指向性」の人称の省略頻度が高くなる。第 1 項の人称は 1/2/3 人称すべてにおいて省略形式の傾向が強かった。それに加え、発話主体指向性の 3 人称は最も省略されやすいことが確認できた。

表 35 形式と人称

形式	1 人称		2 人称		総称		3 人称 LOG		3 人称		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	181	69.9%	4	66.7%	83	100.0%	190	75.4%	362	60.0%	820	68.2%
語彙	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	56	22.2%	210	34.8%	266	22.1%
代名詞	78	30.1%	2	33.3%	0	0.0%	2	0.8%	20	3.3%	102	8.5%
数量詞等	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	1.6%	11	1.8%	15	1.2%
合計	259	100.0%	6	0.5%	83	100.0%	252	100.0%	603	100.0%	1203	100.0%

$$\chi^2=203.6、pf=12、p<.001$$

4.4.3 第 2 項の意味的属性

必須項が 2 つの他動詞構文では「A」の形式・意味属性の決定にもう 1 つの必須項である「O」の関与が考えられることを上に述べた。そこで第 2 項（文法関係「O」）に現れる名詞句の形式と意味的属性を確認してみた。表 36 が分析結果である。分析解釈の前に「O」の位置に現れる形式の具体例を再度確認しておきたい。省略と分析したのは (106) に示した 2 種類である。(106a) S2 のように文脈中の具体的な語で復元できる場合と (106b) や (106c=55b) CL1 のように先行文脈に指示対象の出現はないが、述語の意味から目的語が必要とされる場合である。⁹⁸

⁹⁸ 先行文脈に指示対象が出現している場合は 91 例、出現していない場合は 22 例である。

表 36 「O」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	18	32.7%	113	15.5%	131	16.7%
語彙	31	56.4%	430	58.9%	461	58.7%
代名詞	6	10.9%	0	0.0%	6	0.8%
その他	0	0.0%	187	25.6%	187	23.8%
合計	55	100.0%	730	100.0%	785	100.0%

$$\chi^2=102.9, pf=3, p<.001$$

(106) a. S1 ([どれか一枚 シャツか下着_iの袖-が 変な方向へ いってしまう])

S2 ([CL1 ϕ_j ϕ_i 首尾よく 着る-ことができ-ても]

(A) (O) put on-can-COJ

[CL2何か気分が 悪く] [CL3 結局もう一度 ϕ_j ϕ_i 脱いで]

(A) (O) put off

[CL4[ϕ_j ϕ_i 着なおす-こと-に-なる]REL-の-が オチだ])

(A) (O) put on again-NMZ-DAT-become-NMZ-NOM

(宮部 J101-102)

b. [CL1 ϕ_i 父の脇で床の敷物にじかに腹ばいになって]

[CL2 ϕ_i いつもの作曲をしているというようであれば]

[CL3 兄_i-は 一拍置くように ϕ_j 考えて]

A-TOP (O) think

[CL4 ϕ_i [家族みな of 笑いを誘う]REL-種類の受け答えをしたはず]

(大江 J57)

c. [CL1 ϕ_i (=3) いろいろ ϕ_j 考え-た-末][CL2 ϕ_i ある閃きを覚え]

(A) (O) think-PAST-COJ

[CL3 ϕ_i 42,43 歳で 黒柳家の番頭を 辞めた] (堺屋 J61)

語彙形式は (107a) の「子供」ような有生名詞が 31 例、(107b) の「雑誌」ような無生名詞が 430 例見受けられた。(107c) の身体部位「耳」のように慣用表現として現れる場合、あるいは (107d) の心的状態を表す抽象名詞「気持ち」のような場合は、人間の身

体の延長上と見なすことができ (107b) の「雑誌」などとはその有生性に違いがあると感じられるが、本研究では無生名詞と分類している。⁹⁹

- (107) a. [CL1 ϕ_i 僕_iのお袋のところへ 挨拶に 寄ると]
 [CL2 僕の妹-が 福山市から 二人-の-子供-を
 my sister(A, Ani)-NOM two-of-child(Ani)-ACC
 連れて-帰っ-てい-た]
 take-come home-ASP-PAST (井伏 J4)
- b. [CL1 けれど それが 見つかる前に]
 [CL2 母_i-が すっ飛んできて]
 [CL3 ϕ_i ものすごい勢いで 葵の手から 雑誌-を 奪いとっ-た]
 (A) magazine(InA)-ACC tear-PAST
 (角田 J58)
- c. [CL1 私_iの方は自分のことが話し合いの中心でも]
 [CL2 子供の時からの性格があり] [CL3 このところの習慣もあって]
 [CL4 ϕ_i まわりの発言-に 耳-を かたむけ-ている-だけ-だ]
 (A) ear(InA)-ACC tilt-ASP-only-COP
 (大江 J4)
- d. [日本人の感受性からすると [CL1 主人_i-は 客_j-を もてなすに際し]
 [CL2 かゆい所に 手が 届くように]
 [CL3 ϕ_i 相手の気持ち-を 察して]
 (A) feeling(InA)-ACC assume
 [CL4 ϕ_i ϕ_j 助けてやる]]REL-の-が 礼儀である]
 CL-REL-NMZ-NOM (土居 J38)

有生がデフォルトの代名詞は 6 例のみ観察された (例えば (108a) の「彼女」)。その他に分類した数量詞や指示詞は有生／無生のどちらの可能性もあるが、数量詞 (6 例) と指示詞 (36 例) (例えば (108c) の「それ」) はすべて無生だった。数量詞には (108b) 「何」のような不定数量詞のみが現れた。

⁹⁹ 身体部位名詞句の「O」は 47 例、心的状態を表す名詞句の「O」は 18 例である。

- (108) a. [CL1 彼女_i-は その年パロ・アルトのセンターに来ていたが]
 [CL2 ϕ_i 一度そこに 彼女-を 訪ねて]
 (A) PRO (O,Ani)-ACC visit
 [CL3 ϕ_i 他の研究者たちにも私の考え-を紹介してほしいというのであった]
 (土居 J72)
- b. [CL1 今朝がたも ϕ_i あれこれ 考えていたものだから]
 [CL2 ϕ_i 新聞を ひろげていても]
 [CL3 実際には ϕ_i 何-も 読ん-でい-なかつ-た]
 (A) anything(O,InA)-too read-ASP-NEG-PAST
 (宮部 J91)
- c. お袋-は それ-を まだ 覚え-ている-らしい
 A-TOP DEM(O,InA)-ACC remember-ASP-MOD (井伏 J81)

上の表 36 が示す通り、他動詞文の「O」に現れる指示対象の形式と意味的属性の組み合わせは「語彙形式・無生」がもっとも頻度が高く、この結果は統計的にも支持された (χ^2 値 = 102.9)。

次に、典型的な他動詞構文でない場合の第 2 項 (N2) を見てみる。「N2 を Vt」の形式ではないが (109) CL2 の「N に抱きつく」のような他動詞的な表現に注目し、第 2 項の形式・意味を確認した。

- (109) [CL1 居間から 祖母_i-が 転がり出てきて]
 [CL2 ϕ_i おろおろと 母-に 抱きつく]
 (A) mother(N2,LEX,Ani)-DAT throw oneself into other's arms
 (角田 J153)

結果は表 37 のようになった。語彙形式が全体の 52%を占め、その内、(109) CL2 の「母」のような「語彙形式・有生」の頻度 (74 例中 35 例) がもっとも高い。しかし、その相関関係の有意性は、カイ二乗検定で示されなかった。「O」と「N2」の有生性に関する振る舞いの違いは、典型的な他動詞構文である「ヲ格標示」と斜格標示（特に「ニ格」）に関係があるのではないかと推測できるが、本研究では格助詞の機能についてこれ以上踏み込むことは控え、ここでは、典型的な「O」とそうでない「N2」において、有生性の振る舞い

が少し異なることだけを提示しておきたい。

最後に、(110) CL2 のような間接目的語「IO」を分析したところ、36 例数（省略 22 例、語彙形式 11 例、代名詞 3 例）すべて有生であった。

(110) 私-は 母-に [家の新聞をとりかえてみないか]-と

A-TOP mother(IO, Ani)

CL-CMPL

相談し-た-こと-さえ-あつ-た-のだ

tell-PAST-NMZ-even-exist-PAST-MOD

(大江 J66)

表 37 「N2」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	4	50.0%	17	25.8%	21	28.4%
語彙	4	50.0%	35	53.0%	39	52.7%
代名詞	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	0	0.0%	14	21.2%	14	18.9%
合計	8	100.0%	66	100.0%	74	100.0%

n.s. $\chi^2=3.2$

以上、他動詞の第 2 項と第 3 項に現れる名詞句の意味的属性を確認し、形式との関連性を考察したところ、基本的な「O」について統計的な検証から「語彙形式・無生」の傾向が強いことが確認できた。「N2」の統計的有意差は認められなかったものの「語彙形式・無生」の出現数が他の組み合わせよりも多かった。「IO」はすべて「有生」で現れ、無生の傾向が強い「O」と対比的である。項位置の名詞句の意味が有生か無生かという有生性の「ものさし」は、上の項で見た「A」同様、「O」に関しても有効であることがわかる。

必須項が 2 つ要求される他動詞構文の主要な文法関係「A」と「O」の相互関係に着目して形式と意味の組み合わせを見ると表 38 の結果が得られた。これは機能語的特徴の強い名詞化辞等を除き省略項・語彙項・代名詞項の 3 つの形式と文法関係 (A,O)、意味的要因の関係を示したものである。

「A」「O」「省略」「語彙」「代名詞」「有生」「無生」のそれぞれを組み合わせた場合、「第 1 項・A・語彙・無生」+「第 2 項・O・省略・有生」で談話内に現れる頻度は極めて少な

く、本研究のデータでは確認できなかった。一方、「第 1 項・A・省略・有生」＋「第 2 項・O・語彙・無生」の組み合わせは、最も頻度が高く 293 例にも上った。そのような頻度の高い組み合わせは (111) の S1CL1 から S3CL3 まで複数連続して現れることもあった。

- (111) S1 [CL1 おいおいここじゃここじゃ-と ϕ_i 声-を
(A,Ani) O (LEX, InA)
かけながら渡ったが] [CL2 背負っているリュックサックの始末には
二人 i -とも 手を焼いた]
S2 [CL1 ϕ_i 頭-を 下げると] [CL2 ずしりとリュックサック j -が
(A,Ani) O (LEX, InA)
首や頭を押し] [CL3 ϕ_i 背中-を 水平にして]
(A,Ani) O (LEX, InA)
[CL4 ϕ_i 這って行くと] [CL5 ϕ_j 脇腹か腋の下へ 廻る]
S3 [CL1 そのつど ϕ_i 平衡-を 失って] [CL2 体が揺れるので]
(A,Ani) O (LEX, InA)
[CL3 はつとばかりに ϕ_i レール-を しっかり 握る]
(A,Ani) O (LEX, InA) (井伏 J48-50)

表 38 他動詞の項の形式と意味

文法關係			O											
文 法 關 係	意味		有生						無生					
	意味	形式	省略		語彙		代名詞		省略		語彙		合計	
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
A	有生	省略	17	2.6%	22	3.4%	4	0.6%	90	14.0%	293	45.6%	426	66.3%
		語彙	5	0.8%	4	0.6%	0	0.0%	20	3.1%	74	11.5%	103	16.0%
		代名詞	0	0.0%	5	0.8%	0	0.0%	8	1.2%	23	3.6%	36	5.6%
	無生	省略	0	0.0%	2	0.3%	2	0.3%	6	0.9%	45	7.0%	55	8.6%
		語彙	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	2	0.3%	20	3.1%	23	3.6%
		合計	22	3.4%	34	5.3%	6	0.9%	126	19.6%	455	70.8%	643	100.0%

項が 2 つ以上要求される場合、項のコード化は、「第 1 項・A・省略・有生」＋「第 2

[CL3 ϕ_i 桑畑は黄色く色あせている]

(角田 J9)

(112) 以外に (113a) CL3 の移動表現や (113b) CL2 の「ヲ格」を伴う自動詞表現の名詞句も対象とした。

(113) a. [CL1 わたし i -は すっかり元氣を取り戻して]

[CL2 ϕ_i イーヨーを ベッドに 寝かしつけると]

[CL3 ϕ_i 自分の部屋-に 帰っ-た-のだ]

(S) LEX (N)-to go back-PAST-MOD

(大江 J54)

b. [CL1 しかし英語でその気持ちが表現できず]

[CL2 それで “I am sorry.” -が 口-を 突いて-出て-きた-のである]

S-NOM LEX (N)-ACC push-go out-come-MOD

(土居 J17)

項位置ではないが出来事を表すために重要な役割を果たしている位置に現れる名詞句の意味と形式を確認したところ、表 39 の結果が得られた。

表 39 その他の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	6	1.8%	13	3.9%	19	5.8%
語彙	32	9.7%	258	78.2%	290	87.9%
その他	2	0.6%	19	5.8%	21	6.4%
合計	40	12.1%	290	87.9%	330	100.0%

$$\chi^2=7.2, \text{ pf}=2, \text{ p}<.05$$

「その他」の名詞句は (112) や (113) 、 (114a) CL2 のように「語彙・無生」が圧倒的に多く、330 例中 258 例出現し 78.2% を占める。「語彙・有生」(例えば(114b)) は 1 割にも満たない。「省略・有生」は (114c) のように自動詞述語「ついてきた」のは誰かということの意味的に補完すると「3 人称 (主人公=葵)」になる、というような場合で、かなり特殊なケースといえる。同様に、「省略・無生」¹⁰¹ の場合も特殊な場合が多く、(114d)

¹⁰¹ 「省略・無生」13 例の内 9 例が、(117d)のような場合を始め名詞修飾節内に現れていた。

4.4.5 項の形式・文法関係と意味的属性の関係

ここまで必須項およびその他の名詞句についてその形式 (4.2 項)、文法関係 (4.3 項)、意味的属性 (4.4 項) を検証してきた。「A」は省略・有生の傾向が強く、それと対称的に「O」は語彙形式・無生の傾向が強かった。「S」と「dS」は類似しており、「A」と「O」の中間的な振る舞いを示した。一方、「IO」は語彙化・有生の傾向が強く、準項とも言うべき「N2」と付属的な「その他 N」は語彙化・無生の方向にバイアスがかかっている。これらの振る舞いを相対的に配置すると、図 4 のようになると考えられる。中間的な振る舞いを見せた「S」と「dS」を中心に、「A」に傾くと省略（白抜き）・有生の傾向が強く、「O」に傾くと語彙形式・無生に傾く。さらに、「N2」・「その他 N」では語彙形式・無生の傾向が強い。最後に、他動詞構文に現れる、「A」と「IO」は、意味的属性の有生は共有しているが、形式が相補的な関係を示していることがわかった。談話内の項・名詞句を、形式・文法関係・有生性に着目して検証すると、それぞれの要因が相互に関連し合って情報提供していることがわかった。

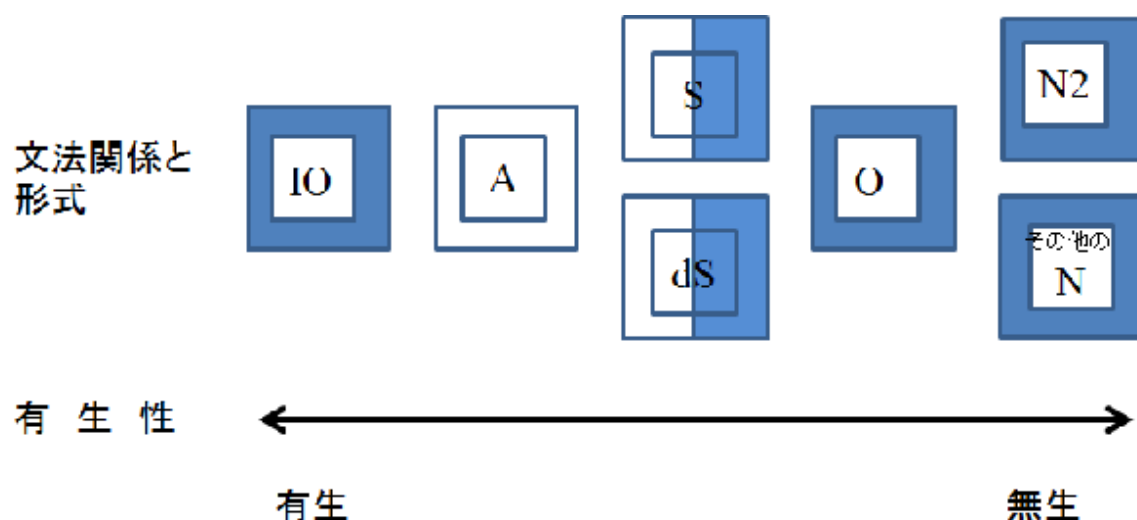


図 4 項の形式・文法関係・有生性の関係

4.5 交替指示

交替指示 (switch-reference) については 2 章で説明したが、ここでもう一度簡単に説明しておく。交替指示とは連続した 2 つの節の間でそれぞれの第 1 項の指示対象が同じなのか異なるのかを何らかの文法的手段（多くは動詞まわりの接辞）によって標示することをいう。この交替指示の概念に従い、第 1 項の指示対象が連続する節間で同じ場合は同一指示 (SS)、異なる場合は非同一指示 (DS) と分析した。指示対象の指示性は、前後両方向を参照している。具体例を (115) に挙げる。

- (115) S1([CL1 [あれは なんだっだろう]C_{MPL}-と 本間_i-は 今になって 考える])
S2([CL1 あの-居酒屋-の-女の子_j-は 夢を かなえるために]
[CL2 ϕ_j クレジットカードを 握って]
DS-SS
[CL3 ϕ_j 銀座へ でかけていく]) (宮部 J50-51)

(115) S2 CL1 の第 1 項「女の子」の同一指示性は次のように決定した。S2 CL1 は文頭の節であり、前方向に隣接する節は、前の文の主節 S1 CL1 「本間は今になって考える」になる。S2 CL1 の指示対象「女の子」と S1 CL1 の指示対象「本間」は異なるため、S2 CL1 の第 1 項の前方向は、非同一指示 (DS) である。一方、後方向に隣接する節 S2 CL2 の第 1 項「 ϕ 」の指示対象は「女の子」であるため、同一指示である。よって、S2 CL1 の第 1 項は、前方非同一・後方同一となり「DS-SS」と分類される。

指示対象を決定する参照領域¹⁰³ は、文の構造を考慮し 3 種類に分かれる。主節か否か、主節でない場合は、副詞節か否かを基準に、1) 直近の節を対象（文構造に関係なく直近の節）、2) 主節と副詞節のみを対象、3) 主節のみを対象に指示性を確認した。1) は、(115) でいうと S1 CL1 の補文と CL1、あるいは S2 CL2、S2 CL2 と S2 CL3 のような隣接する節間の指示対象を確認する。2) は、関係節と補文を除いた節間を対象にし、3) は、(115) でいうと S1 CL1 と S2 CL3 の主節間を対象にする。以下では、まず、1) 同一性を決定するための参照領域がせまい隣接する節間、次に、2) 参照領域が少し広い節間、最後に、3) 参照領域の広い主節間の同一性の結果を示したい。

¹⁰³ 参照領域とは、ギボン (Givon 1983) の指示的距離 (referential distance) に近い考え方である。

4.5.1 隣接節間の交替指示

第1項の指示対象がどのように連続して文脈に登場するかを検証するため、まず、隣り合った直近の節間を対象に同一性を確認する。同一指示性の組み合わせは、1)「SS-SS」(両方向にSS)、2)「SS-DS」(前方のみSS)、3)「DS-SS」(後方のみSS)、4)「DS-DS」(両方向にDS)の4分類である。それぞれのカテゴリーをわかりやすく表現すると、「SS-SS」は前後の節に両手をに延ばし同一性を維持しようとするイメージ、「SS-DS」「DS-SS」はどちらか一方に片手を伸ばして同一性を維持しようとするイメージ、そして「DS-DS」はどちらにも手を伸ばすことができず、孤立したイメージとしてとらえることができる。(116)に具体例を挙げる。

- (116) S1 ([CL1[ϕ_i すぐにも斜めうしろから踏み出して来るはず]_{REL}-
 未来のイーヨー_i-は 花嫁の介添え人で] [CL2 それならば 自分_j-は
 SS-DS DS-SS
 花嫁なのだ])
 S2 ([CL1[ϕ_j しっかり花嫁衣裳を 着た]_{REL}-私_j-が
 SS-SS
 [CL2 花婿の心あたり_k-は ないまま] 未来のイーヨー-を 介添え人に]
 DS-DS
 [CL3 ϕ_j 寂しく ガランドウの場所に 立っている])
 S3 (そこ_i-は もう日暮れ方の広大な野原) (大江 J42-44)

S1 と S2 の文・節連続の種類を見ると、「名詞修飾節→S1CL1 副詞節→S1CL2 主節→名詞修飾節→S2CL1 副詞節→S2CL2 副詞節→S2CL3 主節」の7節が連続し、それぞれの第1項は、「 ϕ_i →未来のイーヨー_i→自分_j→ ϕ_j →私→心当たり→ ϕ_j 」と連続している。ここでの「未来のイーヨー_i」の同一指示性は、先行する名詞修飾節内の「 ϕ_i 」を参照すると同一、後続の「自分_j」を参照すると非同一の「SS-DS」となる。「自分_j」は、前方の「未来のイーヨー_i」と非同一で、文を超え後続する「 ϕ_j 」を参照して「DS-SS」となる。「 ϕ_j 」は前後に同一の「SS-SS」で、「心当たり」は前後に非同一指示の「DS-DS」となる。

本研究のデータは上のように分類されているが、(117) S2 CL1 の「聞く」の第1項「 ϕ_j 」のように、同一指示の指示先が前節の第1項「 ϕ_i 」ではなく、それ以外の必須項（例では IO）の場合がある。

- (117) S1 ([CL1 この人_i-は [近くの掛小屋にいる中尾というものだ]-と 自己紹介して
[CL2 [閑間さんご夫婦と御養女の矢須子さんの三人は古市の会社へお移りにな
っている]-と ϕ_i ϕ (=渡辺)_j 教えてくれた])
S2 ([CL1 「三人とも怪我はしませんでしたか」と ϕ_j 聞くと]
[CL2 「閑間さんがちょっと頬に火傷をされました。ほんの軽い火傷です」と
 ϕ_i 云った]) (井伏 J66-67)

狭い領域で同一性を決定しているという点では、S2 CL1 の第 1 項「 ϕ_j 」は「SS」と判断することも可能だと思われる。しかし、本研究では、参照対象が前節の第 1 項ではないこのような場合は、「SS」ではなく「DS」と分類した。¹⁰⁴

以上の手順で分析した結果が表 40 である。この表から 2 点指摘できると思う。1 点目は「SS-SS」から「DS-DS」間の 4 つのカテゴリーに見られる関連性である。そして、もう 1 点は、「DS-DS」全体の頻度 (1843 例中 806 例 43.9%) および省略項の度数の多さ (301 例) である。

表 40 隣接節間の交替指示

形式	SS-SS		SS-DS		DS-SS		DS-DS		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	298	82.8%	224	73.4%	220	60.6%	301	37.3%	1043	56.9%
語彙	38	10.6%	49	16.1%	108	29.8%	390	48.4%	585	31.9%
代名詞	21	5.8%	22	7.2%	27	7.4%	31	3.8%	101	5.5%
その他	3	0.8%	10	3.3%	8	2.2%	84	10.4%	105	5.7%
合計	360	100.0%	305	100.0%	363	100.0%	806	100.0%	1834 ¹⁰⁵	100.0%

$$\chi^2=122.8, \text{ pf}=9, \text{ p}<.001$$

まず、4 つのカテゴリーの関係を見ていく。前後に触手を伸ばして同一指示を維持している「SS-SS」の場合、省略項で現れることが多く (82.8%)、語彙名詞で現れにくい (10.6%)。それが、前方に同一指示を維持する「SS-DS」、後方に同一指示の「DS-SS」に

¹⁰⁴本研究のデータでの出現数は 46 例であった。

¹⁰⁵作品の第 1 文の第 1 節は、前方照応ができないため分析対象外とし、3 作品がそれにあたる。よって、本研究のデータの総節数は 1837 節だが、隣接節間の交替指示は、1834 節が対象になる。

[CL3 ϕ_i しばらく話をしていると…] (土居 J5-6)

c. [CL1[それ_i-が 何だった-か]CMPL-は もう ϕ_j 忘れてしまったが]

DS-DS

[CL2[ϕ_i ともかく極く些細なことだった]CMPL -と ϕ_j 思う]

(ともかく 私_j-は お礼をいう必要を感じたが…) (土居 J12)

d. S1 [[泉水のほとりに 酢瓶_i-が 立っている] -の-も ϕ_j 見たそうだ]

DS-DS

S2 [CL1 その瓶_i-が 無疵のままで焼け土の上に立って]

[CL2 青いケンボナシの実があったので] … (井伏 J52-53)

(118c) を見てみてもらいたい。「補文→CL1 副詞節→補文→CL2 主節」の順で連続し、それぞれの第1項は「それ_i → ϕ_j → ϕ_i → ϕ_j 」と展開している。そのうち CL1 の「 ϕ_j 」は、直前、直後の近い節を参照すると「DS-DS」となる。¹⁰⁷ このように直近の節に同一性を求める参照領域が狭い場合は、「DS-DS」であっても「有生・人間」であれば省略される可能性が高くなると考えられる。実際にデータを再検索してみると、301 例中の 175 例 (58.1%) が「有生・人間」で、副詞節と主節を合わせた 181 例中では、116 例が「有生・人間」であった。

狭い参照領域の第1項を対象に、同一指示性を4つのカテゴリーに分けてその形式分布を確認したところ、同じ同一指示であっても、前方照応か後方照応かによって形式の頻度に違いがあることが確認された。それに加え、「SS」グループと「DS-DS」の対比的な分布も確認された。また、「DS-DS」でも「有生・人間」であれば省略される可能性が高くなることも確認された。「SS-SS」が省略されやすいという今回の結果は、これまでの先行研究 (ベケシュ 1995b など) で言われてきたように、主題化された名詞句が次の節・文で現れる時は、省略項として現れやすいという形式と主題性ということに連続していくものと思われる。

4.5.2 やや広い参照領域の交替指示

4.5.1 項では、参照領域が狭い場合の交替指示をみた。ここでは、名詞修飾節や補文以

¹⁰⁷ 参照領域を少し広げた場合は、この (121c) の「 ϕ_j 」は「DS-SS」になる。詳細は、次項の 4.5.2 項で述べる。

外の複文と主節を対象に、やや広い参照領域で第 1 項の指示対象がどのような同一性で連続しているかを考察した。前出の (118c) とその前後の文を見してみる。

(119) S1 ([CL1 それからこれも比較的早い頃であったと思うが]

[CL2 ある日 [私を指導 する立場にいた]REL-精神科医_i-が 私_j-に 何か
親切なことをしてくれた])

S2 ([CL1[それ_k-が 何だった-か]CMPL-は もう ϕ_j 忘れてしまったが]

(DS-SS) (1, Ani)

[CL2[ϕ_k ともかく極く些細なことだった]CMPL -と ϕ_j 思う]

S3 ([CL1 ともかく 私_j-は お礼をいう必要を 感じたが]…) (土居 J11-13)

副詞節 S2 CL1 の「 ϕ_j (=私)」を中心に見ていきたい。やや広い領域で同一指示性を決定するために、S2 CL1 の「 ϕ_j (=私)」が参照するのは、直後に後続する補文を超えて、次に存在する主節 S2 CL2 の「 ϕ_j (=私)」である (SS)。前方方向で参照するのは、名詞修飾節と文の境界を超えたところにある主節 S1 CL2 の第 1 項「精神科医」であり、ここでは非同一指示 (DS) である。4.5.1 項の分析よりも少し参照領域を広げて、同一指示を決定した結果、指示性と形式に表 41 のような結果が得られた。

表 41 やや広い参照領域の交替指示

形式	SS-SS		SS-DS		DS-SS		DS-DS		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	189	82.2%	55	77.5%	90	44.8%	53	27.5%	387	55.7%
語彙	22	9.6%	10	14.1%	87	43.3%	118	61.1%	237	34.1%
代名詞	17	7.4%	4	5.6%	17	8.5%	5	2.6%	43	6.2%
その他	2	0.9%	2	2.8%	7	3.5%	17	8.8%	28	4.0%
合計	230	100.0%	71	100.0%	201	100.0%	193	100.0%	695	100.0%

$\chi^2=305.3$ 、pf=9、 $p<.001$

ここから言えることは、隣接節間と同様、指示交替が「SS-SS」の場合は省略されやすく、「DS-DS」は語彙化されやすいという対立関係が成立することである。隣接節間と異なるのは、同一指示の場合、前方照応「SS-DS」(55 例)よりも後方同一指示「DS-SS」(90 例)のほうが省略されやすいことである。この結果は、統計的にも支持され(χ^2 値=305.3)、

形式と交替指示に相関関係が認められた。同一指示「SS」の3グループの分布は、隣接節間とやや広い参照領域では若干異なるが、第1項の同一指示は省略されやすく、非同一指示は語彙化しやすいという点は類似している。

さらに条件を絞って、隣接節の場合とそれより少し参照領域を広げた場合を比較したところ、両者の間に補完しあう関係が観察できた。隣接節で「DS-DS」の第1項の省略項301例を対象に、参照領域を広げてその同一指示性を再検索してみると、「SS-SS」「SS-DS」あるいは「DS-SS」の場合が66例であった。これは、(118c, 119)のような隣接節間で非同一指示であっても、その参照領域を少し広げると、同一指示「SS」を維持できることを示していると考ええる。第1項の同一指示は、狭い参照領域の非同一指示を超えて、やや広い領域間で維持されることが考えられる。この66例をさらに精査したところ、有生性との関与が確認できた。隣接節間で「DS-DS」だったが、参照領域を少し広げたことで「SS-SS」「SS-DS」あるいは「DS-SS」になった66例のうちの47例(71.2%)は(118c, 119)のような「有生・人間」であった。

やや広い参照領域での第1項の指示性と形式を分析した結果、前後、あるいはどちらか一方に同一指示を示す場合が圧倒的に多く、「DS-DS」は語彙化傾向に傾いていることが確認できた。この結果は概ね隣接節間と類似しており、参照領域の差に関係なく「SS・省略」と「DS・語彙名詞」が対立関係にあることが示唆された。また、「隣接節間・DS-DS・省略」がやや広い参照領域で同一指示を維持するときは、「有生・人間」という意味的属性の場合が多いことも確認できた。

4.5.3 主節間の交替指示

基本的な交替指示の定義は、隣接する節間の指示対象の同一性というミクロ的視点だが、4.5.2項ではその参照領域を少し広げた場合を考察し、ここでは、さらに参照領域を広げ、文間の指示対象の同一性を確認した。(120)のS2を中心に、主節連続に現れる第1項の形式と指示性を見ていく。

- (120) S1([CL1 φ_i 焼夷弾-は 何個かまとめてトタンのようなもので 包み]
 [CL2 φ_i 真鍮の針金で 結えてあるらしい])
 S2([CL1 それが空から落ちるとき針金が解けて] [CL2 トタンのようなもの_j-が
 開くと] [CL3 焼夷弾が何発も空中で散らばって]

[CL4 ϕ_j ざあざあという音をだすのだろう])

DS-DS

S3 [CL1 ぴんという音 k -は 針金が庭石の上に落ちたとき-の-音-だろうという
ことであつた¹⁰⁸]) (井伏 J28-30)

(120) の 3 文の主節に現れた第 1 項は、「 ϕ_i 」(S1 CL2) → 「 ϕ_j 」(S2 CL4) → 「ぴんという音 k 」(S3 CL1) のように連続している。その内、2 文目の第 1 項「 ϕ_j 」(S2 CL4) がコード化している同一指示性は、前方、後方、共に非同一指示の「DS-DS」である。「SS-SS」の場合は、(121) の 2 文目第 1 項「彼女」である。また、「SS-DS」の例は、3 文目第 1 項の「彼女」はである。

(121) S1([CL1 私は早速彼女に会いにいったが] [CL2 彼女 i -は 特に「甘える」と
いう言葉と気の概念に 興味を示した])

S2([CL1 彼女 i -は [「甘える」という言葉が日本人の依頼心に対する肯定的
SS-SS

な態度を暗示している]-こと-を見透かしていた])

S3([CL1 彼女 i -は また [非人称的な気の用法が分裂病者の言葉に
SS-DS

類似している]-と指摘した])

S4(なお [CL1 [センターで私の話をきいた]-小グループの中には その後
[サンフランシスコ・カレッジの学長として学生騒動弾圧に勇名をとどろか
した]REL-意味論の学者ハヤカワ j -がいたが]

[CL2 彼 j -は カナダ生まれの日本人二世であるにも拘らず]

[CL3 ϕ_j 日本語をほとんど知らず]

[CL4 したがって ϕ_j [私のあげた]-どの言葉も 知っていなかった])

(土居 J74-77)

「DS-SS」の指示性をもつ第 1 項の例は、(122) のような場合である。

(122) S1([CL1 水戸黄門 i -は とぎれコマーシャルになる])

¹⁰⁸ 「音-だろう-と-いう-こと-だつ-た」は形態的には「N-MOD-CMPL-say-NMZ-COP-PAST」となるが、「MOD」以下をまとめて伝聞の機能語として分類している。

S2([CL1 [ふたたびドラマがはじまる]-のを [CL2 階段の壁にはりつて]
葵_j-は 待った])

DS-SS

S3([CL1 φ_j [音を たてないように] 鍵を まわす]) (角田 J107-109)

以上のように、主節の第 1 項の同一指示性を 1)「SS-SS」(両方向に SS)、2)「SS-DS」(前方のみ SS)、3)「DS-SS」(後方のみ SS)、4)「DS-DS」(両方向に DS)で分類し、形式との関係を調べてみた。表 42 がその結果である。

両方向に同一指示の「SS-SS」と前方向のみに同一指示の「SS-DS」は、7 割以上が省略形式で現れている。同じ指示対象が文を超えて連続する場合は、省略形式が好まれ、次の文で異なる指示対象が来ることになっても省略形式のままで現れることが多い。いわゆる、主題連続は省略されやすいという前方照応指向を示している。また、前方は「DS」でも後方照応が「SS」の場合も、省略項の頻度が高い。一方、両方向に非同一指示の「DS-DS」では、省略形式よりも語彙形式で現れることが多い。これは、主要な指示対象が変わる、つまり、主題が変換する場合には、意味と形式が明確な 1 対 1 関係を持つ語彙形式の方が好まれることを示している。この結果は、隣接節間、やや広い参照領域の時と同様、カイ 2 乗検定でも有意差が認められ、「同一指示」と省略形式には相関関係が認められた。

表 42 主節間の交替指示

形式	SS-SS		SS-DS		DS-SS		DS-DS		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	56	73.7%	72	77.4%	50	58.1%	145	38.1%	323	50.8%
語彙	7	9.2%	14	15.1%	28	32.6%	174	45.7%	223	35.1%
代名詞	12	15.8%	6	6.5%	7	8.1%	9	2.4%	34	5.3%
その他	1	1.3%	1	1.1%	1	1.2%	53	13.9%	56	8.8%
合計	76	100.0%	93	100.0%	86	100.0%	381	100.0%	636 ¹⁰⁹	100.0%

$$\chi^2=122.8, \text{ pf}=9, p<.001$$

しかし、興味深い点が 2 点ある。まず、「DS-SS」において、語彙形式よりも省略が好

¹⁰⁹ 主節の総数は 637 節であるが、1 例は出だしに当たり、前方指示が確定できないため分類から除いた。よって 636 例の主節を分析対象とした。

まれる点、そして、両方向に非同一指示「DS-DS」にも関わらず、省略形式で出現している度数が 145 例もあり、省略形式の中で度数が最も高い点である。

「DS-SS」ということは、第 1 項とは異なるものを談話に導入し、次に続けるということが期待され、(122) のように「水戸黄門」→「葵」→「 ϕ (=葵)」と連続し「葵」という語彙形式で導入されることが期待される。しかし、このような場合は、28 例 (32.6%) に留まり、省略形式はその 2 倍の頻度で現れている。具体的には (123) のような場合で、

(123) S1(冬空の下で[色を失った]_{REL}-枯れ草_i-が うなだれているだけだった)

S2([_{CL1} ϕ_j 夏休みに入る前に] [_{CL2} [ここでナオコと投げ捨てた]_{REL}-アイスクリーム
のビニールパックでもいいから ϕ_k 目にしたくて] [_{CL3} ずいぶん長いこと ϕ_k 草むらを
捜し続けたが] [_{CL4} [見覚えのない]_{REL}-焼酎の空き瓶や黄ばんだ新聞紙しか
 ϕ_k 見つけることはできなかった])

S3(ϕ_k 家に帰ると [もっと遅くに戻るはず]_{REL} -の-母_i-が いた])

(角田 J146-148)

3 文 (S1-S3) の主節の第 1 項は、「枯れ草」→「 ϕ_k (S2 CL4)」→「母」と連続している。そのうち、2 文目の第 1 項「 ϕ_k (S2 CL4)」は、前方・後方共に「DS」に関わらず、省略項として現れている。「DS-DS」で省略形式の 145 例のパラメーターをもう少し絞ってみると、(126) の第 1 項「 ϕ_k (S2 CL4)」のように、広い参照領域では非同一指示でも、狭い隣接節間で同一指示の場合は、71 例 (48.96%) と約半分であった。このような場合の意味属性を確認してみると、有生/人間が 85 例 (58.6%) で半分以上を占めていた。この結果は、広い参照領域で同一指示性を保てなくとも、隣接で同一指示を維持したり、あるいは、有生/人間という意味的属性で同一指示を保持して、省略形式という情報の欠陥を補完しているといえるのではないだろうか。

4.5.4 交替指示のまとめ

交替指示の概念に倣い、談話内の第 1 項が参照領域の範囲の違いで同一指示性と形式にどのような関連があるかを確認した。狭い参照領域の隣接節間、中間的参照領域、広い参照領域の文間の 3 つの範囲で共通して確認できたのは、「SS-SS」は省略傾向で、「DS-DS」は語彙名詞に偏向していることだった。また、「DS-DS」で前方・後方どちらにも同一指示の触手を伸ばせない場合であっても、有生/人間の場合は省略形式として現れることが可

能であることが確認できた。

節を連続して談話を構成していくとき、第 1 項にどのような同一性をもったものを置いて節を連続しているかを確認してきた。前方・後方の両方に同一指示の触手を伸ばすか、あるいは、前方・後方のどちらか一方に同一指示の触手を伸ばすかして同一指示を維持する場合が無標で、その際に好まれる形式は、省略形式であった。第 1 項の省略形式は、透明な接着材がブロック塀の欠損した箇所を補うように、前後の節を接着する働きをしているのではないかと考える。

4.6 省略項と述語の形態

4.5 節までは出来事を記述する骨格となる「指示 (reference) と叙述 (predication)」のうち「指示」側の情報を中心に考察を進めてきた。ここからは「叙述」機能を持つ述語側の情報に着目し項省略との関連を検証していきたい。第 1 項の決定に関与する述語の統語的・意味的情報については、3.5 項で述べたが再度確認しておく。

(124) (=36) 統語的情報

- a. 自動詞構文 b. 他動詞構文 c. 受身構文 d. 使役構文 e. 形容詞文 f. 存在文
意味的情報
g. 移動動詞 h. 所有表現 i. 知覚動詞 j. 伝達・思考動詞
k. 所有者変更の動詞 l. 補助動詞「てやる／てもらう／てくれる」表現
m. 意向・希望表現 n. 可能表現

4.3.1 項から 4.3.3 項で統語的情報の「a. 自動詞構文」「b. 他動詞構文」「c. 受身構文」に関して検証を行った。ここからは残りの「d. 使役構文」から「n. 可能表現」までの述語情報を見ていく。

4.6.1 使役構文

日本語の使役構文には、迂言的使役動詞と語彙的使役動詞の 2 種類がある。前者は使役形態素「-seru」「-saseru」がついた使役形で、¹¹⁰ 後者は語幹と使役形態素を明確に分け

¹¹⁰ 「立つ (tat-u) – 立たせる (tat.a-seru) 」

られないが、使役的意味をもち形式的に自動詞と対応する他動詞¹¹¹ がある場合である（寺村 1982 等）。¹¹² 本研究のデータでは (125a) のような迂言的使役動詞は 22 例確認でき、(125b) のような語彙的使役動詞は 10 例であった。使役表現には (125c) のような迂言的使役受身や (125d) のような語彙的使役動詞の使役受身 4 例も含まれている。

(125) a. [CL1 むしろ無意識も加わって]

[CL2 [ϕ_i 私-に それ-を 準備-させ-た-と-いう]REL-ほう-が
prepare-CAUS-PAST-CMPL-say-REL

正確だけれど]… (大江 J33)

b. [CL1 ϕ_i 全速力で階段を駆け上がり]

[CL2 ϕ_i 見覚えのあるドアのわきのインタホン-を
たてつづけに 鳴らし-た]

ring.CAUS-PAST (角田 J122)

c. [CL1 毎日のように検査があり]

[CL2 ϕ_i 面接のようなもの-を 受け-させ-られ-た]

have-CAUS-PASS-PAST (角田 J42)

d. 石田梅岩-は落ちこぼれの暗い境遇-に 立たさ-れ-てい-た-のである

stand.CAUS-PASS-ASP-PAST-MOD

(堺屋 J39)

以上のような使役表現 32 例に関して第 1 項の形式と意味を調べてみた。表 43 がその結果である。使役表現の母数が少ないという理由もあるかもしれないが、カイ 2 乗検定での有意差は認められなかった。しかし、使役表現での第 1 項の意味属性は「有生」が 78.1% (32 例中 25 例) と 8 割近い出現率である。有生へのバイアスは明示的と考える。また、「使役・省略・有生」の組み合わせは全体の 50% (32 例中 16 例) に当たり、他の組み合わせに比べ非常に高い頻度である。本研究のデータにおいて、談話内で使役表現を使う場合に

¹¹¹ 「寝る(ne-ru) –寝かす(nekas-u) 」

¹¹² 高見 (2007) では「割れる」に対する「割る」も語彙的使役動詞としているが、ここでは「-a/-o -su」の形態素が含まれているもののみを対象とする。また、次の「色あせる」のように「自動詞(色あす) + 使役接辞」の形で自動詞として語形成されているものは除く。

桑畑は 黄色く 色あせている

(角田 J9)

使役表現の多様性については、早津 (2003) 等を参考にした。

好まれる組み合わせは (126b) のような「省略・有生」であり、(126a) のような「語彙・無生」ではなかった。また、使役表現の第 1 項が「省略・有生」の場合、復元先の指示対象が同一文以外(例えば(126b)は 4 文前) の例が 5 例確認できた。使用頻度が高い「省略・有生」の場合では復元先が近接していなくても問題ないようである。

(126) a. [CL1 その 4 年目 富士山が大爆発]

[CL2 その-噴煙-は 江戸にまで 灰-を

LEX(InA)-NOM

LEX-ACC

降ら-せ-た]

fall-CAUS-PAST (堺屋 J24)

b. S1 (債務者_i 本人-に 対する脅しや暴力行為も 多く しかし やられた方には
「借金」という負目があるものだからなかなか表面化しにくい)

S2~S4

S5 ([CL1 ϕ_i 逃げていった先で落ち着き]

(Ani)

[CL2 ϕ_i 子供-を 学校-に 通わ-せ-たり]

go-CAUS-or

[CL3 ϕ_i 新しい勤め先を見つけて] [CL4 ϕ_i 就職したりするために]

[CL5 ϕ_i もとの場所から住民票-を 動かす]

(Ani)

move.CAUS

(宮部 J63, 67)

表 43 使役構文の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	16	64.0%	4	57.1%	20	62.5%
語彙	8	32.0%	2	28.6%	10	31.3%
代名詞	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	1	4.0%	1	14.3%	2	6.3%
合計	25	100.0%	7	100.0%	32	100.0%

本来、使役構文は必須項を 1 つ増やし最低でも 2 つの必須項が前提とされるのだが、本

研究のデータでは、(126a) CL2 のように必須項が 2 つ具現化するのはわずか 7 例¹¹³ で、残りはすべて必須項の数が「0」か「1」（例えば(126a)）であった。(127) の CL3 は必須項「0」の場合である。「避難させる」使役者である第 1 項、「避難する」被使役者の第 2 項、両者もと具現化していない。本来、使役構文は他動化現象であるはずだが、日本語では自動化 (de-transitive) になっていると考えられる。

(127) [CL1[もし上り列車が来れば 下り線に渡り 下り列車が来れば 上り線に移る]-計画で 上り線と下り線に分れ] [CL2 いざ列車が来たという際は]
[CL3 一方 ϕ_i が 手を引張って] [CL3 ϕ_i ϕ_j 避難さ-せる-ことにした]

N1 N2 evacuate-CAUS-MOD (井伏 J47)

「0」と「1」の必須項の数が多いということは、必須項の数を増やすという本来の使役構文の働きとは逆で、必須項を減らしているということになる。では、必須項が減っている一方で、音声形式として残っている項はどんなものなのだろうか。使役構文はどの項を具現化し際立たせようとしているのだろうか。本データの 32 例の使役構文を再度詳しく検証したところ、「ヲ格」を伴った第 2 項が語彙名詞で具現化される頻度が最も高かった (26 例)。使役構文において語彙名詞を使って明示的に情報提供しようとしているのは、第 1 項ではなく第 2 項と考えられる。

本データの使役構文の分量は 32 例と少なく、構文の特性を指摘するには不十分かもしれないが、第 1 項と第 2 項の形式と意味の傾向を提示できたと思われる。第 1 項は「有生」という意味への偏向を示し¹¹⁴、第 2 項は「語彙」という形式への偏向を示すと考えられる。

4.6.2 形容詞文

叙述機能を主に担っているの「動詞」というカテゴリーだが、テンスなどの形態変化を持つ日本語の「形容詞」は動詞寄りの働きをするが推測できる。そこで、形容詞も名詞句の指示対象の識別機能をもった「述語の情報」とみなし分析項目に加えた。形態と意味に

¹¹³ 必須項「3」の例はなく、必須項「2」の 7 例の場合でも、その内 4 例は次のような慣用的表現であった。

それにひきかえアメリカ人-は 主な御馳走については 有無-を いわ-せ-ず…
yes or no-ACC say-CAUS-NEG
(土居 J33)

¹¹⁴ 有生 25 例を母数でカイ 2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2=26.3$, $f=3$, $p<.001$)。

注目して細かなアノテーションを行っている。形態の違いは (128a) CL1 の「イ形容詞」、(128b) の「ナ形容詞」、そして意味の違いは (128c) の感情を表す形容詞か否かという区別である。

- (128) a. [CL1 宝永時代には まだ 旅館や飲食店-が 少なかった-ので]
hotels and restaurants-NOM イ Adj-PAST-because
[CL2 大混乱を生んだ] (堺屋 J28)
- b. 私-は [まさにそれ故に この事実-は 重大である]-と 考えた
this fact-NOM ナ Adj)-CMPL (土居 J66)
- c. [CL1 ϕ_i 千鶴子にそう言われて]
[CL2 [ϕ_i 面白く-なかった]REL-覚え-が ある]
(N1) Adj (EM)-NEG-PAST-REL-rememberance-NOM (宮部 J103)

分析結果は表 44 の通りである。形容詞文において形式と有生性の間にはカイ 2 乗検定で有意差は認められなかった。しかし、第 1 項の意味的属性は「無生」が 75.9% (83 例中 63 例) にも上り無標の意味的属性と考えられる。形容詞の働きは人・物の形状や気持ちを記述することで、その記述対象は人でも物でもどちらでも良いはずであるが、書き言葉を対象とした本研究のデータでは、形容詞の使用は「無生」つまり有生／人間ではない方向に偏っているという結果が得られた。

表 44 形容詞文の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	8	40.0%	24	38.1%	32	38.6%
語彙	9	45.0%	29	46.0%	38	45.8%
代名詞	3	15.0%	0	0.0%	3	3.6%
その他	0	0.0%	10	15.9%	10	12.0%
合計	20	100.0%	63	100.0%	83	100.0%

ただ、(128c) のような「感情形容詞」9 例のうち 8 例までが「有生」項で現れ、「無生」と分類されたのは (129) の名詞化辞のみであった。このことから、「有生」と「感情形容詞」の関連性の強さが伺える。

- (129) [CL1 この店はかなり有名な呉服屋だったが] [CL2 [1 2, 1 3 歳の丁稚たちと同じ
ような 修行-を する]-の-は 相当に 苦しかつ-た-はずだ]

training-ACC do-NMZ-TOP hard (Adj)-PAST-MOD (堺屋 J28)

形容詞表現全体では第 1 項は「無生」の場合が多かった。ここで考えられるのは、形容を判断する者と形容される対象との対峙的な関係である。形容詞の使用で出来事を記述する場合、その指示対象について何らかの判断が行われるはずである（「大きい」なり「小さい」なり）。その際、判断を下すことができるのは人間で、その多くは、自分か主人公などの可能性が高い。すると必然的に、判断する側と対峙する形容される側は、人間以外・1 人称や主人公以外の者や物が多くなると考えられる。形容を判断する側は出来事の外に置かれやくす、形容される第 1 項が具現化されやすくなり「無生」と結びつきを強めるのではないだろうか。

本データの形容詞文は使役構文同様 83 例と少なく、形容詞文の特徴を指摘するには量的に不十分かもしれない。しかし、形容詞文の第 1 項は「有生」よりも「無生」との結びつきが好まれている事実、そして感情形容詞が「有生」と共起しやすいことが確認できたことは強調しておきたい。

4.6.3 存在文

日本語の存在文「N がある」「N がいる」は、一般的に、述語形態の違いが存在物の有生性の違いを示している。存在を表す述語の形態が名詞句の指示対象の有生性の弁別に直結していると言われており、指示対象の識別の重要な指標である。この日本語の特徴的な有生性の識別方法が、名詞句の形式識別にまで関与しているかどうかを本研究のデータを使い確認してみた。

まず、「ある」と「いる」の形態が本当に有生性に直結しているのかを確認してみた。本研究のデータでは、(130a) のような「いる」は 36 例あり、すべてが有生であった。それに対し、「ある」は 74 例中 63 例が無生であり、「ある」と無生の関連性の強さは提示された。しかし、(130b) のような有生の第 1 項と共起する例もあり (11 例)、「ある」は「いる」ほどの強制力がないという結果になった。「ある」と「いる」の形態は、有生性識別の「ものさし」として有効に機能しているが、その制限力に差があると言える。

(130) a. [CL1[ナオコ-が どこに いる]-の-か 知らないまま]

N1(Ani)-NOM EXI-NMZ-INT

[CL2父のタクシーに家族三人乗りこんで] [CL3 家に帰ってきた] (角田 J41)

b. [CL1 そうでなくても ϕ_i 異郷に あれ-ば]

(N1,Ani) EXI-CONJ

[CL2 ϕ_i 心細くなるものだが] [CL3 私は一層心細い気持ちで最初のアメリカ生活を送っていたのである] (土居 J41)

「いる」と「ある」の形態はその制限力に差がありながらも、指示対象の有生性を規定しているのは明確である。そこで、名詞の有生性を識別する能力を持った存在形式が、名詞句側の形式決定に関与しているかどうかを確認してみた。

表 45 が第 1 項の形式と存在文と分析結果である。この結果のカイ 2 乗値 ($\chi^2=12.5$) は、有意確率.001 で有意差は認められなかった。「いる／ある」は、指示対象の有生性には積極的に関わっているが、「省略／語彙形式」の識別関与は断定できなかった。しかし、語彙名詞方向へのバイアスは確認できた。「有生・語彙名詞」は 22 例 58.3% で無生の約 2 倍、そして「無生・語彙名詞」は 61 例 82.4% で無生の約 10 倍で現れている。存在文の第 1 項は、有生・無生の両方の意味的属性において、語彙名詞の頻度が高いことが確認できた。

表 45 存在文の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	12	33.3%	6	8.1%	18	16.4%
語彙	21	58.3%	61	82.4%	82	74.5%
代名詞	2	5.6%	2	2.7%	4	3.6%
その他	1	2.8%	5	6.8%	6	5.5%
合計	36	100.0%	74	100.0%	110	100.0%

n.s. $\chi^2=12.5$, $p<.001$

4.6.4 移動動詞

前項までは述語の統語的側面を中心に分析したが、ここからは述語の意味的側面に着目して第 1 項の指示対象の識別との関与を考察していく。まず、着目したのは (131) よう

な移動動詞である。

- (131) a. [CL₁ 渡辺と高丸_i-は 蘆田川の溪流に沿う坂道-を 二時間あまり歩いて-下り]
 walk down
 [CL₂ φ_i 魚断淵というところまで 行く-と]
 go-CONJ
 [CL₃ 木炭動力の空きトラック-が 来た-ので…]
 N1(InA)-NOM come-CONJ (井伏 J17)
- b. [CL₁ だからこうして彼女も利用したかもしれない東北新幹線の振動-に
 φ_i 身-を 任せながら]
 [CL₂ φ_i(=3) 宇都宮に 向かっ-てゆく]
 leave for-go (宮部 J116)

移動動詞には、(131a) CL₂ の「行く」や CL₃ の「来る」のような直示的動詞を含め、(131b) CL₂ の「向かっ-てゆく」のように移動動詞と直示的動詞の複合的な動詞表現も含まれる。このような移動動詞が第 1 項の形式と有生性の決定に関与しているかどうかを検証してみた。その結果は、表 46 の通りである。

表 46 移動動詞の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	71	68.3%	19	43.2%	90	60.8%
語彙	24	23.1%	24	54.5%	48	32.4%
代名詞	9	8.7%	0	0.0%	9	6.1%
その他	0	0.0%	1	2.3%	1	0.7%
合計	104	100.0%	44	100.0%	148	100.0%

$$\chi^2=18.8, \text{ pf}=3, \text{ p}<.001$$

移動動詞の第 1 項 148 例のうち約 7 割が「有生」で、「有生・省略」(例えば (131b) CL₂ や (132a) CL₁) が最も頻度が高い(71 例 68.3%)。それに対し「無生」は「語彙名詞」で現れる場合が 5 割強 (例えば (131a) CL₃ や (132b) CL₁) であるが、度数は「有生・語彙名詞」と変わらない。移動動詞の第 1 項の「有生・省略」が典型的な組み合わせと考え

られる。この結果は、統計的にも支持された (χ^2 値 = 18.8)。

- (132) a. [CL1 ϕ_i (=渡辺と高丸) 線路へ 出て-みる-と]
(N1.Ani) go out-try to-CONJ
[CL2 西の方の郷分という部落や備後赤坂駅の方に燈が見えた] (井伏 J43)
- b. [CL1 真夜中ごろ 六十機の B29-が やって来て] [CL2 福山市街の周辺の岡に
N1.InA-NOM come
無数の照明弾を落し] [CL3 次に本格的な波状攻撃という爆撃に移った]
(井伏 J23)

第 1 項の形式・意味の決定に移動動詞が関与していることを見たが、次に、直示的移動動詞が「てくる／ていく」のような機能語として使われている場合を確認してみる。自動詞語幹に接続する場合は 37 例 (例えば (133a))、他動詞語幹に接続する場合は 22 例確認できた (例えば (133b))。

- (133) a. [CL1 ϕ_i (=葵) 戻って-きて-から] [CL2 だれかしらが家にいる] (角田 J11)
(S) return (vi)-come-CONJ
- b. [CL1 足の裏が切りつけられたように痛み]
[CL2 [ϕ 靴下-を はいて-こ-なかつ-た]-こと-に 気づいた]
(A) socks-ACC put on (vt)-come-NEG-PAST-NMZ-DAT
(角田 J141)

補助動詞「てくる／ていく」は、本動詞と同様に有生性に識別力があるのではないかと推測し確認してみた。「自動詞＋てくる／ていく」は 37 例確認でき、そのうち 25 例 (67.6%) が「有生」で現れた。「自動詞＋てくる／ていく」は第 1 項の有生性の決定に関与している可能性が高いと考えられる。さらに「他動詞＋てくる／ていく」を見てみると、22 例すべてが有生であった。語幹の動詞の自他に関わらず補助動詞「てくる／ていく」は第 1 項の有生性に関与していると考えられる。

移動動詞は、第 1 項の形式・意味の両者を識別することに関与し、移動動詞が補助動詞「てくる／ていく」として使われる場合は、第 1 項の意味の識別に関与していることが確認できた。

4.6.5 所有表現

第 1 項の指示対象を識別する述語の情報として、次に着目したのは「所有表現」である。
(134a) のような具体的なものから (134b) のような抽象的なものまでを所有する「所有表現」に加え、(134c) のような「存在文」形式¹¹⁵ の「所有表現」も分析対象とした。

- (134) a. [CL1[ϕ_i 同年代の子供-を 持つ-ている]REL-おっさん $_i$ -連中-ばかり-が
(A) LEX (Ani)-ACC have-ASP-REL-man-pl-only-NOM
常連客だから] [CL2 みんなにかわいがられていた] (宮部 J42)
- b. [CL1 [たとえこの陳腐な記事を鵜呑みにしない]REL-賢い人 $_i$ -がいたとしても]
[CL2 ϕ_i そういう-印象-は 持つ-だろう]
(A) such-LEX (InA)-TOP have-MOD (角田 J92)
- c. [CL3[行くべき]REL 場所-が 葵-に-は もう ない]
LEX (InA)-NOM LEX(Ani)-DAT-TOP EXIS.NEG
(角田 J13)

分析の結果は表 47 のようになり、カイ 2 乗検定では有意差を示す結果は得られなかった。¹¹⁶「所有」という意味的情報が第 1 項の形式・意味の識別に関与しているとは明言できない結果となった。しかし、総例数 20 例のうち 12 例が「有生・省略」であることを考えると、次のような指摘ができるのではないだろうか。「所有表現」は、何等かの恩恵を得てその所有物を手に入れた、その結果や状態を表現しており、第 1 項は受益者 (benefactive)¹¹⁷ と考えられている。本研究のデータでは、所有表現の受益者が全体の半分以上が「有生・省略」で現れていることを考慮すると、統計的有意差を示す結果は明示できないものの「有生・省略」への偏向は明らかと考えられ、「所有表現」と有生性の関連性は指摘でき

¹¹⁵ 「存在文」形式で意味が「所有」の場合は 3 例で、すべて「有生・語彙形式」であった。この「存在文」形式を除いた 17 例だけを対象に再分析をした結果、 $\chi^2=8.74$ 、 p 値 <0.05 という有意差を示す結果が得られた。

¹¹⁶ χ^2 値は 4.1 である。

¹¹⁷ Chafe (1970:147) は、「Tom got the ticket.」の文において、「Tom」とそれ以外の部分で伝達されている情報は、恩恵を受けている受益者 (benefactive) 「Tom」とその恩恵の状態・過程・行為を表している関係にあると述べている。受益者は次の 3 つに分類されている。

- a) 状態、恩恵：have, own など
- b) 過程、恩恵：loose, win など
- c) 過程、行為、恩恵：buy, send など

ると考える。¹¹⁸

表 47 所有表現の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	12	80.0%	2	40.0%	14	70.0%
語彙	3	20.0%	2	40.0%	5	25.0%
代名詞	0	0.0%	1	20.0%	1	5.0%
合計	15	100.0%	5	100.0%	20	100.0%

「所有表現」と第 1 項の形式・意味の識別の關係に統計的な結果を明示することはできなかったが、所有の対象である第 2 項に目を向けて詳しく考察すると、興味深いことが観察できた。20 例の「所有表現」のうち第 2 項が有生なのは、(134a) 1 例のみで、他はすべて無生であった。そして、省略項はその内 2 例のみで、あとはすべて語彙形式であった。検証例が 20 例と少ないため一般化は困難だが、「所有表現」では所有対象である第 2 項は「無生・語彙名詞」が無標で、構文の中心的役割を果たしていると考えられる。所有表現の第 1 項と第 2 項の形式・意味の関連性をみると、第 2 項にコード化される所有物が一次的に識別され構文の中心的存在として機能しているのではないだろうか。第 1 項にコード化される所有者は第 2 項の「無生」に対立するものとして類推で二次的に「有生」と識別されるのではないかと考える。

4.6.6 知覚動詞

前項に続き、ここでも第 1 項の指示対象の識別と述語の意味情報の関連性を検証していく。この項では (135) のような知覚動詞と項の形式の結果を示していきたい。知覚動詞の他に (136) のような認知的な動詞も加えている。

- (135) a. [CL1 [泉水のほとりに 酢瓶-が 立っている]REL-の-も ϕ
(3)

¹¹⁸ 有生 15 例を母数にして、カイ 2 乗検定を行ったところ、形式との間に有意差が認められた ($\chi^2=15.6$, $f=2$, $p<.001$)。

見-た-そうだ

see(PERC)-PAST-MOD

(井伏 J74)

- b. [彼女に成り代わった]_{REL}-偽の彰子-は [彼女のなかに その「何か」が

LEX (Ani)-TOP

あった]_{REL}-こと-を 知っ-てい-た-ろう-か

know (PERC)-ASP-PAST-MOD-INT

(宮部 J89)

- c. [CL₁ 子供の頃 いつも そうしていたように]

[CL₂ なんとなく 抱えていた使い古しの毛布で 膝を 覆うと]

[CL₃ イーヨーのベッドの裾の床に座り込み]

[CL₄ [人間の肺の規模を こしているような]_{REL}-音の寝息-を ϕ

(1)

聞い-てい-た

hear (PERC)-ASP-PAST

(大江 J48)

- d. しかし 私-は [自分の直面している]_{REL}-困難-が [単なる語学的な障壁に

PRO(1)-TOP

留まらない]_{REL}-こと-を 当時すでに うすうすと 感じ-始め-てい-た-のである

feel (PERC)-begin-ASP-PAST-MOD

(土居 J19)

- e. [CL₁ 戦後間のなくの頃とて 私 _i-は まずアメリカの豊富な物資に目を奪われ]

[CL₂ また [明るく自由に振舞う]_{REL}-アメリカ人-に深く ϕ _i

(1)

関心し-た-ものである

feel admiration for (PERC)-PAST-MOD

(土居 J4)

- e. [CL₁ 私 _i-が 以上の講演を 行った時]

[CL₂ [[「甘える」という言葉に含蓄される]_{REL}-独特の意味-について

どれほど ϕ _i 気付い-てい-た]-か 今でははっきりとした

(1) notice (PERC)-ASP-PAST-INT

記憶が残っていない]

(土居 J62)

- (136) a. [[頭痛持ちだった]_{REL}-千鶴子-が ときどき そうやって こめかみを

叩いていた]REL-こと-を ϕ ちゃんと 覚え-ている-のである

(3) remember-ASP-MOD

(宮部 J94)

b. [CL1 私 i -は 当時 東京大学医学部の精神医学教室にいたが]

[CL2 ある日 教室主任の内村裕之教授と 座談していて]

[CL3 [「甘える」という言葉-は どうも 日本語独特のものらしい]-と
のべた]REL-こと-を ϕ_i 憶え-ている

(1) remember-ASP (土居 J64)

c. [CL1 [碓の言っている]REL-こと-は ϕ よく わかつ-た-し]

(1) understand-PAST-CONJ

[CL2 おそらく正しいのだろう] (宮部 J47)

分析結果は、表 48 の通りである。第 1 項が「無生」の場合は 116 例中わずか 1 例 (137) しかなく、述語の語幹に受動態の形態素が付与されている場合であった。残り 115 例はすべて「有生」であり、省略形式が 8 割近くを占めている。第 1 項の形式と意味の識別に関して知覚動詞は大きく関与していることがわかる。実際にこの結果は、有意水準 5% のカイ 2 乗値 ($\chi^2=6.3$) で有意差が認められた。

表 48 知覚動詞の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	90	78.3%	0	0.0%	90	77.6%
語彙	15	13.0%	1	100.0%	16	13.8%
代名詞	10	8.7%	0	0.0%	10	8.6%
合計	115	100.0%	1	100.0%	116	100.0%

$\chi^2=6.3$ 、pf=2、 $p<.05$

(137) [CL1 このような-傾向-は実は 精神医学-に限らず 他の専門分野-に-も 見-られ]
see-PASS

[CL2 私は常々それを奇異なことに思っていたのであるが]… (土居 J54)

知覚動詞や認知的動詞の第 1 項は Chafe (1970) の名詞分類の経験者 (experiencer)

¹¹⁹ に該当する。「省略・有生」という形式・意味的属性は経験者を識別するのに有効に機能していると考えられる。

4.6.7 伝達・思考動詞

次に検証する述語は、伝達動詞と思考動詞である。目的語に補文を伴う伝達動詞 (138) や思考動詞 (139) について第 1 項との関係を検証した。

- (138) a. [CL₁本間 _i-は 笑って聞いていたが] [CL₂ [一緒にいた]REL-礎 _j-が そんな
CL-REL-LEX-NOM

ことをするのは田舎者だけだ-と 言っ-た-ものだから]

CL-CMPL say (COMU)-PAST-CONJ

[CL₃彼女 _k-はつまらなさそうに口をつぐんでしまった] (宮部 J44)

- b. [CL₁もし 相手-が 日本人 _i-ならば] [CL₂ φ_i 大体初対面の人-に
(3)

ぶしつけに [お腹がすいている]-か-など 聞く-こと-は-せず]…

CL-INT-like ask (COMU)-NMZ-TOP-NEG

(土居 J10)

- (139) a. [CL₁気がついて開いた目に飛び込んできたのは白い色で] [CL₂ [べつの場合
所にすることができた-の-か]-と 一瞬 葵-は 思っ-た]

CL-CMPL LEX-TOP think-PAST (角田 J17)

- b. [彼女の名前を盗んだ女-も まさにその目的のために … この新幹線に
乗り飛びすぎてゆく町並みを眺めたことがあったかもしれない]-と

CL-CMPL

本間-は 考える

LEX-TOP think (宮部 J117)

伝達・思考表現では伝達・思考内容を補文で表すが、(140) のように補文を持たない場合もあり、これらも分析対象にしている。

¹¹⁹ Chafe (1970:145) によると、経験者 (experiencer) とは、”(someone) is and experience, one whose mental disposition or mental processes were affected” と定義され、心的経験を受けた人物のことである。アスペクトとの組み合わせで、状態で経験的な動詞 (want, know, like) と過程で経験的な動詞 (see, hear, feel) に下位分類される。

- (140) a. [CL1 ϕ_i 先述した小栗了雲について修行し][CL2 ϕ_i とうとう
独自の-もの-を 考えつい-た-のである
original-thing-ACC come up with an idea-PAST-MOD (堺屋 J62)
- b. [CL1 この男 i -は 一箇月前に福山市へ疎開して来たが]
[CL2 ϕ_i 焼け出された-と云って]
[CL3 ϕ_i 空襲のとき-の-様子-を 話し-てくれ-た]
an air raid of-the state of affairs-ACC talk-give-PAST (井伏 J22)
- c. [CL1 ϕ_i (=父と母と祖母) あいかわらず 何-も 訊か-ない-し]
QNT-too ask(COMU)-NEG-CONJ
[CL2 ϕ_i ナオコのことについても 触れない] (角田 J71)

以上のような伝達・思考動詞が、第1項の指示対象の識別に関与しているかどうか確認したところ、表 49・50 の結果が得られた。

伝達・思考動詞どちらにおいても「無生」の第1項が現れることはほとんどなく、伝達動詞の場合は (141a) が唯一の無生第1項の例で、名詞修飾節という構造的な影響が大きい。また、思考動詞の第1項が無生の場合は (141b) の省略が1例のみと、(141c) のような語彙が3例のみ確認できた。

- (141) a. それ-は [ϕ_i 一般に 文化的な衝撃 (cultural shock) -と いわ-れる]_{REL-}
(InA) say-PASS
もの i -を 私-が 体験した-こと-に 関係-がある (土居 J2)
- b. [CL1 そこかしこにいる骨探しの人たちがお尻を立てて前かがみになっている
かと思うと] [CL2 不意に腰をのばし]
[CL3 また前かがみになったりして]
[CL4 ϕ_i ¹²⁰ 潮干狩り-の-光景-を ϕ_j (=1) 思わ-せ-た]
(InA) seashell-digging-of-sight-ACC (N3) think-CAUS-PAST
(井伏 J97)

¹²⁰ この省略項「 Φ 」は具体的な語彙で指示対象を復元することはできず、あえて復元すると「前節 (CL1~CL2) の光景」といった具合になる。「第1項・省略・無生・思考動詞」の組み合わせは、かなり特異な環境で現れるといえよう。

c. [CL1 この-こと-は 精神科医として当然な-こと-と 思わ-れる¹²¹-

this-thing (LEX)-TOP

natural-thing-CMPL think-PASS-

かもしれない-が] [CL2 実は当然ではなかったのである]

MOD-CONJ

(土居 J50)

表 49 伝達動詞の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	61	64.9%	1	100.0%	62	65.3%
語彙	25	26.6%	0	0.0%	25	26.3%
代名詞	5	5.3%	0	0.0%	5	5.3%
その他	3	3.2%	0	0.0%	3	3.2%
合計	94	100.0%	1	100.0%	95	100.0%

表 50 思考動詞の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	47	67.1%	1	25.0%	48	64.9%
語彙	12	17.1%	3	75.0%	15	20.3%
代名詞	9	12.9%	0	0.0%	9	12.2%
その他	2	2.9%	0	0.0%	2	2.7%
合計	70	100.0%	4	100.0%	74	100.0%

¹²¹ この「思わ-れる」は、無生の「このこと」を第 1 項とみなすと、受身の接尾辞となるが、「思う」有生の主体を第 1 項とみなすと尊敬の接尾辞となる。前後の文から判断して、ここでは、受身の接尾辞とした。前後の文脈は下に示した。「れる／られる」という 1 つの形式を 2 つの意味が共有していることからくる曖昧性が、解釈に影響を与える。第 1 項が無生ならば「受身」、第 1 項が有生ならば「尊敬」に解釈されやすい。

S1 (そのために私は、彼らがどういう言葉で自分の状態を訴えるかに注目し、またそれをどう記録することが日本語として正確かという点に心を砕いた)

S2 (このことは精神科医 として当然なことと思われるかもしれないが、実は当然ではなかったのである)

S3 (というのは従来日本の医者は、患者の話を聞いてその要点を限られた数のドイツ語で記載することが習慣になっていたからである) (土井 J49-51)

伝達・思考動詞の第1項に関して、形式と意味の対応関係に有意差が認められる χ^2 値は得られなかったが、伝達動詞の第1項は95例中61例(64.2%)が「有生・省略」で、同じく思考動詞も74例中47例(63.5%)が「有生・省略」で現れており、第1項の「有生・省略」と伝達・思考動詞という意味的情報に関連性を認めてもよいのではないと思われる。「第1項＋有生＋省略＋伝達／思考動詞」は基本的で無標な組み合わせと考えられる。

4.6.8 所有者変更の動詞 (Verbs of Change of Possession)

「所有者変更」の動詞とは、日本語の授受動詞「やる／もらう／くれる」に代表される表現で、所有者間を所有物が移動する表現である。Levin (1993 138-144) と寺村 (1982 126-138) を参考にして本研究のデータを検索したところ、「所有者変更」の動詞に該当するのは以下の18種類の語彙であった (142)。¹²²

- (142) Give 系語彙： 「貸す (lend)」 「売る (sell)」 「払う (pay)」 「差し出す (give)」
「示す (show)」 「見せる (show)」¹²³ 「教える (teach)」
- Obtain 系語彙： 「借りる (borrow)」 「買う (buy)」 「取る (get)」
「奪う (take by force)」 「奪い取る (deprive)」
「カツアゲをする (extort)」 「盗む (steal)」 「得る (obtain)」
「受ける (receive)」 「請け負う (contract)」
- Send 系語彙： 「送る (send)」¹²⁴

「教える－教わる」は具体的な物の所有者移動ではないが、「貸す－借りる」と類似した関係と考えられる。同一フレーム内で視点的対義語関係を持ち、抽象的な知的情報の移

¹²² 本研究のデータでは、授受動詞の派生である「てやる／てもらう／てくれる」の例は見受けられたが、本動詞の「やる／もらう／くれる」は見当たらなかった。補助動詞としての授受表現は、次項 4.6.9 で検討する。

¹²³ 寺村 (1982 136-137) は、「示す」「見せる」も「与える」類に含んでおり、本研究もそれに従った。

¹²⁴ 「渡す (send)」の形式を取りながらも、下線部のように意味的に「所有者変更」でない場合は、分析対象外とした。

・橋に沿って川を渡した直径五十センチの水道管もへし折れて、あんぐり口をあけて管のなか奥まで見えていた (井伏 J107)

議を表すと考えられるため「所有者変更の動詞」の対象語彙とした。¹²⁵ 以上、18種類の動詞を対象に第1項の形式と意味との相関を検証したところ表51の結果が得られた。

- (143) a. [CL1ただ ϕ_i 個別に その店と 契約して]
 [CL2 ϕ_i ぼつぼつ ϕ 払っ-てい-た-ような気がする]
 (1) (O) pay-ASP-PAST-MOD (宮部 J19)
- b. [CL1 ϕ_i 弟-の-オーちゃん-の-口癖-を かり-れば]
 (1) brother-of-O-chan-of-favorite phrase-ACC borrow-CONJ
 [CL2 ϕ_i 一応 準備してもおいたのだった] (大江 J32)
- c. [CL1けれど それが 見つかる前に] [CL2 母 i -が すっ飛んできて]
 [CL3 ϕ_i ものすごい勢いで 葵の手-から雑誌-を 奪い-とっ-た]
 (3) LEX-ACC deprive-take-PAST (角田 J58)
- d. [CL1 ϕ_i (=渡辺) その図面を頼りにして] [CL2途中何度も ϕ_i 人に 教わり-ながら] [CL3 ϕ_i 山本駅まで歩き] [CL4そこから ϕ_i 電車で古市に be taught-CONJ
 来て] [CL5 ϕ_i 会社で この家-を 教わっ-た]
 (3) LEX-ACC be taught-PAST (井伏 J70)
- e. [[一瞬泣きそうな顔をした]REL-父-が 次の日 買っ-てき-てくれ-た]REL-
 father(LEX)-NOM buy-te come-te give-PAST
 の-は 青年向けの週刊漫画だった (角田 J61)

¹²⁵ 「教える」は Give 系、「教わる」は Obtain 系に分類した。

無生」の判断に問題がないものの、「語が 扱いを 受ける」という文全体から見ると、かなり擬人的な表現に解釈できる。¹²⁷ 第 1 項が基本の「有生」ではない場合は有生判断が困難な場合や擬人的な場合で特殊なケースといえる。

表 51 所有者変更の動詞の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	30	68.2%	3	50.0%	33	66.0%
語彙	9	20.5%	3	50.0%	12	24.0%
代名詞	4	9.1%	0	0.0%	4	8.0%
その他	1	2.3%	0	0.0%	1	2.0%
合計	44	100.0%	6	100.0%	50	100.0%

- (144) a. [CL1 とりたても 乱暴で] [CL2 先生-も [ϕ_i 債権回収-を
(InA)
請け負っ-た]REL-暴力団 i -に 脅かされたりすることがありました]
contract-PAST-REL-the group of gangstars-DAT (宮部 J62)
- b. S1 (石門心学 i -は この思想を まず根底においている)
Ishimon sect (InA)-TOP
S2 ([CL1 息苦しい生 産への勤勉さではなく] [CL2 それを通しての修行こそ
本旨であるとしたことで]
[CL3 ϕ_i 当時-の-人々-の-納得-を
(InA) that time-of-people-of-understanding-ACC
得-られ-た-のだ]
obtain-POT-PAST-MOD (堺屋 J71-72)
- c. ドイツ語としては 極く 日常的な-語-も ほとんど
usual-word (InA)-too

¹²⁷ 「同然の扱いを受けた」を google で検索したところ、上位 100 件の内、第 1 項が無生の場合は 3 件検出されたが、残り 97 件は有生であった。
スピノザの思想-は 世界から抹消されたも同然の扱いを受けたのである
(<http://philosophy.hix05.com/Spinoza/spinoza01.html>)

学術用語-同然-の-扱い-を

受け-た

technical term-like-of-treatment-ACC receive-PAST

(土居 J52)

所有者変更を表す場合、その述語の情報と第 1 項の指示対象の形式・意味決定の関連性を確認したところ、カイ 2 乗検定での有意差は得られなかった。しかし、無生第 1 項の 6 例は上で述べたようにかなり特殊な場合であり、それ以外の 44 例はすべて有生であることを考えると、「所有者変更」を表す動詞と第 1 項の組み合わせには有生性の制限がかかっていると言える。また、有生の場合 7 割近くが省略項であることを考えると、所有者変更の動詞の第 1 項は「省略・有生」が無標だと考えられる。

第 1 項の「省略・有生」が無標とすると、語彙化は中心的な役割ではないことになる。そのような有標的な振る舞いをした第 1 項 9 例を詳しく見てみると、ある一定の傾向が見られた。

「所有者変更」を表す動詞を使った表現は、元の所有者 A から新しい所有者 B への物移動を意味しており、(146e)「買う」のような Obtain 系の第 1 項は、新しい所有者 B、つまり、物の移動先である。このような新しい所有者 B が、語彙形式で現れたのは 5 例であった。一方、Give 系の第 1 項は元の所有者 A で、物移動の出発点である。このような元の所有者を語彙化した例は (148) を含め 4 例であった。この「Give 系表現・第 1 項・語彙形式・有生」の組み合わせには、すべて補助動詞「テくれる」が後続し、第 3 項の位置の所有者 B がすべて省略項で、意味的属性が 1 人称、あるいは、発話主体指向性 (logophoricity) を持った 3 人称に限られていた。

(145) a. しかし デッド・エンドの実際的な乗り越え方-を

パパ-と-ママ _i-が

ϕ_j

教え-て-は-くれ-ない-でしょう

father-and-mother(3pl)-NOM

(N3,1)

tell-te-TOP-KURE-NEG-MOD

(大江 J27)

b. このような時 [たまたま知りあった]_{REL}-ある-アメリカ婦人 _i-が

CL-REL-one-American lady(3)-NOM

ルース・ベネディクトの「菊と刀」-を

ϕ_j

貸し-てくれ-た

(N3,1) lend-te-KURE-PAST

(土居 J42)

- c. [CL1 この駅-の-中年の-駅員 i -は [CL2 こちら j-が 事情を 話すと]

this station-of-middle age-station master(3)-TOP

広島行きの切符-を ϕ_j 売っ-てくれ-た

(N3,1) sell-te-KURE-PAST (井伏 J52)

- d. [ナオコはどこにいるの]-か 看護婦-たち-も 担当医師-も 面接の女 i-も

nurse-pl-too doctor in charge-too interviewer-too(N1, 3pl)

ϕ_j (=葵) 教え-てくれ-なかつ-た

(3,LOG) tell-te-KURE-NEG-PAST (角田 J44)

述語の情報が「Give 系表現 + てくれる」の場合、第 1 項が「語彙・1 人称または発話主体指向性の指示対象以外」であれば、第 3 項は「省略・1 人称または発話主体指向性の指示対象」という対立が確認できた。分析対象はわずか 4 例だが、1837 節中確認できた「Give 系表現・第 1 項・語彙形式」の 4 例が、例外なく「てくれる・第 3 項・省略・1 人称/発話主体指向性の指示対象」との組み合わせであったことは示唆的だと考える。

「所有者変更」の動詞という述語の情報は、第 1 項の有生性に大きく関与しており、形式は省略に偏っていることがわかった。¹²⁸ また、述語の情報を「Give 系表現 + てくれる」に絞ると、第 3 項と第 1 項の形式と意味に相補的な関係が確認できた。

4.6.9 補助動詞「-てやる／-てもらう／-てくれる」表現

授受動詞「やる／もらう／くれる」¹²⁹ は、新旧所有者の間での所有物移動という方向性を持った出来事を表現する。そこから派生した補助動詞「-てやる／-てもらう／-てくれる」¹³⁰ も、その方向性を引き継ぐ形で、単純な行為動詞に何らかの授受的な意味合いを付随させる働きをすることができる。例えば、(146) の名詞修飾節内の「呼ん-でくれた」を

¹²⁸ 有生 44 例を母数でカイ 2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた($\chi^2=46.7$, $f=3$, $p<.001$)

¹²⁹ 授受表現は、所有者 A から所有者 B への所有物 C の移動という出来事を表現したものである。その出来事の描き方として（いわゆる視点）、A を基準に、C が A を離れることを表現する Give 系（A が B に C をやる）と、B を基準に、C が B に近づいてくることを表現する Obtain 系（A から B が C をもらう）の 2 通りがある。それに加え、日本語には、形式は Give 系（A が B に C を V）を取りながらも、意味的には Obtain 系を表す「くれる」がある。

¹³⁰ 授受補助動詞「-てやる／-てもらう／-てくれる」のグロスは、それぞれ「te.give/ te.obtain/ te.kureru」とした。

見てみると、単なる「呼ん-だ」よりも「呼ん-でくれた」の方が、階段から落ちて亡くなった「お母さん」側の視点が導入され、救急車を呼んだ「若い娘さん」の行為を評価しているような感じが伴う。

- (146) [CL1 彰子ちゃんのお母さん i -が 階段から落ちて死んだとき]
 [CL2[最初に ϕ_j ϕ_i 見つけて][ϕ_j 救急車-を 呼ん-でくれ-た]REL-の-が
 (A) (O) (A) call-te.kureru-PAST
 若い娘さん j -だっ-た] (宮部 J118)

本研究のデータに現れた「-てやる／-てもらう／-てくれる」は 26 例¹³¹で、(147) CL1 の「いまの話」を除いた 25 例が、すべて有生第 1 項であった（例えば (147) CL2 名詞修飾節内の「 ϕ 」）。

- (147) [CL1 いま-の-話-も [私の思い込みが滑稽だ]-と-は 教え-てくれる-けれども]
 now-of-story(InA)-too CL-CMPL-TOP teach-te.kureru-CONJ
 [CL2 私-自身 [[ϕ_i イーヨーと ふたり 受け入れ-てくれる]REL-人 i -は
 (Ani) accept-te.kureru-REL-person-TOP
 いない]-と 思う] (大江 J26)

授受補助動詞を述語に持つ第 1 項 (26 例) の内、25 例 (96.1%) が有生であることから、述語の情報（方向性）が、第 1 項の指示対象の意味決定と何から関連があることが、容易に推測できる。

日本語教育の分野でも、省略を補う文法的手段の 1 つとして授受的補助動詞が挙げられており、人称制限が指摘されている（野田他 2001）。そこで、本データの「-てやる／-てもらう／-てくれる」と第 1 項の人称を確認してみた。結果は表 52 の通りである。それぞれの形式を見て行くと、「-てやる」に該当する例は、(148) 1 例のみで、第 1 項の指示対象「主人」の形式・意味は、「省略・3 人称」に分類される。

- (148) 日本人の感受性-からすると [[CL1 主人 i -は 客 j -を もてなす-に-際し]
 [CL2 かゆい所-に-手-が 届くように][CL3 ϕ_i 相手 j -の-気持ち-を 察して]

¹³¹ 「-てやる／-てもらう／-てくれる」の第 1 項は、省略 14 例、語彙 12 例であった。

- [CL4 ϕ_i ϕ_j 助け-てやる]]REL-の-が 礼儀-である
 (3) help-te.give-REL-NMZ-NOM etiquette-COP (土居 J38)

表 52 授受の補助動詞と人称

形式	発話主体指向性		3 人称		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
V てやる	0	0.0%	1	4.5%	1	4.0%
V てもらう	3	100.0%	0	0.0%	3	12.0%
V てくれる	0	0.0%	21	95.5%	21	84.0%
合計	3	100.0%	22	100.0%	25	100.0%

$\chi^2=25$ 、 $pf=2$ 、 $p<.001$

次に、「-てもらう」を見てみると、「-てやる」同様、出現頻度が非常に低く、(149) の 3 例のみであった。一方、第 1 項の指示対象は、それ自体では「渡辺と高丸」を指し、3 人称複数に当たるが、文脈の中で捉えると、第 2 の主人公ともいふべき話題の人物で、発話主体指向性を持った指示対象と考えられる。

- (149) a. [CL1 渡辺と高丸 i -は 蘆田川の溪流に沿う坂道を二時間あまり歩いて下り]
 [CL2 ϕ_i 魚断淵というところまで行くと]
 [CL3 木炭動力の空きトラック j -が 来たので] [CL4 ϕ_i ϕ_k 頼んで]
 [CL5 ϕ_i 便乗さ-せ-てもらっ-た]
 (3.pl.LOG) ride-CAUS-te.obtain-PAST (井伏 J17)
- b. [CL1 ϕ_i (=渡辺と高丸) 切符-を 売っ-てもら-おう-と-し-た-が]
 (3.pl.LOG) sell-te.obtain-INT-CMPL-do-PAST-CONJ
 [CL2 ϕ_i なかなか 駅員-に 会えないので]
 [CL3 ϕ_i 暗がりのなかで知らない男-と暫く立ちばなしをした]
 (井伏 J21)
- c. [CL1 とにかく 二人 i -は 赤坂駅で 切符を 売っ-てもら-う-こと-に-して]
 two people-TOP sell-te.obtain-NMZ-DAT-do
 [CL2 ϕ_i 爪先探りで 線路づたいに 歩いて行った] (井伏 J45)

この少ない例数を拠り所に「-てもらう」の特徴づけを行うことは適切でないだろう。しかし、3 例すべての述語部分が複雑な形態で構成されていることは指摘するに値すると考える。述語部分は、単純な行為を表す動詞だけで構成されているのではなく、(149a) では使役の接尾辞をつけて「-てもらう」が続く。また、(149b) では、方向性をもった Give 系の「売る」に Give 系とは逆方向の Obtain 系の「-てもらう」を付加し、さらに、「意向」を表す形態素が付加されている。このような、複雑で有標的な形態を見せる述語に対し、それと共起する第 1 項には、単純で無標、そして、だれもが認識しやすい指示対象が好まれているのではないだろうか。

最後に、形式は Give 系（旧所有者 A が新所有者 B に所有物 C を Give 系 V）を取りながらも、意味的には Obtain 系を表す「くれる」の補助動詞「-てくれる」を考察する。

具体例を見てみると、(150a) (150b) のような「省略・3 人称」が 10 例、(150c) のような「語彙形式・3 人称」11 例であった。

- (150) a. [CL1彼女 _i-は すぐれた精神科医であり] [CL2 また これまで ϕ_i 日本人心理を 研究していたわけでもないのに]
[CL3 [ϕ_i 私の-発表-に 関心を 示し-てくれ-た]REL-こと-が
(3) my-presentation-DAT show-te.kureru-PAST-NMXZ-NOM
私-に-は とても嬉しかった
1-DAT-TOP (土居 J73)
- b. [CL1この男 _i-は 一箇月前に福山市へ疎開して来たが]
[CL2 [ϕ_i 焼け出された]-と 云って]
[CL3 ϕ_i ϕ_j 空襲のときの様子を 話し-てくれ-た]
(3) (1) tell-te.kureru-PAST (井伏 J22)
- c. ある日 [私を指導する立場にいた]REL-精神科医 _i-が 私-に 何か
CL-REL-3-NOM 1-DAT
親切なこと-を し-てくれ-た]
do-te.kureru-PAST (土居 J11)

まず注目したのは、「-てくれる」の出現頻度である。「-てくれる」は 21 例あり、前出の「てやる」「てもらう」に比べ、その頻度差が格段に高い (84.0%)。同じ授受関係を示す補助動詞であっても、Give 系の「-てやる」、Obtain 系の「-てもらう」、そして、Give 系

次に着目したのは、第 1 項と第 3 項 (150b) および第 3 項相当の名詞句 (150c) の人称制限である。表 49 の通り、第 1 項 21 例は 3 人称に限定されていることがわかる。一方、第 3 項¹³² を詳しく見てみると、(150a) のような無生が 1 例の場合を除き、有生 16 例は、すべて 1 人称、総称、主人公であった。山田 (1997) などが指摘するように、接辞「-てくれる」には、項の人称を識別する機能があり、第 1 項の指示対象は「1 人称 (相当語彙)」以外の人称を指示し、一方、受益者 (benefactive) である第 3 項は「1 人称 (相当語彙)」であるという関係が成り立つ。「-てくれる」表現の 2 つの項は、「1 人称 (相当語彙)」を軸に対立していると考えられる。

述語に意向を表す形態素「V う／よう」や希望を表す形態素「V たい」が含まれている場合、第 1 項の指示対象はどのような形式・意味で現れるかを確認してみた。意向表現の例は、(151a)「考えるようにしよう」、(151b)「のべておこう」などである。希望表現の例は、(151c) から (151f) ままで、「ほしい」「所望する」などの内容語や「-たがる」「-たい」の接辞が対象である。

- 132 有生第 1 項 21 例に、(150) の無生第 1 項の 1 例を加えた 22 例から下のような自動詞構文に「てもらう」が続き、第 3 項が必要でない例 (5 例) を除いた 17 例が対象となっている。
- 客人たちの話では 僕の生家には 近所の人や懇意先の人たち-が 僕らのことで
- S
- 見舞いに 来-てくれ-ている-そうだ
- come-te.kureru-ASP-MOD (井伏 J82)

響かなかった]REL-こと-を ϕ のべ-ておこ-う¹³³

CL-REL-NMZ-ACC (1) say-te.place-INTE (土居 J35)

- c. [CL1[新聞の折り込み広告に載せられている]REL-写真-や [通信販売のカタログテレビでやっている]REL-丸井のコマーシャルなど i-を ϕ_j 見ていると]
[CL2たしかに 今はいいい家具-や 洒落たもの-が たくさん あるし]
[CL3 ϕ_k ϕ_i 見れば]

(3) (O)

[CL2 ϕ_k ϕ_i ほし-くなる-だろう-と-も-思う¹³⁴]

(3) (N2) want(DES)-become-MOD-CMPL-think (宮部 J29)

- d. [CL1そこで ϕ_i 酒-を 所望し-た-と-する-と]

(1) wish for(DES)-PAST-CMPL-do-CONJ

[CL2次には [スコッチかブルボン]-か-と聞いてくる] (土居 J22)

- e. [石門心学の影響が今なお強い日本]REL-で-は 各部門の技術者-は

3-TOP

何でも 最高のもの-を つくり-たがる

make-want(DES) (堺屋 J110)

- f. [CL1私 i-は 一九五二年に帰国したが] [CL2その後 私自身 i-の-眼-と-耳で

[日本人の日本人たる]REL-所以-を ϕ_i 明らかにし-たい-と-思う-ように-

(1) clarify-DES-CMPL-think-like-

なっ-た

become-PAST (土居 J47)

¹³³ 本動詞「置く」「しまう」「見る」が機能語化し「V ておく」「V てしまう」「V てみる」などの補助動詞として使われる。ちなみに、本研究のデータでは、それぞれ、5 例、8 例、6 例見受けられた。その内、「V ておく」「V てみる」は、すべての第 1 項が有生であった。「V てしまう」は、以下の 1 例を除き、残りの 7 例は、有生第 1 項であった。意向・希望以外の補助動詞も第 1 項の指示対象の識別に関与している可能性が考えられる。

どれか一枚 シャツ-か-下着-の-袖-が 変な方向-へ いっ-てしまう

go-te.shimau

(宮部 J101)

¹³⁴ 「-だろうと思う」は、「意向-モダリティ-補文標識-思う」の連続になり、補文と主文の 2 つの節で構成されていると分析することも可能だが、意向を示す機能語「だろう」と思考動詞「思う」の連続の場合には、アクセントの下がり目が 1 つであることが普通なため、1 つの複合的な機能語として分析した。(154f) の「-たいと思う」も同様である。

意向・希望表現を分析した結果は表 53 である。¹³⁵ 第 1 項の指示対象が無生の場合は、(152) S1CL1 の語彙形式「事務所」と(152) S2CL1 の省略項 2 例のみである。「事務所」をそこで働く人のメトニミーと考えると、有生と分類でき、意向・希望表現の第 1 項は、すべて有生となる。

表 53 意向・希望表現の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	22	78.6%	1	50.0%	23	76.7%
語彙	4	14.3%	1	50.0%	5	16.7%
代名詞	2	7.1%	0	0.0%	2	6.7%
合計	28	100.0%	2	100.0%	30	100.0%

- (152) S1([CL1 この-事務所-のような-ところ-が [[最後のひとつの転轍機を 通過
this-office(InA)-like-place-NOM
して奈落へと落ちてゆく] REL-機関車-をぎりぎりのところで止める] REL-
ブレーキ-になろ-う-と] [CL2 ϕ_i 頑張っている]
become-INTE
S2([CL1 とりあえず ϕ_i [目の前であがった] REL-火の手-を
(InA)
消し止め-よう-と] [CL2 ϕ_i 眠不休で働いている]
put out-INTE-CMPL (宮部 J72-73)

以上、意向・希望表現と第 1 項の関連性を考察したところ、第 1 項は「有生」に大きく傾いているという結果が得られた。¹³⁶ 知覚動詞同様、「有生」の経験者 (experiencer) の関与が確認できた。

¹³⁵ 意向表現と希望表現の内訳は以下の通り。

意向表現 (11 例) : 省略有生 7 例、語彙有生 2 例、省略無生 1 例、語彙無生 1 例

希望表現 (19 例) : 省略有生 15 例、語彙有生 2 例、代名詞 2 例

¹³⁶ 有生 28 例を母数にして、カイ 2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2=26$, $f=2$, $p<.001$)。

4.6.11 可能表現

可能表現は、使役表現と同様に迂言的な場合と語彙的な場合がある。迂言的な可能表現は、「調べる *sirabe-ru*－調べられる *sirabe-rareru*」のように可能を表す形態素「*reru* / *rareru*」を使う場合と、(153) のように「*V* ことができる」の場合である。

(153) [CL1 気がついて] [CL2 [開いた目に飛び込んできた]-の-は 白い色で]

[CL3 [ϕ_i 別の場所に 来る-こと-が-でき-た]-の-か-と 一瞬 葵_i-は 思った
come-NMZ-NOM-POT-PAST-NMZ-INT-CMPL

(角田 J17)

語彙的な場合は、いわゆる五段動詞と「*reru*」の組み合わせで「*r*」が脱落して「可能形」として語彙化した「読める」や「会える」などである。本研究のデータの(154) のような場合である。

(154) [CL1 ϕ_i 切符を売ってもらおうとしたが]

[CL2 ϕ_i なかなか駅員に 会え-ない-ので]

(3) meet(POT)-NEG-CONJ

[CL3 ϕ_i 暗がりのなかで知らない男と暫く立ちばなしをした] (井伏 J21)

五段動詞以外で「*eru*」の形体を含み自他の区別があり語彙化している「見える」なども可能表現として分類している (155)。

(155) 母-は [この病院はあなたが生まれたところなのだ]-と

[葵-に-は ϕ_i 能面のように 見える]_{REL}-顔_i-で

3.LOG-DAT-TOP (N2) see(POT)

幾度も繰り返した (角田 J32)

以上のような可能表現を対象に第 1 項の形式・意味との関係を分析したところ、表 54 の結果が得られた。

68 例の可能表現のうち、9 割以上の 66 例が有生指示で、無生の指示対象は 2 例のみであった。上で見た (154) のように、可能表現は「第 1 項・省略・有生」との組み合わせ

が好まれているといえる。「可能表現・第 1 項・省略・有生」の場合には、(156) のように、3 文 (S1-S4) を超えて同一指示を維持している場合も見受けられた。

- (156) S1 (けれど家にいるあいだ 何が起きているのか 徐々に 葵_i-は 理解した)
 S2 … S3 …
 S4 ([CL1 ϕ_i 気配を 消して] [CL2 ϕ_i 二階を歩き]
 [CL3[家探した]REL-両親の部屋-で ϕ_i 数冊の雑誌-も
 (N1, Ani)
 見つける-こと-が-でき-た]
 find--NMZ-NOM-POT-PAST (角田 J73-76)

表 54 可能表現の第 1 項の形式と意味

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	54	81.8%	1	50.0%	55	80.9%
語彙	9	13.6%	1	50.0%	10	14.7%
代名詞	3	4.5%	0	0.0%	3	4.4%
合計	66	100.0%	2	100.0%	68	100.0%

可能形態素「れる／られる」は受身の意味の形態素と形式を共有しているため、(157) のような例では、可能とも受身とも解釈できる場合が見受けられた。

- (157) a. [CL1 [もともと欧米人を基準にして作られた]REL-心理テスト-によって
 ϕ_i 測ら-れる-ような]REL-日本的特色_i-は 結局
 (O, InA) measure-POT-like-REL-Japanese characteristic-TOP
 [欧米人の立場から見た]REL-それ-であって] [CL2 この立場を超えるものはそれ
 によっては得られないからである] (土居 J59)
- b. [CL1 私はその中でまず言語と心理の関係から説き起こし]
 [CL2 [「甘える」心理とそれに関係ある]-と ϕ_i 考え-られる]REL-
 (O, InA) think-POT-REL-
 「すねる」「ひがむ」「こだわる」「すまない」等-の-言葉_i-の-意味-と
 word-of meaning-and

さらに気の概念をも説明した

(土居 J69)

次に、有生の第 1 項が語彙形式、代名詞の例はそれぞれ (158a) CL2、(158b) CL1 である。

(158) a. [CL1 葵はそう言ってみたが]

[CL2 父-と-母-に-は 聞こえ-なかつ-た-の-か]

father-and-mother(LEX)-DAT-TOP hear(POT)-NEG-PAST-NMZ-INT

[CL2 ふたりは葵の名前を繰り返すだけだった] (角田 J26)

b. [CL1 僕-は 子供のとき [ケンポナシの実-が落ちる]REL-の-を

PRO-TOP

待ち-かねて] [CL2 よく小石を梢に向けて抛り投げたりして]

wait-cannot

[CL2 親父に叱られていた]

(井伏 J79)

可能表現で第 1 項が無生指示の場合は、わずか 2 例で、省略項 (159a) の指示対象は、「石門心学」という集団を指しており、基本的な無生指示とは異なっていた。また、無生語彙項 (159b) も、「マクロの国民経済全体」という抽象的なものを指示し、典型的な無生指示とは言い難いものであった。

(159) a. [CL1 息苦しい生産への勤勉さではなくそれを通しての修行こそ本旨であるとしたことで]

[CL2 ϕ (=石門心学) 当時の人々の納得-を 得-られ-た-のだ]

(InA)

take-POT-PAST-MOD (堺屋 J26)

b. [CL1 けれどもみんなが勤勉に働いて] [CL2 儉約に努めたら]

[CL3 マクロの国民経済全体-は バランス-が とれ-なく-なって-しまう]

macrotic-total national economy-TOP

keep(POT)-NEG-become-AUX

(堺屋 J44)

可能表現の第 1 項が、無生指示の場合はごくわずかで、ほとんどが有生指示であることがわかった。また、形式も、語彙よりも省略で出現した場合が、8 割以上を上回ることか

ら、可能表現と第 1 項の形式・意味には関連性があると考えられる。¹³⁷

4.6.12 述語情報のまとめ

4.6 節では、述語の統語的および意味的情報に着目し、第 1 項の指示対象の識別との関与を検証してきた。第 1 項の「省略・有生」という形式・意味決定に関与していたのは、受身、移動表現、知覚表現、授受の補助動詞であった。また、形式との統計的相関は明示できなかったが、第 1 項の指示対象の「有生」に関与しているの述語の情報として、使役構文、所有表現、伝達・思考動詞、所有者変更の動詞、意向・希望表現、可能表現を指摘することができた。第 1 項の指示対象の意味役割の中で、知覚、思考、意向・希望の経験者 (experiencer) は、省略されやすい点も指摘できた。

これまで検証した個別の述語情報の基に、10 項目の意味・機能的な述語情報¹³⁸を総合的にして、第 1 項の省略／非省略との関係を分析したところ表 55 の結果が得られた。検証対象は述語情報ののべ数ではなく述語の語幹ベースである。(160) の「言わ-れ-た」(「伝達動詞」と「受身」)のように、1 述語内に複数の指示対象識別述語情報が含まれる場合は、のべ数 2 ではなく述語全体で 1 つの情報として分類した。

(160) [冬休みまで ϕ_i 学校へはいかなくていい]-と ϕ_i 母-に 言わ-れ-た
CL-CMPL (1) say (COMU)-PASS-PAST
(角田 J66)

表 55 述語の意味・機能情報と第 1 項の形式

形式	述語情報有		述語情報無		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	434	64.6%	611	52.4%	1045	56.9%
語彙	177	26.3%	409	35.1%	586	31.9%
その他	61	9.1%	145	12.4%	206	11.2%
合計	672	100.0%	1165	100.0%	1837	100.0%

$\chi^2=25.6$ 、 $pf=2$ 、 $p<.001$

¹³⁷ 母数を有生 66 例に限定してカイ 2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2=73.5$, $f=2$, $p<.001$)。

¹³⁸ (36)(124)意味的情報に加え、統語的でも機能的な受身構文と使役構文も分析対象とした。

表 55 を見ると、意味・機能的な述語情報が付与されていない 1165 例に対し、付与されている場合は 672 例出現しており、約 60% に当たる。これを低いと見るか、高いと見るかは、主観的な判断になってしまう。しかし、様々な述語表現がある中、その表現方法を 10 項目に絞っただけで、検索結果が 1837 例中 672 例あったという事実を考えると、比較的高い出現率と言えるのではないだろうか。

意味的・機能的な述語情報付与の有無と形式の関係を示した表 53 を基にカイ 2 乗検定を行ったところ、カイ 2 乗値は 25.6 で自由度 2 の有意水準 1% の値 (13.8) を上回った。これは、項省略と意味的・機能的述語情報の間に相関関係が認められることが統計的に支持されたことを示している。本研究が取り上げた述語の意味・機能的情報は、第 1 項の位置に現れる指示対象の形式決定に関与しているといえるだろう。

4.7 日本語の分析のまとめ

項省略の頻度が高いという日本語の特徴に着目し、作例ではなく実際の書き言葉のテキストを対象に、形式・意味・機能との関係を考察してきた。省略項の指示対象を確認し、その指示対象が同定されるときに関与する条件、つまり「指示対象の識別方略 (reference-tracking)」を多様な視点から精査・検証してきた。その結果をまとめると図 5 のようになり、単に「言わなくてもわかるものは言わない」と漠然と定義されがちな第 1 項の省略という現象に、5 つの条件・項目が関与していることを提示した。

まず、4.1 節では「単一語彙項の制約 (one lexical argument constraint)」に着目し、1 節内の項位置に現れる語彙名詞の指示対象の数を確認した。その結果、節の種類に制限されることなくこの制約が機能していることを確認した。この制約は、これまでは話し言葉のみに適応されると考えられていたが、本研究の書き言葉でもそれが適応できることを提示した。

また、この制約が他動詞文に関して特に有効であることも提示した。さらに、語彙項だけでなく音声形式で現れる項の出現を確認したところ、1 節内に現れる音声形式で具現化された項の数は 0 か 1 の場合が優勢であった。本研究のデータでは、「単一語彙項の制約」よりもさらに制限力の強い制約が機能していることが判明した。そして、この結果は次の検証項目である文法関係と項省略の関係に連動するものでもあった。

4.2 節では項の形式を確認し、それを基に 4.3 節と 4.4 節では項の形式と文法関係、意味的属性の関連性を検証した。まず、第 1 項と第 2 項の形式・文法関係の分布を見てみる

と「A」は省略傾向に傾き、「O」と「S/dS」は省略ではない方向に偏っていることが確認できた。「S/dS」「A」「O」の形式は能格的な特徴をもった分布であった。

本研究では出来事の骨格を表す主要な項位置の「S」「dS」「A」「O」の分析に加え、その他の位置に現れる名詞句も分析対象にし精査した。その結果、中間的な振る舞いを見せる「S」と「dS」を中心に、「A」に傾くと「省略／有生」の傾向が強く、「O」に傾くと「語彙形式／無生」に傾く。さらに、「N2」・「その他 N」では語彙形式・無生の傾向が強くなることが確認された。最後に、他動詞構文に現れる「A」と「IO」では、意味的属性の有生は共有しているが、形式が相補的な関係を示していることがわかった。談話内の項・名詞句の形式・文法関係・有生性に着目して検証すると、それぞれの要因が相互に関連し合っていることがわかり、「 ϕ ・A・有生」と「語彙・O・無生」の相補的な分布が確認できた。また、その他の位置に現れる名詞句は語彙形式・無生の傾向が強いことが検証された。

第 1 項の文法関係「S」「dS」「A」の形式・意味の相関は、それぞれ細かい違いはあるものの、「省略／有生」傾向という点で大きな方向性に一致が見られた。「身近で」みんなが「慣れ親しんでいる」と感じられるのは無生物よりも有生物と考えられ、第 1 項の指示対象がそのような有生物の場合、言語情報として相性の良い提供方法として省略形式が選択されていると考えられる。

4.5 節では交替指示に着目し、連続した二つの節の間でそれぞれの第 1 項の指示対象が同じなのか異なるのかを確認し、談話内の第 1 項の指示対象の連続性を検証した。省略の傾向が強いのは前方にも後方にも同一指示で連続する「SS-SS」であり、非同一指示の連続「DS-DS」は、語彙形式で出現する傾向が強いことを示した。それに加え、「DS-DS」であっても「有生/人間」の意味的制限がある場合は省略項として現れることがあることを提示した。

最後に、4.6 節では述語の情報と項の形式・意味要素の関連性を検証した。形式・意味の両者に関与し、統計的な有意差が提示できた述語情報は、受身、移動表現、知覚表現、授受の補助動詞の 4 種類であった。第 1 項の「有生」という意味要素に関与しているのは、使役構文、所有表現、伝達・思考動詞、所有者変更の動詞、意向・希望表現、可能表現であった。特に、知覚、思考、意向・希望の経験者 (experiencer) は省略されやすい点も指摘した。

第 1 項の指示対象の識別には様々な条件が関与しており、第 1 項の省略の解明には複眼

的な視点に基づくアプローチが不可欠で、本研究もその点に留意した。単に第 1 項の省略に注目するのではなく、それを取り巻く名詞句側の情報と述語側の情報に着目し、それらの相互関係を検証してきた。その結果、①単一語彙項の制約、②文法関係、③有生性、④交替指示、⑤述語情報という 5 つの条件・項目と第 1 項の省略の関与が確認され、省略された第 1 項が中心的な存在として軸項のような役割をしていることを確認した。第 1 項の省略という現象は単独で起こっているのではなく、1 つの節が提供する語彙項の数の制限とその文法関係、そして有生性という意味、さらに前後の節との同一性と述語の情報がネットワークのように連動し、1 つの情報パッケージとして提示する中で起こっている言語現象だと考えられる。この意味で、本研究が用いた「指示対象の識別方略」というアプローチは、項省略という言語現象を再考するうえで有効な提案ではないかと考える。

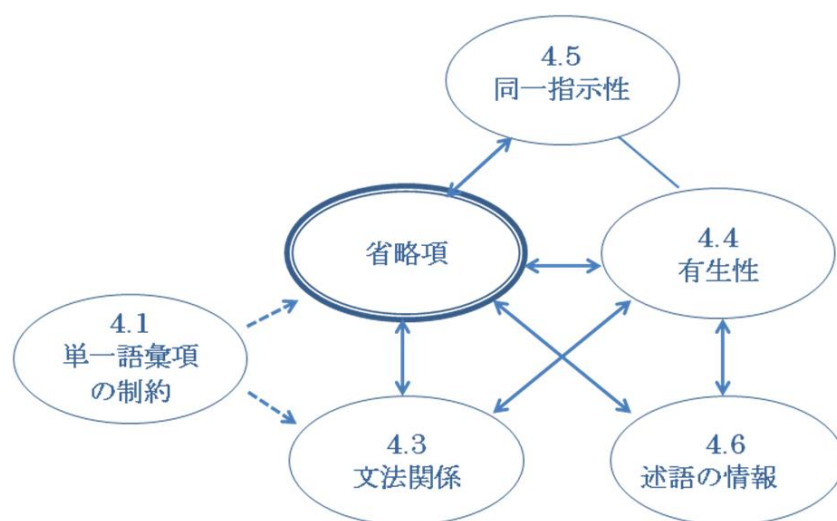


図 5 省略項と条件の関連性

第 5 章 英語の分析と結果

第 4 章では、日本語の項省略を中心に名詞句の指示対象を識別に関する条件を詳しく見てきた。この章では、日本語と英語を対比しながら英語での指示対象の識別方略を検証していく。

まず、5.1 節では英語分析を概観し、次の 5.2 節から実際の分析結果を示す。5.2 節では英語における語彙項の制約の有効性を見ていく。続いて、5.3 節では第 1 項と第 2 項の形式、次の 5.4 節では項の形式と文法関係の検証結果を示していく。5.5 節では第 1 項と第 2 項の形式と意味的属性の関連性を検証し、最後の 5.6 節で英語分析のまとめを行う。

5.1 英語分析の概要

英語分析の対象は、3 章で述べた日本語テキストの英訳版を使用した。日本語テキスト全てに対して 1 対 1 の英訳になっているわけではないが、同じ内容をカバーしている箇所を抽出した。さらに英語テキストの分量を均等にする目的で、6 作品それぞれの単語数を 1400 語程度に合わせた。6 作品それぞれの単語数、節数、文数は表 56 の通りである。

表 56 英語のテキスト詳細

英語タイトル	単語数	節数	文数
1. The anatomy of dependence	1415	217	61
2. The twelve men who made Japan	1481	200	81
3. Black rain	1497	211	68
4. A quiet life	1434	216	71
5. All she was worth	1434	208	106
6. Woman on the Other Shore	1308	175	66

分析の手順は日本語と同じだが、確認のため (161) の例文を使って簡単に説明しておきたい。

(161) [CL₁ Honma_i found an empty seat in a non-reserved no-smoking car]
A (N1, LEX) Vt O (N2, LEX)

and [CL2 ϕ_i put his briefcase down on the floor by his feet]
 (A, N1) Vt O (N2, LEX) (宮部 E137)

節 CL1 では、他動詞「find」の第 1 項と第 2 項が語彙名詞「Honma」と「an empty seat」として具現化している。第 1 項「Honma」は、文法関係「A」、意味属性「人間」「3 人称単数」で、第 2 項「an empty seat」は文法関係「O」、意味属性「非人間」「3 人称単数」と分類できる。一方、節 CL2 では、他動詞「put」の第 2 項「his briefcase」は「非人間」「3 人称単数」の語彙名詞として具現化しているが第 1 項は具現化していない。CL2 の省略項の指示対象を復元すると「Honma」（意味属性「人間」「3 人称単数」）となる。

ここで節の種類と述語の種類についても簡単な説明を加えておく。上の (164) の CL2 の第 1 項の省略／非具現化は等位接続詞「and」の働きが大いに関与していることが予測される。よって、日本語と同様に節の種類も考慮に入れる必要があると考えられるため、節の種類もアノテーションしている。節の種類（パラメーター）は「主節」「等位接続詞節」「副詞節（分詞構文を含む）」「名詞節」「関係節」「to 不定詞」である。

節を分類する際、問題になるのが複文の定義であり、その定義の困難さについては日本語分析の 3 章でも述べた。英語に関しても同様である。特に、節種類の最後のパラメーター「to 不定詞」は時制を持たないことから節と見なされることが多い。しかし、(162) のような文を単文、つまり、出来事を表す 1 つのまとまり・チャンクと処理することは統語的にも意味的にも問題があるという見解があり（杉本 1995:56）、本研究はそのような考えに従い「to 不定詞」句なども節相当の出来事を表す 1 つのまとまりとみなし、分析対象に加えた。

(162) To leave a guest unfamiliar with the house to “help himself” would seem
 to-INF
 excessively lacking in consideration. (土居 E37)

但し、(163) 下線部の場合（「begin to V」「try to V」など）のように形式上は「to 不定詞」だが、意味・機能的にはアスペクトあるいはモダリティと考えられる場合などは「begin to」「try to」を含めたものをひとまとまりの述語とみなした。

(163) They decided they would try to buy tickets at Akasaka Station, and set off
 groping their way along the tracks. (井伏 E51)

(164) a. He had come to Fukuyama a month previously to escape the
S (N1,PRO) come
raids, he told them but had been burned out of his home.
A (N1,PRO) COMU O (N2) (井伏 E29)

b. I consider all the possible situations, but run into a dead
A(N1,PRO) consider O (N2)
end,no matter where I start, and that's why I think this way. (大江 E29)

- 1) 項構造における語彙項 1 つの制約 (5.2)
- 2) 第 1 項の形式の関係 (5.3)
- 3) 項の形式と文法関係 (5.4)
- 4) 項の形式と意味属性 (5.5)

日本語分析から見てきたのは、1 節内に語彙名詞や代名詞など音形式をもった項を複数使用することは避けようとする傾向だった (4.1 項)。では、英語ではどうだろうか。日本語のように主語位置に空所が目立つ言語と異なり、英語では主節 (**matrix clause**) の主語位置に空所が現れることを避ける統語的制約がある。そのため、「節構造における語彙項 1 つの制約 (**One Lexical Argument Constraint on Clause Structure**)」(以下「語彙項の制約」) の効果は期待しづらい。そのせいもあってか、英語の書き言葉と語彙項の制約の関連性を検証した研究は、管見の限り見当たらない。しかし、情報伝達の方略において一般性が高いと考えられるこの「語彙項の制約」は、果たして英語の書き言葉にとっては全く無用の「ものさし」にすぎないのだろうか。本研究では、書き言葉の英語データを使用して「語彙項の制約」の有用性を検証してみることにした。

163

1 節内に語彙名詞がいくつ現れるかを確認した、その方法を具体例と共に示す。分析項目の語彙項数「0」、「1」、「2」、「3」とは (165) の通りである。

- (165) a. [CL1 It was precisely in this period [that the cloth
PRO (S) CMPL
merchant to whom Ishida was first apprenticed went bankrupt]] (堺屋 E22)
- b. [CL1 Mr. Mizoguchi himself would get threatened sometimes by these
LEX (S)
guys [CL2 when he asked them to forgo collecting]]
CONJ PRO (S) ask PRO (IO) to-INF (O)
(宮部 E44)
- c. Her mother had no doubt been watching the phone downstairs
LEX (A) LEX (O) (角田 E4)
- d. [CL1 Another case happened during my early days in America
[CL2 when a psychiatrist [who was my supervisor] did me
REL LEX (A) PRO (IO)
some kindness or other]]
LEX (DO) (土居 E12)
- e. Noris it true even [that the Japanese never ask
CMPL LEX (A)
a guest his preference]
LEX (IO) LEX (DO) (土居 E29)

(165a) の CL1 内にはいわゆる it-that 強調構文の虚辞 it が現れているが、意味内容の詰まった語彙名詞ではないため、「語彙項数 0」となる。「語彙項数 1」は、(165b) 主節 CL1 内に語彙名詞 (Mr. Mizoguchi) が 1 つ現れている場合である。(165b) の when 副詞節 CL2 は、述語「ask」の 2 重目的構文で、主語と間接目的語が代名詞のため「語彙項数 1」となる。¹³⁹ (165c) は他動詞構文の第 1 項、第 2 項が共に語彙名詞で現れた「語彙項数 2」の例である。(165d) の関係副詞節 CL2 は二重目的構文で、間接目的語の形式

¹³⁹ 項位置に「補文」「to 不定詞」「動名詞」「現在分詞」が現れた場合は、意味内容が希薄ではないため語彙名詞に相当するものとして分類している。

が代名詞のため「語彙項数 2」となる。最後に、二重目的構文の (165e) の補文は、項すべてが語彙項目で現れている場合で「語彙項数 3」となる。

1 節内の語彙名詞の出現頻度は表 57 のような結果となった。「語彙項数 0」は 453 例 (36.9%) であるが、分詞構文、to 不定詞、関係代名詞節のように、構造上項が 1 つ少ないことが前提となる節を含んでいる。そのような節を除いた場合を再度分析したところ、残ったのは (166) のような、命令文 (166a 他 4 例)、副詞節 (従属節) (166aCL2 と 166b (2 例))、等位接続詞節 (166c 他 40 例) の 46 例であった。

表 57 1 節内の語彙項の数

項数	数	割合
0	453	36.9%
1	666	54.3%
2	104	8.5%
3	4	0.3%
合計	1227	100.0%

- (166) a. [CL1 ϕ Enter consumer financing_i [CL2 still as ϕ _i loosely
(A, N1) IMP CONJ (dS, N1)
regulated as ever]] (宮部 E106)
- b. [CL1 A bubble is no more than a bubble and inflationary
conditions_i cannot last [CL2 when ϕ _i unaccompanied by increases
CONJ (dS, N1)
in production and consumption]] (堺屋 E21)
- c. They_i emerged above ground and ϕ _i raced between the
CONJ (S, N1)
buildings (宮部 E37)

次に、「語彙項数 1」と分類した場合をしてみる。上で見た (165b) 主節 CL1 のような場合である。全体の半分以上 (666 例 54.3%) が、この「語彙項数 1」という伝達方法を使用している。「語彙項数 1」には N1 や N2 が代名詞 (関係代名詞を含む) で表されている場合は含まれていない。例えば、(167a) CL1 のように N1 が代名詞で占められている場

合や、(167b) CL1 のように N1 と N2 が共に代名詞で N3 のみ語彙名詞で占められている場合も「語彙項数 1」と分類している。

- (167) a. [CL1 She_i put some water from the well
A (N1, PRO) O (N2, LEX)
in an empty vinegar bottle] [CL2 ϕ_i wrapped some incense sticks and
some fresh green leaves in a piece of paper] [CL3 and ϕ_i gave them all to
Watanabe] (井伏 E15)
- b. She gave it a little more thought
A (N1, PRO) IO (N2, PRO) DO (N3, LEX) (宮部 E94)

以上の結果から言えることは、英語における「語彙項数 0」は、日本語の場合と異なり構造（節の種類）の影響が大きい、「語彙項数 0」か「語彙項数 1」で出来事を表現している頻度が 9 割を超えている (91.2%) ことを考えると、英語の書き言葉においても、本研究のデータでは「語彙項の制約」は有効な情報提供の手段として機能しているということである。

「語彙項の制約」が対象としているのは、意味内容が詰まった語彙形式のみであるが、その制約をもう少し強めて、代名詞など何等か音形を持つ形式まで対象を広げて分析を試みた。1 節内に具現化された項がいくつ現れるかを確認したところ、表 58 のような結果が得られた。

表 58 音声形式を持った項の数

項数	数	割合
0	150	12.2%
1	723	58.9%
2	331	27.0%
3	23	1.9%
合計	1227	100.0%

表 57 と表 58 を比較すると、表 58 では音声形式を持つ「項数 2」が 104 例から 331 例へ 3 倍近く、また音声形式を持つ「項数 3」は 4 例から 23 例へと 6 倍に増えている。しかし、全体でみると、「項数 2」と「項数 3」は合わせても 3 割にも満たず、約 7 割 (71.1%)

9 割弱が「項数 0」と「項数 1」で節連続を行っていた日本語 (4.1.1.参照) と比較すると、英語 (書き言葉) の場合その頻度は下がる。しかし、約 7 割が「項数 0」か「項数 1」で情報伝達をしていることを考えると、「1 節内に語彙名詞を複数使わない」という「語彙項の制約」に加え、さらに制限力の強い「1 節内に音声形式を持った形式を複数使わない」という条件が機能していると考えられる。「1 節内に音声形式を持った形式を複数使わない」という条件は絶対的な「ものさし」と言うことはできないものの、ある程度有効な方略として機能していることを示唆していると思われる。

まず、第 1 項の形式から見ていくと、「省略」の形式で現れたケースは全部で 304 例が観察できた。この数字は、述語の時制の有無により (168) の 2 種類に下位分類できる。(168a) のような定性述語の項が省略されている場合が 99 例で、不定述語の項が省略の場合が 205 例であった (168b)。¹⁴⁰

- 167

して、以下の等位接続節 (169) CL2¹⁴¹ のような述語である。304 例のうち定性述語節内に第 1 項が音声形式を持たずに現れた場合は 99 例であった。

- (169) [CL1 She_i sat on the bed] [CL2 and ϕ_i look-ed out¹⁴² the
CONJ (A) Vt-PAST
window. (角田 E7)

また、述語が不定の場合に第 1 項が省略されたケースは、上の to 不定詞 (168b) をはじめ (170) のような分詞構文の場合も含まれ、全部で 205 例見受けられた。¹⁴³

- (170) a. [CL ϕ_i Sensing that there was some serious motive behind my parents'
(A) PART
jocular conversation] I felt tense and hung my head to avert my eyes.
(大江 E22)
- b. [CL ϕ_i Convinced that this was the only proper way] I determined that
(dS) PART
so long as I was examining Japanese patients I would record things and
think about things in Japanese. (土居 E50)
- c. One was to press people to be extravagant [CL by ϕ_i producing moral
P (A) PART
arguments in favor of consumption. (堺屋 E53)

英語の場合、第 1 項が省略されるのは、定性述語では命令文や等位接続詞で、不定述語は to 不定詞や分詞構文の場合が多かった。第 1 項の省略は構造の影響が強いといえ、日本

¹⁴¹ 以下の CL3 のように、副詞節内に埋め込められている等位接続詞節の場合も含む。

[CL1 A headline_i on one of them jumped at her] [CL2 as if it_i had been cut out
[CL3 and ϕ_i placed in relief: High-School Girls Leap from Roof After Fugitive Love Affair]]
CONJ (dS) (角田 E53)

¹⁴² 句動詞 (phrasal verb) に関しては、『Oxford phrasal verbs (2006)』や

「<http://dictionary.cambridge.org/dictionary/british/>」などを参考にした。ちなみに、本研究のデータに現れた句動詞は 85 例。

¹⁴³ (170a) のような現在分詞の分詞構文は 78 例、(170b) のような過去分詞の分詞構文は 17 例、(170c) のような前置詞＋現在分詞の分詞構文は 25 例。その他、前置詞＋過去分詞の分詞構文は 3 例であった。

語の結果とは異なっている。

表 59 第 1 項の形式

第 1 項		
形式	合計	割合
省略	304	24.8%
語彙	371	30.2%
数量詞	36	2.9%
代名詞	424	34.6%
関係代名詞	55	4.5%
指示詞	32	2.6%
動名詞	3	0.2%
不定詞	2	0.2%
合計	1227	100.0%

表 60 第 2 項の形式

第 2 項		
形式	合計	割合
省略	51	8.8%
語彙	332	57.5%
数量詞	13	2.3%
代名詞	88	15.3%
関係代名詞	11	1.9%
指示詞	2	0.3%
疑問詞	2	0.3%
動名詞	2	0.3%
to 不定詞	2	0.3%
補文	74	12.8%
合計	577	100.0%

次に、第 1 項の形式の具体例を示し、その分析を述べたい。語彙名詞、数量詞、代名詞¹⁴⁴、関係代名詞、指示詞、動名詞、不定詞の例が、下の (171a) から (171g) である。

- (171) a. A young man [seated diagonally across the aisle] was shouting
N1 (LEX)
instructions into a cellular phone (宮部 E7)
- b. [CL₁She listened impatiently for the ring] [CL₂ but as before all
CONJ N1 (QNT)
[REL she got] was a high-pitched woman's voice] (角田 E2)

¹⁴⁴ 代名詞には以下のような時間・天候を表す虚辞や形式主語の虚辞が含まれる (31 例) も含まれる。

It was past ten at night when they arrived in the ruins of Fukuyama.
EXP (井伏 E22)
It was hard [to tell whether he was taking the army's part or being sarcastic]
EXP (井伏 E47)

- c. I probably cherished a mild hope that he would press me again
N1 (PRO)
but my host, disappointingly, said “I see” with no further ado. (土居 E10)
- d. This is the idea[that lies at the very core of Sekimon Shingaku]
N1 (REL) (堺屋 E81)
- e. But those¹⁴⁵ weren’t the kind of details Aoi cared about.
N1 (DEM) (角田 E59)
- f. On a micro-economic level working hard was as important for the
N1 (GER)
merchant as for the farmer. (堺屋 E56)
- g. To leave a guest unfamiliar with the house to “help himself” would seem
N1 (to INF)
would seem excessively lacking in consideration. (土居 E37)

表 61 日本語と英語の第 1 項の形式比較

	日本語			英語	
形式	割合	(例数)		割合	(例数)
省略	56.7%	(1045)	⇔	24.8%	(304)
語彙	32.1%	(586)	⇔	30.2%	(371)
代名詞	4.9%	(90)	⇔	34.6%	(424)

4 章で提示した日本語の第 1 項の形式と比較すると (表 61)、英語の場合は日本語と異なり代名詞での出現が 3 割を超え、省略項と代名詞を合わせた割合は日本語の省略項の頻度に匹敵する。これは日本語の省略を英語の代名詞で補完できるというこれまで広く言われてきた論説を指示する結果といえるだろう。一方、語彙名詞の形式に目を向けてみると、日本語、英語双方ともその出現頻度は約 30% で、両言語の間に際立った違いはない。一見、項位置に乘せる情報の形式が異なるように見える日本語と英語だが、具体的な内容を持つ情報を第 1 項の位置に乘せて情報伝達するという方法は、両言語ともに類似していると考え

¹⁴⁵ 指示対象はその前の 2 文 (以下) の情報。

A major search was mounted, focusing mainly on Izu and Tokyo. Her mother had apparently told the police that Aoi felt too embittered about Yokohama to ever go near the place again.
(角田 E57,58)

えられる。

次に、第 2 項の形式の具体例を示しながらその分析を述べたい。(172a) から (172d) に提示したものが主要な形式である省略、語彙名詞、代名詞、補文の例である。省略形式の 51 例は、(172a) のようにすべて関係節であり、構造に依存しているといえよう。一方、語彙形式は、(172b) のように主節に現れる場合が 164 例、関係節の場合が 25 例、副詞節の場合が 27 例、補文などの名詞節の場合が 34 例と、主節に現れる場合が他の種類の節に比べて頻度が高いことが確認できた。語彙形式の第 2 項は、省略形式ほど明確な結果ではないが、節の種類が影響しているように思われる。

- (172) a. Honma recalled the telephone conversation [REL he'd had ϕ_i with
(N2)
that Sawagi woman at the Mizoguchi law office]. (宮部 E40)
- b. [CL1I detected bewilderment in both Father and Mother]
N2 (LEX)
[CL2the moment [REL I closed my mouth]].
N2 (LEX) (大江 E14)
- c. Aoi's mother accompanied her everywhere she went, whether to
N2 (PRO)
tests or to the therapist or to the toilet. (角田 E49)
- d. She mentioned that she'd been working for Mizoguchi for ten years
N2 (CMPL)
now, right through the "consumer finance scare" of the early eighties.
(宮部 E41)

その他の形式には、数量詞 (173a)、関係代名詞 (173b)、指示詞 (173c)、疑問詞(173d)、動名詞(173e)、不定詞 (173f) が確認できた。

- (173) a. Unfortunately before she could learn anything, her mother
N2 (QNT)
rushed up and tore the magazine from her hands in an absolute frenzy.
(角田 E61)

- b. Their first reaction was to smother what I had said with laughter,
N2 (REL)
as if to suggest that my idea was merely an amusing, childish fantasy.
(大江 E15)
- c. Merchant-house managers [_{REL} who experienced this first-hand]
N2 (DEM)
understood that the only way to weather present and coming difficulties
was to work hard, to live simply, and to be thrifty. (堺屋 E44)
- d. How much of [_{REL} what he owned] had he gotten on “easy terms”?
N2 (INT) (宮部 E12)
- e. Eeyore’s got to start doing something for exercise again!
N2 (GER) (大江 E62)
- e. And nobody’s being taught any more how to manage their money.
N2 (INTto INF) (宮部 E81)

第2項の形式分布の特徴は、第1項の分布と異なり語彙形式の出現頻度が抜きん出ているところである。第1項に現れる主要な形式は、省略、語彙、代名詞の3種類であったが、第2項は、省略や代名詞で出現する場合もあるが、6割近くが語彙名詞の1種類に集中している。これは、語彙名詞がもつ透明性という特徴が関与していると考ええる。第1項に比べ第2項の位置には、はなるべく意味の齟齬が生じないように形式と意味が一对一の対応関係の語彙名詞が好まれるようである。この結果は4.2項で示した日本語の結果と類似しており、第2項の位置と形式の関係は、日本語と英語に共通した特徴であると考えられる。

5.4 項の文法関係

日本語の文法関係と形式の相関を 4.3 項で示したように、ここでは英語の項の文法関係と形式について述べていく。まず、「S」「A」「dS」¹⁴⁶の具体例と分析結果を示し、続いて各文法関係と形式の包括的な相関関係を述べる。

5.4.1 文法関係

本研究データ 1227 例の第 1 項のうち、文法関係「S」「A」「dS」で現れたのは、それぞれ 552 例、577 例、98 例であった（表 62）。そのうち「S」の形式を見てみると、552 例の約 7 割近くが語彙名詞（174a）や代名詞（174b）で現れており、省略項（174c）は 2 割に満たない。語彙名詞と代名詞の 2 つが「S」の主要な形式といえるだろう。4.3.1 項の分析でみたように、日本語の「S」の無標形式は省略と語彙名詞であったのに対し、英語の場合は、語彙名詞は同じであるが、省略に代わって代名詞が無標形式になっている。この点が日本語との違いといえる。

表 62 文法関係と形式

文法関係	S		A		dS	
形式	数	割合	数	割合	数	割合
省略	97	17.6%	174	30.2%	33	33.7%
語彙	210	38.0%	127	22.0%	34	34.7%
数量詞	18	3.3%	13	2.3%	5	5.1%
代名詞	170	30.8%	236	40.9%	18	18.4%
関係代名詞	28	5.1%	20	3.5%	7	7.1%
指示詞	24	4.3%	7	1.2%	1	1.0%
動名詞	3	0.5%	0	0.0%	0	0.0%
不定詞	2	0.4%	0	0.0%	0	0.0%
合計	552	100.0%	577	100.0%	98	100.0%

- (174) a. Nevertheless, a Japanese has to be very intimate with a guest
S (LEX) COP
before he will ask him whether he likes something he offers him.

¹⁴⁶ 文法関係「DO」の形式は、5.3 項の表 57 と同一であるためこの項では提示していない。

(土居 E30)

- b. (Watanabe and Takamaru_i had to walk for about two hours down the road...) Time and time again they_i were in a cold sweat of fear, but
S (PRO) COP
eventually they succeeded in reaching Akasaka Station without mishap.

(井伏 E57)

- c. Feeling utterly whole again, I_i helped him back into bed, ϕ_i waited
(S) Vi
until sleep revisited him, and ϕ_i went back to my room.
(S) Vi

(大江 E60)

一方、(175) のような数量詞や指示詞は合計しても 1 割にも満たず、「S」の有標な形式といえる。この点は日本語と同様の結果である。

- (175) a. All that was left standing was a three-storied turret and a gateway known
S (QNT) COP
as the “Iron Gate.” (井伏 E41)
- b. This led to quite a number of the scions of smurai families moving
S (DEM) Vi
into the world of trade and business. (堺屋 E2)

また、関係詞 (176a) や動名詞 (176b)、あるいは不定詞 (176c) のような文法的機能を担ったものが「S」として使用される頻度は、上の省略や語彙名詞や代名詞と比較するとかかなり低い。

- (176) a. What Ishida Baigan preached was the answer to the question
S (REL) COP
of what one should do in order to combine hard work and thrift.
(堺屋 E75)
- b. Producing a card at the cash register and signing the little receipt
S (GER)

would be an easy habit to fall into.

AUX COP (宮部 E26)

- c. To leave a guest unfamiliar with the house to “help himself” would

S (to-INF) AUX

seem excessively lacking in consideration.

Vi (土居 E37)

次に、「A」の形式を見てみると、9 割以上 (93.1%) が省略 (177a) と語彙名詞 (177b) そして代名詞 (177c) で現れている。数量詞 (177d) や関係代名詞 (177e) などは合計しても 1 割にも満たない。これは「S」と同様の振る舞いであるが、「S」との違いは、理論的に可能である動名詞や不定詞の形式が「A」として使用される例が確認できなかったことである。その理由については詳細な検証・議論をするべきであるが、可能性の 1 つとして考えられるのは、情報のシンプルさ・透明性という特徴である。意味内容と文法機能の両方を受けもつ動名詞や不定詞は、形式と意味の対応が一对一の語彙名詞と異なり、コード化する情報が複雑になるためではないかと推測される。

- (177) a. He sat on a folding chair and ϕ_i asked her with a diffident

(A) Vt-PAST

smile whether there was anything he could bring her. (角田 E43)

- b. The Japanese sensibility would demand that, in entertaining, a host

A (LEX) AUX Vt

should show sensitivity in detecting what was required and should himself “help” his guests. (土居 E36)

- c. In the other words, they cut costs, hung on to cash reserves, and

A (PRO) Vt

built a management system able to tough out the recession. (堺屋 E45)

- d. Or perhaps it would be more accurate to say that something

A (QNT)

had made me rehearse it subconsciously.

Vt (大江 E36)

- e. This increased still further my feeling that Americans were a people

who did not show the same consideration and
A (REL)PAST NEG Vt
sensitivity towards others as the Japanese. (土居 E38)

「A」の主要形式、省略・語彙・代名詞をさらに詳しく見てみると、3つの間に微妙な差が見て取れる。省略・語彙名詞に比べ代名詞の優位性（40.9%）が確認できる。「A・代名詞」の組み合わせが無標と考えられる。

次に、「dS」の形式を見てみると、9 割近く (86.8%) が省略 (178a CL1) と語彙名詞 (178b)、代名詞 (178c) で現れ、「S」や「A」と類似した振る舞いをしている。「A」と同様、理論的に可能な動名詞や不定詞の例は、「dS」の位置には 1 例も確認できなかった。

「dS」自身が文法的機能を兼ね備えており、それ以上に動名詞や不定詞といった文法機能も兼ね備えると情報量が多くなるため「dS」との組み合わせでは使用しづらいのではないかと推測される。

「dS」の主要形式、省略・語彙・代名詞をさらに詳しく見てみると、代名詞の頻度が一段低く、省略と語彙が無標の形式と考えられる。

- (178) a. My mother_i, [CL₁ ϕ _i convinced [CL₂ that all three of us had
(dS) Vt-PASS dS(QNT)
either been blown to pieces or crushed beneath the house], had got our
Vt-PASS
three photographs arranged on the home altar. (井伏 E8)
- b. The rice had been harvested, transforming the paddies into a vast
dS (LEX) Vt-PASS
expanse of black and brown. (角田 E8)
- c. I was seized by the premonition of a terrible dream,
dS (PRO) Vt-PASS
a nightmare in which I saw myself standing all alone in an empty, desolate
place. (大江 E40)

日本語の分析「文法関係「dS」の形式」(4.3.3 項)で述べたが、日本語の「S」と「dS」の形式分布と「A」の間には対立がみられた。しかし、英語ではそのような対立は見受け

られなかった。そこで、日本語の分析「文法関係と能格性」(4.3.5 項)と同様に「O」の形式分布を含めた文法関係の包括的相関関係を確認してみた。次の項でその結果を述べていく。

5.4.2 文法関係と形式の相関関係

5.4.1 項ではそれぞれの文法関係の形式分布を確認したが、ここでは第 2 項を含めた項構造全体を対象に、文法関係と形式の関係を見ていく。必須項が 1 つか複数かということ基準に文法関係をまとめ、形式は主要な形式である省略項、語彙項、代名詞、そしてそれ以外という基準で分類した。文法関係と形式の包括的な関係を検証した結果が表 63 である。

表 63 包括的な文法関係と形式

文法関係	A		S/dS		O		合計	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	174	30.2%	130	20.0%	51	8.8%	355	19.7%
語彙	127	22.0%	244	37.5%	332	57.5%	703	39.0%
代名詞	236	40.9%	188	28.9%	88	15.3%	512	28.4%
その他	40	6.9%	88	13.5%	106	18.4%	234	13.0%
合計	577	100.0%	650	100.0%	577	100.0%	1804	100.0%

$$\chi^2=22.5, \text{ pf}=6, \quad p<.001$$

日本語の分析「文法関係と能格性」では、語彙化か否かをものさしにすると文法関係と形式には「A < S/dS < O」の関係が成り立つことを見た。さらに、省略か否かを基準にすると「A 対 S/dS ,O」の能格的な関係が成り立つことを述べた。同じ方法で英語のデータを見てみると、日本語の結果と類似する点と異なる点が見えてきた。

まず、語彙化を基準にみると、「A (127 例) < S/dS (244 例) < O (332 例)」の関係が成立し、O の語彙化傾向が強いという結果が確認できた。これは日本語と類似した結果である。一方、省略を基準にすると「A (174 例),S/dS (130 例) 対 O (51 例)」の関係が確認された。これは、日本語の能格的特徴と異なり、対格的な特徴といえる。この結果は統計的にも有意差が確認された。

しかし、「A」「S/dS」「O」の 3 つの関係をもう少し詳しく見てみると、「A」は省略傾

向、「S/dS」「O」は語彙化傾向という相補的な関係が見られ、能格的特徴が確認できる。英語の文法関係と形式の関係を総合的に判断すると、対格的特徴と能格的特徴の2つの側面があると言える。

5.5 項の形式と意味的属性

5.4 項では、節内の主要な名詞句である項の形式と文法関係との関係をみたが、ここでは項がもつ意味的属性と項の形式の関係を見て行く。着目する意味的属性は、日本語の分析と同様に「有生性 (animacy)」である。文法関係と形式と意味的属性の関係を考察し、名詞句がどのような情報を提供しながら談話内に存在しているかを検証していく。

5.5.1 第1項の意味的属性

本研究の英語データで確認された第1項および第2項の指示対象の意味的属性を示していく。まず、必須項が1つの自動詞構文、それに続き受動構文と他動詞構文の意味的属性の分析結果を示していく。意味的属性のパラメーターは、日本語と同様「有生 (animate) / 無生 (inanimate)」「人間 (human) / 非人間 (non-human)」、および「人称代名詞 (personal pronoun)」である。

第1項の文法関係「S」とその形式と意味属性の関連性を見てみたい (表 64)。まず、「有生」を見ていく。(179a-c) のような省略、語彙名詞、代名詞の形式が具体例として挙げられ、それぞれ 26.9%、25.5%、41.5% の頻度で出現した。この3つの形式が「S・有生」全体の 93.8% を占めている。それ以外の形式 (例えば (179d) の数量詞など) で出現する場合は極端に制限されている。本研究の英語データでは、「S・有生」の組み合わせの相手として最も好まれる形式は、(179c) のような代名詞であった。

- (179) a. They_i decided they_i would try to buy tickets at Akasaka Station, and
 ϕ_i set off groping their way along the tracks.
 (S, Ani,H) Vi (井伏 E51)
- b. Mr. Narahashi stopped by each evening but, as always, remained a man
 S (LEX, Ani,H) Vi
 of few words. (角田 E42)

- c. And I found myself thinking that a Japanese would almost never ask a stranger unceremoniously if he was hungry, but would
S (PRO, Ani,H) COP Adj
produce something to give him without asking. (土居 E11)
- d. Somebody must go to look for the remains, at least.
S (QNT, Ani,H) AUX Vi (井伏 E2)

表 64 「S」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	74	26.9%	23	8.3%	97	17.6%
語彙	70	25.5%	140	50.5%	210	38.0%
代名詞	114	41.5%	28	10.1%	142	25.7%
その他	17	6.2%	86	31.0%	103	18.7%
合計	275	100.0%	277	100.0%	552	100.0%

$$\chi^2=148.4, pf=3, p<.001$$

次に、「S・無生」の形式を見てみると、(180a)のような語彙名詞が半分(50.3%)を占めている。「S・有生」では高い頻度を示した代名詞は、「無生」(例えば(180b))ではわずか28例¹⁴⁷と1割(10.1%)程度に過ぎない。

- (180) a. My perplexity, of course, undoubtedly came from my unfamiliarity
S (LEX, InA) Vi
with American social customs, and I would perhaps have done better to
accept it as it stood, as an American custom. (土居 E28)
- b. (It seems to me that what was behind the panic of the early eighties was
the gotta-have syndrome_i.)
It_i was mostly pure greed, but some of it too was peer
S (PEO, InA) COP
pressure keeping up with the Tanakas. (宮部 E96)

¹⁴⁷ この代名詞28例は、虚辞 it (28例)を除いた数字。

「S」の形式と有生／無生の意味的属性の相関関係を調べた結果、有生では代名詞、無生では語彙名詞の傾向が強いことが確認でき、その結果は統計的にも支持された (χ^2 値 = 149.7)。日本語では有生／無生、省略／語彙名詞に対立的な関連性が確認できたが (4.4.1 項)、英語では、有生／無生、代名詞／語彙名詞の間に対立的な関係が確認された。文法関係「S」が好む伝達情報として、「無生／語彙名詞」の組み合わせは日本語と類似しているが、有生の組み合わせに日本語と英語には違いが見られ、英語では代名詞が好まれる。日本語と英語では、「S」の形式と意味的属性に共通な特徴と異なる点が観察された。

- (181) a. It was still not long after the end of the war, yet I_i was dazzled by the material affluence of America and ϕ_i impressed by the cheerful, uninhibited behavior of its people. (土居 E4)
 (dS, Ani,H) Vt-PASS
 b. The fellow [who was Mr. Mizoguchi's partner at the time] was even shot dS (LEX, Ani,H) Vt-PASS
 at with a pistol at the door to his own house. (宮部 E45)
 c. Besides the almost daily checkups and tests, she wasscheduled S (PRO, Ani,H) Vt-PASS
 to talk with a therapist as well. (角田 E49)
 d. A lot of people_i who_i had been burned out of their homes seemed dS (REL, Ani, H) Vt-PASS
 to be sheltering in the station, but it was difficult to tell for sure in the pitch darkness. (井伏 E48)

- (182) a. The Genroku era_i ended in 1704 and ϕ_i was followed by the
(dS, InA) Vt-PASS

- Hoei era. (堺屋 E23)
- b. A major search was mounted, focusing mainly on Izu and Tokyo.
 dS (LEX, InA) Vt-PASS (角田 E57)
- c. A headline_i on one of them jumped at her as if it had been cut out
 dS (PRO, InA) Vt-PASS
 and placed in relief: High-School Girls Leap from Roof After Fugitive
 Love Affair. (角田 E53)
- d. (The problem was that if everyone worked hard and saved money, then
 the macro-economy would be knocked out of balance.)
 This is called gosei no gobyu (compound fallacy).
 dS (DEM, InA) Vt-PASS (堺屋 E48)

表 65 「dS」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	10	25.0%	23	39.7%	33	33.7%
語彙	12	30.0%	22	37.9%	34	34.7%
代名詞	14	35.0%	3	5.2%	17	17.3%
その他	4	10.0%	10	17.2%	14	14.3%
合計	40	100.0%	58	100.0%	98	100.0%

$$\chi^2=14.9, pf=3, p<.01$$

「dS」の形式と意味的属性の関係で特徴的なことは、「dS・無生・代名詞」の組み合わせが極端に低いことである。本研究のデータにおいて「dS・無生」の組み合わせの相手には (182c) のような受動態よりも省略項か語彙名詞の方が好まれ、「dS・無生・代名詞」は有標と考えられる。「dS」の形式と意味的属性の相対的な関係を見てみると、有生／無生という意味的なものさしは有効に機能しており、「dS」は「代名詞・無生」以外の可能性が高いと考えられ、この結果は統計的にも支持された (χ^2 値=14.9)。

日本語の「dS」と英語の「dS」を比べると、その分布はかなり異なる。日本語の結果は、「dS・有生・省略」と「dS・無生・語彙名詞」が対立的であったが、英語の結果にはそのような対立は見受けられない。また、日本語では有生 42 例、無生 46 例とその度差に際立

った隔たりがなかったが、英語では「dS」98 例中、無生 58 例 (59.1%) となり、無生の出現率が高かった。

最後に、「A」の有生性を見ていきたい (表 66)。「A」で有生の形式は、(183a) の省略、(183b) の補文内の語彙名詞、(183b) の主節や (183b) の副詞節内の代名詞として現れ、その他の形式は (183d) の関係詞を含め 17 例のみであった。

- (183) a. With an ear cocked toward her mother's movements downstairs, Aoi_i
 crept on tiptoe to the phone in the hallway, ϕ_i lifted the handset,
 (A, Ani,H) Vt
 and swiftly punched in the number. (角田 E1)
- b. I saw, in the morning paper he had left sprawled on the table,
 A (PRO, Ani,H)
 an article reporting that a mentally retarded youth had
 CMPL A (LEX, Ani,H) Vt
 assaulted a female student at a camp school. (大江 E70)
- c. Mr. Mizoguchi himself would get threatened sometimes by these guys
 when he asked them to forgo collecting.
 CONJ A (PRO, Ani,H) Vt (宮部 E44)
- d. Desire was easy enough to arouse, but where was the clerk_i
 who_i'd remind you of the spiraling monthly payments,
 A (REL, Ani, H)-AUX Vt
 or who_i'd say "Better leave it at that for today."
 CONJ A (REL, Ani, H)-AUX Vt (宮部 E30)

一方、無生の「A」は、(184a) の省略、(184b) の語彙名詞、(184c) の指示詞を含むその他の形式が見られた。(184d) のような代名詞はわずかに 9 例のみであった。

- (184) a. Lending_i money to the daimyo was a matter of receiving interest but
 ϕ_i did not involve real production of any kind.
 (A, InA) PAST NEG Vt (堺屋 E16)

- b. Our side didn't fire a single shell, not even when the whole sky
A (LEX, InA) PAST-NEG Vt
was crawling with B-29's. (井伏 E43)
- c. This¹⁴⁸ struck me as very odd indeed.
A (DEM, InA) Vt (土居 E33)
- d. My difficulty in saying “thank you_i” arose, I imagine, from a feeling that
it_i implied too great an equality with someone who was
A (PRO, InA) Vt
in fact my superior. (土居 E18)

「A」の形式と意味的属性の相関関係を調べたところ、「S」とは異なる特徴が見えてくる。「S」の有生／無生それぞれの出現例数差はそれほど際立ったものではないが（「S」有生 275 例／無生 277 例）、「A」の場合は明らかに有生の出現が優位である。さらに、代名詞の有生／無生に偏向があり「A・有生・代名詞」も組み合わせが最も好まれることが確認できる。この結果は統計的にも支持された（ χ^2 値＝92.8）。「A」の形式決定に有生／無生の意味的なものさしが有効に機能していることがわかる。

表 66 「A」の意味的属性

形式	有 生		無 生		合 計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	143	30.1%	31	30.4%	174	30.2%
語彙	90	18.9%	37	36.3%	127	22.0%
代名詞	225	47.4%	9	8.8%	234	40.6%
その他	17	3.6%	25	24.5%	42	7.3%
合計	475	100.0%	102	100.0%	577	100.0%

$$\chi^2=92.8, \text{ pf}=3, \text{ p}<.001$$

「A」の形式・意味属性の識別に関して、有生性の有効性は日本語のと類似しているが、

¹⁴⁸ “this”の指示先は前文である以下の文全体である。

American hostess, on the other hand, will sometimes proudly describe how she made the main dish, which she produces without offering any alternative even as she gives her guests freedom of choice concerning the drinks that precede or follow it. (土居 E32)

5.5.2 第 2 項の意味的属性

184

も支持され (χ^2 値 = 138.4)、典型的な第 2 項の情報は「O・語彙・無生」といえる。

表 67 「O」の形式と意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	3	3.0%	48	10.1%	51	8.8%
語彙	41	40.6%	291	61.1%	332	57.5%
代名詞	53	52.5%	34	7.1%	87	15.1%
その他	4	4.0%	103	21.6%	107	18.5%
合計	101	100.0%	476	100.0%	577	100.0%

$$\chi^2=138.4, \text{ pf}=3, \text{ p}<.001$$

第 2 項の形式・意味属性をもう少し詳しく見てみると、日本語との類似点・相違点が見えてくる。「語彙・無生」と「省略・有生」の主要な対立は日本語の結果 (4.4.3) と類似しているが、日本語では「O・省略・有生」が 6 例のみ出現したのに対し、英語では 53 例も現れている。さらに日本語では「O・代名詞・無生」が皆無だったのに対し、英語では 34 例出現している。日本語では「O・語彙・無生」の一方向に際立って偏っていた分布が、英語の分布はもう少し分散したものになっている。

次に、他動詞構文の主要な文法関係「A」と「O」の相互関係に着目して、形式と意味の組み合わせを確認してみた。その結果、表 68 の分布が確認できた。この表は、日本語分析と同様に、機能語的特徴の強い名詞化辞等を除き省略項・語彙項・代名詞項の 3 つの形式と文法関係 (A,O)、意味的属性の関係を示したものである。

この表からもわかるように、「A」「O」「省略」「語彙」「代名詞」「有生」「無生」のそれぞれを組み合わせた場合、「第 1 項・A・代名詞・有生」＋「第 2 項・O・語彙・無生」で談話内に現れる頻度が最も高い (93 例 22.1%)。日本語の優位な組み合わせである「第 1 項・A・省略・有生」＋「第 2 項・O・語彙・無生」と比べると、「A・有生・O・語彙・無生」というバイアスの方向性は類似しているが、第 1 項の形式に違いが見られる。他動詞構文の項の形式・意味属性の分布を細かく分析したところ、日本語・英語の振る舞いに類似点と相違点があることが確認できた。

表 68 他動詞の項の形式と意味

文法関係		O								
A	意味		有生						無生	
	意味	形式	省略		語彙		代名詞		省略	
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
	有生	省略	1	0.2%	13	3.1%	11	2.6%	6	1.4%
		語彙	0	0.0%	8	1.9%	4	1.0%	8	1.9%
		代名詞	2	0.5%	13	3.1%	17	4.0%	31	7.4%
A	無生	省略	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
		語彙	0	0.0%	1	0.2%	5	1.2%	1	0.2%
		代名詞	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	合計		3	0.7%	36	8.6%	37	8.8%	46	11.0%

5.6 英語の分析のまとめ

日本語の指示対象の識別方略の分析方法を援用して、英語のテキストの分析・検証を行ってきた。ここでは分析結果をまとめてみたい。

5.2 項では「単一語彙項の制約 (one lexical argument constraint)」に着目し、1 節内に指示対象が語彙名詞でいくつ出現するかを確認した。この制約は、話し言葉に適応できるもので書き言葉での検証はされてこなかった。しかし、本研究のデータである書き言葉を対象にして検証した結果、節内に「0」か「1」で談話に現れる場合が 91.2% にものぼり、書き言葉のデータを対象にしてもこの制約が機能することを確認した。それに加え音声形式をもった項が節内に「0」か「1」で現れる場合も 71.1% とかなり高頻度であることも指摘した。

次に、5.3 項と 5.4 項では項の形式と文法関係の関連性を検証した。「S」位置に置かれやすい形式は語彙名詞と代名詞で、語彙名詞が最も頻度が高かった。「A」の形式は、省略・語彙名詞・代名詞の頻度が高く、そのうち代名詞の頻度が最も高く、無標の形式と確認された。一方「dS」の場合は、省略と語彙名詞に頻度の差は見られず、代名詞の頻度も「S」「A」に比べ極端に低く、有標な形式と確認された。このように個別に分析した文法関係「S」「A」「dS」「O」を全体的な関係でとらえ直すと、4 つの文法関係の間には対格的特徴と能格的特徴の 2 つの側面が存在することが確認された。

最後に、5.5 項では項の形式・文法関係・意味的属性の総合的關係を検証してみた。必須項が1つの「S」では「有生・代名詞」と「無生・語彙」の2極が無標で、「dS」では「有生・省略」と「無生・代名詞」の2極が有標であった。一方、必須項が2つの他動詞構文の場合の無標は、「A・有生・代名詞」と「O・無生・語彙」のそれぞれ1極に引き合う形で分布していた。

項位置がどのような情報を運びながら談話内に現れているかを精査した結果、英語も日本語と同様、形式・文法関係・意味的属性の組み合わせに制限が加えられていることが観察できた。

第 6 章 韓国語の分析と結果

第 5 章の英語分析に続き、この章では韓国語での指示対象の識別条件を精査・検証していく。まず、6.1 節では韓国語分析を概観し、次の 6.2 節から実際の分析結果を示す。6.2 節では韓国語における語彙項の制約の有効性を見ていく。続いて、6.3 節では第 1 項と第 2 項の形式、次の 6.4 節では項の形式と文法関係の検証結果を示していく。6.5 節では第 1 項と第 2 項の形式と意味的属性の関連性を検証し、最後の 6.6 節で韓国語分析のまとめを行う。

6.1 韓国語分析の概要

韓国語分析の対象テキストは、3 章で述べた日本語テキストの翻訳版を使用した。日本語テキスト全ての内容をカバーしている箇所を抽出したうち、韓国語テキストの分量を一定にする意味で文字数を 2000 程度に合わせたものを対象テキストとした。6 作品それぞれの文字数、節数、文数は表 69 の通りである。

表 69 韓国語テキスト詳細

韓国語タイトル	文字数	節数	文数
1. 아마에의 구조 amaey-uy kwuco 「甘えの構造」	2167	175	49
2. 일본을 이끌어 온 12 인물 ilpon-ul ikkul.e on 12 inmwul 「日本を作った 12 人」	2467	314	114
3. 검은 비 kem-un pi 「黒い雨」	2308	174	55
4. 조용한 생활 coyongh-an saynghwal 「静かな生活」	2349	189	61
5. 인생을 훔친 여자 insayng-ul hwumchi-n yeca 「人生を盗んだ女」(火車)	2033	147	54
6. 대안의 그녀 tayan-uy kunye (対岸の彼女)	2362	191	69

分析の手順は日本語と同じだが、確認のため (186) の例文を使って簡単に説明しておく。

- (186) 금연 차량의 빈자리를 보고 자리를 잡은 뒤 자료가 든 가방을 발 밑에 놓았을 때 전차가 움직이기 시작했다.

[CL1 ϕ_i kumyen chalyang-uy pincali-lul po-ko]
 (ϕ_i = 「本間」) 禁煙 車両-の 空席-ACC 見る-CONJ
 (N1, A, Ani,3) O (N2, LEX, InA)

[CL2 ϕ_i cali-lul cap-un twi]
 ϕ_i 座席 (N2)-ACC 探し-REL 後
 (N1, A, Ani) O (N2, LEX)

[CL3 ϕ_i [calyo-ka tu-n] kapang-ul pal mith-ey
 ϕ_i 資料-NOM 入る-REL¹⁴⁹ カバン-ACC 足 元-に
 (N1, A) S (N1, LEX) O (N2, LEX)

noh-ass-ul ttay]
 置く -PAST-REL 時

[CL4 cenchka-ka wumciki-ki sicakhay-ss-ta]
 列車-NOM 動く -NMZ 始める -PAST-DEC
 S (N1, LEX) O (N2, NMZ)

「(本間) 禁煙車両の空席を見て座席を探してから、資料の入ったカバンを足元に置いたときに電車が動き始めた」 (宮部 K4-8)

(186) の節構成を見てみると、節 CL4 の主節と節 CL1～節 CL3 の副詞節、および節 CL3 に埋め込まれた関係節から成り立っている。次に項の形式と文法関係と意味的属性を見てみると、節 CL1 の他動詞「보다 (pota) 見る」の第 1 項は主人公である「本間」であるが具現化されおらず省略形式としてコード化されている。その一方で、第 2 項は語彙名詞「빈자리 (pincali) 空席」として具現化している。節 CL1 の第 1 項は文法関係「A」、意味的属性「人間」「3 人称単数」で、第 2 項「빈자리 (pincali)」は文法関係「O」、意味的属性「非人間」と分類した。同様に節 CL2 と節 CL3 において、第 1 項が「省略・A・有生」で出現し、第 2 項は「語彙名詞・O・無生」で現れている。主節 CL4 では、第 1

¹⁴⁹ 韓国語の連体修飾標識は述語の種類（動作動詞か状態動詞かコピュラ文か）や時制によって形態が異なる。詳しくは Sohn (1999) や 白 (2004) 参照されたい。

項「語彙名詞・S・無生」の自動詞文である。

以上の方法でアノテーションを行い、それらを基に次の4項目に着目して分析を行った。

- 1) 項構造における語彙項1つの制約 (6.2)
- 2) 第1項の形式の関係 (6.3)
- 3) 項の形式と文法関係 (6.4)
- 4) 項の形式と意味属性 (6.5)

6.2 節構造における語彙項1つの制約

日本語の分析では、1節内で複数の語彙名詞を使用することは避けられる傾向があることを指摘したが(4.1項)、類型論的に類似した韓国語ではどのような結果が得られるだろうか。日本語との比較を念頭に韓国語のデータを分析してみた。

「語彙項の制約」の有効性を検証するための分析方法を例示しながら説明することにした。後の分析結果の表に現れてくる語彙項数「0」、「1」、「2」、「3」とは(187)の(a)～(d)のような場合である。語彙項数「0」とは、(187a) CL1の関係節内をはじめCL2、CL3のように主要な項が全く現れていない場合である。語彙項数「1」の例は(187b) CL1やCL2のように必須項が現れている場合で、語彙項数「2」の例は(187c)である。語彙項数「3」の例は(187d)で、N1、N2、N3の3つの項が現れている場合である。

- (187) a. 상식에서 벗어난 말이라 해도 일단 말해 버린 이상 내게는
중요한 일이기도 했다.

[CL1 [ϕ_i sangsik-eyse pesena-n] mal_i-i-la hay-to]

ϕ_i 常識-から 抜け出す-REL 話-COP-QT しても

[CL2 ϕ_j iltan malhay peli-n isang] [CL3 ϕ_i nayj-key-nun

ϕ_j 一旦 話す しまう-REL 以上 ϕ_i 私-に-TOP

cwungyohan il-i-ki-to hay-ss-ta

重要な こと-COP-NMZ-も する-PAST-DEC

「常識から抜け出した話としても、ひとまず話してしまった以上私には重要なことでもあった」 (大江 K20)

- b. 바이간의 사상은 이극고 제자들에 의해 전국으로 퍼져나가 이시다 심학의
강습소가 전국 각지에 설립되기에 이른다.

[CL1 paikan-uy sasang-un iukko ceyca-tul-ey uyhay
梅岩-の 思想-TOP やがて 弟子-pl-に よって

N1

cenkwuk-ulo phecy.e naka] [CL2 isita simhak-uy
全国的-に 広がる-INF¹⁵⁰ 出ていく 石田 心学問-の
kangsupso-ka cenkwuk kakci-ey sellip-toy-ki-ey
講習所-NOM 全国 各地-へ 設立-なる-NMZ-へ

N1

ilu-nta

至る-DEC

「梅岩の思想はやがて弟子によって全国に広がって行って石田心学の講習所
が全国各地に設立されることになる」 (堺屋 K74)

- c. 아오이는 자신이 어디에도 가지 못했다는 사실을 깨달았다.

aoi-nun [casin-i eti-ey-to ka-ci moshay-ss-ta-nun]
葵-NOM [自身-NOM どこ-へ-も 行く-SUP できない-PAST-DEC-REL]

N1

sasil-ul kkaytal-ass-ta
事実-ACC 悟る-PAST-DEC

N2

「葵は自分がどこにも行けなかった事実を悟った」 (角田 K27)

- d. 무언가 갖고 싶은 것이 없냐고 묻는 아빠에게 아오이는 주간지를
부탁했다.

[ϕ_i mwuen-ka kac-ko siph-un] kes-i eps-nyako]
ϕ_i 何-NOM 持つ-QT 欲しい-REL 物-NOM ない-QT
mwut-nun appa-eykey aoi_i-nun cwukanci-lul pwuthakhay-ss-ta
尋ねる-REL 父-へ 葵-TOP 週刊誌-ACC 頼む-PAST-DEC
N3 N1 N2

「何か欲しいものはないかと尋ねる父に葵は週刊誌を頼んだ」 (角田 K64)

以上のように分類した 1 節内の語彙名詞の出現頻度を確認したところ表 70 のような結

¹⁵⁰ 日本語の連用形に相当する infinitive suffix。詳しくは Sohn (1999) を参照されたい。

果になった。「語彙項数 0」の 358 例と「語彙項数 1」の 723 例で全体の約 9 割を占め、日本語の結果と類似していた。韓国語においても「語彙項の制約」は有効に機能していると考えられる。

次に、日本語と英語の分析同様「語彙項の制約」をもう少し強め、代名詞など何等か音形を持つ形式が現れるかどうかを対象に 1 節内の項の数を確認してみた。その結果表 71 のような結果になった。

表 70 と表 71 を比較すると、表 71 の語彙項の制約を強めたバージョンでは、音声形式を持つ「項数 2」が 107 例から 133 例へと増加している。この変化は英語の著しい変化とは異なり日本語の変化に近い。ただ、音声形式を持つ「項数 1」に着目すると、日本語の「項数 1」(57.9%) に比べ韓国語 (62.4%) の出現率が高くなっている。この点が日本語と韓国語の相違点といえる。韓国語は日本語同様「1 節内に語彙名詞を複数使わない」という「語彙項の制約」に加え、さらに制限力の強い「1 節内に音声形式を持った形式を複数使わない」という条件も機能しており、日本語よりも「項数 1」で情報伝達する傾向が強うと考えられる。

表 70 1 節内の語彙項の数

項数	数	割合
0	358	30.1%
1	723	60.8%
2	107	9.0%
3	2	0.2%
合計	1190	100.0%

表 71 音声形式を持った項の数

項数	数	割合
0	312	26.2%
1	743	62.4%
2	133	11.2%
3	2	0.2%
合計	1190	100.0%

6.3 項の形式

ここでは韓国語のテキストで第 1 項と第 2 項がどのような形式で分布しているかを確認した結果を示していく (表 72 と表 73)。まず、以下の (188) で具体例を示し、その後形式分布の結果を示す。

- (188) 이런 경우 미국인은 정작 그날의 식사에 대해서는 좋아하는지 싫어하는지
아예 묻지도 않으면서, 간혹 식사중에 그 음식을 어떻게 만들었는지

자랑스럽게 이야기하면서도 식사 전후의 술이나 음료에 관해서는 손님에게 선택의 자유를 준다.

[CL1 ilen kyengwu mikwukin_i-un [cengcak kunal-uy
 このような場合 アメリカ人_i-TOP 本 当 に そ の 日 - の
 N1 (LEX)

siksa-ey tayhayse-nun ϕ_j cohaha-nun-ci silheha-nun-ci]
 食 事 - に 対 し て - TOP ϕ_j 好 む - REL - SUP 嫌 う - REL - SUP
 N2 (CMPL)

ayey mwut-ci-to anh -u.myense]
 決 して 尋 ね る - SUP - も NEG - CONJ

[CL2 kanhok siksacwung-ey [ϕ_i ku umsik-ul ettehkey
 時 々 食 事 中 - に ϕ_i そ の 食 事 - ACC ど う や っ て
 (N1) N2 (LEX)

mantul-ess-nun-ci] calangsulepkey ϕ_i iyakiha-myense-to]
 作 る - PAST - REL - SUP 誇 ら し げ に ϕ_i 話 す る - CONJ - も
 N2 (CMPL) (N1)

[CL3 siksa cenhwu-uy swul-inaumlyo-ey kwanhayse-nun sonnim-eykey
 食 事 前 後 - の 酒 - や 飲 み 物 - に 関 し て - TOP お 客 - へ
 senthayk-uy cayu-lul ϕ_i cwu-nta]
 選 択 - の 自 由 - ACC ϕ_i 与 え る - DEC
 N2 (LEX) (N1)

「このような場合アメリカ人は主な御馳走については好きか嫌いかわ有無をいわせず、時には食事中どうやってつくったかを得々とのべながらも、食事前後の飲み物については客の選択の自由をゆるす」 (土居 K37)

(188) CL1 は第 2 項に補文が現れている他動詞構文で、主節の第 1 項は「미국인 mikwukin アメリカ人」として語彙名詞で現れている。(188) CL2 も第 2 項に補文が現れている他動詞構文だが、主節の第 1 項は音声形式を持って現れていない省略形式である。(188) CL3 は上の 2 つの節と同じ他動詞構文だが、第 2 項は補文ではなく語彙名詞「자유 cayu 自由」で現れている。CL3 の第 1 項は CL2 と同様省略形式として分類している。

第1項のその他の形式は、数詞 (189a)、代名詞 (189b)、指示詞 (189c)、名詞化辞 (189d) などである。

- (189) a. 둘이는 맥없이 기다리는 수밖에 없어 천천히 도시락을 먹고 있는데
상행열차가 들어 왔다.

[CL1 twuli-nun mayk.eps.i kitali-nun swu-pakk-ey eps.e]

二人-TOP 力なく 待つ-REL 方法-他-に なく

N1 (QNT)

[CL2 ϕ_i chenchhenhi tosilak-ul mek.ko iss-nun-tey]

ϕ_i ゆっくり お弁当-ACC 食べて EXI-REL-時

sanghayngyelcha-ka tul.e-wassta

上り列車-NOM 入る-来る-PAST-DEC

「二人は力なく待つしかなくてゆっくり弁当を食べていると上り列車が入ってきた」
(井伏 K52)

- b. 하지만 나는 내가 겪은 난처함이 단순히 어학적인 문제에 그치는 것이
아니라는 것을 그때 이미 어렴풋이 느끼기 시작했다.

haciman na-nun [[nay-ka ϕ_i kyekek-un] nancheha-m-i

しかし 私-は 私-NOM ϕ_i 経験する-REL 苦しい-NMZ-NOM

N1 (PRO) N1 (PRO)

tanswunhi ehakcek-i-n mwuncey-ey kuchi-nun] kes-i

単純に 語学的-COP-REL 問題-に とどまる-REL NMZ-NOM

ani-la.nun] kes-ul kuttay imi elyemphwusinukki-ki

NEG-REL NMZ-ACC その時 すでに おぼろげに 感じる-NMZ

sicakhay-ss-ta

始める-PAST-DEC

「しかし私は自分が経験したむずかしさが単に語学的な問題にとどまるのではないことをそのときすでにぼんやり感じ始めていた」
(土居 K23)

- c. 이것은 미시경제, 즉 일개 기업의 경영으로서는 타당한 이론이다

ikes-un misikyengcey cuk ilkay kiep-uy kyengyeng-ulose-nun

これ-TOP ミクロ経済 つまり 一介 企業-の 経営-として-TOP

N1 (DEM)

thatangha-n ilon-i-ta

妥当だ-REL 理論-COP-DEC

「これは、ミクロ経済、つまり 1 つの企業の経営としては正しい理論である」

(堺屋 K43)

d. 혼마가 관여한 것은 예산에 대해 의논할 때뿐이다.

[honma_i-ka kwanyeh-an] kes-un [yeysan.ey

本間_i-NOM 関与する-REL NMZ-NOM 予算-に

N1 (NMZ)

tayhay ϕ_j uynonha-l] ttay-ppwun-i-ta

対して ϕ_j 相談する-PRS 時-だけ-COP-DEC

「本間_iが関与したことは予算に対して（千鶴子_jが）相談するときだけだ」

(宮部 K18)

表 72 第 1 項の形式

第 1 項		
形式	合計	割合
省略	644	54.1%
語彙	424	35.6%
数詞	13	1.1%
代名詞	58	4.9%
再帰	3	0.3%
指示詞	24	2.0%
名詞化辞	24	2.0%
合計	1190	100.0%

表 73 第 2 項の形式

第 2 項		
形式	合計	割合
省略	91	15.9%
語彙	382	66.7%
数量詞	2	0.3%
代名詞	6	1.0%
再帰	1	0.2%
指示詞	16	2.8%
補文	33	5.8%
名詞化辞	42	7.3%
合計	573	100.0%

韓国語の第 1 項の形式は、省略が半数以上（54.1%）で次に語彙名詞が 35.6% と続く。それ以外の形式は合計しても 1 割程度で、この分布は日本語の形式分布（省略 56.7%、語彙 32.1%、その他 11.2%）と類似している。韓国語でも日本語同様、第 1 項の位置に現れる無標の形式は省略で省略・語彙名詞以外の形式が有標な形式という。ただ、省略と語彙

名詞を比べると韓国語の語彙名詞の頻度が若干高い。

次に、第2項の形式の具体例を示しその分析を述べたい。第2項の主な形式は、(190a)から(190d)に提示したような省略、語彙名詞、補文標識、名詞化辞である。

(190) a. 물건별로 그 가게랑 계약해서 조금씩 지불했던 것 같다.

[CL1 ϕ_i mwulkenpyel-lo ku kakey-lang kyeyyakhay-se]

品物別-で その 店-と 契約して

[CL2 ϕ_i cokumssik ϕ_j cipwulhay-ss-ten kes kath-ta]

少しずつ (N2) 支払う-PAST-RELMNZ 同じ-DEC

「(千鶴子が) 商品別にお店と契約して少しずつ支払っていたようだ」

(宮部 K15)

b. 입을 다물자마자,아빠와 엄마 모두가 쇼크를 받았음을 깨달았다.

[CL1 ϕ_i ip-ul tamwul-camaca] [CL2 appa-wa emma

ϕ_i 口-ACC つぐむ-するやいなや 父-と 母

(1) N2 (LEX)

motwu-ka syokhu-lul pat-ass-um-ul kkaytal-ass-ta

みんな-NOM ショック-ACC 受ける-PAST-NMZ-ACC 悟る-PAST-DEC

N2 (LEX)

「(私)口をつぐんですぐ、父と母とがそれぞれショックを受けたのがわかった」

(大江 K12)

c. 하지만 병원에 있는 아오이에게는 무슨 일이 일어났는지 전혀 알 수가 없었다.

[haciman pyengwen-ey iss-nun] aoi-eykey-nun [mwusun

しかし 病院-に EXI-REL 葵-に-TOP 何

il-i ilena-ss-nun-ci] cenhye al swu-ka

こと-NOM 起こる-PAST-REL-SUP 全く わかる 方法-NOM

N2 (CMPL)

eps-ess-ta

ない-PAST-DEC

「しかし、病院にいる葵には何がおこったのか全くわからなかった」

(角田 K34)

- d. 나머지 절반쯤은 히로시마에 연고자를 찾기 위해 왔다는 사람이란 것을 알았다.

[nameci celpanccum-un hiloshima-ey[yenkoca-lul chac-ki
 残り 半分位-NOM 広島へ 縁者-ACC 探す-NMZ
 wihay ka.ss.ta.o-n] salam-ila-n kes-ul] al-ass-ta
 ため 行ってくる-REL 人-COP-REL NMZ-ACC 悟る-PAST-DEC
 N2 (NMZ)

「残りの半分は広島へ縁者を探しに行ってきた人たちだと分かった」

(井伏 K55)

第2項の形式分布の特徴は、語彙形式の出現頻度が抜きん出ているところである。第2項は省略や代名詞で出現する場合もあるが、7割近くが語彙形式に集中している。第1項に比べ第2項にはなるべく意味の齟齬が生じないように、形式と意味が対応した語彙形式が好まれるようである。この結果は4.2項で示した日本語や5.3項で示した英語の結果と類似している。ただ、頻度差を見てみると、韓国語 66.7%、日本語 58.2%、英語 57.5% と3言語間には「韓国語＞日本語＞英語」の関係が成り立つようである。

6.4 項の文法関係

4.3項で日本語の文法関係と形式の相関を示したように、ここでは韓国語の項の文法関係と形式について述べていく。まず、「S」「A」「dS」¹⁵¹の具体例と分析結果を示し、続いて各文法関係と形式の包括的な相関関係を述べる。

6.4.1 文法関係

本研究データ 1190 例の第1項のうち、文法関係「S」「A」「dS」で現れたのはそれぞれ 587 例、573 例、30 例であった（表 74）。各文法関係と形式の具体例を示しながら結果を述べていく。

まず、「S」の形式を見てみると、587 例の約 5 割近くが語彙名詞（例えば 191a）で 4 割近くが省略（例えば 191b）である。この結果を日本語と比較すると（4.3.1 項を参照、省略と語彙名詞ともに 43.3%）、韓国語は日本語に比べ「S」位置に現れる形態は語彙名詞が

¹⁵¹ 文法関係「DO」の形式は 6.3 項の表 72 と同一なのでこの項では提示していない。

好まれるようである。「S」位置が省略形式と語彙形式で約 9 割を占めるという点は日本語と韓国語では共通しているが、語彙名詞の頻度が省略形式を上回るという点が日本語との違いと考えられる。

表 74 文法関係と形式

文法関係	S		A		dS	
形式	数	割合	数	割合	数	割合
省略	227	38.7%	404	70.5%	13	43.3%
N	287	48.9%	123	21.5%	14	46.7%
数詞	5	0.9%	7	1.2%	1	3.3%
代名詞	24	4.1%	35	6.1%	2	6.7%
指示詞	20	3.4%	4	0.7%	0	0.0%
名詞化辞	24	4.1%	0	0.0%	0	0.0%
合計	552	100.0%	573	100.0%	30	100.0%

(191) a. 결국 각 번의 재정은 점점 악화되어 갔다.

Kyelkwuk kak pen-uy cayceng-un cemcem akhwatoye
結局 各 藩-の 財政-NOM 段々 悪化する
S (LEX)

ka-ss-ta

行く -PAST-DEC

「結局 各藩の 財政は 段々 悪化していった」 (堺屋 K16)

b. 그러자 그는 어리둥절한 얼굴로 What are you sorry for 라고 되물어 아주
당황스러웠다.

kuleca [CL1 ku-nun elitwungcelha-n elkwull-o What are you sorry
すると [CL1 彼-TOP 戸惑う-REL 顔-で
for lako toymwul.e]
QT聞き直す-INF

[CL2 ϕ acwu tanghwangsulew-ess-ta

φ とても 面食らう-PAST-DEC

(S=1)

「すると彼は戸惑った顔で **What are you sorry for** だと聞きなおしてきたの
で（私）すっかり面食らってしまった」 (土居 K18)

次に、「A」の形式を見てみると、省略形式（例えば(192) CL2）が7割以上で語彙名詞（例えば(192) CL1）は2割にとどまっている。「S」の分布と異なり省略の傾向が強く、日本語の「A」の形式分布（省略 71.5%、語彙名詞 19.8%）とほぼ同じような結果となった。他動詞主語の位置に置く形式は日本語と韓国語の間に差異があまりなく、省略項の使用に大きく傾いていると考えられる。

(192) 통화 상태가 나빠졌는지 젊은이는 혀를 차면서 전화 스위치를 꺼버렸다.

[CL1 **thonghwa sangthay-ka nappacy-ess-nunci**]

通話 状態-NOM 悪くなる-PAST-SUP

[CL2 **celm.un.i_i-nun hye-lul cha-myense**]

若者 _i-TOP 舌-ACC 打つ-CONJ

A (LEX)

[CL2 φ_i **cenhwa suwichi-lul kke.pely-ess-ta**]

φ_i 電話 スイッチ-ACC 消す.しまう-PAST-DEC

(A)

「通話状態が悪くなったのか若者は舌を打ちながら電話のスイッチを切ってしまった」 (宮部 K11)

最後に、「dS」の形式を見てみる。(193a)のように形態的受身の形態素がある場合を受身表現と分類している。また、6.1 項で述べたように韓国語では使役を示す形態素と受身を示す形態素が重複しているものがあり、(193b)の「書かせる/書かれる」¹⁵²のように形式が同一の場合は意味から考えて受身とした。それに加え、(193c)のように迂言的な

¹⁵² 使役「書かせる」の例は以下の通り。

자신의 이름을 쓰였다

casin-uy ilum-ul ssu-ye ss-ta

自身-の 名前-ACC 書く-CAUS PAST-DEC 「自分の名前を書かせた」

受身も受身として分類している。

- (193) a. 삼면이 산으로 둘러싸 인고원 마을로…

[ϕ_i sammyen-i san-ulo twullessa.i-n] kowen mau_il-lo…
 ϕ_i 三面-NOM 山-に 囲む.PASS-REL 高原 村_i-で
 (dS)

「三方が山に囲まれた高原の村で」 (井伏 K13)

- b. 아오이는 글씨들을 훑으면서 나나코의 안부와 거처가 쓰여 있지 않은가
 해서 필사적으로 찾고 있었다.

aoi-nun kulssitul-ul hwulth-umyese nanakho-uyanpwu-wa
 葵-TOP 文字-ACC 隅々まで調べる-CONJ ナナコ-の 安否-と
 keche-ka ssu-ye iss-ci anh-unka hayse philsacek-ulo
 居場所-NOM 書く-PASS EXI-SUP NEG-INT 思う 必死-に
 dS

chac-ko iss-ess-ta

探す-QT EXI-PAST-DEC

「葵は文字を隅々まで調べてナナコの安否と居場所が書かれていないかと思
 い必死に探していた」 (角田 K61)

- c. “자신을 도우십시오”라는 말은 낯선 손님에 대해 아무래도 이상한
 말이라고 생각되었다.

“casin-ul towu-sipsio” la-nun mal-un nachse-n
 “自分-ACC 助ける-HON” IMP-REL 言葉-TOP 面識がない-REL
 sonnim-ey tayhay amwulayto isangha-n mal-i-lako
 お客さん-に対し どうしても 奇妙だ-REL こと-COP-QT
 sayngkak-toy¹⁵³-ess-ta
 考える-なる-PAST-DEC

「“自身を助けなさい”という言葉は慣れないお客さんに対してやはり変な事
 だと思われた」 (土居 K42)

¹⁵³ 漢字語語幹に「하다 hata/되다 toyta」(する/なる)で能動/受動の対立を示すことができる。
 (193c) の場合「생각하다/되다 sayngkak-hata/-toy (考える/考えられる)」の対立がある。

以上のようにアノテーションを行い分析したところ、「dS」の形式は省略（43.3%）と語彙名詞（46.7%）の頻度が拮抗しており、「dS」位置に使われやすい形式は省略、語彙名詞の両者であることがわかった。この分布は日本語の「dS」は省略傾向が高かった点と比べると異なりを見せているといえる。興味深い点は、韓国語の「dS」形式分布が日本語の「S」の形式分布に類似している点である。

今回の文法関係と形式の分析から第1項の位置に現れる文法関係と「名詞化辞」に非常に強い制限がかかっていることも確認できた。日本語では「S」と「dS」に見られた「名詞化辞」との組み合わせが、韓国語では「S」のみであった。「名詞化辞」が現れる文法関係の位置は極度に制限されているといえるだろう。

文法関係と形式を分析した結果、「S」は語彙名詞寄り、「A」は省略寄りの分布を示し、「dS」では省略・語彙名詞に際立った違いは見られなかった。また、「A」に関しては日本語と韓国語に類似した分布が確認でき、日本語の「S」と韓国語の「dS」が類似した分布を示すことが確認できた。

6.4.2 文法関係と形式の相関関係

6.4.1 項ではそれぞれの文法関係の形式分布を確認したが、ここでは第2項を含めた項構造全体での文法関係と形式の関係を見ていく。日本語と英語分析と同様に必須項が1つか複数かということを基準に文法関係をまとめ、形式との包括的な関係を検証してみた。その結果が表75である。

表 75 包括的な文法関係と形式

文法関係	A		S/dS		O		合計	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	404	70.5%	240	38.9%	91	15.9%	735	41.7%
語彙	123	21.5%	301	48.8%	382	66.7%	806	45.7%
代名詞	35	6.1%	26	4.2%	7	1.2%	68	3.9%
その他	11	1.9%	50	8.1%	93	16.2%	154	8.7%
合計	573	100.0%	617	100.0%	573	100.0%	1763	100.0%

$$\chi^2=422.4, \quad pf=6, \quad p<.001$$

日本語の分析 4.3.5「文法関係と能格性」では、語彙化か否かをものさしにすると日本

語の文法関係と形式の間には「A < S/dS < O」の関係が成り立ち、省略か否かを基準にすると「A 対 S/dS ,O」の能格的な関係が成り立っていることを述べた。韓国語を見ると、語彙化傾向は「A < S/dS < O」で、省略を中心にみると「A 対 S/dS ,O」の能格的な関係がよりはっきりと観察できる。文法関係と形式の関係は、日本語同様能格的な傾向を持つと考えられる。

6.5 項の形式と意味的属性

6.4 項では、節内の主要な名詞句である項の形式と文法関係との関係を見たが、ここでは項がもつ意味的属性と項の形式の関係を見て行く。日本語の分析と同様「有生性 (animacy)」に着目し名詞句がどのような情報を提供しながら談話内に存在しているかを検証していく。

6.5.1 第 1 項の意味的属性

第 1 項および第 2 項に現れる名詞句が持つ意味的属性の結果を説明するにあたり、まず必須項が 1 つの自動詞構文、それに続き受動構文と他動詞構文の意味的属性の分析結果を示していく。意味的属性のパラメーターは、日本語と同様「有生／無生」「人間／非人間」、および「人称代名詞」である。

まず、第 1 項の文法関係「S」とその形式と意味属性の関連性を見てみたい (表 76)。(194a) の語彙名詞 (CL1, CL4) は「無生」、CL3 の省略は「有生」である。「有生」代名詞は (194b) CL1 の「나 na 私」などである。

表 76 「S」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	157	60.4%	70	21.4%	227	38.7%
語彙	76	29.2%	211	64.5%	287	48.9%
代名詞	24	9.2%	0	0.0%	24	4.1%
その他	3	1.2%	46	14.1%	49	8.3%
合計	260	100.0%	327	100.0%	587	100.0%

$$\chi^2=152.9, \text{ pf}=3, \text{ p}<.001$$

- (194) a. 출발 날짜가 가까워지자 우리집 저녁 식탁을 둘러싸고 앉아 있었는데도
여느 때보다 훨씬 딱딱한 분위기가 감돌았다.

[CL1 chwulpal nalcca-ka kakkawe.ci-ca]
출발 日-NOM 近づく.なる-CONJ

S (LEX, InA)

[CL2 ϕ_i wuli_icip cenyek sikthak-ul twullessa-ko]
 ϕ_i 我_i家 夕食 食卓-ACC

[CL3 ϕ_i anc.a iss-ess-nuntey-to]
 ϕ_i 坐る EXI-PAST-CONJ-も

(S, Ani)

[CL4 yenu ttay-pota hwelssin ttakttakha-n pwunwiki-ka
どんな 時-より はるかに ぎこちない-REL 雰囲気-NOM

S (LEX, InA)

kamtol-ass-ta]

漂う-PAST-DEC

「出発日付が近づく我家夕方食卓を囲んで座っていると普通のときよりはるかにぎこちない雰囲気が漂った」
(大江 K5)

- b. 미국에서의 이 같은 체험 덕에 나는 1952 년에 귀국한 후 내 자신의 눈과 귀로 직접 일본인의 참 모습을 명확하게 밝혀보고 싶었다.

[CL1 mikwuk-eyse-uy i kath-un cheyhem tek-ey
米国-で-の この ようだ-REL 体験 おかげ-で

na-nun 1952 nyen-ey kwikwukha-n hwu]
私-TOP 1952 年-に 帰国する-REL 後]

S (PRO,1, Ani)

[CL2 nay casin-uy nwun-kwa kwi-lo cikcep ilponin-uy cham
私 REFL-の 目-と 耳-で 直接 日本人-の 本当

A (PRO, 1, Ani)

mosup-ul myenghwakhakey palkhye-po-ko siph-ess-ta]
姿-ACC 明確に 明らかにする-見る-QT たい-PAST-DEC

「米国でのこのような体験のおかげで私は 1952 年に帰国した後自分自身の目

と耳で直接日本人の真の姿を明確に明らかにしたいと思った」(土居 K49)

「S」の形式と有生／無生の意味的属性の相関関係を調べた結果、有生では省略、無生では語彙名詞の傾向が強いことが確認でき、その結果は統計的にも支持された (χ^2 値 = 152.9)。日本語の結果 (4.4.1 項) 同様、韓国語でも「S」位置が好む伝達情報は「有生／省略」「無生／語彙名詞」で、文法関係・形式・意味の組み合わせに制限があることがわかった。

次に「dS」の形式と有生性を見ていきたい (表 77)。「dS・有生」の形式には (195a) S2CL3 の省略、(195b) CL1 の語彙名詞などがある。

表 77 「dS」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	6	54.5%	7	36.8%	13	43.3%
語彙	3	27.3%	11	57.9%	14	46.7%
代名詞	2	18.2%	0	0.0%	2	6.7%
その他	0	0.0%	1	5.3%	1	3.3%
合計	11	100.0%	19	100.0%	30	100.0%

n.s. $\chi^2=5.9$, pf=3, $p<.001$

- (195) a. 미시적으로 보면 상가나 농민에게 근면은 너무도 소중한 미덕이었다.
사치를 하면 막부의 단속에 걸려관문 당하고 만다.

S1 misicek-ulo pom-yen sangka-na nongmin_i-eykey

微視的に 見る-CONJ 商家-や 農民-に

kunmyen-un nemwuto socwungha-nmitek-i-ess-ta

勤勉-TOP あまりに 大切だ-REL 美德-COP-PAST-DEC

S2 [CL1 ϕ_i sachi-lul ha-myen]

ϕ_i 贅沢-ACC する-CONJ

[CL2 ϕ_i makpwu-uy tansok-ey kellye]

ϕ_i 幕府-の取り 締まり-に 掛かる

[_{CL3} ϕ_i kwanmwun tangha¹⁵⁴-ko ma.nta]
 ϕ_i 関所 被害を受ける-QT しまう.DEC
 (dS, Ani)

「S1 ミクロで見れば商家でも百姓でも勤勉は大事である S2 贅沢をする
 と幕府の取り締まりに掛かって関所行きにされてしまう」 (堺屋 K53-54)

- b. 아빠가 캘리포니아 대학에 작가로 초대받아¹⁵⁵ 그곳에서 얼마간 머물기로
 했을 때의 일이다.

[_{CL1} appa-ka khaylliphonia tayhak-ey cakka-lo chotay-pat.a]
 父-NOM カリフォルニア 大学-に 作家-で 招待され
 dS (LEX, Ani)

[_{CL2} ϕ_i kukos-eyse elmakan memwul-ki-lo hay-ss-ul
 ϕ_i そこ-で いづらか 留まる-NMZ-に する-PAST-REL
 ttay-uy il-i-ta]
 時-の こと-COP-DEC

「パパがカリフォルニア大学に作家で招待されてそちらでいづらか留まるこ
 とにした時のことだ」 (大江 K1)

一方、「dS・無生」の省略は (196a)、語彙名詞は (196b) のような場合である。「dS・
 無生・省略」の 7 例のうち 5 例は (196a) のような名詞修飾節内に現れていた。

- (196) a. 신문 광고에 실린 사진이나 통신 판매 카탈로그 텔레비전에서 선전하고
 있는 마루이 백화점의 광고등을 보고 있으면…

[ϕ_i sinmwun kwangko-ey silli-n] sacin _i-ina thongsin
 ϕ_i 新聞 広告-に 乗せられる-REL 写真 _i-や 通信
 (dS, InA)

phanmay khathalloku theylleypicen-eyse sencenha-ko iss-nun
 販売 カタログ テレビ-で 宣伝する-QT EXI-REL

¹⁵⁴ 「당하다 tanghata」は本動詞の「当面する」の他補助動詞として使われ受動的な意味になる。

¹⁵⁵ 「받아 pata」は本動詞の「受け取る」の他、接辞として使われ受動的な意味になる。

malwui paykhwacem-uy kwangko tung-ul po-ko iss-umyen
丸井 デパート-の 広告 等-ACC 見る-QT EXI-CONJ

「新聞広告に載せられた写真や通販カタログ、テレビで宣伝している丸井デパートの広告などを見ていれば…」 (宮部 K25)

- b. 바이간의 사상은 이윽고 제자들에 의해 전국으로 퍼져 나가 이시다 심학의 강습소가 전국 각지에 설립되기에 이른다.

[CL1 paikan-uy sasang-un iukko ceyca-tul-ey uyhay
梅岩-の 思想-は やがて 弟子-pl-に よって

cenkwuk-ulo phecy naka]

全国-に 広まる 出る

[CL2 isita simhak.uy kangsupso-ka cenkwuk kakci-eysellip-toy-ki-ey
石田 心学-の 講習所-NOM 全国 各地-に 設立-なる-NMZ-に
dS (LEX, InA)

ilu-nta

至る-DEC

「梅岩の思想はやがて弟子達によって全国に広まっていき石田心学の講習所が全国各地に設立されるに至った」 (堺屋 K74)

表 76 を見ると「S」と同様「dS」の形式と意味的属性の間には有生の省略傾向／無生の語彙化傾向が読み取れる。しかし、その結果から統計的な有意差は得られなかった (χ^2 値 = 5.9)。韓国語では項である名詞句の識別に関して、文法関係「dS」・形式・意味属性の組み合わせは効果的な働きをしているとは言えないようである。

最後に、「A」の有生性を見ていきたい (表 78)。「A」の有生は、(197a) CL2 の省略、(197b) の語彙名詞、(197c) の代名詞として現れている。

- (197) a. 둘이는 어둠을 헤치고 길을 찾아서 산요선 선로를 따라 서쪽으로 갔더니 역인 듯한 곳에 이르렀다.

[CL1 twuli-nun etwum-ul heycho]
二人-TOP 闇-ACC 掻き分け

[CL2 ϕ_i kil-ul chac.a-se]

ϕ_i 道-ACC 探す-CONJ

(A, Ani)

[CL3 ϕ_i sanyosen senlo-lul ttala]

ϕ_i 山陽線 線路-ACC 従う

[CL4 ϕ_i seccok-ulo ka-ss-teni]

ϕ_i 西方-へ 行く-PAST-CONJ

[CL5 ϕ_i yek-in tushan kos-ey ilule-ss-ta]

ϕ_i 駅の-REL ような 所-に 着く-PAST-DEC

「二人は闇をかき分けて道を探して山陽線の線路に従って西方へ行ったら
駅のようなところに到着した」 (井伏 K19)

- b. 회고 말쑥한 방에서 이상하게 이해심이 넓은 어조로 말하는 여자가 ,,
아오이에게는 어떻게 되어도 상관없는 것들을 친근하게 물어왔다.

huyko malsswukha-n pang-eyse [isanghakey ihaysim-i

白くて 小奇麗-REL 部屋-で [奇妙な 思いやり-NOM

nelp-un eco-lo malha-nun] yecaka ,,

広い-REL 語調-で話す-REL] 女性-NOM

A (LEX, Ani)

[aoieyk-ey-nun ettehkey to-yeto sangkwan-eps-nun]

葵-に-TOP どうして なる-ても 関係-ない-REL

kestul-ul chinkunhakey mwul.e-wa-ss-ta

こと-ACC 親しげに 聞く-くる-PAST-DEC

「白いつるんとした印象の部屋でやけにものわかりのいい口調で話す女が
…葵にはどうでもいいことを親しげに訊いてくるのだった」 (角田 K48)

- c. 혼마는 웃으면서 듣고 있었지만 … 그녀는 입을 다물어 버렸다.

[CL1 honma-nun wus-umyense tut-ko iss-ess-ciman ...]

本間-TOP 笑う-ながら 聞く-QT EXI-PAST-けれど

[CL2 kunye-nun ip-ul tamwul.e pely-ess-ta]

彼女-TOP 唇-ACC 閉じる しまう-PAST-DEC

A (PRO. Ani)

「本間は笑いながら聞いていたけれども… 彼女は口を閉じてしまった」

(宮部 K36)

一方、無生の「A」には (198a) の省略、(198b) の語彙名詞の形式が見られた。

- (198) a. 조용히 달리는 기관차를 서서히 한없는 낭떠러지로 인도해 가는 작은 전동기. 하나, 또 하나, 소리도 내지 않고 교체되면서 진로를 바꿔간다.

S1 coyonghi talli-nun kikwancha-lul sesehi han-eps-nun
 静かに 走る-REL 機関車-ACC 徐々に 限界-ない-REL
 nangtteleci-lo intohay ka-nun cak-un centongki_i
 断崖-に 引導する 行く-REL 小さい-REL 電動機_i

S2 [CL1 ϕ_i hana tto hana soli-to nay-ci anh-ko]
 ϕ_i 一つ また 一つ 音-も 出す-SUP NEG-QT

(A, InA)

[CL2 ϕ_i kyochey.toy-myense]
 ϕ_i 入れ替わり.なる-ながら

(A, InA)

[CL3 ϕ_i cinlo-lul pakkwe.kan-ta]
 ϕ_i 進路-ACC 変える. 行く-DEC

「穏やかに走っていた機関車を徐々に限りない断崖に誘導していく小さな転轍機。ひとつ、またひとつ音もたてずに切り替わり進路を変えていく。」

(宮部 E52-3)

- b. 머리를 숙이면 배낭이 목과 머리를 누르고 등을 수평으로 해서
 기어가면 옆구리 아니면 겨드랑 밑으로 돌아간다.

[CL1 ϕ_i meli-lul swuki-myen] [CL2 paynang_j-i mok-kwa
 ϕ_i 頭-ACC 下げる-と リュックサック_j-NOM 首-と

A (LEX, InA)

meli-lul nwulu-ko] [CL3 ϕ_i tung-ul swuphyeng-ulo hayse]
 頭-ACC 押さえる-QT ϕ_i 背中-ACC 水平-に して

[CL4 ϕ_i kiekamyen] [CL5 ϕ_j yepkwuli animyen kyetulang
 ϕ_j 脇腹 NEG 脇

mith-ulo tol.aka-nta]

下-に 回っていく-DEC

「(二人は)頭を下げるとリュックサックが首や頭を押し背中を水平にして這
って行くと脇腹か腋の下へ廻る」(井伏 E47)

表 78 を見ると「A」の分布は省略 (404 例)／語彙 (123 例) の対立、あるいは有生 (509 例)／無生 (64 例) の対立は認められるが、「S」の省略・有生／語彙名詞・無生といった形式と有生性の相補的な関係は確認できなかった。しかし、「A・省略・有生」は全体の 64% を占め、日本語の結果¹⁵⁶同様、「A」位置の情報提供の仕方として最も好まれる組み合わせと考えられる。日本語との違いは「A・語彙名詞・無生」の頻度で、日本語の 28% に比べ 31.3% とやや高めである。

表 78 「A」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	361	70.9%	43	67.2%	404	70.5%
語彙	103	20.2%	20	31.3%	123	21.5%
代名詞	35	6.9%	0	0.0%	35	6.1%
その他	10	2.0%	1	1.6%	11	1.9%
合計	509	100.0%	64	100.0%	573	100.0%

n.s. $\chi^2=7.7$, pf=3, $p<.001$

6.5.2 第 2 項の意味的属性

第 1 項に続き、第 2 項（文法関係「O」）に現れる名詞句の意味的属性を確認し、形式との相関を検証した結果を示し（表 77）、それに続き「A」と「O」の相関関係を示していく。

分析解釈の前に「O」の位置に現れる形式を確認しておく。省略と分析したのは、(199a) CL2 に現れているような場合である。(199a) のような「有生」は 20 例で、「無生」（例えば 199b）は 21 例で「省略／語彙名詞」や「有生／無生」間に際立った違いは見られなかった。「有生・代名詞」（例えば 199c）の頻度は低く 7 例であった。一方、語彙名詞として現れたのは、(199d) の「有生」と (199e) の「無生」のような場合である。

¹⁵⁶ 日本語「A」の省略は 859 例中 554 例の 64.5%。

- (199) a. 인큐베이터에 들어가 있어서 좀처럼 안아볼 수도 없어서 나는 매일 밤 울었다.

[CL1 ϕ_i inkhyupeyithe-ey tul.eka iss.e-se]

ϕ_i 保育器-に 入っていく EXI-CONJ

[CL2 ϕ_j ϕ_i comchelem an-apol swu-to eps-ese]

ϕ_j ϕ_i なかなか 抱く-見る 方法-もない-CONJ

(O, Ani)

[CL2 na j .nun mayil pam wul-ess-ta]

1-TOP 毎日 夜 泣く -PAST--DEC

「(葵_iが) 保育器に入っていたので(私が葵_iを) なかなか抱くこともできなかったのので私は毎晩泣いていた」 (角田 K40)

- b. 소이탄은 몇개를 모아서 함석과 같은 것으로 싸서 낫쇠 철사로 묶은 것 같았다는 것이다.

[CL1 soithan i -un myechkay-lul moase]

焼夷弾 i -TOP 何個か-ACC まとめて

[CL2 hamsek-kwa kath-un kes-ulo ϕ_i ssase]

トタン-と 同じ-REL もの-で ϕ_i 包んで

(O, InA)

[CL3 nossoy chelsa-lo ϕ_i mwukk-un kes kath-assta-nun

真鍮 針金-で ϕ_i 結ぶ-REL NMZ 同じ-PAST-REL

(O, InA)

kes-i-ta]

NMZ-COP-DEC

「焼夷弾は何個かまとめてトタンのようなもので包んで真鍮の針金で結えているらしい」 (井伏 K27)

- c. 갓 결혼한 신부와 함께 장애인 처형이 이사 온다면 젊디젊은 신랑은 우리를 어떻게 맞이할 까.

[CL1 kas kyelhonha-n sinpwu-wa hamkkey cangayca

立った今 結婚する-REL 新婦-と 一緒に 障害者

chehyeng-i isa o-ntamyen]

義兄-NOM 引っ越し 来る-CONJ

[CL2 celmticelm-un sinlang-un wuli-lul ettehkey maciha-l kka

とても若い-REL 新郎-TOP 私達-ACC どのように 迎える-PRS INT

O (PRO, Ani)

「今結婚した新婦と一緒に障害者の兄が転居してくるとしたら若い新郎は私達をどのように迎えるだろう」 (大江 K16)

- d. 잘 아는 일본 사람의 소개로 어떤 미국인을 방문했을 때의 일이다.

[cal a-nun] ilpon salam-uy sokay-lo

よく 知る-REL 日本 人-の 紹介-で

etten mikwukin-ul pangmwunhay-ss-ul ttay-uy il-i-ta

ある アメリカ人-ACC 訪問する-PAST-REL 時-の こと-COP-DEC

O (LEX, Ani)

「よく知る日本人の紹介であるアメリカ人を訪問した時のことだ」 (土居 K7)

- e. 세키몬 심학의 영향이 아직도 강하게 남아 있는 일본에서는 각 부문의 기술자는 뭐든 최고의 것을 만들어 내고 싶어한다.

[seykhimon simhak-uy yenghyang-i acikto kanghakey

石門 心学-の 影響-NOM 今だに 強く

nam.a iss-nun] ilpon-eyse-nun kak pwumwun-uy kiswulca-nun

残る EXI-REL 日本-で-TOP 各 部門-の 技術者-TOP

mwetun choyko-uy kes-ul mantul.e nay-ko siph.eha-nta

何でも 最高-の もの-ACC 作って 出す-QT DES-DEC

O (LEX, InA)

「石門心学の影響がまだ強く残っている日本では各部門の技術者は何だろうと最高のものを作り出したがるのだ」 (堺屋 K111)

表 79 が示すように他動詞文の「O」位置に現れる指示対象の形式と意味的属性の組み合わせでは、「有生」の省略と語彙名詞の間に際立った差異は見られず、「語彙・無生」(573 例中 361 例の 63%) に明確な対立関係があることがわかる。この結果は統計的にも支持され (χ^2 値=111.1)、典型的な第 2 項の情報は「O・語彙・無生」と考えられる。

表 79 「O」の意味的属性

形式	有生		無生		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
省略	20	41.7%	71	13.5%	91	15.9%
語彙	21	43.8%	361	68.8%	382	66.7%
代名詞	7	14.6%	0	0.0%	7	1.2%
その他	0	0.0%	93	17.7%	93	16.2%
合計	48	100.0%	525	100.0%	573	100.0%

$$\chi^2=111.1, pf=3, p<.001$$

第2項の形式・意味属性をもう少し詳しく見てみると、日本語との類似点・相違点が見えてくる。「語彙・無生」と「省略・有生」の主要な対立は日本語の結果(4.4.3)と類似しているが、日本語では「O・省略・有生」が6例のみなのに対し、韓国語では20例出現している。日本語では「O・語彙・無生」の一方向に偏っていた分布が、韓国語の分布はもう少し分散していると考えられる。

最後に、他動詞構文の主要な文法関係「A」と「O」の相互関係に着目して形式と意味の組み合わせを見ると表80のような結果が得られた。日本語分析と同様に機能語的特徴の強い名詞化辞等を除き省略項・語彙項・代名詞項の3つの形式と文法関係(A,O)、意味的要因の関係を示したものである。

表 80 他動詞の項の形式と意味

文法関係			O											
A	意味		有生						無生					
	意 味	形 式	省略		語彙		代名詞		省略		語彙		合計	
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
	有 生	省略	16	3.4%	13	2.8%	2	0.4%	48	10.2%	231	49.3%	310	66.1%
		語彙	2	0.4%	4	0.9%	3	0.6%	11	2.3%	55	11.7%	75	16.0%
		代名詞	2	0.4%	1	0.2%	0	0.0%	6	1.3%	16	3.4%	25	5.3%
	無 生	省略	0	0.0%	2	0.4%	1	0.2%	2	0.4%	34	7.2%	39	8.3%
		語彙	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	3	0.6%	16	3.4%	20	4.3%
合計		20	4.3%	21	4.5%	6	1.3%	70	14.9%	352	75.1%	469	100.0%	

「A」「O」「省略」「語彙」「代名詞」「有生」「無生」のそれぞれを組み合わせた場合、「第1項・A・省略・有生」＋「第2項・O・語彙・無生」で談話内に現れる頻度が最も高い(231例 49.3%) ことがわかる。この結果は、日本語の優位な組み合わせと類似しているが、日本語の頻度 (45.6%) に比べ高いことがわかる。

6.6 韓国語の分析のまとめ

日本語の指示対象の識別方略の分析方法を援用しながら韓国語のテキストを分析・検証を行ってきた。ここでは分析結果をまとめてみたい。

6.2 項では「単一語彙項の制約 (one lexical argument constraint)」に着目し、語彙名詞が節内に「0」か「1」で談話に現れる頻度が 90.9% にも昇りこの制約が機能していることが確認された。それに加え音声形式をもった項が節内に「0」か「1」で現れる場合も 88.6% とかなり高頻度であることも指摘した。

次に、6.3 項と 6.4 項では項の形式と文法関係の関連性を検証した。「S」は語彙名詞で、そして「A」は省略で現れる傾向が強く、「dS」では省略・語彙名詞に際立った違いは見られなかった。また、「A」に関しては日本語と韓国語に類似した分布が確認でき、日本語の「S」と韓国語の「dS」が類似した分布を示すことを確認した。さらに、文法関係「S」「A」「dS」「O」の全体的な相関関係を確認したところ、日本語同様能格的な傾向が見られた。

最後に、6.5 項では項の形式・文法関係・意味的属性の総合的關係を検証してみた。必須項が1つの「S」では「省略・有生」と「無生・語彙」で相補的な関係が成り立ち統計的な有意差が確認できたが、「dS」と「A」ではそのような相補的な関係は確認できなかった。しかし、他動詞構文の「A」と「O」の関係をみると、「A・省略・有生／O・無生・語彙」の組み合わせの出現率が圧倒的に高く無標の情報提供の方法と考えられる。

項位置にどのような情報を置いて談話を構成しているかを精査した結果、韓国語も日本語と同様、形式・文法関係・意味的属性の組み合わせに制限が加わっていることが観察できた。

第 7 章 結論

本研究では、機能的で類型論的な手法と対照言語学的方法論を拠り所に、項省略の生起実態を整理・分類しながら、日本語・英語・韓国語の 3 言語に見られる相違点を考察してきた。本章では、各章での議論を改めてまとめると共に、今後の研究課題及び展望を述べる。

まず、第 1 章では、日本語の第 1 項の省略に関する先行研究について概観し、言語教育における本研究の有用性を述べた。先行研究に関しては、質的分析か量的分析かを基準に分類し、本研究では質的および量的の両方からのアプローチを重視することを述べた。

第 2 章では、本研究の言語観、理論的立場を明確にし、機能的で類型論的な対照言語学的といった包括的なアプローチであることを示した。また、分析対象も、形式・意味・語用論的項目にわたり、包括的な分析であることを明示した。

第 3 章では、量的・質的分析の基盤となる日本語のデータと分析方法を詳細に示した。作例ではなく、小説などの書き言葉を用い、それに細かくアノテーションを加え、独自のコーパスを作成した。それを基に、「単一語彙項の制約 (one lexical argument constraint)」と項の形式・文法関係・意味的属性・交替指示・述語情報に着目して分析を進めることを述べ、項省略を名詞句側の情報と述語側の情報から多角的に分析することを明確にした。

第 4 章では、第 3 章で提示した項目の結果を提示した。まず、談話を構築していく際に好んで用いられる語彙項の数は「0」か「1」の傾向が強く「単一語彙項の制約」が有効に機能していることがわかった。また、語彙項に限らず音声形式で具現化された項の現れ方を確認したところ、1 節内の項の数は「0」か「1」が主流で、具現化した項を複数使用する方略は避ける傾向にあることを提示した。

次に、名詞句側の情報として、第 1 項の位置には、内容形態素である語彙名詞よりも機能語的で依存度の高い省略という形式が好まれ、第 2 項の位置には、第 1 項と対立するように語彙名詞が好まれていた。さらに、第 3 項に現れる形式は、隣接する第 2 項ではなく第 1 項と同じ省略形式が好まれており、3 つの項形式分布は、それぞれ隣接する項と対立し相補的な関係にあることを統計的有意性を提示しながら述べた。さらに、文法関係と意味属性の関連性を述べた。「A」は省略・有生の傾向が強く、それと対称的に「O」は語彙形式・無生の傾向が強かった。「S」と「dS」は類似しており、「A」と「O」の中間的な振る舞いを示した。一方、「IO」は語彙化・有生の傾向が強く、準項とも言うべき「N2」と付属的な「その他 N」は語彙化・無生の方向にバイアスがかかっていた。形式・文法関係・

有生性に着目して、談話内の項およびそれ以外の位置の名詞句を検証すると、それぞれの要因が相互に関連し合っていることがわかった。

一方、述語側の情報では、第 1 項の「省略・有生」という形式・意味決定に関与し統計的にも相関が明示できたのは、受身、移動表現、知覚表現、授受の補助動詞であった。また、第 1 項の意味役割の中で省略傾向が高いのは、知覚、思考、意向・希望の経験者 (experiencer) であることがわかった。

名詞句側の情報と述語側の情報に着目し、それらの相互関係を検証してきた。その結果、①単一語彙項の制約、②文法関係、③有生性、④交替指示、⑤述語情報という 5 つの条件・項目と第 1 項の省略の関与が確認され、省略された第 1 項が中心的な存在として軸項のような役割をしていることを述べた。

第 5 章では、英語における「語彙項の制約」の有効性、項の形式と文法関係、および意味的属性の関連性を検証した。まず、話し言葉にのみ適応できるとされた「単一語彙項の制約」であるが、本研究の書き言葉のデータでもその有効性 (90%以上) が確認された。文法関係と形式の関係では、「S」位置に置かれやすい形式は語彙名詞と代名詞で、語彙名詞が最も頻度が高かった。一方、「A」の形式は、省略・語彙名詞・代名詞の頻度が高く、そのうち代名詞の頻度が最も高かった。「dS」では、省略と語彙名詞に頻度の差は見られず、代名詞の頻度も「S」「A」に比べ極端に低かった。文法関係「S」「A」「dS」「O」を、全体的な関係でとらえ直したところ、4 つの文法関係の間には対格的特徴と能格的特徴の 2 つの側面が確認できた。最後に、形式・文法関係・意味的属性の総合的關係を見てみると、必須項が 1 つの「S」では「有生・代名詞」と「無生・語彙」の 2 極が無標で、「dS」では「有生・省略」と「無生・代名詞」の 2 極が有標であった。一方、必須項が 2 つの他動詞構文の場合の無標は、「A・有生・代名詞」と「O・無生・語彙」のそれぞれ 1 極に引き合う形で分布していることを確認した。

第 6 章では、韓国語における「語彙項の制約」の有効性、項の形式と文法関係、および意味的属性の関連性を検証した。まず、語彙名詞が 1 節内に「0」か「1」で現れる頻度が 90.9% 確認でき「単一語彙項の制約」が機能していることを示した。それに加え音声形式をもった項が節内に「0」か「1」で現れる場合も 88.6% とかなり高頻度であることも指摘した。次に、項の形式と文法関係は、「S」は語彙名詞で、そして「A」は省略で現れる傾向が強く、「dS」では省略・語彙名詞に際立った違いは見られなかった。また、「A」に関しては日本語と韓国語に類似した分布が確認でき、日本語の「S」と韓国語の「dS」が類

似した分布を示すことを述べた。文法関係「S」「A」「dS」「O」の全体的な相関関係を確認したところ、日本語同様能格的な傾向があることを示した。

以上、本研究では3章から6章にかけて日本語の第1項の指示対象を識別するための諸条件の検証、そして英語と韓国語の第1項の省略と指示対象の識別方略について考察を行ってきた。次節では日本語・英語・韓国語の3言語の結果を比較・対照する。

7.1 3言語の比較

7.1.1 項構造における単一語彙項の制約

1つの節内で語彙的名詞句として現れる項の数はゼロか1が基本で、節1つに対して語彙項が2つ以上出現することは回避される、という「単一語彙項の制約」に関する、日本語(4.1.1項)、英語(5.2節)、韓国語(6.2節)の結果を改めて記すると表81のようになる。

表 81 語彙項の制約の3言語の比較

	日本語	英語	韓国語
(a) 1節内の語彙項が0か1の場合	93.0%	91.2%	90.9%
(b) 1節内の具現化した項が0か1の場合	89.7%	71.1%	88.6%
0の場合	31.8%	12.2%	26.2%
1の場合	57.9%	58.9%	62.4%

「単一語彙項の制約」(表内(a))の結果は、3言語とも9割以上が「0」か「1」の語彙名詞を使って節を構成していることを示しており、類似した結果といえる。談話のなかで自動詞の主語(S)、他動詞の主語(A)、目的(O)の位置にどのような形式の名詞句が生起しているかを計量分析した結果、出来事を表現する際、節の主要な位置に現れる語彙名詞の数が、「0」か「1」であるという条件は、3言語に共通して有益に機能していることから、通言語的な特徴と考えられる。

節内の語彙名詞の出現頻度に関しては3言語間に類似性が確認できたが、「音声形式で具現化された項」(表内(b))に関しては、3言語間に相違が見受けられた。9割近い日本語・韓国語に対して英語の頻度は7割程度に下がっている。節内の項位置に音声形式をもつ情報を置くか否かということを基準にすると、3言語間には「日本語・韓国語>英語」という関係が成り立つと考えられる。さらに、類似している日本語と韓国語をよく見てみ

ると、項位置に情報を具現化させるか否かで違いが見受けられた。韓国語では 62.4% が音声形式をもった項で出現しており、日本語 (57.9%) より頻度が高い。1 節内の項形式の情報量を比べた場合、「韓国語 > 日本語」という関係が成り立つと考えられる。

7.1.2 項の形式

述語が要求する項の数が 1 つの場合の「S」と「dS」、2 つの場合の「A と O」の形式分布が、日本語表 82 (=表 31)・英語表 83 (=表 63)・韓国語表 84 (=表 75) である。まず、3 言語に共通する特徴は「O」の形式分布で、語彙名詞の出現が際立っている。また、「A」の形式分布も語彙名詞が 2 割前後と、3 言語の分布は類似していると言える。問題は必要項が 1 つの場合の「S」と「dS」で、韓国語の語彙名詞の頻度が最も高く、続いて日本語・英語と頻度が下がっていく。語彙名詞かどうかを基準に「A」「S/dS」「O」の頻度を比べると、韓国語は「S/dS」「O」が似た振る舞いをする能格型と考えられる。一方、「O」の語彙名詞の頻度に対して「A」「S/dS」の語彙化の頻度が低い英語は対格的振る舞いをしていると考えられる。日本語はその中間的な振る舞いであると考えられる。

3 言語の項の文法関係と形式分布を類型論的に分類すると、能格的特徴が強い韓国語と対格的な特徴が強い英語、そして中間的な日本語というコンフィギュレーションと言えるのではないだろうか。

表 82 日本語の文法関係と形式

文法関係	A		S／dS		O		合計	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	614	71.5%	431	44.1%	152	17.7%	1197	44.4%
語彙	170	19.8%	416	42.5%	500	58.2%	1086	40.3%
代名詞	61	7.1%	40	4.1%	6	0.7%	107	4.0%
その他	14	1.6%	91	9.3%	201	23.4%	306	11.4%
合計	859	100.0%	978	100.0%	859	100.0%	2696	100.0%

表 83 英語の文法関係と形式

文法関係	A		S/dS		O		合計	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	174	30.2%	130	20.0%	51	8.8%	355	19.7%
語彙	127	22.0%	244	37.5%	332	57.5%	703	39.0%
代名詞	236	40.9%	188	28.9%	88	15.3%	512	28.4%
その他	40	6.9%	88	13.5%	106	18.4%	234	13.0%
合計	577	100.0%	650	100.0%	577	100.0%	1804	100.0%

表 84 韓国語の文法関係と形式

文法関係	A		S/dS		O		合計	
形式	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	404	70.5%	240	38.9%	91	15.9%	735	41.7%
語彙	123	21.5%	301	48.8%	382	66.7%	806	45.7%
代名詞	35	6.1%	26	4.2%	7	1.2%	68	3.9%
その他	11	1.9%	50	8.1%	93	16.2%	154	8.7%
合計	573	100.0%	617	100.0%	573	100.0%	1763	100.0%

7.1.3 項の形式と意味的属性

7.1.2 節では 3 言語の「A」と「O」と形式の分布に共通する特徴を確認した。ここではさらに、意味的属性を加えて分布を精査した結果、共通点と相違点を確認された。他動詞構文の「A」と「O」の位置に現れる指示対象の形式・意味的属性の分布を、再度、表 85 (=表 38 日本語)、表 86 (=表 68 英語)、表 87 (=表 80 韓国語) に記載した。

まず、3 言語に共通していたのは、「A・省略／語彙名詞・無生・O・省略・有生」という組み合わせが 1 例も確認できなかったことである。それ対して、3 言語ともに無標の組み合わせともいえる、頻度の高い組み合わせが確認できた。日本語と韓国語の場合は「A・省略・有生・O・語彙名詞・無生」で、英語は「A・代名詞・有生・O・語彙名詞・無生」の組み合わせで出現する場合が最も多かった。第 1 項の形式の違いはあるが、その他の要素は 3 言語に共通しており、他動詞構文に乗せる文法関係・意味的属性は 3 言語で共通していた。

ただ、頻度のバラつきという点で、日本語・韓国語と英語の間に違いが見受けられた。日本語と韓国語の無標の組み合わせ「A・省略・有生・O・語彙名詞・無生」の出現率は、それぞれ 45.6%、49.3% と 50% に近く、一点に集中しているといえる。一方、英語の「A・代名詞・有生・O・語彙名詞・無生」は 20% 程度に留まり、日本語・韓国語に比べて、一極に集中しているとは言い難い。日本語と韓国語では他動詞構文に現れる項の指示対象の識別方法は、ある程度固定していると考えられるが、英語は分散的であると考えられる。文法関係・形式・意味的属性の組み合わせを固定度と考えると、「韓国語＞日本語＞英語」という配列が確認できた。

表 85 日本語の他動詞の項の形式と意味

文法關係			O											
文 法 関 係	意味		有生						無生					
	意味	形式	省略		語彙		代名詞		省略		語彙		合計	
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
A	有生	省略	17	2.6%	22	3.4%	4	0.6%	90	14.0%	293	45.6%	426	66.3%
		語彙	5	0.8%	4	0.6%	0	0.0%	20	3.1%	74	11.5%	103	16.0%
		代名詞	0	0.0%	5	0.8%	0	0.0%	8	1.2%	23	3.6%	36	5.6%
	無生	省略	0	0.0%	2	0.3%	2	0.3%	6	0.9%	45	7.0%	55	8.6%
		語彙	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	2	0.3%	20	3.1%	23	3.6%
		合計	22	3.4%	34	5.3%	6	0.9%	126	19.6%	455	70.8%	643	100.0%

表 86 英語の他動詞の項の形式と意味

文法関係			O													
A	意味		有生					無生								
	意味	形式	省略		語彙		代名詞		省略		語彙		代名詞		合計	
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
	有生	省略	1	0.2%	13	3.1%	11	2.6%	6	1.4%	78	18.6%	5	1.2%	114	27.1%
		語彙	0	0.0%	8	1.9%	4	1.0%	8	1.9%	46	11.0%	4	1.0%	70	16.7%
		代名詞	2	0.5%	13	3.1%	17	4.0%	31	7.4%	93	22.1%	16	3.8%	172	41.0%
	無生	省略	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	23	5.5%	0	0.0%	24	5.7%
		語彙	0	0.0%	1	0.2%	5	1.2%	1	0.2%	23	5.5%	3	0.7%	33	7.9%
代名詞		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	1.7%	0	0.0%	7	1.7%	
合計		3	0.7%	36	8.6%	37	8.8%	46	11.0%	270	64.3%	28	6.7%	420	100.0%	

表 87 韓国語の他動詞の項の形式と意味

文法関係			O											
A	意味		有生						無生					
	意 味	形 式	省略		語彙		代名詞		省略		語彙		合計	
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
	有 生	省略	16	3.4%	13	2.8%	2	0.4%	48	10.2%	231	49.3%	310	66.1%
		語彙	2	0.4%	4	0.9%	3	0.6%	11	2.3%	55	11.7%	75	16.0%
		代名詞	2	0.4%	1	0.2%	0	0.0%	6	1.3%	16	3.4%	25	5.3%
	無 生	省略	0	0.0%	2	0.4%	1	0.2%	2	0.4%	34	7.2%	39	8.3%
		語彙	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	3	0.6%	16	3.4%	20	4.3%
合計		20	4.3%	21	4.5%	6	1.3%	70	14.9%	352	75.1%	469	100.0%	

7.2 今後の研究課題と展望

今後の課題としては以下の3点があげられる。

- 1) 本研究のデータの精緻化
- 2) 対象研究の拡大と深化

3) 言語および言語学教育への応用

まず、1) のデータの精緻化では、両方向からの言語データを使用する。本研究では日本語ベースのデータに独自でアノテーションを加え、細かな量的分析を行った。しかし、それは日本語からの一方向の分析であり、英語ベース（英語原書の日本語訳と韓国語約）と韓国語ベース（韓国語原書の日本語訳と英語訳）のデータとの比較・検証も必要であると考ええる。

今後は、本研究で行ったアノテーションを基に、英語から、あるいは韓国語からのデータを加えて指示対象の識別方略の違い・類似点を確認していきたい。

次に、2) の対象研究の拡大と深化では、英語・韓国語の分析項目を広げていく。本研究では、英語・韓国語の分析は、語彙項の制約・文法関係・形式・意味的属性の4点の分析に留まった。しかし、日本語の分析同様、名詞修飾節と主節間の文法関係の連続性や述語の意味的情報との関係の分析は述べられていない。特に、述語周りの情報が豊かな点で類似している日本語と韓国語では述語情報と名詞句の形式・有生性の関係を検証していきたい。

最後に、3) の言語および言語学の教育に関しては、隣接分野である言語習得研究との連携を視野に入れて研究を進めていきたい。1.3.1 項で述べた母語話者と日本語学習者との運用の違いが、学習者の文法関係・形式・有生性・述語情報の習得とどのように関連しているかといった実践的・実験的な研究に関心を持っていきたいと考えている。また、言語学の隣接分野として言語聴覚士教育における言語学という視点にも注目していきたい。言語聴覚士養成教育において言語学の知識は不可欠で、国家試験の出題項目として言語学の基礎知識から対照言語学や類型論、日本語論までが網羅されている。しかし、主流は理論言語学であり、対照言語学や類型論の知見はあまり反映されていないのが現実である。現在、ことばの医療に携わる言語聴覚士制度において広範囲な知識が望まれている（氏平2010）。そのような中、機能的で類型論的な視点がことばの観察に有益であるという提案を言語学側から積極的に行いたいと考えている。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になりました。

研究活動全般にわたり格別の御指導と御高配を賜りました東北大学大学院国際文化研究科のナロック・ハイコ先生に甚大なる謝意を表します。修士課程を含め9年間という長い期間、私のゆっくりとした成長に辛抱強く付き合ってください、そしていつも励ましてくださいました。ここに深く感謝の意を表します。

副指導教官として貴重な御教示を賜りました同大学院の小野尚之先生と中本武志先生に心から感謝申し上げます。両先生からの助言で本稿の完成度を高めることができました。また、上原聡先生には認知言語学からの有益な助言をいただきました。宮本正夫先生には研究者としての姿勢を教わりました。心より感謝申し上げます。

このほかにも本研究科の言語コミュニケーション論講座の諸氏、特に、李美賢さんには韓国語のにおいてアドバイスをいただきました。大変感謝しております。

東北大学へ進学すること、研究者になる道を選んだことを心から応援してくれ、本稿が完成するのを心待ちにしていた亡き義母・久好依子にこの論文を捧げたいと思います。また、陰ながら娘を支援してくれた父・山村忠良、母・登代美に感謝いたします。

最後に、どんな場面でもいつも温かく見守り続けてくれた夫・久好亮二に深く深く感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献

- 安藤貞雄・小野隆啓. 1993. 『生成文法用語辞典』大修館書店
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館書店.
- 池上嘉彦. 2006. 「＜主観的把握＞とは何かー日本語話者における＜好まれる言い回し＞」
『言語』Vol.35. 5: 20- 27.
- 石川慎一郎. 2008. 『英語コーパスと言語教育ーデータとしてのテキスト』東京：大修館書店
- 井出祥子. 2002. 「The speaker's viewpoint and indexicality in a high context culture」片岡邦好・井出祥子（編）『文化・インターアクションー・言語』3-19. 東京：ひつじ書房.
- 伊豆山敦子. 1986. 「「省略」とは何かー日本語はなしことばにおける動作（状態）主体の有無ーRemarks on ellipsis of subject in spoken Japanese」『アジア・アフリカ研究』15: 211-231.
- 上原聡. 2001. 「言語の主観性に関する認知類型論的一考察」『日本認知言語学会論文集』第1巻: 1-10.
- 氏平明. 2010. 言語聴覚士教育における言語学と音声学, 福岡教育大学附属特別支援教育センター研究紀要, 2:1-10.
- 恵谷容子. 2004. 主題の省略に関する一考察ー「連続型省略」における容認度の観点からー.
『日本語教育』123: 46-55.
- 大津由紀雄(編). 1995. 『認知心理学 3 言語』東京：東京大学出版.
- 大堀壽夫. 2000. 「言語的知識としての構文ー複文の類型論に向けて」坂原茂（編）『認知言語学の発展』281-315. 東京：ひつじ書房.
- 大堀壽夫. 2002a. 『認知言語学』東京：東京大学出版.
- 大堀壽夫. 2002b. 「「交替指示」構文の通時相ー統語変化とカテゴリー化」『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』297-321. 東京：東京大学出版.
- 奥津敬一郎. 1983. 「何故受身かー＜視点＞からのケース・スタディー」『国語学』132: 65-80
- 生越直樹(編). 2002. 『対照言語学』東京：東京大学出版会.
- 小澤伊久美. 2006. 「川端康成『雪国』に見られる話者の時間意識ー原文と英訳との比較から」『JCLA』6: 581-584.
- 尾上圭介. 2003. 「ラレル文の多義性と主語」『言語』32-4:34-41.

- 海保博之・柏崎秀子(編). 2002. 『日本語教育のための心理学』 東京：新曜社.
- 甲斐ますみ. 2000. 「談話における 1・2 人称主語の言語化・非言語化」『言語研究』177: 71-100.
- 架谷真知子. 1991. 日本語の主語と目的語の省略－学習者の習得過程－. 『日本語学』 10: 65-74.
- 加藤重広. 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京：ひつじ書房.
- 鄭惠先. 2002. 「日本語と韓国語の人称詞の使用頻度－対訳資料から見た頻度差とその要因－」, 『日本語教育』 114: 30-39.
- 小池清治. 1994. 『基礎古典文法』. 朝倉書店.
- 小泉保. 2007. 『日本語の格と文型－結合理論にもとづく新提案』. 大修館書店.
- 金澤裕之. 2007. 「「～てくださる」と「～ていただく」について」『日本語の研究』 第 3 巻 2: 47-53.
- 金慶珠. 2001. 「談話構成における母語話者と学習者の視点－日韓両言語における主語と動詞の使い方を中心に」, 『日本語教育』 109: 60-69.
- 金水敏. 1989. 「代名詞と人称」北原他(編)『日本語の文法・文体』 98-116. 東京：明治書院.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』 東京：大修館書店.
- 久野暲. 1983. 「第 1 1 章 ゼロ代名詞, 主題, 予測性」『新日本文法研究』 176-189. 東京：大修館書店.
- 熊倉千代. 2006. 「川端康成『雪国』地文の視点とその認知表現について」『JCLA』6: 589-592.
- 坂本勉. 1995. 「構文解析における透明性の仮説－空主語を含む文の処理に関して－」『認知科学』 2(2): 77-90.
- 柴谷方良. 2000. 「ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 1 文の骨格』 岩波書店
- 清水佳子. 1995. 「「NP ハ」と「 ϕ (NP は)」一文連続における主題の省略と顕現－」宮島達夫・仁田義男(編)『日本語類義表現の文法 (下)』 647-654. 東京：くろしお出版.
- 情報処理振興事業協会技術センター. 1987. 『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (basic verbs)』 東京：情報処理振興事業協会技術センター.
- 徐一平. 2006. 「『雪国』にみる日本語の認知言語学的特徴－中国語訳・英語訳と対照して」『JCLA』 6: 573-588.
- 砂川有里子. 2005. 『文法と談話の接点』 東京：くろしお出版.

- 盛文忠. 2006. 「『雪国』の中国語訳からみる日中量言語の認知的差異一文型・主語・動詞・数量詞の使用を中心に」『JCLA』 6: 589-592.
- 杉本孝司. 1995. 「複文（？）と他動性の接点—R - 系列表現から—」仁田義雄編『複文の研究（上）』東京：くろしお出版.
- 高田眞吾・土井範久. 1995. 「省略された代名詞の解釈」『日本語学』 Vol.4. 14: 19-24.
- 高見健一. 2007. 「使役形と自／他動詞形」久野暉他編『言語学の諸相 - 赤塚紀子教授記念論』東京：くろしお出版.
- 田窪行則. 1998. 『岩波講座言語の科学2 音声』東京：岩波書店.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』. 東京：研究社
- 田中真理.. 1997. 「視点・ヴォイス・複文の習得要因」『日本語教育』 92: 107-118.
- 田中祐司. 2001. 日本語の受動文における動作主の省略と関係詞化. (編) 中右実教授還暦記念論文集編集委員会『意味と形のインターフェイス：中右実教授還暦記念論文集』 411-421. 東京：くろしお出版.
- 角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.
- 塚本秀樹. 2006. 「日本語からみた韓国語—対照言語学からのアプローチと文法化—」『日本語学』 Vol.1 25:16-25.
- 坪井栄治郎. 2003. 「受影性と他動性」『言語』 32 4:50-55.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第1巻』東京：くろしお出版.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第2巻』東京：くろしお出版.
- 富田英夫. 2007. 『日本語文法の要点』東京：くろしお出版.
- 成山重子. 2009. 『日本語の省略がわかる本 - 誰が？誰に？何を？』東京：明治書院.
- 新村明美. 2006. 「空間・対象・相手認識に関する日中英対照」『JCLA』 6: 577-580.
- 二枝美津子. 2007. 『主語と動詞の諸相 認知文法・類型論的視点から』東京：ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会(編). 2008. 『現代日本語文法6』東京：くろしお出版.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子. 2001. 『日本語学習者の文法習得』東京：大修館書店.
- 橋本修. 2003. 「日本語の複文」北原保雄 監修・編 『朝倉日本語講座5 文法I』 181-199
- 長谷川信子. 1995. 「省略された代名詞の解釈」『日本語学』 Vol.4. 14: 27-34.
- 廣瀬幸生. 2001. 「話し手概念の解体から見た日英語比較」について『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書』 723-755.

- 白峰子. 2004. 『韓国語文法辞典』大井秀明訳 東京：三修社.
- ベケシュ・アンドレイ. 1995a. 「日本語における照応の語用論—より広い指示手段系列におけるコノとソノ—」『複文の研究（下）』481-509.
- ベケシュ・アンドレイ. 1995b. 「文脈から見た主題化と「ハ」」『日本語の主語と取り立て』155-173. 東京：くろしお出版.
- ベケシュ・アンドレイ. 2002. 「日本語にいわゆる「ハの主題」はあるのか—文脈の観点から—」『「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究 研究報告書V』107-129. 筑波大学.
- 本田啓. 1994. 「見えない自分、言えない自分 言語にあらわれた自己知覚」『現代思想』Vol.22-13: 168-177.
- 松本裕治・大山浩美. 2009. 「言語処理による作文支援・語彙学習への可能性について」『日本語教育』140: 37-47.
- 丸山岳彦. 2009. 「作文の文体情報 - 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から見えるもの」『日本語教育』140: 26-36.
- 三上章. 1953. 『現代語法序説』東京：くろしお出版復版(1972)
- 三上章. 1960. 『象は鼻が長い』東京：くろしお出版
- 南不二男. 1974. 『現代日本語の構造』東京：大修館書店.
- 宮島達夫・仁田義雄(編). 1995. 『日本語類義表現の文法(下)』東京：くろしお出版
- 森山新. 2010. 「格助詞ヲ、ニ、デの意味構造とその習得に関する認知言語学的研究—韓国語・中国語を母語とする日本語学習者を中心として」『日語学習与研究』Vol.5-150: 16-27.
- 守屋三千代. 2006. 「日本語における聞き手認識の言語化」『JCLA』6: 581-584.
- 山内博之. 1997. 「日本語の受身文における「持ち主の受身」の位置づけについて」『日本語教育』92: 119-130.
- 山田敏弘. 1996. 「日本語の参与者追跡システムについて(1)—授受表現を中心として」『現代日本語研究』3: 93-114. 大阪：大阪大学出版.
- 山田敏弘. 1997. 「テイル」とベネファクティブ」『日本語教育』92: 131-142.
- 山田敏弘. 2001. 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究—テモラウ受益文の使役的性質と受身的性質」『日本語学』Vol.20 5: 102-114.
- Yamamoto.Mutsumi. 1992. *Endophora and exophora in English and Japanese*. Doshisha

- Bas, Aarts. 2007. *Syntactic Gradience*. Oxford University Press.
- Biber, Douglas, Susan Conrad, and Randy Reppen. 1998. *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*. Cambridge, England: Cambridge University Press. [斎藤俊雄他（訳）(2003)『コーパス言語学：言語構造と用法の研究』東京：雲南堂]
- Booij, Geert. 2007. *The Grammar of Words – An Introduction to Morphology 2nd edition*. New York: Oxford University Press.
- Chafe, Wallace L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard. 1983. Switch-reference in Huichol: a typological study. In Haiman J. and Munro P. (eds.). *Switch-reference and Universal Grammar*. Amsterdam: Benjamins.
- Comrie, Bernard. 1989a. Some general properties of reference-tracking systems. In *Essays on grammatical theory and universal grammar*, Arnold, D. et al. eds., 37-51. Oxford: Clarendon.
- Comrie, Bernard. 1989b. *Language universals and linguistic typology* (2nd ed.). Oxford: Blackwell.
- Comrie, Bernard. 1998a. Reference-tracking: description and explanation. Sprachtypologie und Universalienforschung (STUF) 51: 335-346.
- Comrie, Bernard. 1998b. Perspectives on Grammaticalization. In *Studies in Japanese grammaticalization -Cognitive and discourse perspectives-*, Toshio Ohori ed., 7-24. Tokyo: Kurosio Publishing.
- Comrie, Bernard. 2003. Typology and language acquisition: the case of relative clauses. In *Typology and second language acquisition*, Anna Giacalone Ramat. ed., 19-37. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Croft, William. 1990. *Typology and universals*. Cambridge: Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Dahl, Osten. 2000. Egophoricity in discourse and syntax. *Functions of Language* 7.1: 37-77.
- Dik, Simon C. 1989. *The theory of Functional Grammar, Part 1*. Dordrecht:Foris.
- Dik, Simon C. 1997. *The Theory of Functional Grammar, Part 1: The Structure of the Clause second, revised edition*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

- Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Du Bois, John W. 1980. Beyond definiteness: The trace of identity in discourse. In Chafe W. L. (ed.). *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Norwood, NJ: Ablex, 203-274.
- Du Bois, J. W. 1985. Competing motivations. In *Iconicity in syntax*, J. Haiman ed., 343-365. Amsterdam: Benjamins.
- Du Bois, John W. 1987. The discourse basis of ergativity. *Language* 63 4: 805-855.
- Du Bois, John W. 2003. Discourse and grammar in *The new psychology of language : cognitive and functional approaches to language structure Volume 2* . pp47-87/ edited by Michael Tomasello / Mahwah, N.J. : Lawrence Erlbaum Associates
- Fillmore, Charles J. 1975. *Coming and going. Santa Cruz 1971 Lecture on deixis*. Berkeley: University of California.
- Foley, William A. and Robert D. Van Valin, Jr. 1984. *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fox, Barbara A. 1987. The Noun Phrase Accessibility Hierarchy Reinterpreted: Subject Primacy or The Absolutive Hypothesis?. *Language* Vol.63 4: 856-870.
- Fox, Barbara A and Sandra A. Thompson. 1990. A Discourse Explanation of the Grammar of Relative Clauses in English Conversation. *Language* Vol.66 2: 297-316.
- Fry, John. 2003. *Ellipsis and Wa-marking in Japanese Conversation*. New York/London: Routledge.
- Givon, Talmy. 1979. *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- Givon, Talmy. 1983. *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study*. Amsterdam: John Benjamins.
- Greenberg, Joseph H. 1963. Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In *Universals of language*, J. H. Greenberg ed., 73-113. Cambridge, MA: MIT Press.
- Gundel, Jeanette, Nancy Hedberg and Ron Zacharski. 1993. Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language*. Vol.69 2: 274-306.
- Haiman, John. 1983. Iconic and Economic Motivation, *Language*, Vol. 59 4: 781-819.
- Haiman, John. 1994. Ritualization and the Development of Language. In *Perspectives on*

- grammaticalization*, William Pagliuca ed., 3-28. Amsterdam: J. Benjamins.
- Halliday, M.A.K and R, Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Halliday, M.A.K . 1985. An Introduction to Functional Grammar. London : Edward Arnold [山口登・笥壽雄（訳）（2001）『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』東京:くろしお出版].
- Huang, Yan. 2004. Anaphora and the pragmatics-syntax interface. *The handbook of Pragmatics*, Laurence R. Horn and Gregory Ward ed, 288-314. Cambridge, Mass., USA : Blackwell.
- Hopper, P.J. and Thompson, S.A. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251-299.
- Ikegami, Yoshihiko (2004): “First/Second vs. Third Person” and “First vs. Second/Third Person”. Two Types of “Linguistic Subjectivity”. In: *Seduction, Community, Speech.*, Brisard, Frank et al. eds., 61-73. Amsterdam: Benjamins.
- Keenan, Edward and Bernard. Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63-99.
- Kennedy, Graeme. 1998. *An Introduction to Corpus linguistics*. London: Longman.
- Kuno, Susumu. 1987. *Functional syntax: anaphora, discourse, and empathy*. Chicago/London: University of Chicago Press.
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago/London: University of Chicago Press.
- Li, Charles N. 1997. On Zero Anaphora. 1997. In *Essays on language function and language type: dedicated to T. Givon*, Joan Bybee et al. eds., 275-300. Amsterdam: John Benjamins B.V.
- Miyamoto, Tadao. 1999. *The light verb construction in Japanese : the role of the verbal noun*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Munro, Pamela. 1979. On the syntactic status of switch reference clauses: The special case of Mojave comitatives, In *Studies of switch-reference*. Munro ed., UCLA Papers in Syntax. 8. 145-160.
- Nakahama, Yuko . 2003. Referential Topic Management in Japanese and Korean Oral Narratives. *Japanese/Korean Linguistics*. Vo. 12: 16-27.
- Nariyama, Shigeko. 2002. The WA/GA distinction and switch-reference for ellipted subject identification in Japanese complex sentences. *Studies in Language* 26:2: 369-431.

- Nariyama, Shigeko. 2003. *Ellipsis and Reference tracking in Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Narrog, Heiko. 2009. *Modality in Japanese: the layered structure of the clause and hierarchies of functional categories*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ohori, Toshio. 2005. Construction Grammar as a conceptual framework for linguistic typology. In *Grammatical Constructions: Back to the roots*, Mirjam Fried et al. eds., Amsterdam: John Benjamins.
- Oh, Sun-Young. 2006. English zero anaphora as an interactional resource , *Discourse Studies* 8: 817-846.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. Passives and related construction: A prototype analysis. *Language* 64.4:81-848
- Shi, Dingxu. 1993. Discourse topic continuity and syntactic reduction. 1993. *Proceedings of the 19th annual meeting of the BLS*, 313-322.
- Silverstein, M. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert M. W. (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies. 112-171.
- Slobin, D. I. 2001. Form-Function relations: how do children find out what they are?, In M. Bowerman and S. C. Levinson (eds.), *Language Acquisition and Conceptual Development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sohn, Ho-Min. 1999. *The Korean language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tsunoda, Tasaku. 1981. "Split Case-marking Patterns in Verb Types and Tense/Aspect/Mood." *Linguistics* 19: 389-438.
- Uehara, Satoshi. 1998. Pronoun Drop and Perspective in Japanese. *Japanese Korean Linguistics* 1.7: 275-289.
- Van Valin, Robert D., Jr.. 1987. Aspects of the interaction of syntax and pragmatics: Discourse coreference mechanisms and the typology of grammatical systems. In *The Pragmatic Perspective*, Verschueren and Bertucci Papi eds., 513-531. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Van Valin, Robert D., Jr. ed.. 1993. *Advances in Role and Reference Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

- Van Valin, Robert D., Jr. ed.. 1995. Role and Reference Grammar. In J. Verschueren, J. Ostman and J. Blommaert, eds., *Handbook of pragmatics: manual*, 461-8. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Van Valin, R. D. and R. LaPolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Whaley, Lindsay J. 1997. *Introduction to typology: The unity and diversity of language*. Sage Publications. Chicago Press.
- Yamamoto, Mutsumi. 1999. *Animacy and reference – A cognitive approach to corpus linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Yamamoto, Mutsumi. 2006. *Agency and Impersonality – Their Linguistic and Cultural manifestations*. Amsterdam: John Benjamins.

辞書

Oxford phrasal verbs : dictionary for learners of English / [edited by: Colin McIntosh]. 2006.
Oxford : Oxford University Press.

インターネットサイト

<http://dictionary.cambridge.org/dictionary/british/>

略語

略語	英語	日本語
1	the first person	一人称
3	the third person	三人称
A	subject of transitive verb	他動詞の主語
ABS	absolutive	絶対格
ACC	accusative	対格
Adj	adjective	形容詞
Ani	animate	有生
ASP	aspect	アスペクト
ATT	attributive form	連体形
AUX	auxiliary	助動詞

CAUS	causative	使役
CMPL	complementizer	補文標識
CL	clause	節
CONJ	conjunction	接続詞
COP	copula	コピュラ
COMU	communicative	伝達動詞
DAT	dative	与格
DEC	declarative	平叙
DEM	demonstrative pronoun	指示代名詞
DES	desire	希望
DET	determiner	限定詞
DS	different subject	非同一指示の主語
dS	drived subject	派生主語
EM	emotion	感情
END	end form	終止形
ERG	ergative	能格
EXI	existential	存在
EXP	expletive	虚辞
Gen	generic reference	総称指示
GER	gerund	動名詞
H	human	人間
HON	honorific expression	敬語
InA	inanimate	非有生／無生
INF	infinitive	不定／不定の接辞
INT	interrogative	疑問
INTE	intentional	意向
IMP	imperative	命令文
ILL	illocutionary modulator	発話内モジュレーター
LEX	lexical noun (full noun)	語彙名詞
LOG	logophoricity	発話主体指向性

MOD	modality	モダリティ
N(P)	noun (phrase)	名詞(句)
N1	1st argument	第 1 項
N2	2nd argument	第 2 項
N3	3rd argument	第 3 項
NEG	negative	否定
NH	non-human	非人間
NMZ	nominalizer	名詞化辞
NOM	nominative	主格
OBJ	object	目的語
OBL	oblique	斜格
PART	participle	分詞
PASS	passive	受動態
PAST	past	過去
PERC	percept verb	知覚動詞
pl	plural	複数形
POSS	possessive	所有格
POT	potential form	可能形
P	preposition	前置詞
PRED	predicate	述語
PRES	present	現在
PRS	prospective mood suffix	予測モード接辞
PRO	pronoun	代名詞
REFL	reflexive	再帰形
REL	relative clause marker	関係節標識
RRG	Role and Reference Grammar	Role and Reference Grammar
QNT	quantitative	数量詞
QT	quotative particle	引用の助詞
S	subject of intransitive verb	自動詞の主語
sg	single	単数

SS	same subject	同一指示の主語
STM	stem	語幹
SUP	suppositive mood suffix	仮定・推定の接辞
TEN	tens	時制
TOP	topic marker	主題標識
U	undergoer	受動者
V(P)	verb (phrase)	動詞
Vi	intransitive verb	自動詞
Vt	transitive verb	他動詞
ϕ	elipted argument	省略項
te.give		補助動詞てやる
te.obtain		補助動詞てもらう
te.kureru		補助動詞てくれる